BMP187

ST

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ＢＭＰ１８７

【Ｎコード】
Ｎ７４８６Ｍ

【作者名】
ＳＴ

【あらすじ】
「幻影獣」と言われる怪物に蹂躙される世界。平凡な少年・澄空悠斗は、ある日突然「世界最高のＢＭＰ能力者」と断定され、ソードウエポンの称号を持つ少女と共に、幻影獣との戦いに身を投じていく。といった感じの話です。よろしくお願いします！

計測結果「ＢＭＰ１８７」

「なんどやっても『１８７』だ！　なんてことだ！！」

軽くヒステリーを起こしたように、白衣を着た年配の男が縦長の機械を蹴り倒す。

テレビとかで見覚えのある顔だ。

確かＢＭＰ研究の世界的な権威で、名前は……。

思い出せん。

「上条博士、この測定器でもう１５台目です。さすがに、機械の故障という可能性は低いかと」

「分かっておるわ！」

床に転がった測定器を踏みつけながら怒鳴る、上条博士（やっと思い出した）。

似たような機械が、他にもいくつも転がっている。

この『ＢＭＰ測定器』ってやつ、安いものでも一千万はするって聞いたことがあるんだが……。

「１８７という数値が間違いないのなら、彼、拘束しないで大丈夫なんでしょうか……？」

「む、それは……」

少し気弱そうな白衣の女性に言われて、考え込む上条博士。

確かに、俺は拘束されていない。

すわり心地のいいリラックスチェアに腰かけて、ＢＭＰ測定器に触れていただけだ。

というか、未だに、自分の状況が分かっていないんだが。

「下手に彼を刺激するのはやめてください、上条博士」
と、俺の後ろに立っている長身の男が声を出した。
こっちは全く見覚えのない男だ。年の頃は２０代後半から３０代前半だと思うのだが、やたらと顔がいい。
俳優か何かだろうか？　眼鏡をかけた理知的なハンサムだ。
「ＢＭＰ１８７のＢＭＰハンターに暴れられれば、この程度の人員ではどうしようもありません。ただでさえ人手不足なんですから、あまり物騒なことを言わないでください」
自分の方がもっと物騒なことを言っているハンサム。
と、同時に１０人ほどの黒服たちが、まるで化け物をみるかのような目でこっちを見てきた。
どの黒服も、俺が１０人いても片手で払われるような体格をしてるんだけど。

「と、とりあえず、検査を始めよう。い、いいかな、悠斗君。痛くはしないから、いきなり私を粉々にしたり、溶かしたりはしないでくれよ」
「できません」
足を震わせながら、それでもプロ意識でこちらに寄ってくる上条博士。
「あの、その前にバイト先に連絡入れてもいいですか。今日シフト入ってるんで」
バイトの時間まで、あと3時間くらいはあるが、この調子だと間に合わない可能性がある。
「ああ、バイトなら」
と、眼鏡ハンサムが携帯電話を渡してくる。

『も、もしもし』
「ん？　店長ですか？　実は、今日のバイト……」

『ああ！　分かっている！　今日は来なくても大丈夫だ！　というか、明日からも来なくても大丈夫だ！　悠斗、い、いや、悠斗君！　今までありがとう！　今月の分の給料はちゃんと政府の人に渡しておいたから！　それじゃあ！』
言いたいことだけを言って、電話は切れた。
というか、これってクビってことか。
「良かったね、悠斗君」
ハンサムメガネがにこやかに話しかけてくる。
この中で、俺にびびってないのは、この人だけみたいだけど、まるで俺のことをライオンか何かのように警戒しているのが分かる。
全く、心あたりがないんだが。

ああ、なんで、こんなことになったんだろうか。

派手な音を立てて、重そうな機械が地面に落ちる。
「こらぁ！　何をやっとるか！　悠斗君を刺激するな！　飛ばされるぞ、首が！」
そして、上条博士がどなる。飛ばさないけど。

若い研究員が、慌てたのか、聴診器のようなものをお手玉している。
「もたもたするな！　悠斗君が飽きたら、壊されるぞ、研究所が！」
そして、また博士がどなる。もちろん壊さないよ。俺は。

白衣の女性が、やたらと太い注射器のようなものを、なぜか嬉しそうな顔で持ってくる。
「馬鹿モン！　いきなり、硫酸なんぞ持ってくる奴があるか！　何に使うつもりだ！」
いや、ほんとに何に使うつもりだ？

みんな真剣にやっているのは分かるが、検査の準備とやらは全く進んでいない。
正直、もう帰りたいんだが。
「彼を責めないでやってください」
と、突然、眼鏡の青年が俺に話しかけてきた。
「この国には、彼の他にまともなＢＭＰ研究者はいないんですよ。毎回、危険なＢＭＰハンターを押し付けられて、ちょっとナーバスになっているんです」
今日一日で、１０回くらい『危険』と言われた俺も、なかなかナーバスになってますが。

「あの、ちょっと聞いてもいいですか？」
と振り返ったとたん、２，３人の黒服から銃を向けられた。
「こらこら、過剰反応し過ぎだ。別に取って喰われたりしないから、銃をしまいなさい」
眼鏡の青年に言われて、ぺこぺこしながら銃をしまう黒服たち。……普通に傷つくな。
「で、なんですか？　聞きたいこととは」
「なんで、今日、突然、俺を連れてきたんですか？　確か、ＢＭＰ１２０以上の人間は、小さい頃から訓練しないと精神に異常をきたすから、国が保護してるって聞いたことがありますけど」
「ん。いい質問ですね。まあ、まだ色々と調査中なんですけどね。君を見つけたのは単純な話です。情報提供をしてくれた人がいるんですよ」
誰だ。そんな余計な事をした人は。
「私の口からは言いにくいんですが。まあ、近いうちに会えますよ。彼女も君に興味を持ってたみたいですから。……会わないほうがいいかもしれないですけどね……」

ちょっと待て。今、最後に小声で物騒なセリフを言いましたね。

問い詰めようとしたところで、
「よし、ようやく準備が整ったぞ！」
腕いっぱいにわけのわからない器具を持った上条博士が迫ってきていた。
「さあ！　『属性分析』を始めようじゃないか！」
興奮で息を荒げながら宣言してくる。

……ああ、なんだか。
牛丼が欲しくなってきたな。

「ついに、ついに！　悠斗君の『属性』が判明したぞ！」
白髪を振り乱しながら、上条博士が叫ぶ。
意外に手入れが行き届いている白髪だ。研究で忙しいだろうに、しっかりケアしてるんだな。感心だ。

と、どうでもいいことを考えているのは俺だけみたいで、みんな上条博士の次の言葉を聞き逃すまいと息を殺している。
「悠斗君の『クラス』は……」
上条博士が、一瞬声を止める。
その場にいるすべての人たちが息を呑む。
俺は、腹の虫が鳴りそうになるのを我慢する。

「『ウェポンテイマー』だ！」
……へえ。
と、とりあえず頷く俺の耳に、

「「「うおおおおお！」」」

と、怒号のような歓声が響いてきた。

「ＢＭＰ１８７のウェポンテイマーだって！　そんなことがあっていいのか！？」

「無敵じゃないか！」

「確か、麗華さんはテイマーがいなかったわね！」

「じゃあ、彼女と組めば！」

「「世界最強のコンビじゃないか！」」

「すごいぞ、悠斗君！」

「悠斗君、万歳！！」

「あ、ど、ども、です」

あまりの迫力に圧倒されて後ずさる、俺。

一体何がどう凄いのか、誰も説明してくれないことの方が、俺的には脅威だ。

「城守君！」

上条博士が、美形の眼鏡の人を呼ぶ。『城守』っていうのか。

「なんでしょう、博士」

「さっそく、悠斗君のＢＭＰ登録を政府に申請してくれたまえ！　もちろん所属は、うちの研究所だ。あと、『新月』への編入手続きも頼む。ああ、それから予算だ。世界最強のテイマーを養成するんだからな。たっぷりと頼む！」

「お任せください。そういうのは、得意分野です。使いきれないくらい、引っ張ってきて見せますよ」

いや、その予算は、もうちょっと世の中のためになることに使ったほうがいいんじゃないかな？

「思えば、大学でどのゼミにも入れてくれなくて、仕方なくＢＭＰ研究の道に進んで数十年……」
上条博士が、語り始めてしまった……。
「いつの間にやら、世界的な権威、などと持ち上げられるようにはなったものの、いつもいつも問題の多いＢＭＰ能力者を押し付けられてばかり……」
確かにいるよね、能力が高いのに嫌われてる人って。
「だが、ついに今日！　ＢＭＰ能力が高いのにまともな逸材に出会えた！」
ガッツポーズをする上条博士。

と、そのまわりに白衣の人たちが集まってきた。
「そのとおりですよね、博士！」
「一時間も検査をしたのに、どこも壊されてないんですよ！」
「他の連中なら、この辺の機材は全滅でしたね！」
「それどころか、麗華さんなら、この研究所が全滅でしたね……」
「それは、言い過ぎだ。半壊くらいで我慢してくれるはずだ」
抱き合って喜ぶ研究員の方々。
ＢＭＰ能力者っていうのは、怪獣なのか？
おかしいな。小学校の教科書には、そんなこと書いてなかったぞ。

「わしゃあ、テンションあがってきたぞぉ！」
年寄りが、テンションとか言うなよ……。

「悠斗君、私も嬉しいですよ」
理知的な眼鏡の人、いや、城守さんが話しかけてきた。
「君は……いや、君たちはきっと人類の希望になります。この歴史的な瞬間に立ち会えたことを、私は誇りに思いますよ」
端正な顔に最大級の敬意を込めて、城守さんが微笑む。

いや、どう考えても、俺はそんなたいした人物じゃないんですが。

さて、そろそろドッキリカメラとか、出てこないかな。

……来ないよね。

ソードウエポン『剣麗華』（1）

「ぼへー」

と、思わず口に出して呆けてしまうくらい、俺はアホ面をしていた。
それも、そのはず。
ここは、国内でも有数の名門ホテル『ホテル・ヒルトン』の最上階スイートルームなのだ。

俺がこんなところにいるのは、もちろん訳がある。
（なんとか）検査が終わり、アパートに帰ろうとしたときに、音もなく城守さんが近付いてきたのだ。
無言で差し出される携帯電話を、嫌な予感を覚えつつ受け取った俺の耳に聞こえてきたのは、予想通り、アパートの大家さんの声だった。

『ああ、悠斗君か！　いや、実は、今日、君の部屋の鍵を取り換えることになってね。別に、どこも壊れてないんだけどね！　取り替えてしまったから、君の鍵はもう使えないんだ。ああ、いや、大丈夫！　今月分の家賃は、政府の人に払ってもらったから！　じゃあ、元気で！』
というわけで、俺はホームレスになった。

なったと思ったら、城守さんにタクシーに乗せられて、気づいたらいつの間にか、この部屋に放り込まれていたというわけだ。
「いや、しかし、な……」
スイートルームなんて、俺は都市伝説の類いだと思ってたけど、ほ

んとにあるんだな。
一泊５０万円とか。
ギャグだったら笑っても良かったけど、あいにくみんな大真面目だった。
確かに豪華な部屋だけど、別に５０倍豪華だとか、５０倍幸せになるとか、そんな効果はない。

でも、
２倍くらいには、楽しくなってきた。
ふかふかのベッドに、豪華な調度。
『こんな所、どうやってメシ食ったらいいんですか！？』と泣きついたら、城守さんが『夕食は、フランス料理のフルコースをルームサービスで届けさせます』とのこと。
普通に楽しみだ。
しかも、大きな窓から見下ろせば、宝石箱をひっくり返したような夜景。
ぜひここは、グラスを傾けながら『勝者の気分だ』とか、言わなければ！

ワインを飲むわけにはいかないので、高級そうなグラスにミネラルウォーターを注ぐ。
そのまま窓の近くに行こうとすると、

携帯が鳴った。

シックな黒の折りたたみ携帯だ。
城守さんが持たせてくれたものだが、今まで携帯なんか持ったことがなかった俺は、あれをさんざんいじくりまわそうと決めていた。

ああ、今日、寝られるかな？

なにはともあれ、電話にはでなければ。おそらく、相手は城守さんだ。

「もしもし」

「悠斗君ですか！　すみません、私のミスです！　まずいことになりました」

なんですか、いきなり？

「気が緩んでいたといわれても仕方ありません……。麗華さんに『あの子、どうだった？』と聞かれ『ＢＭＰ１８７のウェポンテイマーでした。素晴らしい素質ですよ』と言ったら『そう、わかった』と答えられてしまったんです！」

すみません。今のセリフのどこに『まずいこと』があるのか、俺には分からないんですが。

「今は、まだ大丈夫ですか！？」

「はあ。特になんにも……。ひ！」

今、物凄い寒気がした。

なんだ？　スイートルームは、クーラーの威力も５０倍なのか！

「どうしました、悠斗君？」

「い、いや、凄い寒気が……」

うわ、足が震えてる。

「く……。もう来たのか……」

城守さんの悲痛な声。

その間にも、悪寒はどんどん増していく。

上がってくる。なにか恐ろしい塊が、凄いスピードで上がってくる。
内臓が下から突き上げられるような圧迫感。

下の階の人たちの悲鳴が聞こえてくるような気がするのは、幻聴だと信じたい。

と、緊急館内放送を知らせる音楽が鳴った。
『み、みなさまにお知らせがあります。げ、現在、当ホテルにＢＭＰハンターとして有名な剣麗華様が、お見えになっていらっしゃいます。ご友人に面会に来られたとのことです。決して、危険はありませんので、悪寒を感じても慌てずに、お部屋に引き籠もっていてください！』
引きつったような、係りの女の人の声。
というか、引き籠っていてください、って本音が出てるじゃないか。

『お、お、おちつつ、落ち着いてください！　彼女の目的は、最上階のスイートルームに泊まっている澄空悠斗様です。他のかたかたたちには、け、けっして、き、危険はないので、落ち着いて！　部屋から出ないでください！』
……このホテルの個人情報保護方針は、いったいどうなっているんだ？
というか、危険がないなら、なんで、部屋から出てはいけないのだろうか？
『だから、大丈夫だって言ってるでしょうが！　悪いのは、澄空ってお客さんだけなの！　できたら、出てってー！』
ついにキレだした。
というか、初めて泊まるホテルで『出てって』と言われた高校生は、どのくらいいるんだろうか？
興味深いテーマだ。

「……凄い状況になっているみたいですね」
城守さんが嘆息してる。
「俺、一体、どんな悪いことをしたんでしょうか？」
「いえ、悠斗君は少しも悪くありません」
城守さんは断定してくれるが、もちろん俺の心は癒されない。
プレッシャーの塊はどんどん近付いてくる。これってひょっとして、エレベーターか？

「いいですか、悠斗君。よく聞いてください」
真剣な声の城守さん。
「君の部屋の前には、１０人のＳＰを配置しています。死んでもその場を守るように言っておきますが、はっきり言って、１０秒と持たないと思います」
マジですか？
「とにかく初撃をかわしてください。ああ見えて、彼女は聡明な人です。落ち着いてみれば、君がまだ能力に目覚めていないのを、分かってくれると思います」
ということは、一発喰らうのは前提なんですね。
というか、聡明なら、乗り込んで来る前に、思いとどまったりはしてくれないんでしょうか？

「自分と対等に渡り合えそうな人ができたのが、よほど嬉しいんでしょう。君の実力を試したくて仕方がないようです。携帯も持っていないようで、連絡が通じません」
「携帯は、携帯しないと意味がないじゃないですか！」
「うまいこと言っている場合ではないですよ、悠斗君」
言ってねえよ。
「とにかく、間違っても死なないようにしてください。あなたは、こんなところで死んでいい人ではありませんから。私も急いで向か

います」
「ちょ、ちょっと待ってくだ……」
切れた。

……そりゃあさ。
こんな所で死んでいい人間なんて、いないと思うよ。普通は。

城守さんに切られた携帯電話を持ったまま呆然としている俺の耳に、ノックの音が聞こえてきた。

「悠斗様、起きていますか？」

こんな状況で寝られる人間がいたら、ぜひ教えてほしい。一生近付かないから。

「ご承知の通り、今、この部屋に向かって麗華様が近付いてきています」

やっぱり、麗華って人か。

「我々は、これから麗華様をおとめしなければなりません」

声の主はおそらく、さきほど上条博士の研究所で見た黒服達だろう。いかにもプロフェッショナルという体つきをしていたが、このホテル全体を圧迫するような気配の持ち主と比べると、紙切れよりも頼りない。

「いや、やめといた方がいいんじゃないかな？」

この気配の持ち主は、絶対に人間じゃない。というか、人間であってほしくない。

「そういうわけにもまいりません」

やたらと悲壮感の漂う黒服。

「悠斗様、今までお世話になりました」

いや、４時間前に会ったばかりだよね？

と、その時、チーン、と乾いた音がフロア全体に鳴り響いた。ような気がした。

それと同時に、今まで下から感じていたプレッシャーが、真横から吹き付けてくるように感じる。

「正直に申し上げて、5秒と持たないと思います」
城守さんの見立てより、短くなってるじゃないですか。
「これほど嬉しそうな麗華様を見るのは、初めてです。万が一、あなたにもしものことがあったら、怒り狂った麗華様によって、このホテルの歴史は今日で終わります」
「いや、なんかそれ、おかしくないですか？」
いまいち話の筋が分からないのは、俺の頭が悪いからか？　麗華様とやらは、俺に死んでほしいのか、死んでほしくないのか、どっちだ？
と。
「……」
い、いきなり恐ろしいほどの沈黙が訪れた。
な、なんなんでしょうか？
「お待ちください、麗華様！　悠斗様は、まだ……！」
「ひ、そ、それは……！」
「止めろ！　なんとしても、麗香様をおとめしろ！」
飛び交う怒号。
ついには、銃撃の音まで聞こえてきた。
「……」
「……」
沈黙が続く。

「……」
「……」
「……」
「……」

そして。

コンコン。

『さっき世界は滅んだ』と言われても信じそうなほどの静けさの中、俺の神経をこそげ落とすような無気味なノックの音が聞こえてきた。
「……よー」
動転して『澄空悠斗なんて人間はここにはいませんよー！』とベタな返事をしようとしたが、口の中が完全に乾いていて声が出なかった。
さっきのミネラルウォーター飲んどきゃ良かった。

と、
いきなりドアが目の前を通り過ぎた。
「……な！」
そのまま、後方の窓ガラスに激突する。
豪勢に街の灯りを映し出す大きなガラスは、防弾らしく傷一つついていなかったが、高級そうなドアと俺の心は、真っ二つに折られてしまった。

「しまった……。力加減、間違えた」
心の折れた俺に聞こえてくるのは、『ちょっと反省』みたいな軽い声。

ちょっと待て！
これが『力加減、間違えた』なんてレベルか！
怒りで折れかけた心を再武装し、マウンテンゴリラのようなその女を睨みつけて、

呆然とした。

『細い』というのが、第一印象だった。
だが、それは、二足歩行するクロコダイルのような女性を想像していたためで、少し風変りな制服に身を包んだその女性は、奇跡のような比率を誇るプロポーションをしていた。
水でできているんじゃないかと思えるほど滑らかな黒髪が目を引く。
冗談のように整った小さな顔がその身体に乗っている。
透き通るように色素の薄い瞳は、どこまでも捉えどころがなく、
白磁のような美しい手には、壮麗な諸刃の剣が握られていた。
？

ちょっと待て？
剣？

「『断層剣』カラドボルグ」
『鈴が鳴るような』という形容詞がぴったりの声音で言う女性。
んーと、今のは、その剣の説明をしてくれたのでしょうか？
そんなことより聞きたいことが、３ダースほどあるのですが。

次々と襲い来る摩訶不思議な事態に声が出せなくなった俺の前で、

美しい女性は、『カラドボルグ』を振り上げた。

……。

邪神以外の神様の存在を信じてもいい。

俺が今日初めてそう思ったのも無理はないだろう。

少し変わった制服に身を包んだ女性が放った一撃の後も、俺の首はつながっていた。

ただし、あと数十センチずれていれば、その限りではなかった。

「……」

俺の表情はほとんど変わっていなかったと思う。心理的には泡を吹きまくりなのだが、もう外部に情報発信するだけの気力も残っていないのだ。

ふかふかの豪華なベッドが真っ二つに切断されたばかりか、床に巨大な亀裂が走り、階下の部屋が見えている。

重厚なドアの直撃にも耐えた防弾ガラスにも大きな三日月型の亀裂が入っており、そこから美しい星達が直接見えるようになってしまっていた。

一瞬でスイートルームを戦場に変えた美しい女性は、『カラドボルグ』を肩に担いだまま少し考え込むような仕草をして、

「ごめん。まだ、ＢＭＰ能力が覚醒してないこと、気づかなかった」

と言った。

ああ、

誰か、誰でもいいからその一言を彼女に伝えることができていれば、俺が生まれて初めてのホテルで、名指しで、しかも全館放送で罵られることはなかったんだ。
ついでに、この部屋も、明日以降も存分にブルジョワジー達の虚栄心を満たし続けられたんだ。

とりあえず、第一級戦犯は城守さんだな。あと、黒服。次点で、俺くらいにしておこう。

女性が軽く右手を振ると、『カラドボルグ』は煙のように消え去った。
これが、ＢＭＰ能力か。

そのまま女性が、ツカツカと近づいてくる。
「あれ？」
よく見ると、あの制服、高校生の制服っぽく見える。
常人離れした容姿と、浮世離れした言動のせいで気付かなかったが、女性自身もかなり若い。
ひょっとして、俺と変わらないくらいなんじゃないか？

「ソードウェポン『剣麗華』」
と、女性は、ピアニストのように優雅な右手を差し出してくる。
単なる自己紹介なのだろうが、その響きは、天上の音楽のように美しい。
俺も負けてはいられない。
右手を差し出し、
「『澄空悠斗』。大衆飯店『よーい丼亭』皿洗い……は、今日首になったから無職。琴峰高校一年生……だったけど学費が払えなくてやめたから、学生でもない！」

……。

別に、困らせようと思って言ったわけじゃない。

正直に自己申告しただけだ。

目の前の女性も、さぞ呆れているだろうと思って見てみると、

捉えどころのない瞳に少しだけ真剣な色を載せた彼女は

「うん。よろしく」

と、その容姿に似合わない幼い口調で、俺の手を強く握りしめていた。

……変な人だな。

今日一日、さんざん気を張っていたからだろうか？

不意を突かれて緊張の糸がぷっつりと切れた俺は、

そのまま眠りの世界に誘われた。

通学「新月学園」

目覚めは、意外に悪くなかった。

だが、ふかふかのベッドや、豪華な内装はなく、目に入るのは、まっ白い壁と少しスプリングの固いベッド。

それから、象用か、というくらい太い注射器。

……なんでだ。

「お、お目覚めですか!?　失礼しましたー!」

その象用注射器を抱えた白衣の女性は、俺と目が会うなり、脱兎のように逃げ出した。

そういや、あの人、初日に俺に硫酸飲まそうとした人だな。

さすが、上条博士。部下の研究員まで、普通とは一味違う。

しかし、上条博士の部下がいるということは、ここは研究所かな。

なんで、こんなところに?

……って、考えるまでもないか、いくらスイートルームだからと言って、壁と床に大穴が空いたような部屋が使えるはずがない。

気を失った俺を、城守さん達が運んでくれたんだろう。

ん?　今、なんか見えたような気が。

「ちらっ」

と、自分でいいながら、ドアから顔の上半分だけ出しているのは、城守さん。

全然萌えませんが、若干可愛いです。美形は得ですね。

「なに、やってるんですか？」
一応、聞いてみる。
「お、怒ってませんかね？」
「まあ、そんなには」
怒るだけの気力が残ってないというのが本音だが。
「そうですか！　それは、良かった！」
途端に、顔を綻ばせて、部屋に飛び込んでくる城守さん。

テ、テンションが読めない。

「申し訳ありませんでした！」

と、いきなり城守さんは、腰を９０度に曲げて謝ってきた。
むう。役人のくせに、なんて潔い謝りっぷりだ。
「私が一言、『悠斗君は、まだＢＭＰ能力が使えない』と麗華さんに伝えていれば、こんなことには……」
それは、俺も思います。２秒で言えますよね、そのセリフ。
「いえ、そんな、気に……」
「まあ、無事でなりよりです」
しないでいいですよ、と言おうとしたところでセリフを被せられた。
切り替え早いな、城守さん。

「あんなことになって、麗華さんも残念がってましたよ。『悠斗君とあまり話ができなかった』と」
「壁に大穴があいてる状況では無理です」
星空が見えていたので、若干ロマンチックではありましたが。
「ですから、私が代わって彼女のことを説明しようかと思うのです

が」
「いえ、その必要はないです」

この国で、総理大臣の名前を知らなくても、彼女の名前を知らない人間はいない。
昨日、初めて名前を聞いた時点で気付かなかったのは、俺が相当に混乱していた証左だと思う。
『剣麗華』。
高校生にして、すでに世界のトップランクに名を連ねる凄腕ＢＭＰハンター。
メディア露出がほとんどないため、『怪獣みたいな女性』『超絶美少女』といった両極端な噂のみが流れていたが、両方とも真実だった。うむ。
実際の幻影獣討伐での実績はもちろん、ＢＭＰ研究の分野でも、すでになくてはならない存在として認知されている。
外交戦略にすら影響を及ぼすほどの有名人だが、なにより特筆すべきは、そのＢＭＰ能力値。
人類には不可能と言われたＢＭＰ１７０を超えるＢＭＰ１７２を叩き出した、ＢＭＰ能力値の世界記録保持者。

ん？
……ちょっと、待て？

「あの、城守さん？」
「はい？」
「今のＢＭＰ能力値の世界記録っていくつでしたっけ？」
と、聞くと、城守さんが不敵な笑みを浮かべる。
ううん、嫌な予感が。

「『昨日まで』なら、麗華さんがもつ１７２が最高値ですね」
『昨日まで』に不必要な力を込めて、城守さんが言う。

「……少しは、ご自分の立場が分かっていただけましたか？」
「…はい」
わかりたくもありませんが。

つまり、この俺、澄空悠斗は、
昨日一日で、人類のＢＭＰ能力値最高記録を、１５も更新してしまったわけだ。

◇◆◇◆◇◆◇

「ふむ……」

見知らぬ道の真ん中で立ち尽くす。

迷った。

ロードマップでは不安なので、わざわざゼンリンをコピーして来たのに迷うとは、いかなる怪奇現象だろうか？

「参ったな……」
どう見ても自分に似合っているとは思えない風変わりな制服の襟元を弄びながら、呟く。
今、俺は『新月学園』へ編入手続きに向かう最中だった。

うん？　なんでこんなことになっているか？
『新月学園』は、日本で最高のＢＭＰ養成機関だ。俺の意図はどうあれ、政府としては是非とも、あそこに放り込みたいらしい。
そして、俺のような人生経験の浅いガキが、海千山千の役人である城守さんに、論戦で歯が立つわけがないということだ。
以下に、その激しいやり取りを示そう。

「という訳で、悠斗君には、『新月学園』に編入していただきたいのです」
「なにが『という訳で』ですか？　直前のセリフ覚えてます？　『新月学園学食のささみチーズフライの味は、もはや芸術の域に達していると言っても過言ではない』ですよ。『という訳で』と言えば、説明責任をすべて果たしたと考えるのは、この国の人間の悪癖の一つで……」
「新月学園なら、学費は全額免除ですが？」
「入ります。すぐ入ります。必ず入ります。いますぐ入ります。さあ、早く必要書類を！　虚実織り交ぜて、完璧な願書を作成して見せます」
「真実だけを書いていただければ、結構です」

という具合だ。

しかし、参ったな。このままでは、学園にたどりつけない。
一度は諦めたハイスクールライフ。すぐにでも、授業を受けたいのに。
……誰かに、道を聞くか。

「っと、ちょうどいい」
道の先から、猛スピードでこっちに走ってきている男子高校生がいる。しかも、どうやら新月学園の制服を着ている。
あれだけバイタリティーに溢れる走りをする男なら、俺の一人や二人、学園まで連れて行ってくれるに違いない。

「おーい！」
手を振る。彼は、どんどん近づいてくる。
心なしか、スピードがさらに上がっているような？
「お、おーい？」
疑問形にして呼びかけてみるが、彼のスピードは増すばかりだ。
ひょっとして、これって危なくないか？
「ま、待て！　ちょっと待て！　いくらなんでも、そのスピードは、危ないぞ！」
「逃がすかー！」
もはや、人間業とは思えないスピードに達した男子高校生が、目前に迫る。何を追ってらっしゃるんでしょうかー！

俺は、反射的にその場を飛びのいた。

「ぐっ。つつ……」

受け身を取りそこねて、ひとしきり痛がったあとに、目をやると。
石垣に大穴を開けて上半身をめり込ませた、男子高校生の下半身が見えた。

「くそ、見失った！」

石垣から勢いよく頭を引っこ抜いた男子高校生が叫ぶ。
言動から典型的なアホ面を想像していたのだが、なかなかのイケメンだ。若干、軽そうにも見えるが。
なんだか、不公平を感じるなぁ。

「おい、あんた！　ここらへんで、幻影獣を見なかったか？」
「幻影獣？」
思わず問い返す。
俺だって、天気予報とＢＭＰ警報くらいは、確認してる。
今日は、すがすがしいくらいの『青』マークだったぞ。

「そんな訳ないって。俺が、さっきまで追いかけてたんだから」
と言う男子高校生。
ならば、その辺にいるのだろう。
と、周りを見回してみると。

「あ、ほんとだ」
確かにいた。

その姿はウサギを中型犬くらいにまで大きくしたようなイメージ。
ただ、頭のてっぺんに付いている立派な角が非常な違和感を醸し出している。
幻影獣とはいえ、このくらいなら特に害はない。いわゆるＤランクというやつだ。
ただ、成長するとどんな化け物になるかわからないので、ＢＭＰ管理局は、通報・捕獲を奨励している。
この男子高校生も、そんな真面目で正義感あふれる若者らしい。外見は、弱ナンパ男風味にも見えるが。

「でかした、相棒！」
いつの間にか人を相棒にしたてあげた男子高校生は、幻影獣（幼体）目がけて、クラウチングスタートの姿勢を取る。
そして、
「超加速（システムアクセル）！」
弾丸のような速度で、地を蹴った！
こ、こいつ、ＢＭＰ能力者だ！
一瞬で、俺の視界から、完全に消えた。

そして、轟音。

「げ、げほげほ……」
さきほどに倍する量の土けむりで、せき込む俺。
しばらくして、それが収まったころに視界に入ったのは、腹を抱えて人を小馬鹿にしたように鳴いている幻影獣。

「あれ？」
疑問符を浮かべる俺を置いて、ひとしきり笑った幻影獣は跳び去って行った。
「？」
「お、おーい……」
か細い声に目をやると、
「……大丈夫か？」
そこにいたのは、壁に上半身をめり込ませた、男子高校生の下半身。

「……わ、わるいけど、抜いてくれないか？」
「抜くのはやぶさかではないけど……。どうだろう？　ここは、い

っそのこと、そちら側に突き抜けるというのは？」
「だ、だめだ！　すっごいデカイ犬が睨んでる。あと、１０センチで、やつの捕食範囲に入ってしまう」
……それは、大変だ。俺も、弱ナンパ風味とはいえ、イケメン高校生が犬にいただかれた道路を、これから通学路にはしたくない。
抜いてあげよう。

しかし、あれだ。
ＢＭＰ能力者は、怪獣みたいな人たちばかりだと思っていたが、少し愉快系の変人もいるんだな。

……さらに憂鬱になってきた。

「いや、助かったよ。マジで」

無事、石垣から下半身を（いや、上半身か）を救出した俺は、問題の男子高校生と一緒に歩いていた。

「しかし、石垣、あのままにしておいていいものかな？」

「留守だったしな。後で、学園の事務の人と一緒に謝りに行くよ。どうせ、俺一人だと、もっと怒らせるしなー」

軽い口調で言う、若干イケメンの男子高校生（ではなくて、『新月学園』の生徒だな。こんな風変りな制服が他にあるとは思えん）。

しかし、俺が着ると、ただの変わった制服なんだが、こいつが着るとなかなか様になっているな。ち、不公平な。

「しかし、あんたも変わってるよなー。入学式からまだ2週間もたってないうちに、転校してくるなんてさ」

「ふ。俺はどちらかというと、入学して2週間で前の高校を辞める羽目になったことに脅威を感じてるよ」

いや、マジで。

「いや、凄いって誉めてんだよ。ＢＭＰ能力がない奴が『新月』に入るには、７０以上の偏差値がいるんだろ」

いや、５０を超えた記憶がないぞ、俺は。

「ま、も一人の転校生に比べたら、全然目立たないだろうけどな」

「もう一人の転校生？」

興味を覚えた俺は、聞く。

「おいおい、とぼけるなよ。ＢＭＰ１８７とかいうとんでもない能力者だよ！　つい最近まで剣の１７２ですら人類の限界を超えたって騒がれてたのにな。１８７なんて、もう人間じゃないんじゃない

かー？」
「凄いな」
世の中には、そんなとんでもない人間もいるのか。

……って、ちょっと待て。それ、俺だ。

「お、着いたぞ」
「へ？」
彼の間違いをただそうとした俺は、唐突なセリフに意表を突かれた。
「ここが、職員室だ。先生が待ってんだろ。こういう時、普通は」
「あ、ああ。そうだな」
……校門をくぐった記憶がない。疲れてるんだな、俺。
「じゃ、俺は事務室の方に行くから。さっきの石垣の件、報告しないと」
と、背を向けて、

「あ、そだ」
と、止まる。
「俺は、ランスウェポン『三村宗一』。よろしくな」
「と、こちらこそ。元よーい丼亭調理補助候補・新月学園編入予定『澄空悠斗』だ」

負けじと、称号らしきものをつけてみたが、

やっぱり『元』と『予定』は良くないな。
早いところ、新しい称号を用意しよう。

◇◆◇◆◇◆◇

日本で最高のＢＭＰ養成過程を持つ高校。『新月学園』。

ＢＭＰ能力の高低と入学試験の難度が反比例するという、変則の試験方法を持つことでも有名なこの高校は、いわゆる超名門校でもある。

ＢＭＰ能力がないものが入学するには日本で最も難しいと言われているが、入学することさえできれば、ここほど恵まれた高校もない。

まず授業料が安い。一般的な公立高校の半額程度だ（ＢＭＰ能力者は無料になる）。

また、人的・設備的投資も凄い。

幻影獣対策費として政府から直接補助金を受け取っているので、授業料が安いにも関わらず、他の高校を圧倒するほどの資金力を誇る。

ＢＭＰ能力者養成に使うべき資金だが、その恩恵の一部を他の在校生も享受することができる（高ＢＭＰ能力者にいたっては、生活費どころか給料が出る）。

また、ＯＢ・ＯＧの寄付及び卒業後のコネクションも凄い。

無事ここを卒業することができれば、『特権階級』『ＢＭＰ族』と言われるほどに、輝かしい未来が約束される。

だが、それゆえに、過程は厳しい。

ＢＭＰ能力者は、その能力を磨くために血のにじむような鍛練を、ＢＭＰ非能力者は、それ以上の努力を要求される。

落伍者には、容赦ない。

それゆえに、教師陣も、他の高校とは一線を画する。
各界で名をはせた学者、カリスマといわれる教育者。
なかでも中核となるＢＭＰ養成課程を担当する教師陣は、世界の一流ＢＭＰハンターと並んでも、何ら遜色ない凄腕のみが抜擢されている。

以上、『季刊ＢＭＰ最前線ＶＯＬ１３７・ＢＭＰハンターになるならここだ』より抜粋（俺の脳内で）。

◇◆◇◆◇◆◇

……つまりは、あれだ。

この何の変哲もない職員室のドアを開けるのにも、凄く勇気がいるということを分かってもらいたかったんだ。

昨晩の麗華さんも件もある。
ドアを開けたとたん、原子レベルにまで分解されるトラップが発動しても別に不思議じゃない（というか、実際にそんなセキュリティを一部で採用しているらしい。……正気か）。

とはいえ、いつまでもビビっているわけにはいかない。

意を決して、俺はドアを開けた。

超名門校とはいえ、職員室の中は意外と普通だった。

だが、誰もいなかった。

「そうか、ホームルームの時間か」

しかし、それにしても誰もいなくなるものだろうか。

少なくとも、俺の担任はここにいてくれないと、どうやって教室まで行けばいいんだ。

「ああ、もう！　いったいどこにいるのかしら!?」

突然、誰もいないはずの職員室から声がした。

……いや、誰もいなかった訳じゃない。

小さ過ぎて見えなかったんだ。

職員室の中ほどにある席の一つに、小学生くらいの女の子が座っていた。

「……なぜ、職員室に女の子が？」

いぶかりながらも、俺は近づいていく。

「もう……？　ほんとにどうなってるんだろ？　１０キロ先にいたって分かるくらい集中してるのに……。まさか、上条博士、ついにボケたんじゃないでしょうね」

上条博士はボケないだろ。あれだけハッスルしてれば。

しかし、この子、右目に、えらいごつい眼帯してるな。もっとファンシーなのにすればいいのに。

「『ＢＭＰ１８７』なんてとんでもない男の子なんだから。同じ町内……いや市内にいれば、絶対に感知できるはずなのに！　……って、あなた、何をしてるの？」

「いや、教室が分からないんですが」

いきなり話しかけられて思わず敬語になる俺。
しかし、この子、姿も声も幼いけど、口調が妙にしっかりしてるな。
しかも、教師の席に座ってるし、いったい何者だ？
まさか！？
「教室が分からないって、転校生でもあるまいし」
まさか、あの、絶滅したと言われている。
「ん、あなた見ない顔ね。……いや、どっかでつい最近見たような」
俺も一度でいいから見たいと思っていた。
「って、ちょっと待ちなさい。確か、澄空悠斗君の顔写真がここに……」
でも、ほんとにいるわけないと思っていた。
「まさか、あなたが、澄空悠斗君！」
「こども先生だー！！」

「……はい？」
しまった。思わず、叫んでしまった。
しかし、なんてことだ。俺の担任はこども先生だというのか。
「そんなことはいいから、ちょっと顔見せて」
言いながら、こども先生は、右目の眼帯をはずす。
驚いたことに、そこから深緑の瞳が姿を現した。
左目は普通の黒色なのに。

「んー？」
吐息がかかるくらいの距離で、深緑の右目を使って、俺の瞳を覗き込んでくる。
「ん、んんー？」
しばらく見つめたあと、何が気に入らないのか、俺の頭を小さな両手でつかんでシェイクしだした！
「せ、せんせせせせ？」

「……ぜんっぜん、わからない」
拗ねたように言って、急に手を離した。
「感知できないわけだわ。キミ、いったいどこに１８７ものＢＭＰを隠しているの？」
……衝撃だ。
ＢＭＰってのは、隠せるものなのか？
しかし、頭を揺すっても出てきたりはしないと思うんだけど。

「ま、いいわ。城守さんが間違いをするとも思えないし。ようこそ、新月学園へ。私があなたの担任、緋色香よ」
「あ、どうも、澄空悠斗です」
「んー？　いや、ここは、ＢＭＰ能力者っぽく……」
というと、こども先生は、気取ったしぐさで立ち上がり。

「はじめまして。『アイズオブエメラルド』の緋色香です。よろしく」

ふ。そちらが、そう来るなら。

「『無所属』の澄空悠斗です。よろしく」

……いや、確かに『元』も『予定』も使ってないけど。
『無所属』はないよな。政治家じゃあるまいし。
というか、『』をつければ格好がつくと思っている考えをいい加減、直さなければ。

転校

実は、転校ってのをしたのは初めてなんだが。
こんなに緊張感があるものなのか？

「と、という訳で、今日からこの新月学園に通うことになった澄空悠斗くんです。みんな仲良くしてあげてくださいね」
こども先生がなんとか盛り上げようとしているが、教室はお通夜のように静まり返っている。
いや、違うな。
これは、どっちかというと爆弾処理の最中的な静けさだ。
めちゃくちゃ警戒されている。
……というか、教卓前にいる子たちなんて震えているんだが。

「え、えーと、な、なにか悠斗君に質問はあるかなー？」
おお、こども先生。俺の自己紹介をカットしたぞ。
ナイスな判断だ。こんな空気で、ギャグとか言えないぞ、俺は。

「は、はい。あの、じゃあ、質問していいですか？」
眼鏡をかけた、三つ編みの女の子が手を挙げる。
なんか、委員長ぽい子だな。
「はい、なんでしょうか。委員長」
まんまかい。
というか、なぜ、こども先生が答える？
「す、澄空君のＢＭＰ能力は、なんですか？」

『うわ、聞いちまった！』
的な空気が教室を支配する。
質問した委員長自身は、気丈に先生を睨みつけているが、教室はそれまでとは比べられないくらい空気が重くなっている。
というか、廊下側のあの子とか、泣いてないか、ひょっとして。

「う、うーん。プライベートに関わることは、もっと悠斗君と仲良くなってからね（はあと）」
「この学園に通う人たちは、みんな生死を共にする仲間です。少なくとも、ＢＭＰ能力に関しては、プライベートなんてないと思います」
こども先生が、ひらがな『はあと』まで使ったのに、委員長はスルーしてしまった！
……というか、ギャグが通る雰囲気じゃなさそうですよ、こども先生？

しばらく痛いほどの沈黙が続いたが、
やがて、こども先生は観念したのか、

「いえ、澄空悠斗君は、まだＢＭＰ能力が発現していません」

言った。

直後、教室に悲鳴が響いた。

「や、やっぱり噂はほんとだったんだー！」
「か、『覚醒時衝動』……」

「ＢＭＰ１８７の覚醒時衝動だって！」
「いや、確か、覚醒時衝動って年を取ってから起きるほど、激しくなるって聞いたことが……」
「麗華さんが小学生の時に起こした時には、国家維持軍の一個大隊が壊滅したって話だろ！」
「宗一の時でさえ、あれだけの騒動になったのに……！」

本人を置き去りにして盛り上がる、クラスメイツ。
というか、また知らない単語が出てきたな。
カクセイジショウドウ？
氷砂糖の親戚か？

しばらく騒ぐに任せていた教室の空気を総括するように、委員長が一喝する。
「先生！　先生は、私たちに死ねと言うつもりですか！」
「あら、違うの？」

……今度こそ、教室が凍りついた。

「委員長、言っていたわよね？　ここにいるのは生死を共にする仲間だって。なのに、悠斗君のためには命をかけられない？」
「い、いえ、それは……」
口ごもる委員長。
こども先生はいつのまにか、右目の眼帯を外し、深緑の右目を全開にしていた。
「これは、とても名誉な任務。ＢＭＰハンターになれるかどうかさえ分からないあなた達が、人類史上最高のＢＭＰ能力者の覚醒に立

ち会えるんですから」
「そ、それは、確かに。あ、あれ。そういえば」
後ろの方の席で、背の高い男子生徒が困惑した声を上げる。
「きっと悠斗君は、私の想像もできないくらいたくさんの人を救ってくれる。だから、私は命だってかけられます」
い、いや、そんな先行予約されても困るんですが。
「みんなも同じ気持ちだと思ってたけど、違ったみたいね」
「い、いや、違ったりはしないんですけど……。あ、あれ、なんでだろ？」
窓際で背の高い女子生徒が困惑している。
「やはり悠斗君は、別のクラスに在籍してもらうことに……」

「ちょっと待ったー！」
廊下側のガタイのいい男子生徒が声をあげた。
続いて、真ん中あたりの頭の良さそうな男子生徒が立ち上がって言う。
「そうですよ、先生。僕らは何も、受け入れられないなんて言った覚えはありません」
え？　言ってなかったっけ？
「いわゆるブラックジョークってやつです」
なるほど、ブラックの方か。
「先生、私、悠斗君と世界のために、命をかけます！」
「私も！」
「俺もです！」

今までの空気が嘘のような熱気に包まれる教室。
……これは、洗脳と言わないか？

「みんな、やっぱり最高の生徒たちだわ。１８７ものＢＭＰを持っていながら、この年になるまで覚醒していないような爆発物クラス

に危険で怠け者の高ＢＭＰ能力者の覚醒時衝動に立ち向かうなんて！」

こ、こども先生。もう少し、オブラートに。

俺のハートが大打撃です。

「でも、今のみんなの力では、悠斗君の覚醒時衝動に立ち向かうにはやはり力不足です。彼を止めるのは、わたしの『アイズオブエメラルド』の仕事です」

「そんな！　先生は、ただでさえＢＭＰ過程の方で大変なのに！」

「そうですよ！　『アイズオブエメラルド』に万が一のことがあったら、それこそ、この国の大きな損失です」

「クラス全員で壁になれば、延焼被害は最小限で済むはずです！」

……俺は、爆発物じゃないやい。

と、その時、

「ん。なら、私がそばで見てようか？」

涼風が吹いた。

ホームルームの最中、それもこれだけ紛糾している中だというのに、彼女は、何事もなかったかのように扉を開けて入って来た。

いくら俺が頭のままならない人だとはいえ、彼女の顔を忘れるはずはない。

昨日初めて出会って、会うなり高級スイートルームと小心者の俺の心を両断してくれたＢＭＰハンター。

一瞬、水を打ったように静まり返る教室。

沈黙を破ったのは、こども先生だった。
「珍しいわね、剣さんが登校してくるなんて。でも、遅刻よ？」
「ん、おめかししてた」
……おめかし？
着ているものは、他のみんなと変わらない。少し風変りな新月学園指定制服だ。別に改造の類もしていない。
水でコーティングされているとしか思えない同性が羨むほどの黒髪も、特に手を加えた様子もない。
スキンケアという言葉とは無縁なほど宝石のような輝きを放つ肌は、化粧らしきものを施した形跡はまったくない。
いったいどこを、おめかしする必要があるのだろうか？
同じ疑問をクラスメイト全員が持ったらしく、麗華さんも回答の必要を感じたらしい。
美しい黒髪を無造作にかきあげ、
「髪、洗ってきた」
「普段は洗ってないとでも言うんですか！？」
委員長が、即座にツッコむ。
……早いな。高速ツッコミだ。
「ん、なかなかの仕上がりだと自負してる」
しかし、華麗にスルーする麗華さん。そら、確かに綺麗な髪ですけどね。
ギャラリーの視線を一切気にせず、彼女の席なのだろう、窓際最後列の空席に着く麗華さん。

と、そこで、最初の彼女の言葉を思い出したのか、麗華さんの隣に座っていた男子生徒が突然、立ち上がり、

「宣誓！　俺、船酔いするタイプなんで、廊下側の席を希望します！」

どこからツッコんでいいのかわからないセリフを吐いて、立ち上がり、高速のスピードで、廊下側最下部に自分の席を構築した。

……まあ、とりあえず『センセイ』の発音が間違っていることだけ指摘しておいてあげようじゃないか。ただしくは『先生！』だ。

それはともかく、麗華さんの右隣の席が空席になったわけで。

「じ」

……う。麗華さんからすっごいカムカム光線がでている。

この状態で、俺にあの席に座らないという選択肢はあるのか？

「じゃあ、悠斗君の席も決まったことだし、ホームルームを続けましょうか」

ないみたいです。

新月学園「授業風景」

……ま、まずい。
先生が何を言っているのか、さっぱり分からん。

転校初日。
新月学園で受ける初めての授業。
俺は、いきなりのピンチに直面していた。

とにかく、授業の内容が理解できない。
入学式から2週間ほどしかたっていない時期なので、学校による授業進度の差が原因なのではないと思う。
ただ単純に、俺の前の学校とはレベルが違うんだ。

「む、むむむ……」
今日転校したばかりだというのに、完璧に揃っている教科書類（なぜか参考書までセットでプレゼントされた。凄い厚遇だ）だが、とりあえず俺にわかるのは、これが数学の教科書であるということくらいだ。

先生も、そんな俺の様子に気づいているのか、さっきから、こちらをちらちらと見ている。
大丈夫ですよ、先生。ちょっと気にかけてもらったくらいで、どうにかなるような問題ではなさそうッス。

「ん？」
と、待てよ。
あの、いかにも学者肌、って感じの先生、俺とゆうよりも、さっき

から麗華さんの方を見てるんじゃないか？

「あ、ああ。あの、麗華君……」

学者肌数学教師が、麗華さんに呼びかける。

「ん。なに？」

「き、君が授業に出ているなんて珍しいな。気になることでもあるのかい？」

まるで腫れ物に触るかのような雰囲気の学者肌教師。なんだ、これ？

「ん。悠斗君のそばにいないといけないから出てる」

しーんと静まりかえる教室（もともと誰も騒いではいないけど）。

というか、麗華さん、普段は授業出てないのか？

「そ、そうか。そうだな。ええと、あれだ。せっかくだから、私の授業で気になったことがあったら、ドシドシ指摘してくれないか？　君の意見は参考になるからね」

「？　え。指摘していいの？」

心底、意外、という顔の麗華さん。

「……いや、やっぱり、やめてくれ。君のレベルに合わされると、他のみんながついてこれん」

難解な命題に挑む学者のように嘆く学者肌先生。

って、あれですか？

この、俺にとっては、同じ国の言語で話されているということくらいしかわからない、この授業が、麗華さんには、出る必要もないくらいレベルの低い授業だと？

呆けたように隣の麗華さんの顔を見る俺。

それをどう誤解したのか、

「ん？　悠斗君、今の先生の解法は、別に間違いじゃないよ？　確かに、あんまり綺麗な解法じゃないけど。悠斗君が気になるなら、指摘する」

「いやいやいやいや。しなくていいです」
『綺麗な解法』と来た。
な、なるほど、だいたい分かってきたぞ。
この人、自分と周りのレベル差にもの凄く無頓着なんだな。
他のクラスメート達は、すでに俺がこの授業についていけてないのを肌で感じているというのに。
未だに俺が、数学のままならない人だということを理解できていらっしゃらない。

……胃が痛くなってきました。

◇◆◇◆◇◆◇

「ぽめらにゃぁー……」

別に復活の呪文ではない。
脳のオーバーヒート音である。
数学はおろか、午前中の全科目において1パーセントも理解できなかった脳が発する、悲しみの交響曲だ。

「だいぶ、まいってるみたいだな……」
「ん？」
同情するような声に顔をあげると、そこには今朝見た、弱ナンパ男風味イケメン。
「三村？」
「難しいだろ、ここの授業？」
「そらもう、魂を抜かれそうなほどに……。って、それより、なん

でおまえがここにいる？」
と、俺が聞くと、三村は一瞬キョトンとしたが、
「何言ってんだよ。クラスメイトだ。ついでに、おまえの前の席だ」
「いつからだ？」
少なくとも朝のホームルームの時にはいなかったような気がするが。
「あの石垣があった家に、事務員さんと一緒に謝りに行ってたんだよ。この席、空席になってたろ？」
「……」
覚えてない。
基本的に、麗華さんのことと、呪文のような教師の言葉しか覚えてない。

「ま、同情はするけどな」
「なんの話だ？」
授業がさっぱりわからないくらいで、同情されるいわれはないやい。
「この学校、確かにＢＭＰ能力者は特別扱いされてるけどな。クラス分け自体は、単純に学力で分けるんだよ」
「？」
「上の方の連中と下の方の連中の偏差値の差が凄いからな。クラスごとに授業内容が別なんだよ。で、ＢＭＰ過程のときだけ、ＢＭＰ能力者が特別教室に集まって授業を受ける、と」
「と、いうことは……」
つまり、あれだ。
このクラス、麗華さんと三村と（あと、ひょっとしたら俺プラス若干名）以外は、特にＢＭＰ能力者というわけではなくて、単に高学力生徒クラスってわけか？

そして、信じがたいことだが、
「お前、ひょっとして、勉強できるのか？」
「ま、このクラスじゃ底辺だけどなー」

「弱ナンパ男風味なのに？」
「おまえ、結構、無茶苦茶言うよな……」
若干傷ついたように見える三村。
気にしてたのか。悪いことをしたかもしれない。

「けど、おまえは特別だ。学力関係なしで、どうしても、剣の近くに置いときたかったんだろ。だから、『同情する』って言ったんだ」
「よし、分かった。同情されてやる」
そういうことなら、同情されることもやぶさかではない。
「で、その剣はどうした？」
「へ？」
言われてみると、確かにいない。
まあ、昼休みだし、飯でも食いに行ったんだろう。
というか、俺も行かねば。

そんなことを思っていると、ちょうど麗華さんが帰って来た。

「おかえり」
「ん。ただいま」
言うなり、抱えていた物体を俺の机の上に下ろす。
明太子パンが六個。
「？　これは？」
「悠斗君はまだ知らないかもしれないけど、ＢＭＰ能力は意外とカロリーを使う」
俺の机に手をつき、瞳を覗き込むようにして話しかけてくる麗華さん。
うん。確かに美人だ。間違いない。
「だから、私も悠斗君もこのくらいの量は必要」
言うと、俺の机に置いていた明太子パンのうち三つを取り、自分の席に着いた。

「……栄養のバランスは？」
「……栄養のバランス？」
おお、麗華さんに疑問符を使わせたぞ。
あの頭の良さそうな教師陣に勝った！

……空しいよな、やっぱり。

「いや、タンパク質とかビタミンとか……」
ミネラルとか。
俺も良くは知らないけど。
「……その視点はなかった」
明太子パンをじっと見つめる超絶美少女。
「悠斗君は、奥が深い」
妙に感慨深そうに言って、明太子パンを、はむはむし始める。

……んー。深いかなぁ？
三村は、『深くない深くない』って手と首を振ってるけど。

◇◆◇◆◇◆◇

昼休みも残りわずかだというのに、俺は呼び出しを受けていた。

呼び出し主は、あまり雰囲気のよろしくない三人組。

どうみても友好的には見えない。

が、なぜか、呼び出し先が体育館裏ではなく、体育館『内』だった。

こういうところにも、学校自体の品の良さが出ているのだろうか。

そういえば、周りで遊んでいる他の生徒たちも、こっちをちらちら見ているが、あんまり緊張感がない。

「そりゃ、この学校は、ＢＭＰが全てだ。あんたが本当に、ＢＭＰ１８７だってんなら、王様のようにふるまおうが、誰も文句は言わねえ」

真ん中のリーダー格の男子生徒が、口火を切る。

どうでもいいが、右側に立っている男子生徒は、結構、男前だ。

「けどな。今だにＢＭＰ能力が発現してないってのはなんだよ！？

そんなんで、エリート面されたんじゃ、他の連中はたまったもんじゃねえ。まして、あの剣より上なんて、ありえねえ！」

力説するリーダー格。

しかし、右側の男子生徒、頷くばっかりだな。せっかく、顔がいいんだから、積極的に前に出ないと損だぞ。

「よし、分かった。つまり、石ころのようにじっとして目立たなければいいんだな？」

まかせろ。そういうのは、得意だ。

「ちげーよ。どうしたって目立つだろ。今のままじゃ」
と、リーダー格が指さすのは、檀上。
天秤を模した、奇妙な形のオブジェクトがステージの奥に飾られていた。
しかし、左側の男子生徒は存在感がないなぁ。そのままだと、『リーダーのA君、男前のB君、空気のC君』とかいうふうにランク付けされちまうぞ。世間に。

「こいつは、『審判の天秤』って言われてる」
「ふむ」
「触れた人間の潜在ＢＭＰ能力を、他人にも分かるよう視覚化する装置だ」
「ふむ？」
「ＢＭＰ測定器のように、相対評価には向かねえが、誰にでも直感的に分かりやすい」
「ふ、ふむむ？」
く、こいつ。
不良のくせに、小難しい言葉を並べてからに。なにが『ソータイテキ』だ。

「見てろよ」
言って、リーダー格が、『審判の天秤』に触れる。
途端、
獅子に似た姿の獣が姿を現した！

「おお」
その輪郭は朧げで、今にも消え入りそうだが、その獣の放つ気配は、まっすぐで強い。
「っつ、はぁ……」

止めていた息を吐き出すような仕草をするリーダー格。
瞬間、獣も姿を消した。
「どうよ！　今のが、俺の『審判の獣』だぜ！」
「へえ」
こいつに対する認識を少し改めなければならない。
今の獣は、まだまだ輪郭もはっきりしていなかったが、嫌みのないまっすぐな強さを感じた。
「こいつは、ＢＭＰ１０８。もう少しで、ＢＭＰ能力の発現する、１１０に届くところだ」
男前が付け足す。
そして、やっぱり、何も発言しないもう一人の男子生徒。もっと、前にでようぜ！

「何が言いたいかわかるだろ？　あんたにも、これをやってもらいたいんだ」
馬鹿にするな。俺でも、そのくらいは、分かる。
「ちょうど、ギャラリーも多い。ここで一発、ＢＭＰ１８７の凄さってやつを見せてくれよ。そしたら、明日から、あんたがここのボスだ」
「なるほどな」
『ボス』という表現に違和感はあるが、リーダー格の言うことにも一理ある。

……実は、俺自身も、あのＢＭＰ測定器とやらの１８７という測定結果には、疑問を持っていた。

だって、全然、自覚ないし。
そもそも、今までＢＭＰとは関係ない環境で生きて来たのに、いきなり『今日から君が最強のＢＭＰ能力者だ』とか言われても困る。

いい機会だ。
挑戦しよう。

深呼吸する。
少し、緊張している。
正直な所、『審判の獣』は現れないんじゃないかと思っている。
そうすれば、この未だに理解できない現実からは、逃れることができる。
三村やこども先生、上条博士、城守さんに高校生活。
それから麗華さんと離れるのは若干寂しい気もするが、リーダー格の言うとおり、本当に能力がないのであれば、俺はここに居座るべきじゃない。
意を決して、『審判の天秤』に手を触れた。

ぴりっとした、というくらいだろうか。
特にこれといった手ごたえもなかった。
『審判の獣』も見当たらない。
「ほらみろ！　やっぱり、ガセじゃねえか！」
いきなり飛び跳ねたように喜ぶリーダー格。
「ＢＭＰ１８７なんて、いくらなんでもありえないと思っていたんだ！」
追随する男前の仲間。
そして、あと一人はやっぱり頷くだけだった。もっと前に出ようぜ！とか言っている場合ではない。
これは、この『審判の天秤』か上条博士のところの『ＢＭＰ測定器』のどちらかが故障しているということだ。

どちらにしても、後始末は大変そうだ。城守さん、頑張って。

と、そこまで俺が思ったとき、

「ひ！」

『心底恐ろしいものを見た』という声で、リーダー格が悲鳴をあげた。

「あ、ああ……」

男前も呆然とした表情で、『審判の天秤』の背後を見上げている。

「なんだ？」

俺も同じところを見てみるが、何も見えない。

ひょっとして角度の問題か？

などと、馬鹿なことを考えていると。

「き、きゃあああああ！」

ギャラリーたちから、もの凄い悲鳴が轟いた。

「なにあれ！　なにあれ！　なんなのあれー！」

「い、いくら、なんでもむちゃくちゃだ！　ＢＭＰ１８７だからって、なんだよ、あれー！」

「に、にげにげにげにげ……！」

「やっぱり、あいつには手を出しちゃいけなかったんだ！」

ちょっとしたパニックに陥っている体育館内。

しかし、やっぱり俺には何も見えない。

「な、なぁ、澄空。俺たちが悪かった。あんたの力は十分に分かったから、『ソレ』しまってくれ！」

とリーダー格。

「い、いや……」

しまってくれ、と言われても。

「お願いだ、悠斗さん！　……、ひ、ま、待った。や、やめろ。潰さないでくれ！」

と男前。
つ、潰すってなんだ？
ひょっとして、これ。本人には見えない仕様なのか？
「ゆ、悠斗さん。いや、澄空様！　俺たちが悪かった。この通り！　だから止めてくれ。止めてください！　お願いします！」
ついに口を開く第３の男。ようやく口を開いたと思ったら、それか。
というか、様づけなんてするな。俺が暴君みたいじゃないか。

「や、やっぱり、無理だ。あの三人組がいくら謝っても、澄空君の怒りは収まらない！」
「て、天罰だ。地上最強のＢＭＰを図ろうとした天罰だ！」
「とにかく逃げろー！　ＢＭＰ過程の先生たちを……、いや、国家治安維持軍を呼べー！」

……。
いや、暴君だな。まるっきり。

◇◆◇◆◇◆◇

「一言で言って、大惨事ね」
「大参寺ですか」
それは、きっと格調高いお寺なのでしょうね。
「発音変えてもダメです」
右目の眼帯の位置を直しながら、こども先生。
しかし、いつ見ても、ごつい眼帯だ。クマのプーさん眼帯とかじゃだめなのか？

昼休み後。
俺は午後の授業には出席せず、職員室に呼び出されていた。
目の前には、明らかにサイズの合っていない机の前に座っている、こども先生。
そして、他の教師たちが、俺から距離を取るようにして、壁際に移動しているのが気になる。凄く気になる。
「何らかの異常を訴えて保健室を訪れた生徒が２１６人。そのうち、パニック症状を起こして早退することになった生徒が８７人」
「ぶっ！」
ま、マジですか！？
「一番近くにいた三人組は、入院したわ。大事には、いたらなかったようだけど」
「ぶっ！」
ま、マジですか！？
もの言いたげな隻眼で見つめてくる、こども先生。
「待ってください、こども先生。意外に思うかもしれませんが、俺にも主張らしきものがあるようですよ？」
「こども先生、言わない。別に、言い訳する必要はないわよ」
『なんで疑問形なのよ』といったツッコミをすることすらなく、やけに寛大な、こども先生。
「君が他の生徒にそそのかされたのは明白だし、あの『審判の天秤』は、本当に何の危険もない、ただの検査器具なんだから」
「え？」
凄く危険だったように思うんですが。
「そうね。今、あれの製造元は大変よ。謝罪会見に、原因究明・再点検、商品回収。結構、大手なんだけど。潰れなければいいんだけどね。悠斗君のせいで」
こ、こども先生、もう少しオブラートに。
俺のハートにクリティカルヒットです。

「ま、それはともかく。もう少し、こっちに来て」
言われるがままに、椅子ごと寄せると、こども先生は眼帯を外した。
「んー」
深緑の瞳が、俺を覗き込む。
「ん、んー！」
こども先生の手が、俺の頭を掴む。
「せ、せんせせせ……」
縦に振っても、やっぱりＢＭＰ能力は出てこないと思います、こども先生！
「やっぱり、わかんない」
拗ねたように手を離す、こども先生。じゃあ、するなよ。

「でも、これでわかったでしょ」
「え？」
人差し指を、ビッと立てて、こども先生。
「感知能力者としては屈辱だけど、私に感知できないだけで、やっぱり君にはとんでもないＢＭＰ能力が眠っているわ」
「はい」
みたいですね。
「君自身が自覚できないのは分かるけど、これから先に何が起こるか、私にもわからない。覚醒時衝動だけでなく、いろんなことに気をつけて」
「分かりました」
深く頷く。

人に迷惑をかける生き方だけは、嫌だからな。

豪華絢爛（ロイヤルエッジ）『本郷エリカ』

眼が覚めると、夕方だった。
机から頭を起こすと、教室内には誰もいない。
「ふーむ」
午後の授業の途中から、記憶がない。
これは、俗に言う居眠りというやつだろう。
「いや、どっちかというと気絶かな？」
ほんとに、授業中、先生が何を言ってるのか分からないもんなぁ。
「そういや、麗華さんは……」
いない。
今日の状況からして、先に帰ったとは考えづらいな。
もう少し待ってようか。

しばらく待っていると、教室のドアが開いた。
だが、期待していた人物ではなかった。
「委員長？」
それは、麗華さんにも喰ってかかっていた、委員長属性の委員長だった（名前はまだ知らない）。
「まだ、帰ってなかったんですね」
軽く会釈をして、自分の机を漁る委員長。
どうやら、忘れ物を取りに来たようだ。
しかし、委員長。分厚い眼鏡で、三つ編みで、あんまり目立つ風貌じゃないけど、なんだか、ホっとする。
この二日間、個性の強い人たちばかりだったもんなぁ。
上条博士（と、そこの女性研究員）、城守さん、三村、こども先生。
そして、やっぱり麗華さん。
あの人は、やっぱり特別だよなぁ。

「『特別』って、どんな気持ちですか？」

そりゃ、あれだけ超絶美少女で、仰天戦闘力を持ってれば、普通の感性にはならないとは思うよ。でも、悪い子じゃないんじゃ……え？

気がつくと、いつの間にか、委員長が目の前まで来ている。

普段から難しい顔をしているが、今は特に真剣だ。

「今日の昼休み、体育館で遊んでいた人たちが、１００人近く早退したって聞きました」

「ぶっ」

そ、その話題でしたか。

まずい。急いで、対こども先生用に用意していたけど、結局使わなかった言い訳を思い出さないと！

「待ってくれ、委員長！　意外に思うかもしれないが、俺にも若干、言い分が、あったりなかったり、五分五分だ」

いかん。焦りすぎて、言動が意味不明だ。

「別に責めてるわけじゃないです」

しかし、やけに寛大な委員長。

「ほんのわずかだけど、ＢＭＰ能力があると分かって、この高校に入るために、私、勉強しました。身体を壊すほど」

以前に聞いた、ＢＭＰ能力と反比例する試験制度か。

「でも、低ＢＭＰ能力者……特に、ＢＭＰ１１０未満の能力発動値に達していないＢＭＰ能力者にとっては、結局ここも、ただの名門校です」

それのどこが悪いのか、俺には分からないけど。

少なくとも、このクラスの授業についていけるだけで、凄いと思うけどな。

『特別』って、どんな気持ちですか？」

前言撤回。
この子も、難しい。

◇◆◇◆◇◆◇

この二日間で、頭を悩ませる事項が爆発的に増えた。
まず、なんといってもＢＭＰ能力。
続いて、麗華さん、新月学園、さきほどの委員長もそうだ。ついでに、上条博士のところの注射好きの女性研究員さん。
そして、今現在、俺がどこにいるかということ。

「そもそも、俺はどこに帰るつもりだったんだ？」
絶賛ホームレス中だというのに。
委員長の話を、頭が悪いなりに消化しようと、うんうん唸りながら帰ったのがまずかった。
ただでさえ知らない道を、意識しないまま歩き続けるうちに、絶望的なまでに知らない場所に出た。

「首都にしては、綺麗な川だよなぁ」
その川（名前は知らない）に架かる、これまた名前も知らない橋の上から、のんきに呟いてみる。
でも、ほんとに綺麗な川だ。
透明度は高いし、魚も泳いでいる。
幅もそれなりだし、河原も綺麗だ。
おまけに金髪の美人まで立ってる。

「って、え？」

確かに金髪の美人が立ってる。

後姿だけでも美人だということを確信できる、すらりとした長身（麗華さんより高そうだ）に加えて、セミロングの輝くような金髪。

それも、染めているのではありえない自然な金。

おまけに、新月学園の制服を着ている。

「うちの学園、外人さんまでいたのか……？」

思わず欄干から身を乗り出して確認しようとする。

と、

「痛っ」

何かに、頭をぶつけた。

「なんだ、これ？」

確かに頭をぶつけた。

しかし、そこには何もない。

いや、『ない』訳じゃない。手で触ると、確かに感触がある。

しかし『視えない』。

「うーん……」

撫で回す。

感触はプラスチックに近い。

大きさは、ラグビーボールほど。

形は楕円で……、そう、できそこないのラグビーボールというと一番イメージが近いかもしれない。
そんな不可思議で不可視の物体が、欄干の上、１０センチくらいのところに浮いている。

「あー！　それに触っちゃダメデス！」
俺の知能では無理と、早々に思考を放棄しようとした矢先に、高く良く響く声が聞こえてきた。
声のする方を見てみると、さきほどの外人さんだ。
「それに触っちゃダメデス！　危ないデス！」
多少、片言気味だが、綺麗な発音だ。そして、案の定、美人だった。

輝くような金髪に見とれていると、金髪さんは、土手に駆け上がりだした。
「ひょっとして、こっちに来ようとしてるのか？」
結構、距離があるんだけど。
うーん、間が持たないなぁ。

さて、ここで問題。
こういう時の正しい対応は、次の内、どれだ？

1．恋人のごとく、彼女に向って全力で手を振り続ける。
2．二枚目の如く、少し流し目で川を眺め続ける。
3．脱兎のごとく、逃げる。
4．馬鹿のごとく、ぼーっとする。

よし、４だ。

などと馬鹿なことを考えていると、金髪さんが、いつの間にか目の間にいた。

結構、足、早いな。

「あ、危ないから、触っちゃ……、だめ、デス」

「りょ、了解ッス」

近くで見ると、輝くような金髪以上に、深く青い瞳に圧倒される。

思わず、敬礼した俺を、誰が責められるだろう？

「そ、それに触れては、いけないのデス」

「こ、これのこと？」

と、反射的に、その不可視のラグビーボールに触れてしまう、馬鹿な俺。

「デスから触れてはいけません！　手が切れてしまいマス！」

そ、それは、大変だ！

慌てて手を放し、出血の具合を確かめる。

「……あれ？」

しかし、手はどこも切れていなかった。というか、さっき、散々触りまくってたよな。確か。

「ちょっと見せてくださいデス」

俺の手を取って、まじまじと見つめる金髪さん。

「確かに、傷はないようデスね。何よりデス……」

セリフとは裏腹に、めちゃくちゃ落ち込んでいる金髪さん。え？

俺、またなんかしました？

「あの。なんか、まずかった？」

「いえ。怪我がなかったことは、とても喜ばしいのデスが……」

憂いの色に、瞳を染める。

「そうとばかりも言えない事情があるのデス……」

とりあえず、聞きましょうか。

そして、そのあとで、新月学園まで送ってもらおう。さりげなく。

◇◆◇◆◇◆◇

「私は、本郷エリカといいマス」

「あ、どうも、はじめまして」

金髪の彼女に促されるまま、川を眺めるような体勢で、土手に二人して座り込んで話している。

名前もそうだが、外人さんにしては、顔の線が柔らかい気がする。

ハーフさんだろうか？

「クラスは『支援士（サポーター）』、能力名は『豪華絢爛（ロイヤルエッジ）』デス」

「へえ。ロイヤルエッジっていうのか」

さきほど俺も触れた、不可視の刃。

それを、彼女は今、川の上あたりに展開しているらしい。

その数は、数十個。

良く見れば、完全な不可視というわけではなく、光の反射でだいたいの位置は掴めるみたいだ。

だが、一番の問題は……。

「エッジというにしては……」

切れない。

たまたま近くに浮遊していた『ロイヤルエッジ』を撫で回しているのだが、できそこないのラグビーボールのような形のソレは、確かに多少は尖っているが、よほど強くこすらないと、斬れそうにない。

「そうなんデス……」
青い瞳を伏せるハーフさん。

「幻影獣に有効な攻撃を与えられるのは、ＢＭＰ１２０からなのに、私のＢＭＰは１１９。おかげで、エッジも、こんな中途半端な状態なんデス」
それで、放課後一人で訓練してたのか。
見た目はロイヤルなのに、なんて健気なハーフさんだ。
見た目も才能もエクセレントな、どこかの麗華さんにも、是非見せたいところだ。

って、そういえば、俺、自分の自己紹介してないぞ。
彼女は、『ロイヤル』だから、俺は……。
（はじめまして！　『１－Ｃ』の澄空悠斗です！）
というのは、どうだろう？
って、それは、ただの所属だ！
没！

「あなたは、澄空悠斗さんデスよね？」
「へ？」
とても自然に、俺の名前を呼ぶ本郷さん。
どうして俺の名前を知っているんだ？

理由は不明だが。

彼女に自己紹介する機会は、最初からなかったらしい。

「体育館での『審判の獣』の儀式を見てましタ」
「ぶっ」
こ、ここにも糾弾者がいましたか。
「待ってください、エリカさんとやら。とてもとても不可思議でしょうが、実は、俺にも異論・反論・オブジェク……」
「とても、感動しましタ」
「……はい？」
感動とな。
なぜに？

「いったい、どんな獣が見えたんだ？　どうも、本人には見えない仕様らしいんだが……」
「分からないデス」
平然と言い放つ金髪。
「レベルや属性が違い過ぎると、見えてても理解できないことが多いデス。麗華さんの時もそうだったデス」
「そ、そなんですか」
「でも、とても優しくて強い獣でしタ。強すぎて、みなさんパニックになってしまったようデスけど……」
と、エリカは、言葉を区切り、
「私も、悠斗さんみたいなＢＭＰ能力者になりたいデス」
「いや、それはおすすめしない」
いや、マジで。

「ところで、悠斗さんの家は、こっちの方なんデスか？」
自分でも『ロイヤルエッジ』を弄びながら、エリカが聞いてくる。
ああ、そういえば、今、迷子の最中だった。忘れてた。

俺は、懐から携帯電話を取り出す。
「もしもし、城守ですが」
「城守さん。俺は、どこに帰ればいいんでしょうか？」
「？　それは、哲学的な問いですか？」
なんでやねん。
「物理的に、今日、寝るところです。壁はなくてもいいですが、天井は必要です。浮浪者はいてもいいですが、不審者は勘弁です」
「いきなり最低ラインを切り出さなくても……。そこに、麗華さんはいないんですか？」
「いえ、いませんけど」
別口の美少女なら、いますが。
「おかしいですね。麗華さんに、案内するよう、お願いしていたんですが」
「失礼しました。お手数、おかけしました」
慌てて電話を切る。
やばい。
そういえば……。

「麗華さんを置いて帰ってきてた」

◇◆◇◆◇◆◇

「ウチの学校で、麗華さんを置いて帰る男の子がいるとはおもいませんでしタ」
「意外だねぇ。俺もだよ」

とりあえず新月学園まで帰らないといけないので、エリカに案内を頼むと、意外なほどあっさりと引き受けてくれた。見た目はロイヤ

ルだが、ほんとにいい娘だ。
しかし、麗華さんにどうやって謝ったものか。いきなり、断層剣を抜かれた日には、まっぷたつになるのは、俺の身体だけではすみそうにないぞ。

「アレ？」
唐突にエリカが立ち止まる。
「どうした？」
「アレを見てくださいデス」
言われて見た方向には、新月学園の制服に身を包んだ女生徒。
しかも、
「委員長に似ているような……」
気がするのだが、確証が持てない。
俺の知っている委員長は、ちょっと気が強いところもあるみたいだが、まじめで、礼儀正しい。
しかし、今、見ている彼女は、制服をだらしなく着崩しているし、髪にも艶がなく、目の焦点も合っていないように見えるし、霊魂のような不可思議な光り方をする爬虫類のような尻尾を生やしている。

「……」

って、ちょっと待て！
「なんなんだ、あれ！？」
ようやく現実を認識して騒ぎ出す俺の前で、不気味な青色に輝く尻尾が、もの凄い勢いで振りぬかれた！
「な！」
たまたまそこを通りがかっていた人たちが、３人ほど、まとめて吹っ飛ばされる。

「気をつけてくだサイ、悠斗さん！　あの人は、幻影獣に寄生されていマス！」
エリカが叫ぶ。
き、寄生型の幻影獣だって？　あれは、滅多にいないはずじゃないのか！
ちなみに、カードレアリティで言うと、『レア』くらいの出現率だ。
「あの人を止めマス！　援護してくだサイ！」
と、エリカ。
言われて、一応、周りを見渡してみるが、他に誰もいない。
ということは、さっきのセリフは俺に言ったのか？
しかし、援護といっても……。
「とりあえず、ミネラルウォーターとか買ってきておけばいいのかな？」
ほんとにそれくらいしか思いつかない馬鹿な俺を尻目に、エリカが能力を発動させる。

「豪華絢爛（ロイヤルエッジ）！」
指揮者のような優雅な腕の振りに合わせて、空間に出現する数十の不可視の刃。
その刃が、彼女の指の動きに合わせて、幻影獣に寄生された女生徒に向かって殺到……。
「さぁ、どこからでもかかってくるがいいデス！」
……え？
この刃、ひょっとして、動かせないのか？

ビシ、と指を突き付けられた謎の女生徒は、しかし、向かって来ない。
どころか、くすりと小馬鹿にしたような笑みをこぼして、背中を向けて逃げて行った。

「お、追わないと！」
あまりの出来事に、自分の身の程も忘れて追いかけようとする俺。
「ま、待ってくださいデス！」
その俺の首に、後ろから細い腕が巻きつく。
す、スリーパーホールドの体勢になっているんですが！

エリカの腕は、長いが細い。
ゆえに頸動脈をいい感じで圧迫しており、気を抜くと落ちてしまいそうだ。
ついでに、エリカの胸は大きくて形がいい。
こちらも気を抜くと、背中側から意識が飛びそうな危険物である。

「エ、エリカ！　く、首！　落ち……」
「チョー久々に、豪華絢爛（ロイヤルエッジ）の切れ味がいいデス！　隠蔽率も高いので、下手に突っ込むと危険デス！」
確かに、謎の女性徒を追うためには、豪華絢爛（ロイヤルエッジ）が布陣された空間を抜ける必要があるが……。
「じゃあ、早く解除を！」
「そ、それガ……。慌てて変に固着させてしまったせいか、解除に時間がかかりそうなんデス……」
ま、まさか。解除に、1分くらいかかるとか……。
「15分くらいかかりマス」
……。
キミの能力は、お笑い専門ですか？

「ひ、ひどいデス！　悠斗さん！　私はあんまり出来は良くないかもしれないデスけど、お笑いじゃないデス！」
「す、すみません！」

言い過ぎました！

だから、落とさないでください！

◇◆◇◆◇◆◇

結局、謎の女生徒には逃げられてしまった。
まあ、１５分も経てば、無理もない。
そもそも、迎撃専門のエリカと、応援専門の俺でなんとかできる状況ではなかった気がする。

あのあと、
『やっぱり、私はだめだめデスー』
と嘆くエリカをなんとかなだめすかして、新月学園まで案内してもらった。
女性とまったく縁のなかった俺が、レディを慰めるような真似ができるとは……。
「人間その気になれば、なんとかできるもんだなー」
ほんとに、そう思う。
しかし、なんともならないことも、もちろん、厳然として存在する。

今がちょうどその時だった。

「うわ。ほんとにまだいる……」
今日の宿はなくなるが、いっそのこと、帰ってくれていた方が良かったかもしれない。
不審者のような恰好で、教室のドアの陰から覗き見る俺の視線の先。
窓側最後尾の席に、何度見ても、この世のものとは思えないほど美

しい少女が座っていた。
待っていてくれたのだ。

俺の脳裏に最初の出会いのシーン（主に『断層剣カラドボルグで』真っ二つになった部屋）が思い出される。
おまけに、今回は、例え俺が真っ二つにされても、誰も擁護してくれない気がする。というか、してくれない。
とはいえ、まだ死ぬ気はない。
「仕方ないな……」
やはり、ここは『カウンター土下座』しかない。
麗華さんが怒り始めた瞬間に、カウンターで額を床に叩きつけながら、ダイビング土下座をする。
人間、機先を制されると弱いものだ。

「とはいえ……」
頭を床にこすりつけた状態になるので、後頭部を踏みつけられたりすると、非常にスプラッタなことになる。
「こ、こえー……」
普通にビビる。
が、あれだけの超絶美少女を2時間近く待たせておいて、このまま逃げることなど許されるはずもない。
「よし！」
俺は、覚悟を決めた。

「麗華さん！」
勢いよくドアを開ける。
「待たせてごめん！　頭悪いくせに考え事してて、ボーとしていて、一人で帰ってしまいました！　ほんとにすみませんでした！」
一息に言いきって、『カウンター土下座』の体勢を取り、麗華さんの怒りに備える。『断層剣カラドボルグ』か『後頭部踏みつけ』が

出るほど怒っていれば、俺の負けである。

すると。

「ん。待ってた。じゃあ、帰ろう」

許してくれました。

心、広いな！

共同生活

道行く人がみんな振り返る。
良く『街で会ったら、１０人中１０人が振り返る美人』とかいうけど、ほんとに全員振り返る。
それも老若男女問わずに。
まあ、無理もない。
どう見ても、モデルかアイドルにしか見えないもんな。

「ん？　悠斗君。何か気になることである？」
なくはないですよ。
振り返って麗華さんを見てボーとした連中が、その後で、『で、その隣にくっついてるおまけみたいな奴、何？』みたいな視線で見てくることとか。
しかし。
「いや、何も」
と答えるしかあるまい。
毎日こんな状態じゃ無理もないけど、ほんとに他人の注目を集めるのに無頓着な人だ。

ところで、今、俺は、他の人からどう見えてるんだろうな。
この位置関係（麗華さんの隣を歩いている）なら、ストーカーには見えないだろうが。どうだろう、アイドルとそのマネージャーとかか？
いや、しかし、麗華さんは、普通の人間なら一緒に歩くことすら躊躇するほどの美人だ。
コスプレして麗華さんに付きまとっている不審者と勘違いされないとも限らない。というか、さっきから１０人に１人くらいの割合で、そういう目で見ている連中がいる。

一応、保険をかけておくか。

「麗華さん。もし、国家権力がやって来た時には、正しい身分照会を頼むよ」

「ん。大丈夫。悠斗君もＢＭＰハンター登録されているはずだから、もう国会議事堂にでもフリーパスで入れるはず」

そういう類いの心配をしているのではないですが。

まあ、大丈夫だろう。

実に居心地の悪い帰り道をしばらく歩き、ようやく目的地らしいマンションが見えてきた。

首都の一等地だというのに、土地の取得だけでいったいいくらかかったんだ、というくらい馬鹿でかくて豪華なマンション。

どうも、ここが俺の新しい寝床らしい。

しかし、昨日までは、こういう建物は実は、国家維持軍の秘密基地か、変形合体するロボットパーツのたぐいだと思っていたけど、やっぱり人が住めるんだな。

俺なら、屋根さえあれば、オールシーズンいけるというのに。

ちなみにマンションの名前は

『ハイツ剣』

「……」

ちょっと待ってみようか。

「麗華さん」

「ん。何？」

「このマンションは、お父様の持ちモノなのでしょうか？」

なぜか敬語になる卑屈な俺。

「ん。違う。おじい様の」

そですか。

俺にとっては、その違いは本質的な違いではないですが。
つまり、あれだ。

麗華さんは、これだけウルトラハイスペックな容姿と能力に加えて、お嬢様属性持ちと。

一度、この世界の神様と意見交換会をする機会はないものだろうか。

入口のセキュリティを、麗華さんに付いて抜ける。
そのまま、最上階までエレベーターに乗って上がり、一番いい場所にある一室の前まで来た。
「ここ」
と言って、麗華さんが鍵を開ける。
そして、そのまま先に中に入った。
？　あれ？
とりあえず、俺も続いて入る。
入ってみると、麗華さんは、ダイニングの椅子に腰かけて、くつろいでいた。
？　えーと。

「麗華さん、質問です」
「ん？　なに？」
「ここは、俺の部屋なんだよな？」
「うん。そう。それから、私の部屋でもある」

俺は席を立った。

廊下に出て、携帯電話を取り出す。
そして、一件しか入っていない番号をコール。

「はい。城守ですが」
ワンコールで出た。
「城守さん。俺は、ここにはいられません」
「？　それは、哲学的な意味でですか？」
おしい。
「倫理的な意味でです。なんで、高校生の分際で、同棲をしなければならないんですか？」
と聞くと、いかにも、やれやれ、と言った口調で、
「実は、悠斗君の覚醒時衝動に関する調査報告がまとまったんですよ」
また、氷砂糖の親戚か……。

「それによると、悠斗君のＢＭＰ能力が戦闘系のものだった場合、最大被害を想定すると、国家維持軍の首都防衛部隊が全滅となっています」
「ぶっ」
それは、いくらなんでも大袈裟過ぎだ。
麗華さんが、昔、国家維持軍の一個大隊を沈黙させたとかいう話といい、どうしてそうも大袈裟に言うのか？
「誰ですか、そんなデマを飛ばしてるのは？」
と言う、城守さん。ほらみろ。やっぱり、デマじゃ……。
「一個『連隊』です。麗華さんの覚醒時衝動の時ですね。いや、あの時は、ほんとうに肝を冷やしました」
……左様ですか。
「国家維持軍をそのマンションに張り付けられればいいんですが、ご近所迷惑というものもありますし」
……でしょうねぇ。
「まあ、悠斗君にとっても、麗華さんにとっても『高貴なる責務』というやつですよ。間違いにだけ気をつけて、健全に同居してください。十分、骨身にしみているとは思いますが、麗華さんを怒らせ

ると、検査院に机を投げつけた時のほうがまだまし、という目にあいますよ」
「実感こもってますねー」
投げやりに呟く俺。
やっぱり、この人に口論で勝つのは無理だ。
どうやっても、反論できない材料をそろえているに違いない。

「では、私はこれで」
と言って、電話は切れた。

敗者の気分でダイニングに帰ってくると、美しい姿勢で麗華さんが椅子に座っていた。
ただし、制服のままだ。

「とりあえず、服、着替えてきたら？」
「なぜ？　このままでも構わない」
「いや。そのままだと……」
「そのままだと？」
「しわになる」
「……悠斗君は奥が深い」

以上のようなやり取りを経て、麗華さんは着替えに行ってくれた。
……やっぱり、俺の『奥』が深いわけじゃないよな。

「にしても……」
見渡してみても、何もない。
３ＬＤＫというふざけた間取りで、広さも十分。備え付けの家具も豪華だが、それ以外に何もない。
なんとなくイメージ通りではあるが、ここまで徹底しているとは。

「まさか、食料もないなんてことはないよな？」
心配になって冷蔵庫を開ける。
そこには、５００ミリリットルのミネラルウォーターが５本ほど入っていた。
「……」
ちなみに冷凍庫は、空だった。冷凍庫、いらないではないか。
たとえ、この水が、ＢＭＰ兵器開発局の調合した特殊飲料だったとしても、この水だけで、あの暴力的なプロポーションが維持できるとは思えない。
「となると、怪しいのはあそこだ！」
芸能人お宅訪問、のノリで、システムキッチン上部の収納部を開く。
すると、雪崩が起きた。

「……」
雪崩の正体は、カップラーメンだった。
それも、同一メーカーの同一種類のシーフードヌードルだ。
「……」
一つ一つひっくり返して調べてみるが、賞味期限以外に違いが見当たらない。
「ということは、シーフードヌードルコレクターのセンもないな」
そんなコレクターがいるかどうかも知らないが。
と、ドアの開く音がした。

「あれ、悠斗君？　どうしたの？」
麗華さんは、タンクトップとジーンズというラフな格好だった。
お嬢様属性ということで、ドレスで登場とかいうインパクトはなかったが、代わりに脚が長いことが判明した。いや、マジで長い。
「いや、食料を探してた」
自分で言いながら、これはコソドロと変わらないのではないかと、今更ながらに青くなる。

「ん。だったら、そこから好きなの選ぶといい」
そうか。やっぱり、このシーフードヌードルズが唯一の食糧か。
「栄養のバランスは？」
「その視点はない」
開き直りやがった。
「……ないけど、あってもいいかなとは思ってる」
「譲歩ですか」
ならば、仕方ない。

俺が、カレーでも作りますか。

「はじめての」幻影戦闘

「身近に料理ができる人がいるなんて、思わなかった」

夜道。

スーパーへの道程を歩きながら、麗華さんはしきりに感心している。

「いや、あのクラスにも結構いると思うぞ。あんまり、自分から言わないだけで」

「！　やっぱり、悠斗君は、奥が深い」

いやー。深いかなー？

「ところで、悠斗君は着替えないの？」

麗華さんの指摘の通り、俺は、新月学園の似合わない制服のままだった。

「服がなくてね」

もともと、大して持っていなかったが、アパートを追い出されるドサクサでほとんど紛失しているとみていた。

「だったら、私の服を着ればいい」

言われて、麗華さんの方を見る。

長身の麗華さんと俺は、確かに身長は同じくらいだが……。

麗華さんの細い腰に目をやる。

そのウエストの寸法で締め付けられると、俺は冗談抜きで死んでしまう。

しかも、『あれ、私のズボン、悠斗君の足にはだいぶ長いね。かなり、切らないと』なんて言われた日には、泣いてしまう。

「ウエスト？」

きょとんとして、麗華さんは、自分の腰に手をやり、続いて俺の腰を撫でる。

「ほんとだ、細い」

気づいてなかったのか。
ここまで、自分の魅力に無自覚なレディも珍しい。

◇◆◇◆◇◆◇

「この、『ジャワカレー』と『アーモンドカレー』は、結局、何が違うの？」
スーパー『トミタケ』の、今まで足を踏み入れたことがないという区画で、２種類のカレールーを前に深遠なる問いかけをしてくる超絶美少女。

「基本的には、味が違う」
それは、間違いない。
「……応用的には？」
容赦のない、麗華さんのツッコミ。
「値段が違う」
人によっては、こっちが基本的事項だろう。ちなみに、俺は後者だ。
「つまり、値段と味が正比例すると？」
「そうとも限らないのが、カレールーの恐ろしいところだ」
別にカレールーに限ったことではないが。

部屋の惨状を見ている限りでは、てっきりこういう買い物は面倒くさがると思ったんだが、麗華さんは、意外にノリノリだった。
しかし麗華さん、食材の産地とか、栄養素とか、ついでにスーパーマーケットの営業形態の特徴と分類とか、そういう難しいことは自分からスラスラ教えてくれるのに、変なところで知識が抜けている。

「大変だ。悠斗君」
「どうした？」
「カレーを作らなければならないのに、米がない」
「入口のところに売ってたけど？」
「違う。炊飯ジャーがない」
「麗華さんの部屋にあったぞ？」
「え？」
そんな馬鹿な、みたいな顔で見つめられる。
「そういえば、あったような気もするけど。私が買っていないのに、なぜ存在するの？」
「うーん。いわゆる『備え付け』ってやつじゃないのかな？」
冷蔵庫とかも、間違いなく麗華さんが買ったものじゃないだろう。
「そこまで確認したうえで、カレーライスを作る決断をしたの？」
そ、そんな大げさなものではないですが。
「いや、炊飯ジャーくらい、なくても普通に買えるし。まだやってる電機屋くらい、ここに来るまでにもあったろ？」
「！　そ、その視点はなかった。申し訳ないです」
い、いや、謝らんでもいいですが。

でも少し分かったぞ。
このアンバランスさは、麗華さんの性格だけが原因じゃない。
おそらく、いろいろなことの経験が不足しているんだ。

◇◆◇◆◇◆◇

スーパー・トミタケからの帰り道、俺たちはそれぞれに買い物袋を

抱えていた。
麗華さんは、野菜や飲み物。
俺は、カレールーと米。

「悠斗君。重くない？」
麗華さんが声をかけてくる。
重いです。２０ｋｇは調子に乗りすぎました。
「いや、大丈夫だ」
「しかし、発汗量、筋肉反応、心拍数。全てが、異常値を示しているように見えるけど」
「気のせいだ」
「そう？」
麗華さんに、男のプライドについて説明するのはまた今度にしよう。

「あれ？　悠斗君。あの人、うちの委員長さんじゃないかな」
と、麗華さんが指差したのは、俺の体力がいい加減に限界にきていた時だった。重い。マジ、重い。
「どれどれ」
あ、ほんとだ。
……いや、待てよ。

確かに委員長に、似てはいる。
しかし、今、見ている彼女は、制服をだらしなく着崩しているし、髪にも艶がなく、目の焦点も合っていないように見えるし、霊魂のような不可思議な光り方をする爬虫類のような尻尾を生やしている。
「って、夕方のあいつじゃないか！」
幻影獣に取り憑かれた女生徒だ！
「幻影獣に取り憑かれてるね」
冷たすぎて頼もしくなるほど冷静な声色の麗華さん。
その手には、シンプルな装飾の諸刃の剣が握られていた。

……『断層剣カラドボルグ』じゃないよな。

「『干渉剣フラガラック』」

と、麗華さんは説明してくれた。なんだか、良く分からないけど、凄い剣なんでしょうね。

「悠斗君は、ここで待ってて」

言って、女生徒めがけて突進していく麗華さん。

「ギィヤアアア！」

鼓膜が破れそうなほどの奇声とともに、青白く光る尻尾で迎撃する女生徒。

だが、麗華さんは、苦もなくかわし懐に飛びこむ。

そして、『干渉剣・フラガラック』を、女生徒の身体に突き立てた。

「……って、ちょっと待てー！」

思わず焦ってしまったが、麗華さんが、そんな早まったことをするはずがない。

干渉剣フラガラックは、確かに謎の女生徒の身体を貫いていたが、その身体からは一滴の血も流れていなかった。

「ひょっとして、精神だけを攻撃する剣とか……？」

という俺の推測を裏付けるように、串刺しにされた謎の女生徒の身体から、青白いゴーストのような物体が姿を現した。

あれが、寄生型の幻影獣か！

「追いかけて、仕留めてくる。悠斗君は、ここで待ってて」

言って、駆け出す麗華さん。

「ま、待つんだ、麗華さん！」
買い物袋は、置いて行った方がいい！

◇◆◇◆◇◆◇

しばらく待ったが、麗華さんは帰ってこない。
仕方なく、俺は謎の女生徒の様子を見ていた。
「やっぱり、委員長だよな」
とりあえず地面に敷いた俺の制服の上着の上で眠る女生徒は、見れば見るほど委員長そっくりだった。
「こども先生は、委員長はちゃんと家に帰ってたって言ってたけど……」
家族も騙していたということだろうか。幻影獣もあなどれないな。

「ん……」
お、委員長が目を覚ました。
「委員長。大丈夫……」
「なんなのよ、あいつら！」
いきなり、怒鳴られました。
「し、信じられない……。人の心に、入ってくるなんて！　幻影獣ってなんなの！　なんであんなのが存在するの！　もういや！　私もう、あの学校やめる！　ＢＭＰハンターになんかなれない！」
無理もないのかもしれないが、委員長はだいぶ怯えて興奮していた。
いかん。なんとか、落ち着かせなければ。
小粋なギャグも全然思いつかないし、とりあえずここは土下座して謝ろう！
「すみませんすみません。とりあえず、すみません！」

……いかん。俺もだいぶ混乱している。

と、どうにも手のつけられない状態だった委員長が、突然黙り込んだ。

「な、なにか、ありました？」

敬語で聞く、情けない俺。

「あ、あれ、あれ……」

委員長が指差す先には。

青白いゴーストが立っていた。

間違いなく、さきほどの寄生型幻影獣だ。

麗華さんを振り切って、ここに帰ってきたらしい。

犯罪者は現場に帰るというが、なんてハタ迷惑にセオリー通りなやつだ。

「いや……。もういや！　こっちに来ないで！」

よっぽど気持ち悪かったのだろう。

委員長は、俺のワイシャツをちぎれるくらいに握りしめて、目いっぱい振り回していた。

「まずいな、これは」

委員長は、戦力にならないばかりか、逃げることすら難しそうだ。

俺も、彼女を抱えて逃げられるほど、身体を鍛えてはいない。

あんまり出来の良くない頭を使って、打開策を考える。

「仕方ないか……」

やはり、大した策は思いつかなかった。

「委員長」
ダダをこねる子供のような委員長の目をみながら、語りかける。
「これを麗華さんに渡してほしい」
「え？」
はじめて、委員長が俺の目を見た。
そんな彼女に渡したのは、カレールーと米袋。
「そして伝えてほしい。とりあえず『弱火で煮込め』と」
「は？」
く。やはり俺もだいぶ混乱してるな。ロクなセリフが思いつかん。

「す、澄空くん！」
委員長を背にするように立つ。
俺のカンでは、あの幻影獣には直接的な攻撃力はない。
とりあえず、俺に取りつかせて、時間稼ぎをしている間に麗華さんが帰ってきて、『干渉剣フラガラック』でズブリとやってくれる！
完璧だ。完璧に行き当たりばったりなプランだ。
……俺、ほんとに頭悪いな。

「来い！　幻影獣！」

でも、なるべくなら来るな！

買い物帰りのヴァルキリー

いつの間にか、俺は目をつぶっていた。
精神を乗っ取られるって、どんな感覚だろう。
普通に生活していれば、まず遭遇しない危機だ。
委員長があんなに怯えるんだから、よっぽど気持ち悪いんだろうな。
いや、それどころか下手をすると、もう二度と目覚めないかも。
その場合、労災はおりるのか？
って、おりても、目が覚めなかったら意味ないだろ！

と、ひとしきり心の中で葛藤してみた。
しかし、幻影獣はいつまでたっても襲ってこない。
「……ひょっとして、なぶるつもりか……？」
恐る恐る目を開けると。

そこには、『干渉剣フラガラック』で壁に縫いつけられた幻影獣がいた。

「麗華さん！」
「ごめん。遅くなった」
シンプルな片手剣で幻影獣を壁に縫いつけたまま、息一つ乱さずに麗華さんは言う。
その姿は、まるで北欧神話のヴァルキリーのようだ。
ヤバイ！　めちゃくちゃ格好いいぞ！
そして、左手に持っている買い物袋は、プラスなのかマイナスなのか、もう何がなんやら。

「ギ、ギィィヤアァァア！」
この世のものとも思えぬ声をあげてもがく幻影獣だが、その剣はい

っこうに抜けない。
無感動な目で見降ろす麗華さん。

やがて、寄生型幻影獣は、煙のようにこの世から姿を消していった。

幻影獣が消えると、フラガラックも消した。
エリカと二人、あれだけ苦労した寄生型幻影獣を苦もなく消し去った麗華さんは、特になんの感慨も抱いてはいないようだった。

「悠斗君、大丈夫だった？」
声をかけてくる、超絶美少女改めＢＭＰヴァルキリー。
「ああ。大丈夫。なんともな……」
「大丈夫じゃありません！」
また、委員長に怒鳴られた。

「な、なにを考えているんですか！　じ、自分から乗っ取られようとするなんて！　麗華さんがもう少し遅ければどうなっていたか！　何が『弱火で煮込め』ですか！　馬鹿ですか！？」
まあ、馬鹿なのは、確かです。はい。
「ま、まあ。あの時は、あれくらいしか思いつかなかったし……」
「お、思いつかなかったって！　……お、思いつかなかったからって……」
徐々に、委員長の声が小さくなっていく。

「……やっぱり『特別』だからですか？」
「え？」
「まだ、ＢＭＰ能力が発現してないのに……。それでも、やっぱり

『特別』だから、あんなことができるんですか？」
捨てられた子犬のような目で見てくる委員長。
それは、今日の放課後に、一度聞いていた問いだ。
……特別か。
委員長の抱えている悩みは、俺には理解できないけど。

「『特別』じゃない人なんて、いるのかな？」

俺は、自然とそう答えていた。

「たとえば、ここにおわす麗華さん」
両手で、麗華さんを指し示す。
「今はこうやって超絶美少女づらしているけど。なんと部屋には、ミネラルウォーターとシーフードヌードルしかないという徹底ぶりだ。しかも、同一メーカーの！」
「は？」
委員長はきょとんとしている。
が、俺は構わない。
「今は若いからいいけど、あと１０年もすれば、顔中に吹き出物が出て『わたし、こんな顔じゃ、恥ずかしくて表に出れないー』とか言って、戦闘サボタージュするぞ。たぶん」
「私は、そんなことしない」
すかさずツッコム麗華さん。
いや、俺もほんとにそう思っているわけじゃないすよ。
「だから、栄養管理をしてくれるメッシーが必要だ」
……俺、ほんとにボキャブラリー貧困だな。

「麗華さんだけじゃない。城守さんって人がいるんだけど、あの人がいなかったら、俺も新月学園に通うことすらできなかった」
「……」

「ＢＭＰハンターだけが偉いわけじゃない。支えている人たちだって『特別』だと思わないか？」
「……」
それは、俺の偽らざる本音だったが。
委員長は答えない。

「……それは、きっと、澄空君が『特別』だから言えるセリフです」
すっかり、正気を取り戻した瞳で言う委員長。

「私、やっぱり、特別になりたいです」
言って、委員長は、帰って行った。

……失敗か。

◇◆◇◆◇◆◇

委員長の説得に失敗したからといって、落ち込んでいる暇はなかった。
次は、いよいよ本日のメインイベントだ。
具体的には、カレーを作るだけだが。

軽い気持ちで言い出したことだが、今は少し後悔している。
麗華さんの部屋のキッチンを借りて料理をしている俺の後ろから、彼女の凄まじいまでに真剣な視線を感じるからだ。
そのくせ、目が合うと、微妙に視線をそらす。
……妙な雰囲気だ。

良く考えてみれば、超絶美少女かつお嬢様属性持ちの麗華さんに出す料理を作らなければならない訳で。
通常であれば、『うちの犬でも食べないわ』と一喝されても不思議がないシチュエーションではある。
……だんだん怖くなってきた。
スパイスとか全然買ってないし、ほんとにただの家庭用カレーなんだが。

ええい！　考えていても仕方ない。
ここは『よーい丼亭調理補助見習い候補』と呼ばれた自分の実力を信じるのみだ！

緊張する。
緊張する緊張する緊張する。

俺はだんだん、自分の言葉を後悔し始めていた。
麗華さんが、右手にナイフ、左手にスプーンを持ち、小さな子供の『待ってました』ポーズで待っている。
麗華さん。カレーにはナイフは使わない。

「それでは、じょ、どうぞ」
少し噛んだ。
超絶美少女が、まるで宝石でも見るかのような目で鍋を見ているんだから、仕方がない。
やはり、今からでもカレースパイスを買ってきて、本格的なカレーを作り直すべきだろうか。
……まあ、そんな技術もないけど。

買ってきた食器に、カレーをよそう（驚いたことに、麗華さんの部屋には皿すらなかった）。
緊張の一瞬。
王侯貴族のような優雅な仕草で、麗華さんが一口カレーを口に入れた。
そして。

……。

「どうしたの、悠斗君？　顔、真っ赤」

……はっ。
「い、いや、そんなことはないぞ」
「でも、心拍数も早くなってる」
無造作に麗華さんが俺の手に触れる。
「い、いや、大丈夫！」
俺は慌てて手を引いた。

落ち着け！
笑顔が可愛いなんてのは、物語の中だけだ！
人間の表情の中で一番きれいなのは、おすまし顔だと、偉い人も言ってたぞ！

「衝撃。これは、おいしい」
と、また微笑む。
すみません。抜群に可愛いです！

「変な悠斗君。どうして、私と目を合わせない？」
心底不思議そうだという顔で、麗華さんが聞いてくる。

笑顔一つで、完全にさきほどまでと立場が逆だった。
これだから、女の子は怖い。

「はぁ……。衝撃だった」

食後のコーヒーを飲みながら、麗華さんはご満悦だった。
ちなみに豆から挽いたコーヒーではない。特売のインスタントコーヒーだ。
でも、麗華さんは気にせずに飲んでいた。超絶美少女のくせに、なんて難易度の低い女の子だ。

「そういえば、悠斗君に聞きたいことがある」
「なんだ？」
なんでカレーにリンゴとハチミツなの？　とか聞くなよ。俺も知らん。
「さっき、委員長さんに言っていたこと」
「というと……」
カレーは弱火で煮込め、だったか？

「違う。特別でない人なんていないって言ったこと」
「ああ、あれか」
「委員長さんも特別。悠斗君も特別」
「ああ」
「じゃあ……」

「じゃあ、私も特別？」

……えーと。

「むしろ、麗華さん以上に非凡な人は、この国にいないと思うんだけど？」

「でも……」

麗華さんは、真剣な顔だった。

「私が死んでも、別の人が私の仕事をする。とすると、私は特別ではないと思う」

「ふむ」

確かに、他にも優秀なＢＭＰハンターは沢山いる。

でも……。

「その人は、きっと、麗華さんと同じようで、違う仕事をする人だと思うな」

「？」

「肩書きは同じでも、やってることは同じでも、麗華さんの代わりは麗華さんしかいない。俺よりうまいカレーを作れる人は世界に何億人といるだろうけど、このカレーを作れるのは世界に俺一人しかいないのと同じように」

「？」

麗華さんはきょとんとしている。

そして、たっぷり五分ほど固まってから、

「悠斗君は、難しい」

と、ポツリとこぼした。

……そうかな？

どこにでもある『特別』

翌日。
昨日の激闘（麗華さんしか闘ってないけど）が嘘のように、平和な教室。
その静寂を破る乱入者が現れた！

「澄空！」

このクラスのもう一人のＢＭＰハンター、三村宗一だ。

「聞いたか！　澄空！」

「もちろんだ。新月学園の学食が、ささみチーズフライの販売を一時停止するという話だろう？」
悲しむべきことだ。
「誰が、ささみチーズフライの話をしてるんだよ！　他にも、うまいモンはあるだろうが！」
何を言っているんだ、こいつは？
「いくら、おいしい料理を並べていても、『ホーム』となる料理は必要だ。ささみチーズフライ、ささみチーズフライ、ラーメン、ささみチーズフライ、ささみチーズフライ、トンカツ……といった具合に」
「だったら、『ホーム』を変えろよ！　牛丼、牛丼、カツ丼、牛丼、牛丼、鳥の唐揚げ……といった具合に！」
「む」
なるほど、一理ある。
だが、しかし。
「それは、ささみチーズフライに対する裏切りにはならないだろう

か？」
「……な、なるほど。そう言われると難しいな……」
「だろう？」
言ってて、自分でドツボにはまっている気がしてきた。
今、別のものを食べると、もう二度とささみチーズフライは食べてはいけないということになってしまうのだろうか？

「で、三村。本当にささみチーズフライの話をしに来たの？」
横から麗華さんの声がする。
何を言っているんだ、この超絶美少女は？
他の話をしているように見えるのか？

「っと、そうだった。澄空のせいですっかり脱線しちまった」
え？　違うの？

「これだよ、これ」
と、三村が差し出してきたのは、薄っぺらいわら半紙だった。

「なになに」
『季報・新月』と書かれてある。どうやら、校内新聞の類らしい。
「この学校、校内新聞とかあったんだな」
「二年前まではな。そんで、これが二年ぶりに復活した『新、季報・新月』だ」
ほう。それは、確かに大ニュースだ。
誰が復活させたのかは知らないが、大した人物に違いない。
肝心の紙面は、と。

「衝撃！　深夜の激闘。寄生型幻影獣対ＢＭＰヴァルキリー」
麗華さんが、後ろから見出しを読み上げる。

「昨夜、２０：００頃、新月学園にほど近い路上で、寄生型幻影獣と、有名なＢＭＰハンターであり、本校の生徒でもある剣麗華さんとの戦闘が繰り広げられた。人間の精神に寄生し操るという危険極まりない能力を持つ幻影獣に対し、剣麗華氏は、精神体を攻撃する『干渉剣・カラドボルグ』で応戦。圧倒的な強さでこれを殲滅し……」

そこに書かれていたのは、まぎれもなく昨日の戦闘の一部始終だった。あと、麗華さんの普段の学園生活とか。
なぜか、俺の体育館での『審判の獣』騒ぎも書かれていた。
ついでに、季報・新月を復活させた『本誌記者』とやらの顔写真も載っていた。もちろん新月学園生だが、勝気な瞳が印象的な、なかなか可愛い子だった。

「しかし、いい文章書くなー。まるで、見てきたみたいだ」
「……おまえの目は節穴か、澄空。ちゃんと『偶然居合わせた本誌記者が』って書かれてるだろうが」
「ああ、確かに」
しかし、待てよ。あの場所には、俺たちの他には委員長しかいなかったはずだが。

「いや、だからな。澄空……」
物覚えの悪い子に対するように、少しいらつきはじめる三村。
……なんだというんだよ。

「新、季報・新月。楽しんでいただけましたか！」

ガラっとドアを開けて、良く通る声が教室を走り抜ける。
見ると、季報・新月に載っている『本誌記者』がそこに立っていた。
写真と同じ、勝気な目が魅力的な女の子だ。

「ああ。凄く良かった。主役は麗華さんなのに、なぜか俺のことがちょろちょろ書かれているのは気になるけど、この臨場感は凄いね。いったいどこで、あの闘いを見てたんだ？」
と、俺としては褒めたつもりだったんだが。
なぜか、記者さんは、ぽかんとした表情をした。
……え。俺、またなんかした？

「澄空よ……」
「か、彼は大物だから……」
「というか、あれ、本気で言ってるのか？」
「澄空君は、天然だから。ネタとかじゃないと思う」
「にしても、ベタだよな」
「でも、委員長、ほんとに別人みたい！」

クラスメイトの訳の分らない非難を浴びる。
疎外感を感じた俺は、三村と麗華さんを見た。

「澄空……。おまえ、ほんとに気付いてないのか？」
「三村。悠斗君を責めてはいけない。きっと、昨日の戦闘で疲れている」
麗華さんのフォローになっていないフォロー。
だって、昨日、俺、何もしていないし。

「もう、これでどう！」

と、記者さんが、颯爽とした姿で眼鏡をかける。あれ、どこかで見たような。

「だったら、これでどう！」

と、どこかで見た女の子が、髪をみつあみにする仕草をする。

「って、委員長！」

それは、まごうことなき委員長だった。

俺は、慌てて、季報・新月に目を移す。

でも、

「本誌記者『新條　文』」

ほら見ろ。どこにも委員長なんて書かれてないぞ。

「それは、委員長の本名だー！」

「それは、委員長の本名だー！！」

「それは、委員長の本名だー！！！」

「それは、委員長の本名だー！！」

「それは、委員長の本名だー！」

クラスメイトの大合唱。

怒られました。

「ほんとに、澄空くんは、つかみどころがないですね」

委員長が、呆れたように、言う。

いや、単に馬鹿なだけですよ。

「ＢＭＰハンター専門のライター。これが、今日から私が目指す『特別』です」

勝気な瞳には一点の曇りもなく。

委員長は、清々しい声で言い切った。

そうだな。うん。

きっとそうなんだろ。

「だから、これから、よろしくお願いしますね」

俺に向かって、礼儀正しくお辞儀をする委員長。

ん、あれ？

「え？　麗華さんをメインで取材するんじゃないの？」

「何を言ってるんですか？　これから、澄空君が世界一のＢＭＰハンターになるんでしょう？」

涼しい顔で大型爆弾を投下する委員長。

「い、いや。俺はまだ、ＢＭＰハンターになれるとは……」

「委員長さん」

しどろもどろになる俺を見かねたのか、麗華さんが助け船を出してくれた。助かった。

「委員長さんは見る目がある」

麗華さーん！

「まだ能力も目覚めてないってのに、大変だな。澄空」

人ごとのような口調で、三村が言う。

そして、『絶対に悠斗君は、まかせておけっていうに決まっている』光線を出している麗華さん。

「取材、してもいいですよね？」

勝利を確信したかのような委員長。

俺は……。

「と、とりあえず、まかせておけ」

結構、ヘタレだった。

入学して、2か月。
すでに、6月に入っているというのに、俺のＢＭＰ能力はまだ目覚めていなかった。
これだけ結果が出ていないにも関わらず、なぜか政府は俺のＢＭＰハンター登録を抹消しようともせず、学費・生活費の負担が全くない状態で高校生活を送れていた。
が、プレッシャーまでない訳ではなく。
かといって、ＢＭＰ能力をすぐに目覚めさせる方法などあるわけもなく。

とりあえず、授業についていけるようになろうと、俺は勉強をしていた。

「違う。ここは、こっちの公式を使う」
また、麗華さんに注意された。
特に頼んだわけではないのだが、俺のあまりの要領の悪さを気の毒に思ったのか、最近、麗華さんが勉強を見てくれている。
「そこも、違う。ここは、こう」
な、なるほど。
いつ見ても、目の覚めるような美しい解法だ。
ちなみに麗華さんが勉強をしているのを見たことがない。
『授業だけで十分』とのことだ。
で、常に学年一位と。
……人を馬鹿にしているのか？

「悠斗君。聞いている？」
すみません。聞いてませんでした。

「ふーむ……。どうして、悠斗君がこんな問題が解けないんだろう？」
そんなこと言われても。
「やっぱり、悠斗君は奥が深い」
……いや、絶対に違う。

「ん……」

ふと、麗華さんが険しい顔をした。
え？　俺、またなんかした？

「悠斗君、テレビを」
「え？　え？　え？」
訳も分からず、迫力に押されるようにリモコンを探すが。
ああ、くそ。こんな時に限って見つからないんだ。
が。

「首都にお住まいの皆さま！　申し訳ありません！　ただいまより、緊急放送を開始いたします！」
え？　え？
まだ、電源入れてないぞ？
なのに、テレビには国営放送のニュースキャスターが映し出されている。
アイドル並みに美形と評判のキャスターだけど、今は化粧もそこそこに、ものすごい形相だ。

「首都東方より、５００を超える幻影獣の大群が侵攻してきております！　過去最大の規模です！」

ご、５００！？　２０年前の、首都決戦の時より多いじゃないか！
「この非常事態に対して、政府はさきほどレベル４、非常事態宣言を行いました！　国家治安維持軍の全軍を投入し、東方砦にて敵幻影獣軍の迎撃を試みます！　また、ＢＭＰハンターへの通常の依頼手順を全て省略。撃破した幻影獣の数に応じて、報酬が支払われる『クルセイドシステム』が適用されます！　全ＢＭＰハンターは、東方砦に急行してください！」
マジか……。
「なお、『クルセイドシステム』発動に伴い、東方砦以外の地域は完全に非武装状態になります。都民の皆さまは、至急最寄りのシェルターに避難してください！」

悲鳴のようなキャスターの声とともに、簡略化された戦略図が、画面に映し出される。
「うわ……」
思わず声が漏れた。
絶望的なほどの赤の光点が、東方砦に押し寄せてきている。
５年前、当時俺が住んでいた町に幻影獣が襲ってきたときは、確か、あの１０分の１くらいの数だった。
それでも、当時は、本気で死を覚悟したものだ。

ピリリリリ！

ひい！

心臓を鷲掴みにするような電子音が響く。

「あ、私の携帯」
麗華さんが呟いて、電話に出る。

「うん。今、見てる。うん。今から？　分かった、待っている」
必要なことだけを言って、電話を切ってしまった。

「し、城守さんですか？」
なぜか敬語になる、ビビりな俺。
だが、今回は、誰も俺を責められないのではないだろうか？
「うん。車を回すから、ここで待っててくれって。東方砦まで送ってくれるらしい」
「そ、そうか……」
麗華さんの強さは身にしみているが。
……本当に、こんな女の子が、幻影獣と闘うのか？

「れ、麗華さん……」
自分でも情けないと思う声が漏れる。
「うん？」
「え、ええとだな……」
何を言おうとしていたのか、自分でもわからない。

「ああ」
麗華さんが、ぽんと手をたたく。
「大丈夫。このペースなら、ちょっと中断しても来週の試験には間に合う。赤点の心配はない」

いや、そんな心配はしてないっす。

というか、えらい余裕ですね。ＢＭＰヴァルキリー様。

◇◆◇◆◇◆◇

「麗華さん！　悠斗君！　いますか！」
ドアを叩く音と、緊迫した城守さんの声が響く。
ドアを開けると、有無をいわさず駐車場まで引っ張って行かれた。

「さあ！　早く乗ってください！　麗華さん！」
自分も、頑丈そうなブラックの車に乗り込みながら城守さんが言う。
「うん。分かった」
と言って助手席に乗り込もうとする麗華さん。
しかし……。

「？　悠斗君は？」

え。俺？

「悠斗君は、今回は、留守番です」
「え……」
予想外、という顔をする麗華さん。
まったく、ほんとにこの超絶美少女は、一般常識というものが欠如してる。

「あのな、麗華さん。ＢＭＰ能力が覚醒していない俺が行っても、足手まといになるだけ……」
最後まで言えなかった。

「私の近くにいた方が、悠斗君は安全」
そう言い切る彼女の目には、いつもの浮世離れした色も、何者にも屈さない超人的な力も見えなかった。
「やつらを東方砦で喰いとめられれば、もっと安全ですよ」
そこに、正論で諭す城守さん。

しばらく麗華さんは悩んでいたが。
やがて。

「悠斗君、これを」
と、俺の手に何かを置いた。
「もしもの時に使って欲しい」
言って、助手席に乗り込んだ。

「麗華さ……」

この時の彼女の顔を、俺は生涯忘れないと思う。

「悠斗君……。すぐに帰ってくるから、私がいないところで死んではいけない」

◇◆◇◆◇◆◇

『首都民の皆さま！　非常事態警報が発令されました！　至急最寄りの指定避難場所へお急ぎください！　くりかえします！　首都民のみなさま……』

がなりたてるサイレンと必死のアナウンス。
我先に避難場所へ向かう人たちの中で、俺は一人、覇気がなかった。
避難するのに覇気というのもおかしいのかもしれないが、とにかく元気がなかった。

「はあ……」

麗華さんがあんな顔をするなんて。
まるで、これから俺が死ぬみたいじゃないか……。
実際に死ぬかもしれない恐怖より、麗華さんにそう思わせてしまったことの方がこたえている。

「しっかりしなきゃな……」

麗華さんが負けることはないだろう。
俺にできることは、何事もなかったように迎えることだけだ。

「でも……」

2か月ですっかりなじんだ街も、今日はまるで別の街のようだ。
取るものも取り敢えず逃げまどう人たちを見ていると、嫌な予感ばかりが膨れ上がってくる。

放置された自動車、放置された商品、放置された街。
確か五年前もこんな感じだった。

しばらくして、新月学園が見えてくる。
ＢＭＰ能力者養成校というだけあって、あそこの幻影獣防衛システムは、首都でも一・二を争うほど洗練されたものだ。
だけど、今の俺には……。

まるで、棺桶のように見えた。

◇◆◇◆◇◆◇

「あれ……」

いつものように教室にやってくると。

誰もいない。

なんでだ。

この学園は避難場所じゃなかったのか。

「いや、ちょっと待てよ……」

避難って教室にするもんなんだろうか？

なんだか、避難って、体育館とかにするイメージがあるぞ。

「ったく、何やってんだよ、おまえは」

聞きなれた声がする。

「三村？」

「三村？　じゃないだろ。避難場所にいないから、探したぞ。こんな時に、教室なんかで何をするつもりだったんだよ」

さぁ。

それは、俺にも分らん。

「校門のところで、先生たちが、体育館の方に避難してください、って叫んでただろ。あそこ、シェルターになってるんだよ。聞いてなかったのか？」

聞いてはいたんだろうが、まったく覚えていない。

まいったな。

自分の命の危機だというのに。

麗華さんのことばっかり考えてた。

避難所にて

「でも、わざわざ、俺を探しにきてくれたのか？」
並んで廊下を歩きながら、三村に話しかける。
この２か月の付き合いで、外見こそ弱ナンパ風味だが、なかなかいいやつだというのは分かっていたが、こんな時にまで他人を気遣える兄貴属性の持ち主だったとは。
「もう弱ナンパ男風味はいいだろ……」
苦笑する三村だが、なんだか元気がない。
まあ、こんな状況で元気があっても、どうかとは思うが。

「なあ。澄空……」
「ん？」
「その……。おまえ、こんなところにいていいのか？」
「？」
「ああ……。聞き方が悪いよな」
珍しく言いにくそうにしている三村。なんなんだ？
「その、こんな一大事に闘えずに、悔しいとかはないのか……？」
「と言われてもな……。俺、まだ、ＢＭＰ能力とやらが使えないし。ん？　そういや……」
三村は闘わなくていいのか？　と聞こうとすると。

「俺のＢＭＰは１２１。ギリギリ能力が使えるって程度だからなー。邪魔になるから、来るなってことだろ」
これも三村には珍しく、自嘲気味に答えてくる。
「ふーん。どのくらいまで上げれば、呼んでもらえるんだろうな」
四捨五入して１３０になる１２５か。いや、まてまて単に数字の問題とは限らない。
能力特性があるだろうし、年齢制限もあるのかも。

などと、俺がいろいろと推論を述べるていると。
「おまえ、やっぱり、変わってるよな」
などと、失礼なことを言われた。
「それをいうなら、弱ナンパ男風味のくせに、おまえがナンパしてるの見たことないぞ。そっちの方が変わり者だい」
「もう弱ナンパネタはいいってのに……」
と、にわかに真剣な顔になり。

「ＢＭＰ能力者はさ、特に高ＢＭＰになるほど、幻影獣狩りに執着するんだ。俺なんかですら、こんなところで留守番させられて悔しい。なのに、おまえは……」
口ごもる三村。

それは、俺に闘志とか覇気とかがないと言いたいのか？
「どきどき……」
……。
しまった！
セリフと心の声が逆だ！

「ぷっ」
笑われた。
「いや、ぷぷ。おまえは大したもんだって話だよ！　剣がべったりなのもわかるなー」
と、なにやら一人納得したような三村。
こいつ、ひょっとして、情緒不安定になってるんじゃないだろうな？

「いや、俺も大丈夫だよ。そだな。また、次があるし。今はおとなしく、二人でＢＭＰヴァルキリー様のご帰還を待つとすっか！」

◇◆◇◆◇◆◇

俺は常々疑問に思っていたことがある。
それは『体育館を避難場所にするのは本当に正しいのか』ということだ。

内部構造は、むき出しで、なんだか強い力を受けると壊れそうだし、だだっ広くて寒そうだし。

だが、今日、その疑問が解けた。

最初にその光景を見たときは、さすがに驚いた。
行列を成す人々が体育館の中で次々に消えていくのだ。
なんと、体育館の中央に隠し階段が設置されており、そこから地下に降りれるらしい。
そして、地下は核の直撃にも耐えられるという、とんでもないシェルターになっている。
ついでに、５０００人が一年間は生き延びられる仕様になっているらしい。

……普通に凄え。

◇◆◇◆◇◆◇

シェルターでは、意外な再会が待っていた。

「悠斗さん。お久しぶりデス」
「ほ、本郷さん!?」
「エリカでいいデス」
と言って、エリカは俺の手を取って振り回した。

「2か月も会えなくて、気になってましタ。悠斗さん。ちゃんと学校来てましたカ？」
「来てたよ、一応」
成果は上がってないけど。
「1－Cにいるのは知ってたんですケド、なかなか行きにくくてズルズル来てしまいましタ。こんな時に再会できるなんて心強いデス！」
……いや、なんの役にも立ちませんけどね。

と、いきなり後ろから首を絞められた。
「澄空ー」
「み、三村……？」
「学園一の美少女のヒモみたいな生活しておきながら、こんどは『金髪の妖精』となんだか怪しい雰囲気作りやがって……。いくらBMPセレブだからって、いったいどういう了見だ？」
おまえこそ、そのセンスの悪いニックネームはいったいどういう了見だ？
そして、誰がヒモだ。誰が！

「悠斗さんの転校初日に出会いましタ。いろいろと相談に乗ってくれて助かりましタ。一緒に幻影獣と闘ったりもして、頼もしかったデス！」
……おかしいな。俺の記憶とだいぶ食い違いがあるぞ？
「……やっぱりいいよな。高BMP能力者は。これは決して、俺が弱ナンパ男風味だから羨ましいわけじゃないぞ。男なら、誰でも羨

ましい状態だ！」
そして、力説する三村。
弱ナンパ男風味って言うの、もうやめようか。

「三村さんは、１２１なんですカ！　羨ましいデス」
「いや、本郷さんだって１１９なんだろ。俺と2しか変わらないじゃないか」
「でも、１２０超えたらＢＭＰハンター登録できマスよね。やっぱり、１２０の境は大きいデス」

避難中だというのに、なんだか盛り上がっている三村とエリカ。
核戦争にも耐えられるというだけあって、普通の避難所ほど雑然とした雰囲気はないが、それでもこんな状況だ。
よくそんなに盛り上がれるなー。

「いやいや、ＢＭＰハンター登録したところで、１２０をギリギリ越えたような高校生には仕事なんて回ってこないんだよ」
「そうなんデスカ？」
「まったく。仕事さえくれれば、いくらでもやってやるのに！　１８７もあれば、仕事なんて選び放題なんだろうけどなー」
ひょっとして、俺のことか？
俺も仕事なんてもらってないぞ。麗華さんは、時々行ってるみたいだけど。

「でも、悠斗さんはＢＭＰ能力が覚醒していないのデハ？」
「そうそう。だから、剣のヒモみたいな生活してんだよ。高校生でヒモって凄いよなー」
……ヒモじゃないやい。

新月学園地下シェルターは、広大だ。
避難してきた人も一か所に押し込められるということはなく、５０人くらいずつ別々の部屋に分かれて入っている。
長期避難を前提としているからか、ちょっと小奇麗な集会場といった雰囲気だ。
もちろん長期滞在したいとは思わないが。

その時だった。

『緊急事態発生！　緊急事態発生！』

突然、シェルター内に警報が響く。
今日は、緊急事態の大安売りだな。
もう驚くまいて。

『Ｂランク幻影獣が一体、この新月学園を目指して侵攻してきています！　現在、首都の国家維持軍は東方砦に集結しており、救援には時間がかかります！　非常事態につき、対幻影獣結界を最高出力にて稼動します！　精神干渉により、人によっては精神状態が若干不安定になる恐れがありますので、みなさま、気をしっかりお持ちになってください！』

驚いた！

「び、Ｂランク幻影獣……！」
避難した人たちも絶句している。

幻影獣は、おおまかにＡからＤの四つのランクに分けられている。
Ｄランクは危険度の低い幻影獣。三村と初めて会った時のウサギみ

たいなやつがこれにあたる。
Cランクは一般的な幻影獣。麗華さんがフラガラックで一蹴したやつはこれだな。Cの強い方だ。今、東方砦に向かっている幻影獣の軍団も全部これだ。
そして、Bランク。
これは、いわゆるボスクラスにあたる。
ほとんど現れることはなく、確か、世界全体でも出現数は２０に届かない。
一体で、軍団に匹敵すると言われ、その大きさも強さも桁違いだ。
もっと分かりやすく言うと。

こっちに向かっている幻影獣は、東方砦に向かった軍団と同等の力を持っているということだ。

ヒーローの条件

轟音とともに、核にも耐えうるシェルターが揺れる。
避難してきた人たちの悲鳴が木霊する。

『現在、Ｂランク幻影獣と対幻影獣結界が接触しています！　かなりの衝撃がありますので、みなさま、何かにつかまってください！』

オペレーターの必死の叫びが響く。
最初の放送から、約３０分後。
この新月学園は、Ｂランク幻影獣の攻撃にさらされていた。

「想像以上だ……」
あまりに圧倒的な力の前に、恐怖すら湧いてこない。
こんなもの、もう天災と変わらないじゃないか！
でも、なんでだ？
陽動にしても、なんで、こんな避難所なんかを攻撃するんだ？

と。
不意に三村が立ち上がった。
「お、おい！　三村……」
「知ってるか、澄空？　単独でＢランク幻影獣を３０分以上止められる対幻影獣結界は、まだ世界のどこにもないらしい」
嫌な予感がする俺に、三村はやけに落ち着いた口調で答えてきた。
「つまり、ここの結界も長くは持たないということデス」
覚悟を決めた表情でエリカが続く。

見ると、他にも何人か立ち上がっている生徒がいる。
あいつら見覚えがある。ある程度、腕に覚えがあるＢＭＰ能力者だ。

「おまえは来るな」
「お、おい……」
「悠斗さんの戦場は、今日じゃないと思いマス」
「いくらなんでも、Ｂランク相手に無茶だろ！」
「無理をするつもりはないさ」
「危なくなったら逃げマス」
「だ、だからってな……」
無茶だ。
どう考えても、無茶だ。

「死ぬなよ、澄空。高ＢＭＰ能力者は、それだけでみんなの希望なんだ」
「今日を生き延びるのが、悠斗さんの仕事デス」
「いつか、Ｂランク幻影獣でも倒せるような凄いＢＭＰ能力者になるまで」

「必ず生き延びてくだサイ！」
言って、二人は駆けだして言ってしまった。

そして。

感傷にふける間もなく。
……みなさんの視線が痛い。

さきほどのやり取りは、どうも声が大きすぎたらしく、俺の素性がみなさんに筒抜け状態になっている。
『きっと、あの方は、不利な状況も顧みず仲間を救うため、ここを

飛び出すに違いない。ってか、飛び出せ』光線が、四方から降り注いでいる。
あそこのおばあさんなんか、拝んじゃっているよ、おい。

「……じー」

俺が行っても、邪魔になるだけですよ、冗談抜きで。麗華さんとの件で、実証済みです。

「……じー！」

応援くらいしかできないですよ。しかも、ボキャブラリーが貧困なので、大して、足しになりません。

「……じー！！」

えーと。だから、その……。

「……じー！！！」

つまり……。

「……じー！！！！」

「い、行ってきまーす！」

俺は飛び出した。

目を輝かせているみなさんの期待が痛い。

物語の主人公って、実は、案外、こんな状態が多いのか、ひょっとして！？

◇◆◇◆◇◆◇

パシンという音がした。

音の質自体は軽い。

けど、何か取り返しがつかないものが切れてしまったような音だった。

続いて轟音・振動。

わが校が世界に誇る対幻影獣結界が崩壊したのが、直感で分かった。

大地震に匹敵するような揺れの中、それでも地上への道を駆けのぼった自分を褒めてやりたい。

が、俺の勇気もそこで打ち止めだった。

地下シェルターから体育館に通じる階段を登りきった後。

体育館の中央で、俺は一歩も動けなくなった。

怖い。

とんでもなく、怖い。

三村やエリカ達が出て行ったはずなのに、なぜか閉ざされたままの体育館の扉。

その向こうから、ホテルで初めて麗華さんに会った時と同じくらいのプレッシャーを感じる。

ただ、あの時と違うのは。
叩きつけてくるような、圧倒的な殺意。

「これが、Bランク幻影獣……」
例え、銃を目の前に突きつけられても、たぶんこんな気持ちにはならない。

「これは……無理だ……」

情けなくも断言して、再び地下への扉を開ける。
たとえ地下に逃げ込んでも、たぶん助からない。
でも、それでも、ここにはいたくない。

負け犬そのものの思考で、階段を降りようとした時。

ポケットから、何かが滑り落ちた。

それは、手のひらサイズの飾り気のない箱だった。
「これは……」
確か、別れる時に麗華さんがくれたものだ。
もしもの時に使えとか言っていたような。

藁にもすがる思いで、その箱を拾い上げる。

「ボタン……？」

箱を開けると押せるボタンが一つ。
何かを起動させる装置なのか？

そして、説明書らしき紙切れが一枚滑り落ちる。

これまた、藁にもすがる思いで拾い上げる。

麗華さんのことだ。

きっと、何か物凄い兵器を隠していたに違いない！

◇◆◇◆◇◆◇

『ＢＭＰ決戦アイテム・決意の天幕』

概要

遠隔操作装置により起動する、拠点型ＢＭＰ能力者補助装置。

起動と同時に１０本の高さ3メートルの円柱が出現する。

その円柱によって描かれる境界線よりも前方で闘う限りにおいて、

大幅にＢＭＰ能力を強化することができる。

ただし、境界線を越えて後退した場合には、長期に渡ってＢＭＰ能力が使用できなくなる。

また、境界線を越えなかった場合でも、限界以上にＢＭＰ能力を酷使するので、身体への負担は大きい。

使用する際には、特に注意すること。

追伸

ＢＭＰ能力増幅率は、悠斗君の言葉を借りれば『当社比１．５倍』。

これなら、勝てると思う。頑張れ。

◇◆◇◆◇◆◇

「当社比１．５倍じゃねー！」
俺は、説明書を床に叩きつけた。
だいたい、『当社比』なんて、俺がいつ言った！？
……いや、言ったような気もするな……。
「じゃなくて！」

ＢＭＰ能力を使えない俺に、ＢＭＰ能力強化アイテムを渡してどうするんだよ……。

時々、変わったことをする人ではあるけど、今回は極め付けだ。
期待していた分、反動も大きい。

「もう、どうにでもなれ！」

俺は、その場にどっか、と腰を落とした。
シェルターに戻る気にもならない。
この気配の持ち主にかかれば、どうせ巨大な棺桶だ。

もう、この状態からなんとかなるとしたら。
麗華さんが、突然戻ってくるか。
噂に聞く最強ＢＭＰチーム『クリスタルランス』が駆けつけてくれるかしかない。
そういや、クリスタルランスって、今、首都に帰ってきてるんだったな。まあ、どうせ、東方砦に向かってるんだろうけど。

「あとは、俺のＢＭＰ能力が突然目覚めるくらいかな……」

……。

「……待てよ」
自分で言って、気がつく。
ひょっとして、麗華さん。

「俺のＢＭＰ能力が目覚めると、信じていたのか？」

『私がいないところでは死んではいけない』
あの時の、麗華さんの言葉と表情が思い出される。
心配していなかったわけでも、ちょっとドジをした訳でもなくて……。

「そうなのか、麗華さん？」
考えれば考えるほど、そうだという気がしてくる。
俺の頭の中に残っている別れ際の麗華さんの表情のイメージが、別れの予感を想像させるものから、再会の約束を信じさせるものへと変わっていく。

「正直、どうしてそこまで信じてもらえるのか、非常に疑問なんだが」
俺は、立ち上がった。

５年前とは違う。

今回は逃げるわけには行かない。

「なんせ、世界一の女の子に期待されてるんだからな！」

意を決して、体育館の扉を開ける。
と、同時に、人間が飛んできて、俺を下敷きにした！

「み、三村！？」

俺を下敷きにしたのは、三村だった。
頭から結構な量の血を流しており、呼んでも反応しない。
「ひょっとして、やばいか、これ？」
とりあえず、シェルターに運んで治療してもらおうと思った時。
総毛立つような視線を感じた。

それは、生まれて初めて見る怪物だった。
大きさは、三階建てのビルほど。
それが、１０メートルくらいの高さのところに浮いている。
姿は、人型に近い。
ボロボロの黒いマントを纏い、鈍い色の鉄仮面をしている。
だが、マントの切れ目から覗く関節部分は、腐食した何か、だし。
その目の部分には空洞しかなく。
その奥には、赤い光が見えている。

『ミ・ツ・ケ・タ』

「ひっ」
思わず悲鳴をあげてしまう。
あの化け物、間違いなく俺を見ている。

まさかと思うが……。

「ひょっとして、狙いは俺……？」

呆然と呟く俺の前で、化け物が腕を振り上げる。
なんか、ヤバイ！
麗華さんの寝起きくらい、ヤバイ！

「この、こっち来い、三村！」
動かない三村をひきずって、体育館から逃げ出す。
細身なのに、意外な重さを感じる三村とともに、なんとか脱出した後。

閃光が走った。

「……わー……」
無感動に呟く。

体育館がなくなっていた。
何が起きたのか分からないが、地面から３０センチくらいの壁を残して、その上の部分がごっそり消滅していた。
どうやら、シェルターは無事のようだが、二度目の保証はない。
というか、二度目があったら、まず間違いなく誰も助からない。

『ミ・ツ・ケ・タ……』

だが、化け物は、とりあえずシェルターの方には興味がないらしい。
こちらにしっかりと向き直り、近づいてくる。

……良く見れば、鉄仮面の下の顔が、骸骨だった。

マジで、怖い。

「……あれ？」

とりあえず、逃げようとしたが、立てない。

ひょっとして腰が抜けたか？

……へえ、腰が抜けるとこんなふうになるんだな。

「豪華絢爛（ロイヤルエッジ）！」

現実逃避しかかっていた俺の意識を引き戻したのは、聞き覚えのある声だった。

「エリカ！」

「悠斗さん！　ご無事ですカ！」

エリカは、三村以上にひどい有様だった。

風変りな制服はあちこちが破れ、赤い血がにじんでいる。

美しい金髪も泥だらけで、おまけに血でべっとりと顔に張り付いている。

いや、エリカだけじゃない。

見覚えのある新月学園生……ＢＭＰハンター候補生や、おそらくは国家治安維持軍の軍人であろう軍服を着た人たちが、グラウンドに散らばって転がっていた。

起きる様子はない。

「あの人たちなら大丈夫デス。ＢＭＰハンターは、これくらいで死んだりしまセン」

「そ……」

そうなのか、と聞こうとして絶句した。

エリカの顔が白い。

青白いなんてレベルじゃない。ほとんど死人の顔だ。

理由はすぐに分かった。

「見てくだサイ、悠斗さん。私の豪華絢爛（ロイヤルエッジ）。相変わらず斬れないですケド、Bランク幻影獣を抑え込んでいるでショウ？」

「た、確かに、抑え込んでいるけど……」

命を削っている。

これ以上続けると、ほんとに危ない！

「豪華絢爛（ロイヤルエッジ）を解除しろ！　死んでしまうぞ！」

「大丈夫デス。私もこんなところで死ぬつもりはないデス。……ですが、解除するのは、悠斗さんが逃げた後デス」

「え？」

「あの幻影獣、ずっと誰かを探していましタ。私は、あいつは、悠斗さんを殺しに……、いヤ、そもそも東方砦が襲われていること自体、悠斗さんを殺すための陽動だと思っていマス」

エリカがとんでもないことを言い出した。

「あいつの狙いは悠斗さんデス。悠斗さんが逃げてくれれば、みんな助かりマス」

「ほ、ほんとに？」

俄かには信じがたいけど、あの幻影獣は、豪華絢爛（ロイヤルエッジ）に遮られながら

も、ずっと俺だけを見ている。
俺がうまく逃げおおせば、シェルターには見向きもしないかもしれない。
「ここは私たちの戦場デス！　今は、逃げることが悠斗さんの闘いデス！」
「エリカ……」
「悠斗さんなら、いつかきっと、Ｂランクでさえ倒せると信じてマス！」

エリカの言う通りかもしれない。
いや、きっと言うとおりだ。
俺がここに残っても、なんの役にも立たない。
いや、足手まといどころか、敵を引き寄せている厄介者だ。
今はみんなのためにも逃げる時だ。いつか能力が目覚めれば、あいつを倒せるかもしれない。
いや、きっと倒す！
そのためにも、今は、逃げる時なんだ！

『本当にそれでいいのか？』

「いいわけがない」

俺は、懐から一つの箱を取り出す。
麗華さんにもらった『切り札』だ。
そのボタンを押す。

「俺の生き方は、俺が決める」

誰にも邪魔はさせない。

ま、参考くらいにはするけど。

「ＢＭＰ決戦アイテム『決意の天幕』」

轟音がする。

そして、俺の『決意』が現れる。

◇◆◇◆◇◆◇

東方砦。

首都の東方１００キロに位置する軍事基地である。

幻影獣の出現により、国家間の戦争というものに現実味がなくなった現代では、従来のような戦闘機や戦車といった兵器は無用の長物と化していた。

なぜなら幻影獣には、近代兵器は通用しない。

彼らを倒せるのは、ＢＭＰ能力者だけである。

そして、本当に優秀なＢＭＰ能力者ならば、比喩でなく、一人で軍

隊に匹敵する。

翼を持つ悪魔のような外見をした一体の幻影獣が斬り捨てられる。

「３７体目、撃破」

感情のこもらない声で、剣麗華が呟く。

最強ＢＭＰハンターチーム『クリスタルランス』をはじめとする有力ハンター達の到着が遅れているうえに、かつてない規模の軍勢に苦戦するＢＭＰ能力者の中で、孤軍奮闘……というか、傍若無人に暴れまわっている。

あまりにレベルが違いすぎて、味方のハンターたちは足手まといにすらなっていない。

「３８、３９体目、撃破」

しかし、麗華の声には高揚も覇気も感じられない。

それもそのはずで、麗華は明らかに退屈していた。

もともと闘いに使命感や刺激を求めるタイプではなかった。

ＢＭＰハンターになったのも、他の能力者達のように、闘いに存在意義や居場所を求めたわけではなかった。

その意味では、退屈などと感じること自体がなかった。

自分を脅かす敵など存在せず、自分の求めるものもない。闘いは麗華にとって作業でしかなかった。

だが、今、明らかに彼女は退屈していた。

なぜならここには、彼がいない。

（悠斗君がいれば、きっと今日の闘いは褒めてくれていた）

この２ヶ月間、常に一緒にいてくれて、彼女の言動に、いちいち驚

いたり、呆れたり、感動したりしてくれた、あの少年がいない。

気付いたら、幻影獣はいなくなっていた。
５０体は倒しただろうか。
この区画の敵は、ほとんで一人で片づけてしまった。
だが、疲労もなく、感慨もない。

（つまらない）

対幻影獣戦闘は、こんなにつまらないものだっただろうか？

「噂以上だなー、君は」

所在なく立ちつくしている剣麗華に、嫌みのない声で、二人のＢＭＰハンターが話しかけてくる。
２０代後半から３０代前半に見える、屈強な二人組だ。

「俺らもそこそこ上位のランカーなんだがなー。君がいると、やることなかったな」
「ほかのところに回った方が良かったかな？」
「どちらでもいい」

もうここは飽きた。早く帰りたい。

「そうだなー。確かに君は、新月学園の方に行った方がよかったかもなー」
「え？」
会話を切り上げて立ち去ろうとした剣麗華の耳に、聞き捨てならな

い単語が飛び込んできた。
「新月学園が、どうかしたの？」
「？　知らないのか？　新月学園がＢランク幻影獣に襲われてるって」
「わざわざ、この東方砦を放っておいて、なんであんなとこ襲うのか分からないよなー。って、待てよ。君、確か……」
剣麗華が新月学園所属というのに気がついたのか、気まずそうな顔をする二人組を置き去りにし、彼女は物凄い勢いで駆けだす。
が、そんな彼女を、携帯の着信音が引き止めた。
何の飾り気もない、初期設定のベル音だ。
気のりはしないが、なんとなく電話に出る。
『戦闘中すみません、麗華さん！』
「なに。城守さん。今、忙しい」
『その件での電話です。麗華さんの耳にも入ってるんですね？』
「やっぱり、本当なの？」
『はい。間違いありません。信じがたいことですが、首都に出現したＢランク幻影獣は、東方砦を無視して、新月学園を狙っています』
「わかった。すぐに向かう」
『ちょっと待ってください！　今、麗華さんに離れられたら戦線が崩壊します。第２波はもうそこまで来ているんですよ！』
言われて見ると、確かに東の空に多数の黒点が見える。
剣麗華にとって脅威となる数には見えなかったが。
「でも、緋色先生も、他の有力ハンターも、今は新月学園にいない。私が行かなければ悠斗君は守れない」
いつになく真剣な剣麗華。

そんな彼女に、予想外の一言が投げかけられる。

『それを、悠斗君が望むと思いますか？』

「え？」

予想もしなかったセリフに、一瞬、剣麗華の動きが止まる。

命を救われて、怒る人がいるとでもいうのだろうか？

『東方砦で闘う仲間と、首都に住む人たちを守るという責務を放りだして駆けつける麗華さんを、悠斗君は喜ぶと思いますか？』

「そんなことは……」

分からない。

考えたこともない。

そして、その問いに答えてくれる少年は、今、ここにいない。

「城守さんには分かる？」

『分かります。決して彼は喜ばない。このクビ、賭けてもいいです！』

一片の迷いもないセリフ。

そこに嘘がないのは、明白だった。

どうしてそこまで言い切れるのかは疑問だったが。

悠斗君に嫌われるのは、困る。

「こいつら片づけたら、新月学園に行ってもいい？」

『それはもちろんですが……。１００体は来てますよ。いくら麗華さんでも、他のハンターと連携して防御しながら……』

「忙しいから切る」

と、ほんとに切る。

とは言うものの……。
１００体は厳しい。
時間制限さえなければ、どうということもない数だが、一刻も早く新月学園に駆けつけなければいけない状況では、厳しい。

（けど……）

新月学園に残っているＢＭＰハンターを思い浮かべてみる。
とてもＢランク幻影獣に対抗できそうな人材は残っていない。
悠斗君がうまく逃げてくれればいいけど。
いや、待てよ。

（ひょっとして、Ｂランク幻影獣の狙いは悠斗君じゃ……）

何らかの根拠があった訳ではない。
高ＢＭＰ能力者ほど幻影獣に狙われやすい、という訳でもない。
けど、なぜか、そんな気がした。
そんな気がすると、さらに不安になってくる。

（悠斗君が死ぬ……？）

それは困る。
とても困る。
この幻影獣軍をすぐにでも片づけて、新月学園に向かわなければならない。

（でも……）

難しい。

『断層剣カラドボルグ』では時間がかかりすぎる。

『干渉剣フラガラック』では意味がない。

剣麗華の『幻想剣（イリュージョンソード）』は、神話や伝説上の剣をモデルにして、様々な能力を持つ剣を具現化する能力だ。

創り出す剣の能力には基本的に制限がなく、一度でも具現化した剣は、以後いつでも即座に取り出すことができる。

究極の汎用性を持つ無敵の能力なのだが。

剣麗華は物理系はカラドボルグ、精神系はフラガラックと安易に考えて、他の剣を創り出す努力を怠っていた。

ただ勝つだけなら、その二つでも問題はなかった。

だが、『時間をかけずに勝たなければならない』といった状況を想定してなかった。

守りたい誰かの為に闘う、という状況を想像したこともなかった。

正答を出すことと思考することの違い。

今思えば、あの少年はずっとそのことを麗華に伝えてくれていたような気がする。

しかし、今さら悔やんでも仕方がない。

今からでも、新たな剣を創り出すまでだ。

幸いイメージはある。

今のこの気持ちを、そのまま具現化するかのようなぴったりのイメージの剣がある。

目を閉じて集中する。
その剣のイメージは、驚くほど簡単に具現化できた。

「早い……。新記録かもしれない」

疑うまでもなく新記録だ。
前にフラガラックを作った時は、3か月かかった。

剣麗華の手に、ひと振りの長大な剣が握られている。
しかも、その刀身は紅蓮の炎に包まれている。

「『炎剣レーヴァテイン』」

それは、世界を滅ぼすと言われる炎の剣。

お互いの射程範囲にまで迫りくる幻影獣。

紅蓮を抱えたヴァルキリーは、幻影獣の群れに向かって、破壊の塊を振り下ろした。

「覚醒」の劣化複写（イレギュラーコピー）

俺の背後に並んだ１０本の円柱。
これが、『決意の天幕』なのだろう。
同じ場所にいるエリカの『豪華絢爛（ロイヤルエッジ）』の威力が目に見えて跳ね上がった。

だが、俺には何の変化もない。

『いくら増幅しても、ゼロはゼロだけどな』

構わない。
決意に必要なのは、損得勘定じゃない。

ほんの少しの勇気。

俺は、絶対に、この円柱より後ろには下がらない！

全く勝算がない訳じゃない。

こども先生によると、ＢＭＰ能力は、該当者が強いストレスや生命の危機にさらされている時、あるいは強力な幻影獣と相対している時に覚醒する可能性が高く、覚醒理由の３０パーセント超を占める。
今は、二重に条件を満たしている状態なのだ。
まあ、『覚醒理由、特になし』回答が６０パーセント超を占めるので、あまり期待はできないが。

「ゆ、悠斗さん！」

エリカの悲鳴が響く。
俺は、エリカの脇を通り抜け、さらにBランク幻影獣に近づいた。
いきなり麗華さんのようになれなくてもいい。
でも、なれると、さらにいい。
だって、闘っている時の麗華さんは本当に格好いいもんな。
普段は、ただの超絶美少女なのに、いざ、カラドボルグを持って闘い始めると、本当に戦女神みたいで。
「ゆ、悠斗さん……？」
エリカの声の質が、少し変わる。
同時に、右手に生まれる確かな重み。
「そうそう、こんな感じで……」
麗華さんと同じように、右手に持った剣を天に掲げてみる。
「って、剣！？」
思わず、叫ぶ。
驚いたことに、俺の右手にはいつの間にか。
『断層剣カラドボルグ』が握られていた。

「カラドボルグ……だよな？」

いつの間にか右手に握られていた剣を、まじまじと見つめる。

間違いない。

どっからどうみても、麗華さんが持ってたカラドボルグだ。

「？　なにゆえに？」

以下から、選ぼう。

1．目の錯覚
2．超常現象
3．麗華さんのＥＸ能力。
4．俺のＥＸ能力。
5．マンモスラッキー

「5だな」

一瞬で、結論を出す。

分からないことは、あとで城守さんにでも聞けばいい。

目の前には、『豪華絢爛（ロイヤルエッジ）』で身動きの取れないＢランク幻影獣。

そして、右手には、無敵の断層剣カラドボルグ。

これがラッキーでなくて、なんだというのだ。

「せーの！」

壮麗な剣を力いっぱい振りかぶる。

使い方については、問題ない。
『具現化した時点で、もうこれは俺の能力』だ。

「ま、待ってくださイ！　悠斗さん！　このままでは、『豪華絢爛（ロイヤルエッジ）』が、障壁になりマス！　解除しますから、タイミングをあわせテ！」

エリカが何か言っているが、攻撃に集中していてよく聞こえない。
たぶん『キャー！　悠斗さん、格好いいデス！』とかに違いない！

照れるな。

「おおおおお！」

気合い一閃。
俺は、カラドボルグを振り下ろした。

◇◆

振り下ろしたが、特に変化はなかった。
だいぶ近づいたとはいえ、俺と、鉄仮面を被った大型幻影獣との距離は、まだ１０メートルはある。
刀身が届くような距離ではない。
もちろん、手ごたえもない。

「あれ……？」
思わず呟く。
なんだか、さっきまで、カラドボルグを発動できてたような気がしてたけど、いざ冷静になって見ると、そんなはずはないような気がしてきた。

そもそも『幻想剣』は、麗華さんが能力で具現化させた仮初の剣だ。
麗華さんの手を離れれば、消滅する。
１００キロも離れた俺の手の中にあるはずがない。
ましてや、俺に発動できるはずがない。
そう思って、もう一度右手を見ると。

そこには、綺麗さっぱり何もなかった。

なるほど、１が正解だったか。

「よし、逃げるぞ、エリカ！」

男らしく決断して、エリカの手を取る。
鉄仮面幻影獣が怖いのはもちろん、だいぶ盛り上がってしまったので、若干格好悪くもあった。

「ま、待ってくださイ！　悠斗さん、あれヲ！」
「な、なんだよ？」
意外な抵抗を受けて立ち止まる。
鉄仮面を見ると、身体が斜めにずれていた。

「あれ？」

錯覚ではない。
確かに、鉄仮面の上半身と下半身が、若干斜めにずれている。
しかも、そのズレが少しづつ大きくなっていく。

「これっテ……」
「まさか」

唖然とする俺たちの前で、鉄仮面大型幻影獣が、魂を切り裂くような悲鳴を上げる。

「うわー！」

「う、うるさいデス！」

慌てて、耳をふさぐ俺たち。

そして。

完全に切断された幻影獣の下半身が。

どさりと、地面に落ちた。

◇◆

地に落ちた下半身は、砂のように舞い散っていき。

しばらく叫び続けていた上半身も、やがて煙のように消えうせた。

「やった……のか？」

声が渇いている。

どうにも、目の前の現実が信じられない。

「デモ。『豪華絢爛（ロイヤルエッジ）』が障壁になっていたはずデスのに……」

エリカも、半信半疑のようだ。

バリン！

突然音がした。ガラスをたたき割ったような、甲高い音だ。

バリン！　バリン！　バリン！　バリン！

しかも、一つじゃない。

連鎖するように、連続して音がしている。

「な、なんだ？」

「悠斗さん、アレを！」

言われて見上げると。

空から、砕け散ったガラスのような物体が、夕陽を受けて輝きながら舞い降りてきている。

「なんだ、これ？」

そのうちの一つを手に取る。

プラスチックに近い、不思議な感触。

「これって」

「『豪華絢爛（ロイヤルエッジ）』の破片デスね……」

エリカも、俺の手を覗きこみながら、呆然と呟く。

そっか。

『豪華絢爛（ロイヤルエッジ）』ごと、あの幻影獣を切り裂いたのか……。

「凄いデス……」

「ん？」

囁くような声に振り返ると、なんだか、金髪の美少女が凄い目をしている。

「悠斗さん！　凄いデスー！」

◇◆◇◆◇◆◇

『

夕陽を浴びて煌めくカケラが、一人の少年を祝福するように降り注ぐ。

今日、この場で産声を上げた、一人のＢＭＰハンターだ。

新月学園を襲ったＢランク幻影獣のＢＭＰ値は、推定で３５２。

正式に幻影獣の存在が確認されて以来、観測された中では過去最強の幻影獣だった。

それを生まれて初めての実戦で、しかも一刀のうちに斬り捨てるという離れ業をやってのけた少年は。

自信の能力を誇るでもなく、恐れるでもなく。

金髪の少女に抱きつかれて、目を白黒させていた。

……大丈夫。麗華さんには言わないから。

それは、ともかく。

私にはようやく分かった。

私が彼に惹かれる理由。

彼のＢＭＰ能力の本質は、剣麗華の幻想剣を複写して見せた、その

性能の高さではなく。
死神のごとく君臨したＢランク幻影獣にも決して退かなかった、心の強さ。
どれだけ打算を積まれようとも曲げなかった、意志の強さ。

本人は否定していたが。
やはり、私は特別なものだと思う。

そういえば、彼は常々『称号』を欲しがっていた。
麗華さんは、ソードウエポン。緋色先生は、アイズオブエメラルド。
三村くんでさえ、ランスウエポン。
子供っぽいとも思うが、分からないでもない。

ここは、僭越ながら、私が考えよう。

そのチカラで、他のみんなが続く道を切り開いて欲しいという願いを込めて。
ＢＭＰヴァンガード、と。

』

季報・新月、臨時増刊号『決戦・新月学園籠城戦！』（編者：新條文）より抜粋。

第一章『ＢＭＰヴァンガード』エピローグ

「以上が、第五次首都防衛戦で、澄空悠斗君がＢランク幻影獣を破った時の映像です」

ここは、上条博士の研究室の一室。

そこの大型プロジェクターに、澄空悠斗が大型幻影獣を屠った戦闘の映像が映し出されていた。

部屋にいるのは、上条博士に、城守、そして、５人の男女。

「国家維持軍の撮影班が間に合わずに、新月学園の生徒が撮った映像を提供してもらわなければならなくなったのは情けないですが、これはこれでよく撮れてます。スカウトしたいくらいですね」

滔々と話す城守。

一方、５人の男女は、そんな城守を若干白い目で見ていた。

「『クリスタルランス』の皆様方には、この少年の今後について、最強ＢＭＰハンターチームとして助言をいただきたいと思い、お越しいただきました」

あくまで淡々としている城守。

その彼に、端に座っている体格のいい男が声をかける。

「いや、蓮よ。これって、どう見ても、あの時のガキじゃ……」

「何を言っているのか分かりませんねハンマーウエポン彼は今回初めて能力覚醒したのです以前にクリスタルランスと会っている訳がありませんなにか勘違いをしているのでは」

「そ、そうだった。すまん、蓮」

大男が、城守に頭を下げる。

「いやー、それにしても、あの子、ほんまにリーダーの呪いを自力で解いたんや。たいしたもんやなー」
大男の隣に座っている活発そうな女性が、声を上げる。
「ユトユト、凛々しい♪　ギューってしたい……」
そのさらに隣の、本人は眠そうだが目の覚めるような美女は、頬を赤らめて夢見るような表情をしている。
「そうですかね……」
そのさらに隣の少年は、なんだか、おもしろくなさそうな顔をしていた。

「な、なあ、城守君。なんだか、彼らは悠斗君の事を知っているように見えるんだが……」
「なにを言っているんですか上条博士前回の戦闘で初めて覚醒した悠斗君とクリスタルランスに接点があるわけないじゃないですか科学者なら冷静な目で見てください悪い人に騙されて高額な商品を売りつけられますよ」
「そ、そうだな、すまん」
勢いに押されて黙り込む、上条博士。

「ま、まあ、いい、とりあえず、悠斗君のこの能力について、クリスタルランスの皆には意見を……」
「『劣化複写（イレギュラーコピー）』」
「へ？」
間抜けな声を出す、上条博士。

「この能力の名前は『劣化複写（イレギュラーコピー）』。必ず劣化状態で模写する代わりに、どんな能力でも複写できる、最強の複写系能力です博士」
一番端に座っている、剣麗華に負けず劣らずの美しい女性が発言する。

驚いたことに、その瞳は燃えるような赤だった。
「劣化複写（イレギュラーコピー）……。な、なんて、研究意欲を掻き立てられる能力だ！」
そして、年甲斐もなく興奮する上条博士。

「しかし、記憶が戻ったって感じやないなー」
活発そうな女性が言う。
「うん。戻ってたら、キュートさに加えてスタイリッシュ度が３０パーセントくらいアップすると思う」
眠そうな眼の美女が、なぞの指標を持ち出して言う。
「能力自体には問題ないみたいだし、いいじゃないか。これで、いつでもストリートバトルができそうだな」
大男が言う。
「いくら幻想剣（イリュージョンソード）を複写できるからって、剣さんとは月とすっぽんです。臥淵さんとじゃ勝負になりませんよ」
少年は、やっぱり面白くなさそうな顔をしている。

「ですからですねぇ！」
そんな５人を見て、焦ったような表情になる城守だが、上条博士が彼らの会話そっちのけでパソコンを叩きだしたのを見て安心した。
どうやら、劣化複写（イレギュラーコピー）がよほど魅力的な研究材料だったらしい。
相変わらず、優秀なのに扱いやすくて助かる。

「心配しすぎですよ、蓮。上条博士は、そんなに話の分からない人ではありません」
赤い眼の美しい女性が、上条博士に聞こえないようにして、城守に話しかけてくる。
「というより、ただ単純にどうでもいいと思うタイプの人ですけどね……」
嘆息する城守。
「でも、無理だとは思いますが、もう少し気をつけてもらえないで

しょうか？」
「あれでもみんな気をつけているつもりなんですよ」
だから困るんですよ、という感想を持つ城守に、柔らかなほほ笑みを向ける女性。
しかし、その深紅の瞳だけが、場違いな程に異彩を放っている。
眼の前の女性にその気がないとしても、決して気を抜けない。

一旦、この瞳『アイズオブクリムゾン』に支配されれば、『死ねと言われれば死ぬのかお前！』という子供の喧嘩で良く使われる常套句が冗談でなくなる状態になる。
つまり、死ねと言われれば死ぬ。

「むしろ、私は、あなたが一番心配なのですが？」
「それは誤解です」
「そうですか」
あまり信じてはいない顔で、赤い眼の女性が言う。

というか、城守はこの女性が一番心配だった。
自分で気が付いていないのだろうか？

今でも、普段は滅多に自分が笑わないことを。
なのに、さきほどから、隠すそぶりもなくニコニコと笑顔を振りまいていることを。

そして、言う。

「ようやく会えますね。澄空悠斗君」

第一章『ＢＭＰヴァンガード』完。

新居を探そう

俺は、今までの人生で死を覚悟したことが、三度ある。

一度目は、５年前、当時住んでいた町が幻影獣に襲われた時。

二度目は、こども先生に、『先生って、ちっこくて可愛いっすね』と言った時（なんで、あんなこと言ったんだか）。

そして、三度目が今。

正直、今が断トツで、一番怖い。マジ怖い。

「あのー、麗華さん……」

テーブルの向い側に座っている麗華さんに声をかける。

「なに。悠斗君」

そして、いつものように感情の薄い表情で、普通に返事もしてくれる。

でも、明らかに怒っている。

怒っているのを隠そうとしているのか、そもそも今まで怒ったことがないから怒り方が分からないのかは分からないが、確かに怒っている。

しかし、俺には心当たりがない。

が、３か月一緒に暮らしているが、ただ機嫌が悪いだけで麗華さんがここまで怒っているのは記憶にない。

何かやらかしたのだろう。

なんとか、思い出してみることにしよう。

◇◆◇◆◇◆◇

えーと、今日は、朝、起きてきて……。

「おはよう、麗華さん」

「おはよう、悠斗君。そろそろ起きてくるころだと思って、トーストを焼いておいた。2分前に焼きあがったから、いいタイミングだと思う」

「え、えらくピンポイントな起床予想だな。さすが、麗華さん。ありがたくいただくよ」

「ん？　悠斗君、何を読んでるの？」

「ああ。賃貸情報誌だよ。新しいアパート探してて」

◇◆◇◆◇◆◇

要約すると、以上のような状況だった。

……分からん。先の会話のどこに問題があったというんだ!?

「悠斗君」

「は、はい！」

なんでしょうか？

「私に気に入らないことがあるなら、言ってほしい。大抵のことは、直す用意がある」

いえ、どこからどう見ても、いつも通りの完璧美少女ですが。

「だったら」

と、言葉を区切る。

言葉では伝えにくいが、無茶苦茶怖い。

目の前にいる俺にはもちろんだが、高ＢＭＰ能力者である麗華さんの感情の高ぶりは、プレッシャーという形で周囲の人にも影響を与える（普段は抑えているらしい）。
以前は、そのせいで、あるホテルが一週間、営業停止になったこともある。
……このマンションの下の階じゃ、今頃、大騒ぎだろうなぁ。すみません。

「だったら、なぜ、新しい転居先を探しているのか理解できない」
「？　だって、この間の闘いでＢＭＰ能力が覚醒したろ？　覚醒時衝動とやらもなかったし。もともと、俺の覚醒時衝動対策で、俺と麗華さんは一緒に暮らしてたんだし」
と、俺が言うと。
ぽん、と、やたらと可愛い仕草で麗華さんは手を打った。
「うっかりしてた。そういえば、そうだった」
さきほどまでの怒気が、嘘のように消えていく。
なんだったんだ、一体？

「そういうことであれば、私も協力させてもらう。悠斗君に、きっと、最高の部屋を見つけて見せる」
と、燃える完璧美少女。

いや、普通の部屋でいいっすよ。

◇◆◇◆◇◆◇

ところで、俺は、今までの人生で『贅沢な悩み』というものをしたことがない。

だが、今、初めてそれをしている。

「金には余裕があるんだよなー」

思わず、顔がほころぶ。

手元で開いているのは、賃貸情報誌。

今までの人生では、入居部屋に求めるのは、屋根と壁だけだった。

バストイレ共同どころか、それ自体がないような場所も多かったし、治安の悪い場所も多かった。

住み込みのバイトなんかは最高だったが、あまり長くは雇ってくれなかった（別に俺の素行が悪かったせいではない。一言で言うと、城守というイケメン眼鏡役人のせいだ）

だが、今回は違う。

高校生の身分でありながら、ＢＭＰハンターとしての収入がかなりのものなのだ（まだ、一回しか戦闘してないのに）。

おまけに前回の第５次首都防衛戦でＢランク幻影獣を倒した時の一時金が、これまた凄い額だった。

という訳で、俺は身の程知らずにも、部屋の良し悪しなんかをいい気分で判定していた。

「これなんか良さそうだな。豪華なテラス付きの高層マンションかー」

「そこはだめ。隣にもっと大きなマンションができて、日当たりが悪い」

突然割り込んでくる完璧美少女。

びっくりした。

「じゃ、じゃあ、ここは？　超高速インターネット使い放題、電話かけ放題、最新ハイテクマンション、近日公開」

「あのあたりは、干渉系の幻影獣の出現率が高い。電気・通信系統

は正常に動作しないことがある。マンションなんか作らないほうがいい」

「じゃ、これ。複合型ステーションまで徒歩一分。アクセス抜群、環境最高」

「あのステーション、この間、幻影獣に、根こそぎやられた。呪い汚染のせいで、あと１０年間は建物が建てられない。線路の引き直しをしないと」

「これ」

「建設会社が談合で捕まった。このマンションは完成しない」

……だそうです。

選択肢があるならあるで、結構、難しいな。

「引越し、やめようかな」

「それがいい」

「へ？」

思わず、麗華さんを見る。

「い、いや、やはり良くない。理由もなく、若い男女が同居するのは良くないと、緋色先生も言っていた」

「そ、そうすか」

こども先生らしい正論だ。

「ちなみに、麗華さんはオススメとかあるの？」

「なくもない。いくつかピックアップしておいた。案内できる」

「じゃあ、お願いしようか」

そういうことになりました。

◇◆◇◆◇◆◇

「あ、あの、ここは……？」
俺は、どもりまくりながら、麗華さんに尋ねていた。

「部屋探しをする前に寄りたいところがある。悠斗君も迷惑じゃなければ付き合ってほしい」「いいよ。じゃあ、そっちから、先、行こうか」と安請け合いしたのを、俺は今、激しく後悔している。

なぜなら、この建物は、どう見ても……。

「首相官邸。テレビとかで見たことない？」
ありますよ。
あるから、ビビってるんですよ。
「な、なんで、こんなところに……」
「おじい様に呼ばれた。少し時間ができたから、顔が見たいって」
今、とんでもなく不吉なセリフを聞いた気がする。

『おじい様に呼ばれた』と言ったな？
つまり、麗華さんのおじいさんは、この建物に縁のある人で……。

俺は、物凄い勢いで、麗華さんの名字『剣』が付いている政治家をピックアップする。
財務大臣、厚生労働大臣、幻影獣対策大臣……。
その他、色々。
でも、『剣』という名字には覚えがない。
じゃあ、そんなに有名な人ではないかな？

と、俺が、少し（ほんの少し）だけ、安心していると。
「剣源蔵って言う」
「首相じゃないですかー！」
思わず叫ぶ。

一番最初に思い出さなければならない人が抜けていた。

「で、では、いってらっしゃい」
精神的に完全にビビってしまった俺は、ぎこちない笑顔で麗華さんに手を振る。
「悠斗君も来るといい」
「い、いや、俺は、ここで待ってるから！」
「でも、こんなところで立っていると、不審者と間違われる」
麗華さんの鋭い一言。
確かに、さっきから、門のところのガードマンが（俺ばっかりを）物凄い目で見ている。
「お、俺は、庶民だから……」
「私だって庶民」
いや、絶対に違う。
「大丈夫。お付きの人たちは胃に穴があいて、時々、交代するけど、私には普通」
いや、俺には普通じゃないと思います。絶対。

なんと言われても、俺はここに入る気はなかった。
大して役に立たない第六感が、今日ばかりはビンビンに警戒音を発しまくっていた。
たとえ、今現在、後ろから幻影獣に襲われても、絶対に、ここには……！

「一緒に来てくれないかな……？」
「行きます」
ちょっと、上目遣いの麗華さんに、俺は即答した。
泣く子と、完璧美少女には勝てん。

おじい様へのご挨拶

剣源蔵。
剛腕で知られる政治家で、現在、この国の首相を務めている。
元々は、この国最大の企業グループ『剣財閥』を率いるバリバリの財界人だったのだが、あることをきっかけに政界に転身。
以後、とんとん拍子で首相にまで上り詰めたという、庶民をなめきった経歴の持ち主である。
財界と政界でトップを極めた人間だからして、国民の評価はすこぶる高い。
この国が幻影獣に滅ぼされていないのは、この人のおかげだという声も多い。
が、気性の激しさは折り紙つきで、国会中継を見て子供が泣き出したとか、ＳＰが胃潰瘍で入院したとかいう話は上げるとキリがないほどある。
それでも、物を投げつけたり、むやみやたらとどなり散らしたりという子供っぽい怒り方をしないところが、また人気の理由ではあるのだが。

断言しよう。

子供っぽかろうと、子供っぽくなかろうと、怖いものは怖い。

◇◆◇◆◇◆◇

「いつも孫娘が世話になっているね」

この国のトップらしく、威厳に満ちた口調で言う剣首相。
麗華さんから見ればただの祖父かもしれないが、俺から見れば、遥か彼方の天上人である。
剣首相も表面上はそれらしく振舞ってくれてはいるが。
その実は。
『こいつが、可愛い麗華にたかるコバエか……。機会があれば、搾りあげてやろうか』とばかりに、低レベルの怒気に満ち溢れている。

やたらと豪華な応接室に麗華さんと一緒に座らされ（俺は嫌だと言ったのに）、その正面にこの国の首相が座っているという異常な構図もあいまって、俺は逃げ出したくなっていた。

「い、いえ……。お、僕のほうこそ、麗華さんにはいつも世話になりっぱなしで……」
「隠さなくてもいいよ。麗華と一緒に暮らすのは大変だろう」
「そんなことはない。最近では、家事もきちんと分担しているし、お風呂上りにバスタオル一枚で怒られることもなくなった」
麗華さん、空気読んで！
でないと、俺が身体的・社会的に抹殺されます。

「ま、まあ……。仲良くやっているのなら、なによりだ。節度さえ守ってくれれば、何も言わん。節度さえ、な」
ま、守ってます、守ってます。

「ところで麗華よ。ちと、澄空君と二人で話がしたいので、席を外してもらってもかまわんか？」
なんですと！
「別にいい」
なんですと！！
「じゃあ、しばらく散歩してくる」

と言い残し、麗華さんは出て行ってしまった。
久しぶりの家族の会話じゃなかったんですか！？
なんで、俺が首相と二人っきりにならなければ……！

「すまんな、澄空君。二人の貴重な時間を、年寄りの我がままで浪費させてしまって」
年齢的には初老だが、精神的にも肉体的にも若々しい首相が言う。
「いえ、気にしないでください」
だから、社会的に抹殺だけは勘弁してください。
麗華さんとは、ほんとに、ただれた関係にはなってませんから。

「……」
「……」
「……」
「……えーと」
黙ったまま俺を見つめてくる首相に、どう反応していいものか迷ってしまう。

「君は……」
と、ようやく口を開いてくれる。
「はい」
「普通だな」
「はい？」
思わず語尾が上がる。
なんのこっちゃ。

「そ、そうですね。あまり面白味がある人間ではないかもしれませんねー。外見も普通だし、運動神経も普通だし、頭は悪いし」

しかし、とりあえず合わせる、事なかれ主義の俺。
「ああ、いや。すまない。そういう意味ではないんだ」
と、さきほどまでの子供っぽい怒気を完全に消した首相。

「君には、釈迦に説法かもしれないが、高ＢＭＰ能力者は精神を病む」
どきり、とした。
「周囲の無理解や嫌悪はもちろん、ＢＭＰ能力自体が、直接的に精神を蝕む代物だからな。高ＢＭＰ能力者が人格破綻せずに成長するためには、完全に外界と隔離した状態で、専門的な訓練と治療が必要だ」
「……」
「だが、その代償は大きい。麗華を見ていれば、分かるだろう」
「麗華さんは……？」
「ああ。小学校を出るころまでＢＭＰ研究施設で育った。君も知っているかな。上条博士という世界的にも有名なＢＭＰ研究の権威だ」
「知ってます」
とても、そうは思えないハッスルじいさんでしたが。
「あの施設は、もともと麗華のためだけに建てたものなんだがね。最新の設備と最高の頭脳。おかげでなんとか麗華の人格は崩壊することなく成長できた」
あの人を最高の頭脳というのは俺にはなかなか難しいが、とにかく、剣首相の言っている意味は分かった。

「だが、その麗華のＢＭＰ１７２を上回る１８７ものＢＭＰを持つ君が……」
俺を見る。
「普通であることに、脅威を通り越して、感動さえ覚える」
「た、ただの特異体質では……？」
「長年、麗華を見てきた私には、あれが体質ごときでどうにかなる

ような衝動でないことぐらいは分かる。彼女も同意見だ」
「彼女？」
と、俺が聞き返した時。
上品なノックの音がした。

◇◆◇◆◇◆◇
『最強ＢＭＰチーム・クリスタルランス１人目（リーダー）：緋色瞳（能力名：アイズオブクリムゾン）』の場合

「失礼します」
上品な美声とともに、目を疑うような美女が入室してくる。
俺は、今までの人生で麗華さんより綺麗な人は見た事がなかったが。
年の差はあれ、この人は同じくらい美人だった。
だが、何より驚いたのは、その燃えるような瞳の色だ。

「お茶をお持ちしました」
「は、はい……」
圧倒的な存在感に気圧されながらも、なんとか返事ができた。

「どうぞ」
と湯呑みを差し出す、赤い目の美女。
が、差し出した後も、すぐには去ろうとしなかった。
その燃えるような瞳で、俺の瞳をじっと覗きこむ。
あれ？　この仕草、誰かに似てる気が。

「綺麗な瞳ですね」
「は……はい……」
炎を宿す瞳にそう言われても、俺にはまともな返事はできない。

「緋色君。もういいかね？」
「ええ、すみませんでした、剣首相」
首相に言われて、優雅に距離を取る美女。

「さて、澄空君。一応紹介しておこうか。彼女が、最強ＢＭＰチーム『クリスタルランス』のリーダー。『アイズオブクリムゾン』こと、緋色瞳くんだ」
「あ、アイズオブクリムゾン！？」
いくら世相に疎い俺でも、その名前くらいは知っている。
クリスタルランスのリーダーにして、最強の支配系能力を操るＢＭＰ能力者。
確か、ＢＭＰは、麗華さんに次ぐ１６８で、賢崎藍華と並んで、歴代３位（ちなみに、恐ろしいことに、１位は俺である）。

「はじめましてですね。澄空悠斗君。それとも、『ＢＭＰヴァンガード』とお呼びした方がいいかしら？」
「い、いえ。澄空で結構です……」
恐縮する俺。
ちなみに『ＢＭＰヴァンガード』というのは、前回の戦闘でクラスメートの新聞部員兼委員長がつけてくれた称号だ。自分でも、割と気に入っている。

「で、どうかね。久しぶりに見る澄空君は？」
「変わってないですよ。溢れるほどの力と、強い意志。……いえ、むしろ、以前より強い」
久しぶり……。何を言ってるんだ？

いくら俺でも、こんな美女と会ったことがあるなら、忘れたりはしないぞ。

「きっと。凄く素敵な生き方をされてきたのでしょうね。私も、我が事のように、誇らしいです」

ちょっとした気がかり

『クリスタルランス2人目、ハンマーウエポン：臥淵　剛。能力名：怪力無双（ドラゴンバスター）』の場合

麗華さんのお祖父さんと、麗華さんと同じくらい綺麗な謎の美人のツイン攻撃で消耗しきった俺は、なんとか解放されたあと、ふらふらしながら首相官邸の廊下を歩いていた。

『麗華さんが戻るまで待っていては？』と勧められたが、あれ以上消耗させられては、家さがしどころではなくなってしまう。

「にしても、一体、麗華さん、どこ行ったんだろうなー？」

と、歩き慣れない広大な建物内をうろうろしていると。

前方から、2メートルはありそうな、がっしりした体格の男が歩いてきた。

「な、なんだ、あれ！？」

思わず叫んでしまったのも、無理はないと思う。

大男は、なんとハンマーを担いでいた。

それも、漫画とかで出てきそうな、コテコテのハンマーだ。

しかも、でかい。大男の背丈くらいある。

大男自身も、ガラが悪いというわけではないが、異常な威圧感がある。

『近づくだけで怪我をしそうな』という形容詞がぴったりの大男だ。

だから、俺は、端に寄った。

それも、壁に触れそうなくらい端にだ。

なのに。
気がつけば、大男は、俺の目の前に来ていた。

「な、何でしょうか？」
近くで見ると、ほんとにでかい。目の前に壁ができたみたいだ。
「ふん……」
大男は俺の質問には答えず、軽く鼻を鳴らすと、いきなりハンマーを振りかぶった。
「『怪力無双（ドラゴンバスター）』」
まさしく、ドラゴンをも倒せるくらいの威力を持ったハンマーが迫ってくる。
あまりに突然の出来事で、俺は対応どころか、走馬灯すら見る暇がない。

そして。

俺の鼻先数センチのところで、大男のハンマーはピタッと止まっていた。
あれだけの慣性をいったいどうやって殺したんだ？

「避ける必要もなし……か。つれねえなぁ。相変わらず」
ハンマーを背中に戻し、大男は、にっこりと獰猛な笑みを見せた。
いや、反応できなかっただけっすよ。
だいたい『相変わらず』ってなんだよ。出会いがしらにハンマーを振り上げられた経験は、今まで生きてきた中で、なかったぞ。
「あの時は、不意を突かれたからだ、なんて言い訳はする気はねえけどな、今の俺は、あの時よりさらに強ええぞ。失望させるつもりはないぜ」
「？？？」
何を言っているんだ、この人？

「ああ、そうか。一応、自己紹介する必要があるんだったな」
いかにも『馬鹿らしいけどな』と言わんばかりの口調で、大男が言う。
「俺は、『ハンマーウエポン』臥淵　剛。能力は『怪力無双（ドラゴンバスター）』。ま、典型的な怪力戦闘タイプだ。よろしくな』」
「こ、こちらこそ、よろしくお願いします」
この人の名前も聞いたことがあるな。

クリスタルランスのメンバーで、身体能力を飛躍的に向上させる『怪力無双（ドラゴンバスター）』の使い手。
身体能力自体を向上させるから、攻撃にも防御にも隙がないのはもちろんだが、特筆すべきは、その攻撃力の上昇幅。
あのハンマーで、直接幻影獣を叩いて潰せるほどの怪力を発揮できるらしい。

……さっき止めてくれなかったら、首相官邸の壁に、俺の顔がコレクションされてたな……。

「ところで、おまえ。ストリートバトルは知ってるな？」
「は、はい」
ストリートバトルって、確か、能力向上を目的にＢＭＰ能力者同士で私闘をするやつだよな。
話は聞いたことがあるけど、俺には無縁のものだ。

「俺は、ストリートバトルは基本的に誰からでも受けてるが、おまえは特別だ。ファイトマネーなしで最優先で受け付けてやる。俺の懸賞金はなかなかのもんだから、その気になったら、いつでも連絡してくれ」
「は、はぁ」

なんで、そんな危ないものを、こんな化け物と俺がしないといけないのだ？

「じゃあな、『主都橋の……』じゃなかった『ＢＭＰヴァンガード』。ストリートバトル待ってるぜ」

最初から最後まで、意味不明のまま。

謎の大男は、去って行った。

結局、この日は部屋さがしどころではなくなった。

◇◆◇◆◇◆◇

「澄空。ちょっと、小耳に挟んだんだが……」

次の日。

俺の通うＢＭＰ能力者養成校『新月学園』に登校した俺は、朝の教室で一人の弱ナンパ男風イケメンに話しかけられていた。

こいつの名は、三村宗一。

風貌こそ弱ナンパ男だが、一応ＢＭＰハンターだ。おまけに、麗華さんと同じく『ウエポン』の属性持ちだ。

また、学力に応じたクラス分けがされるこの学校で、このクラス（学年一位だったりする）にいるということは頭もいいということだ。

じゃあ、俺も頭がいいのかというと、そういうわけでは無かったりする。

「おまえ、家を探してるんだってな？」

「そうだけど。誰から聞いた？」
疑問に思って聞き返す。
この話は、麗華さんにしかしていないと思っていたんだが。

「いや、剣に『なんか面白いことないかなー』って聞いたら、『うん。悠斗君が部屋を探している。私も、できる限り助力しようと思う』って答えてくれたもんでなー」
……なるほど。
相変わらず、読みにくい反応をする人だな、麗華さん。
「というわけで、おまえにはこれをやろう」
と、封筒を渡される。

「なんだ、これ？」
「中には、地図と入場券が入っている」
指を意味なく左右にチッチッと振りながら、三村が言う。
こういうことするから、弱ナンパ男とか言われるんだがな。
「そこで、おまえは求めるものを得るだろう」
「要するに、住宅展示場の案内か何かか？」
「……ま、平たく言えば。バイト先なんだけどな、ノルマが結構、きついんだよ。助けると思って、頼む！」
拝むような仕草をする。
コイツは、弱ナンパ男のくせに、なかなかの苦学生らしい。
一か月前までは、こいつに輪をかけて苦学生だった俺としては、なんとか力になってやりたいところだ。

「じゃ、とりあえず、週末に行くよ」

◇◆◇◆◇◆◇

その日の放課後。

俺は、こども先生に呼び出された。
ちなみに、こども先生というのは、俺が勝手に（心の中だけで）呼んでるあだ名で、本人に言うと怒る。ちゃんと緋色先生と呼ぼう。

「失礼します」
頭を下げて、職員室に入室する。
入室すると同時に、他の先生たちが『今度は何があったんだ？』みたいな顔をするが、もう慣れた。別に濡れ衣でもなし。

「ん？」
と、そこに予想外の人物を見つけた。
麗華さんだ。

「悠斗君」
おいでおいでをする麗華さん。
「あ。ちゃんと来たみたいね」
続けて、やたらと幼い声がする。

声が幼いのも当然で、麗華さんの前に座っているのは、どう見ても小学生の女の子だった。
この外見で、『こども先生』以外に、一体どんな愛称を付けろというのだ？
まあ、右目に物凄く無骨な眼帯をしているのが、子供らしくないと言えばないけど。
もっと、ファンシーなのにすればいいのに。

「ちょっと待っててね」

と言って、こども先生は、右目の眼帯を外す。
そこから、深緑の瞳が姿を現した。
こども先生のＢＭＰ能力『アイズオブエメラルド』だ。

「んー」
視力検査のような格好で、麗華さんの瞳を覗きこむ。
ああすることで、その人のコンディションやＢＭＰ能力の状態が分かるらしい。
俺も、ああやって、良く『診ら』れている（ちなみに、俺の場合は、あの後、頭をシェイクされる）。

「んー？」
眼帯をかけなおして、難しそうな声を出す、こども先生。
「麗華さんが、どうかしたんですか？」
ちょっと心配になって声をかける。
「うん。ねえ、剣さん。最近、身体の調子が変とか、熱っぽいとか、感じることはない？」
「特には。私は、風邪などはひいたことはないから」
「そっか。美人は、風邪引かないっていうしね」
……初耳だ。

「こども先生？」
「うん。悠斗君にも聞いてもらった方がいいかな。でも、こども先生言わない」
こん、と叩かれた。……また、言っちまったか。

「わずかにだけど。麗華さんに、ＢＭＰ過敏症の兆候が出てる」
「ＢＭＰ過敏症？」
花粉症と響きは似ているが、ＢＭＰと入っていると不吉だ。
「ＢＭＰ能力の強さに身体が付いていかなくなった時に起こる不具

合の総称。進行してＢＭＰ中毒症になると命に係る」
自分のことなのに、さらっと『命に係る』とか言う麗華さん。
「高ＢＭＰ能力者ほど、かかりやすいの。まあ、その年になってから能力覚醒して、覚醒時衝動も起こさないような鈍感な男の子は大丈夫でしょうけど」
く、さっきの仕返しか。こども先生、意外とＳだな。

「ま。このくらいなら問題ないでしょ。でも、あんまりＢＭＰ能力の乱用は避けること。進行が進む時もあるから」

初めてのデート？

週末。
封筒の中に入っていた地図を頼りにやってきた先。
そこにひとつの大きな建物があった。

広大な敷地にそびえ立つ、青を基調とした建物。
どことなく、海を連想させる。
そして、看板に『新月マリンパーク』と書いている。

「悠斗君。私には、住宅展示場じゃなくて、水族館に見える」
一緒についてきてくれた麗華さんが言う。
奇遇だな。俺もそう思う。

一緒に入っていたチケットを見ると、それはもうはっきりと『水族館入場チケット』と書いている。
今まで確認しなかった俺も悪いが、あいつはいったい何を考えているんだ？

「どうするの、悠斗君？」
「悔しいから、使ってやるか。このチケット」
単なる入れ間違いだったら気の毒だと思うが、今回は、あいつが悪い。
「でも……」
「ん？」
「水族館は、恋人同士でないと入ってはいけないと三村が言っていた」
「そんなことはない」

ほんとに何を考えているんだ、あいつは。

◇◆◇◆◇◆◇

『新月マリンパーク』は、なかなか豪勢な造りをしていた。

まずは、全方位に魚が泳いでいる水のトンネルがお出迎え。
ジャブ代わりの普通の水槽がいくつか続いた後、この水族館の売りでもある、深く地下にらせん状に進みながら鑑賞できる超大型水槽が待っている。
やっぱ、首都は金があるんだなー。

「悠斗君」
と、いきなり麗華さんに話しかけられた。
「ん？」
「ここでは、結局、何をすればいい？　ここにいる魚の名前や生態を説明するのなら、簡単だけど」

そういう場所ではありません。
とはいえ、そうはっきり聞かれると迷うな。
恋人同士なら、親睦を深める、でいいんだろうけど。

……いや、恋人同士でなくてもいいのか。

「自由に泳ぎ回る魚を眺めながら、親睦を深める……とか」
「親睦？　私と悠斗君の間の人間関係に、現在問題があるとは思えない」

「まあ、問題があるとは俺も思ってないけど。さらに仲良くなる……とか？」
「さらに仲良くなるとどうなる？」
「仲良くなると……」
どうなるんだろう？

「対幻影獣戦闘時の連携戦闘効率がアップするとか？」
自分で疑問形になる俺。
「なるほど。では、親睦を深めよう」
そして、あっさりと納得する麗華さん。

と、いきなり腕を組まれた。
「れ、麗華さん？」
「大丈夫。私とて、男女の親睦の深め方くらいは知っている。周りの人たちも、皆、同じようにしている」
麗華さんの言うとおり、確かに周りの人は皆、腕を組んだり、肩を組んだり、もう少し密着したりしている。
というか、ここ、ほとんどカップルばっかりだったんだな。
そして、カップルばかりなのに、なぜか俺たちに物凄く視線が集中しているのに、今、気がついた。

そっか、麗華さんと居るんだもんな。

最近はだいぶ慣れてきたが、モデル並み（というよりモデルより）綺麗な麗華さんは、とにかく目立つ。
最初は、一緒に登下校するだけで、不審者通報されないか心配になるくらいだった。
そんな美人が、かなり無理しないとイケメンとは言われない俺と腕を組んで、珍妙な会話を繰り広げているんだ。注目されないほうがおかしい。

男が見とれて、女が腹を立てているカップルなんかはまだいいほうで。
女が顔を赤らめて『私、そっちのケがあったのかもしれない』とか言って、男が青い顔をしているカップルなんかは、もうご愁傷さまとしか。

「悠斗君、顔が赤い」
「ひょ！」
いきなり言われて、飛び上がる。
女性にしては背が高い麗華さんの顔は、俺と同じ位置にある。
いったん意識しだしてしまうと、かなり無理をしても二枚目ではない俺には、この美顔は刺激が強すぎる。

「ちょっと、のどが渇いたから……」
かなり無理のある言い訳をする俺。
すると。

「わかった。水分を調達してくる」
言うが早いか。
音の速度で、麗華さんは行ってしまった。

ひょっとして、催促したと思われたのか？

ひとり残された俺には興味をなくしたのか、周りのカップルたちは去って行った。
とはいえ、女が男をつねったり、男が必死で白昼堂々、愛の言葉を囁き直して女を正常な道に戻そうとしているカップルを見る限り、だいぶ禍根を残すイベントだったようだが。

まあ、それはともかく。
下手に動くと、はぐれてしまう。麗華さんが迷子になるとも思えないし、ここでのんびりと待っているか。

「でか……」
目の前に巨大なサメが迫る。
体長は１０メートルほど。大きな口は、俺がまるごと入りそうだ。
強化ガラスがなければ、人間など相手にもならないような生物だが。

「俺は……」
つい一カ月ほど前、これよりもさらに強大な生物（かどうかは分からないが）を倒した。
史上最強のＢＭＰ３５２を誇ったＢランク幻影獣。
『奇跡のＢＭＰハンター出現』なんて見出しで、つい最近まで大々的に報道されてたもんだ。
こうやってのんびり過ごせるのは、城守さんが顔出しＮＧにしてくれたからだな。感謝しなければ。

気がつくと周りには誰もいなくなっていた。

「劣化複写（イレギュラーコピー）：幻想剣（イリュージョンソード）。断層剣カラドボルグ」

ふと呟く。
次の瞬間、俺の手には壮麗な剣が握られていた。
麗華さんの幻想剣を俺の能力で複写した剣。
一か月前に目覚めたばかりだというのに、今では驚くほど簡単に使いこなせる。
そして、劣化状態の複写とはいえ、この剣は、目の前のサメごと、この超巨大水槽を両断する力を秘めている。

「ま、しないけど」
剣を消す。
ＢＭＰ能力に目覚めた当初はむやみやたらと使いたがる人が多いらしいが、俺にはそういうのはなかった。
覚醒時衝動ってやつもなかったし。

そうこうしているうちに、人の気配がした。
麗華さんかと思って見ると。

そこには、見たことのない二人組の女性が並んで歩いてきていた。

『クリスタルランス３人目、アローウエポン：茜嶋光。能力名：天閃（レイ）。及び、クリスタルランス４人目、犬神　彰。能力名：電速（パルス）』の場合

ただものじゃないのは一目でわかった。
身のこなしとか隙とか、小難しいことを考える前に、高ＢＭＰ能力者は纏っている空気が違う。
意識して抑えないと、周りの人に圧迫感を与えるほどのプレッシャー。
麗華さんなんかは、その筆頭だ。
ちなみに、その麗華さんよりＢＭＰ値の高いはずの俺は、あんまりそういうのがないらしい。
『控えめなのが、澄空君のいいところですね』と、こども先生も言っていた。

だが、その力に反して、見た目は二人とも細身の女性だった。

一人は、勝気な瞳が印象的な活発そうな女性。なんとなく、眼鏡はずし状態の委員長に似てるな。
もう一人は……。

「美人……だな」

単純に美人度（そんな尺度があるのかどうかは知らないが）でいうなら、麗華さんや緋色瞳さんの方が上かもしれないが、包み込んでくれそうな優しい雰囲気がいい。
少しとろんとした眠そうな眼といい、おっとりとしていながら優雅な仕草といい。

「あんな姉さんがいたら、いいだろうなぁ」

不覚にも、そんなことを思う。
……家族のいない生活も長いのに、何をいまさら。

などと、考え事をしていると。

「うわ」
いつの間にやら、二人組の女性が目の前にいた。
通路は広い。
この二人は、俺に用があって寄ってきたのだ。

「あ、あの、なんでしょうか？」
「キミは……」
眠そうな眼の女性が、言う。
「私を……」
高ＢＭＰ能力者なら、俺の力に気づいてもおかしくない。

いや、それ以前に、ひょっとして、さっきの『カラドボルグ』見られたか？

「お姉さんと呼んでもいい」

「はぁ……」

って。

「え？」

今、なんとおっしゃいました。

「私は、ユトユトのお姉さんになりたいと思っている」

ゆ、ユトユトって、それ、ひょっとして、俺の愛称っすか？

「ちょ、ちょっとちょっと。飛ばしすぎや、光。悠斗君、びっくりしてるやないか」

隣にいた活発そうな女性が、口を挟む。

「そ、そですよ。いきなり、お姉さんとか言われても」

というか、この人たち、なんで俺の名前を知ってるんだ？

不思議な関係

『クリスタルランス５人目、ダガーウエポン：坂下　陸。能力名：連携攻撃（ラピッドアタック）』の場合

最強ＢＭＰチーム『クリスタルランス』は、リーダーの緋色瞳をはじめ、５人中４人が初期メンバーのままだが、一人だけメンバーが交代していた。

それが、彼、坂下陸。ダガーウエポンの称号を持つＢＭＰ能力者だ。

『無敵』と言われた前任者には及ばないが、次代を担うホープとして、世界の注目を集める能力者の一人である。

そんな彼が、なぜかこの日、一人で水族館をさまよっていた。

「別に事件が起こりそうな雰囲気もないよな……。先輩方が月に一度の合同練習をキャンセルするくらいだから、よほどのことだと思ったんだけど……」

二人の先輩、茜嶋光と犬神彰が突然『今日、水族館に行くから、練習行けなくなった』と言い出したため、心配して後を追ってきたのだ。

が、電速（パルス）を尾行をするのは無理だったらしい。見事に捲かれたというわけだ。

「まぁ、単なる息抜きだったら、邪魔しちゃ悪いしな。このところ、忙しかったし……」

幻影獣との闘いで彼女らが疲れを感じているとすれば、クリスタルランスの中ではまだまだ実力不足の自分も原因の一つである。

休息の邪魔はしたくなかった。

「帰るか」
帰って修行しよう。そう思って、踵を返した時だった。
「あれ……」
前方から見覚えのある女性が近づいてくる。
羨望の視線を当然の如く集めながら、とらえどころのない表情で歩いてきているのは……。
「つ、剣さん！」
思わず叫んで駆け寄っていく。
「ん？」
女性が、軽く視線を動かしてこちらを見る。
そんな仕草でさえ、撮影して永久保存しておきたいほど美しい。
「えーと？」
「お忘れですか？　以前、剣さんに挑戦して、ボッコボコに負けた坂下陸です！」
まるで、それが誇らしいことであるかのように胸を張るダガーウエポン。
「ん。覚えてる。あの後、クリスタルランスに入ったって聞いた」
歴代2位のＢＭＰ能力値を持つ麗華でさえも、クリスタルランスには一目置いている。
チームとしての実力は紛れもなく世界一だし、アローウエポンこと茜嶋光には、個人部門のＢＭＰランキングでも上を行かれているのだ。
「入ったって言っても、補欠みたいなもんですけどね。なんせ、前任があの人だし……」
「まぁ、そうかもしれない」
前任者、ブレードウエポンと呼ばれる男は、引退した今でも歴代最強と言われている。

「ところで、剣さんはどうしてここに？」
「ん？　悠斗君と見学に来た」
「ユウト？　ひょっとして澄空悠斗ですか？」
途端に渋い顔になる坂下。
彼は悠斗には会ったこともないが、、あまり良い印象を持っていなかった。
別に、突然出てきて、いきなりＢランク幻影獣を倒して英雄と呼ばれようが、上条博士とあの人が共謀して『彼こそ救世主』とかなんとか国会で演説させてごっそり予算をぶんどっていこうが構いはしない。
しかし、なぜか彼の尊敬するクリスタルランスの他のメンバーがやたらと悠斗のことを気にしているのだ。
特に茜嶋光などは、第五次首都防衛戦以降、あからさまに『ユトユト可愛いユトユト格好いい』などと言い続けている。
どう考えても何らかの接点があるのは間違いないのだが、誰もそれを教えてくれないのだ。

仲間外れにされているようで、面白くはない。

「今から悠斗君のところに戻るけど、一緒に行く？」
と、両手に持った缶ジュースを揺らしながら、問いかけてくる麗華。

一瞬迷った坂下だったが。
「ええ、是非」

◇◆◇◆◇◆◇

「いきなりゴメンな。うちら、クリスタルランスのメンバーなんや」
「え？」
ま、またクリスタルランス？
最近、えらく縁があるな。

「うちは、電速（パルス）の犬神彰。で、こっちのぽやぽやしてるのが、アローウエポンの茜嶋光」
「え、ええ！！」
また、驚いた。

電速（パルス）が女性だってのは聞いたことがあったけど、遠距離戦闘系最強とも言われるアローウエポンの正体が、こんなぽやぽやしたお姉さん系の女性だって？

「うん。そういう訳で、私の弟になると色々便利。というか、もう１０年前から姉弟だったような気さえするよね？」
しませんよ。
「だから、飛ばしすぎや、光」
「彰は、クールすぎると思う。自分だって凄く楽しみにしていたくせに」
「悠斗君が戸惑うやろ、言うてんのや」
と、なんだか言い合いをしている女性二人。

……訳が分からん。

「という訳で、どうかな？　ユトユト」
どうかな、と言われても……。
確かに、こんな美人のお姉さんがいれば嬉しいのは間違いないが。
ここで『分かりました。これからよろしく、お姉さん♪』などと言えるほど、俺は三村ナイズされていない。

「えーと、とりあえず、ちょっと連れがいるんで、また今度ということで……」
「連れ？　ああ、ひょっとして、剣麗華？　おたくら、同じ学校やったもんな」
ど、どうして、そんな情報まで？
「ユトユト。お姉さんに黙って彼女作るのは良くないと思う。ちゃんと紹介しないと」
そして、いつの間にか、お姉さんになっているし。

「べ、別に彼女じゃないですよ」
同居は、してるけど。
「ほんとに？　嘘、吐いてない？」
「ほ、ほんとです。もう、全然」
「欲しいとも思ってない？」
「お、思ってないことはないですが……。麗華さんは、いくらなんでも、俺とじゃ釣り合いが取れないというか……」
いきなり元気になったアローウエポンに押されるまま、余計なことをしゃべりまくる弱気な俺。

「そっか。分かった」
と、いきなり光さんが、ポンと手を打った。
「ユトユト」
「は、はい」
というか、そのニックネームは、決定なのか？
「ユトユトは、お姉さんより、彼女が欲しいということ？」
「え？」
「そういうことなら、私も彼女で構わない。１０年前から、そうだったような気がする」
１０年前って、俺、小１ですよ。

「ん？　ひょっとして、妻の方がいい？」
『いや、そういうことではなく…』と言おうとした俺の耳に。

「それはおかしい」
聞きなれた声が耳に入ってきた。

「悠斗君がＢＭＰ能力に目覚めたのは、１か月前。クリスタルランスと婚姻関係を結ぶほどの出来事が、１０年前にあるはずがない」
麗華さんだ。

一応、助け舟を出してくれているんだと思うだけど。
なぜだろう。事態がややこしくなるような予感しかしない。

それに、横に連れてるイケメンは誰だ？

「うわ！　あんた、剣さんかいな？　美人さんになったなぁ……」
猫っぽい方の女性、犬神さんが声を上げる。
「美人さんなだけでは、お姉さんは認めない」
そして、いつの間にかできた、俺のお姉さんの気合いが膨れ上がっている！

「アローウエポンと悠斗君は、血縁関係はないはず。そのくらいは、私も知っている」
「ソードウエポンこそ、悠斗君と同居とはどういうこと？　いくら同じ高校に通っているとはいえ、おかしい」
「おかしくない。悠斗君の覚醒時衝動に対応するため、それなりの実力を持つＢＭＰハンターがそばにいる必要がある」
「ならば、ソードウエポンよりＢＭＰランクが上で、お姉さんである私が同居すればいい」

「悠斗君に、お姉さんはいない」

いつの間にやら、物凄い勢いで人が集まってきていた。
どちらか片方でも呼べれば、どんなくだらないイベントでも成功しそうなほどの美女二人が、どこかずれたような言いあいを真剣な顔で繰り広げているのだ。
注目されない方がおかしい。

「あ、あのな、光……」
「つ、剣さんも……。みんな、見てますし……」
猫っぽい女性とイケメンが、美女二人をとめようとしている。
そして、『あんな美女二人が取り合いをするなんて、ユウトって、いったいどんな男前だ』とかいう声も聞こえるが（真横にいるのに、俺のことだとは思われてないらしい）、俺にも何がなんだか、さっぱり事情が分からない。

まあ、とりあえず。

とりあえず、今日は家さがしどころではないことだけは分かった。

狙撃手と安全装置

翌日。
平和な登校風景より。

「という訳で、おまえが間違って入れた水族館のチケットは使ってしまった」
「いや、それはいいんだけどな……」
道すがら、三村に説明する。

住宅展示場の地図と案内状の代わりに、水族館の入場券が入っていたこと。
麗華さんも一緒だったから、間違いでした、と引き返すわけにいかなかったこと。
中は意外に楽しめたが、途中、アローウエポンと電速（パルス）とダガーウエポンに会って、しかもアローウエポンが自分のお姉さんになると言い出して大変だったこと。
元はと言えば、三村がチケットを入れ間違えたのが原因なので、チケットを返すつもりもチケット代を払うつもりもないこと。

こんなに分かりやすく説明したのに、三村はなんだか不思議そうな顔をしていた。

「俺には、途中から話がまったく見えなくなったんだが。エリカは分かったか？」
と、もう一人一緒に登校していた金髪の美少女に振る。
この少女の名は、本郷エリカ。
『豪華絢爛（ロイヤルエッジ）』という不可視の刃を操る、見た目ゴージャスなのに、中身けなげな、ハーフっぽい（実際は良く知らない）女の子だ。

「私は最初から分かりませんでしたガ？　そもそも、なぜ、住宅展示場の地図と案内状を、水族館のチケットと入れ間違えるんですカ？　悠斗さんも当日まで確認しないなんて変ではないでしょうカ？」
確かに、前半部分は俺も気になるところだ。……そして、後半部分は俺がバカだからというだけの理由だ。

「いや、俺にも実はよくわからないんだけどな……」
俺とエリカに見つめられ、若干気まずそうに三村が口を開く。
「バイトしてたら、いきなり、あの『アイズオブクリムゾン』に声を掛けられてな……」
え？
「で、いきなり『これはとても重要なミッションです。あなたを見込んでの依頼ですよ』とか言うもんだから……」
「ちょっと待て」
俺は遮った。
「緋色さんが、どうしてそんなことを言い出したのかは分からないけど、おまえ、そんな怪しげな切り口で始まった依頼に乗ったのか？」
「いや、俺も怪しいとは思ったんだよ。いくら『アイズオブクリムゾン』だからってな。でも……」
「デモ？」
エリカが興味を示している。
「美人過ぎて、いつのまにかＯＫしてた」
「おい！」
理由になってない。

「おまえ、もし、緋色さんが何かヤバイたくらみを持ってたら、どうするつもりだったんだ！」
「ち、ちらとはその可能性も考えたんだけどな……。ほら、あの人、

一応、緋色先生の姉さんなわけだし、妹の生徒に悪いことをしたりはしないかなー、と」

「『しないかなー』じゃないだろ……。いくら、こども先生の姉さんだからって……？　姉さん？」

昨日から、良く聞く単語に、一瞬、止まる。

「あレ？　知らなかったんですカ？　アイズオブクリムゾンは、緋色先生のお姉さんですヨ？」

「まじで！？」

「超有名だぞ。だいたい、緋色なんて名字少ないんだから、予想はつくだろ？」

つかなかったし、知らなかった。

「こども先生……。ただものではないと思ってたけど。まさか、あんな超絶美人の姉がいたとは……」

「姉は関係ないだろ……」

「というカ、あんまり、こども先生言わない方がいいですヨ」

エリカにまで、注意される。

いい加減ほんとに、こども先生と呼ぶ癖は直した方がいいかもしれない。

と、その時。

ガンと、石が砕けるような音がした。

見ると、１メートルくらい先の地面が拳大にえぐれていた。

「ん？」

首を傾げる。

「なんだ、あれ？」

落石か。

などと、考えていると。

「伏せろ馬鹿！」
三村が、俺たち二人を庇うように押し倒してきた。
この時、エリカの方は抱きかかえるようにして、俺の方は蹴飛ばすようにして、庇ってくれたのは、この際、大目に見よう。……若干、羨ましいが。

「な、なんだ、なんだ」
三村に引かれるまま、隠れた電柱の後ろから、地面が拳大に次々えぐれていく光景を見ている俺。
「狙撃されてる」
「そ、狙撃？」
なんだ、そのデンジャラスな単語は！？
「方角からして、新月学園の方ですネ。豪華絢爛（ロイヤルエッジ）で防ぐには、弾が小さくてやっかいデス」
当然のように順応する金髪美少女。
こういう時、やっぱり、俺は新米だなぁと思う。

それは、ともかく。

「やってくれるじゃねえか」
ん？　あれ？　これ、俺の声？

『

電柱の陰から飛び出す。
さきほどのまでの弾道から、敵狙撃手は、おそらく新月学園の屋上。
距離は、１００メートルほど。
天閃（レイ）なら、まったく問題にならない距離だが、人死にはまずい。
なるべく威力を絞って。

「天閃（レイ）」
手のひらから放たれた、光り輝く光線が、新月学園屋上の昇降口部分を貫き。
爆発する。

これで、敵は姿を現すはず。
そこを撃てば終わりだ。

「……？」
と思って見ていたが……。
一向に、敵は姿を現さない。
幻影獣なら、向かってくるはずだが……。

「ひょっとして、お仲間か？」
だとするとまずいな。
遠距離攻撃系ってんで、過剰反応しちまった。

とっとと、引っ込もう。

』

「ん？　あれ？」

気がつくと、俺は人差指で新月学園の屋上を指差した、なんだか格好いいポーズで立ち尽くしていた。
「……」
確か、電柱の後ろに隠れていたはずなんだが。
なんというか、記憶が数秒ほど飛んだ感じだ。

……というか、敵は？

「す、澄空？」

「悠斗さん？」

出遅れた感を漂わせながら、三村とエリカが電柱から姿を現す。

この感じだと、敵は逃げたのか？

「な、なあ、澄空。今のなんだけど……？」

「今の？」

やっぱり、俺、何かしたのか？

「お、覚えてないんですカ？」

「な、なにかまずいことしたのか？」

たとえば、こども先生に、『こども先生』と言ってしまったような感じで！

「まずくはないデスけど……。いきなり、飛び出していったかと思うと、遠距離系のＢＭＰ能力で敵を狙撃しテ……。しかも、あの能力ハ……」

「おまけに、なんつうか、若干渋い魅力というか、チョイ悪でぶっきらぼうで、でも強いみたいな二枚目風というか！」

「いや、ほんとに、覚えてないんだか……」

そして、俺は、おまえが何を言っているのか分からん。

「いい加減にしろよ、おまえ！」

いきなり、三村がキレた。

「剣みたいな完璧美少女と同居しておきながら、こないだの第五次首都防衛戦で幅広い層の人気を獲得し（もちろん若い女性層を含んでいるのが問題だ！）、あげくの果てに、エリカともちょっといい感じになってる上に……！」

「なってないデスけど……」

「今度は、チート気味でどう見ても二枚目風味の裏人格使いか！

表人格の三枚目とのギャップが魅力か！　おまえは、漫画の主人公か！」

「ええい！　少しは、俺に分かる単語で話せ！　だいたい、漫画みたいな設定っていうなら……！」

「悠斗君。と、三村にエリカ？　何を騒いでるの？」

「……彼女が居るじゃないか」

誰もが認める完璧美少女・剣麗華の登場で、ひとまず場は収まった。

◇◆◇◆◇◆◇

一方その頃。

「いや、びっくりしたね。複写系能力ってのは、聞いてたけど。天閃（イレ）まで使えるなんて。どこで、覚えたんだろうね」

爆発の痕を留める新月学園校舎屋上で、一人の少年が話しかける。

線の細い、どこか儚げな雰囲気の少年だった。

「……」

対照的に、話しかけられた方の少年は、存在感に満ちていた。

体格にも恵まれ、覇気もある。ついでに言うと、なかなかの男前だった。

「でも危なかったね。僕が、飛び出すのを止めなかったら、今頃死

んでたかもしれないよ」
「……」
覇気がある方の少年は、なにやら眼を閉じて考え事をしていた。
「聞いてる？　達哉」
「ああ。聞いている」
と、眼を開ける長身の少年。
「俺が間違っていた。数か月前にＢＭＰ能力が覚醒したばかりだとはいえ、実力を確かめてやろうなんて上から目線で対したのが、失敗だった」
「……そうかな？　単純に力量差のような気もするけど」
「やってみなければ、分からん」
力強く言い切る長身の少年。
「具体的には、どうするの？」
「決闘を申し込む」
「……君ら、一応同じ高校の高校生だよ？」
「だが、俺も彼もＢＭＰハンターだ」
そして、長身の少年は、闘志あふれる笑みをこぼす。
「ストリートバトルなら、問題ないだろ？」

「二重人格？」

こども先生が、すっとんきょうな声をあげる。
そして、他の先生が、『またアイツか』的な距離の取り方をする。
もう慣れたけど。
だから、あなたがたも、いい加減、俺に慣れろよ。

「俺は覚えてないんですけど」
あまりに、三村とエリカがうるさい（特に三村）ので、麗華さんと一緒にこども先生に診てもらいに来たという訳だ。
ちなみに麗華さんは、ＢＭＰ過敏症の検査。今のところ、特に心配するほどではないらしい。

「悠斗君は、私を廃業させる気なのかしら？」
「え？」
なんでだ。まさか、こども先生を廃業して、大人先生になるとか？
と、あほなことを思い浮かべたら叩かれた。

「失礼なことを考えたわね」
と言う緋色先生。
さすがは、アイズオブエメラルドだ。

「いくらなんでも、人格障害を見過ごしていたなら、感知系能力者失格ってことよ」
と、麗華さんを診るために外していた眼帯を弄びながら言う。
しかし、いつ見てもごつい眼帯だ。もっとファンシーなのにすればいいのに。

「じゃ、いい？　動かないでね」
と、俺の顔を固定して深緑の右目で覗き込んでくるこども先生。
いつもより、さらに近い。

「うーん……」
「あの……」
「うーん……」
「あ、あの……」
「うむむむ」
「せ、せん、せせせせ……」
「うむー！」
「ゆ、揺らしすぎです……！」

いつもより、激しく頭をシェイクされました。

「やっぱり、分かんない！」
……さいですか。

「前から聞こうと思っていたんだけど」
それまで黙って見ていた麗華さんが口を挟む。
「緋色先生が言う『分からない』って、何が原因なの？」
「原因も何も、全然、さっぱり、何も分からないの」
はっきりと言い切るこども先生。

「でも、正直なところ、ひとつだけ心当たりがあるの」
「え？」
初耳だ。
というか、心当たりがあるならどうして今まで言わなかったんだ？

「でも、ここじゃちょっとね。場所を変えましょう」

◇◆◇◆

連れてこられたのは、生徒指導室。
あったんだな、うちの高校にも。
ちなみに、いくらうちの高校が特殊でも拷問器具とかはないから安心していい。
……たぶん。

「場所を変えるってことは、何か秘密の話でもあるんですか？」
心配になったので、聞く。
ＢＭＰ能力にかかわってから、心配性になった気はするな。

「そうね」
肯定するこども先生。
「私は、居ていいの？」
麗華さんが口を挟む。
そういえば、まったく普通の成り行きで、麗華さんを連れてきているけど、大丈夫なのか。
「悠斗君次第ね。私は、麗華さんにも聞いてもらった方がいいと思っているけど」
と、こども先生が俺を向く。
麗華さんも向く。

話の内容が分からないけど、別に麗華さんに隠すことはないだろう。

麗華さんなら、隠しておいたエロ本を見つけても、『悠斗君の嗜好の傾向を教えてもらえれば、次は私が買ってくる』とか言いそうだ。
まあ、それはともかく。

「問題ないです」
「そう。分かった」
こども先生が、俺たち二人に椅子に座るように促す。

「さっき言っていた心当たりなんだけど」
「はい」
「私のアイズオブエメラルドは、どんな現象でも解析できるのが特徴なの」
「はあ」
「つまり、いくら澄空君が特殊でも、解析できないということはありえないの」
「はい」
「なのに解析できないとなると、答えは一つ」
「はい」
「私を上回る力の持ち主による精神プロテクトがかかっている可能性がある」

「……はい？」

精神プロテクト？
なんですか、それ？

「分析に特化した緋色先生クラスのＢＭＰ能力を妨害する能力？そんなものがあるの？」

すかさず質問する麗華さん。対応早いな。
「私もないとは思うんだけど……。少なくとも、今まで見たことはないわね」
マジですか？

「あ、あの先生……。その精神プロテクトってやつ、危険はないんですか？」
「あると思う。これが本当に精神プロテクトだとすると、暗示や催眠というより、ほとんど呪いね。二重人格というのも、その影響じゃないかしら」
マジですか！
「悠斗君がＢＭＰ能力に目覚めたことで、精神構成に変化が生じ、ほろこびが出始めている……？　ありうる話だと思う」
そして、どんな時でも冷静な麗華さん。

「悠斗君、ちょっと聞きにくい話なんだけど……」
「な、なんでしょう？」
「これほどの精神干渉を受けていて、そのことだけを忘れているとは考えられないの。悠斗君。ひょっとして、ある時点からの記憶がないんじゃないかしら？」
「まさか。そりゃ、小さい頃のことはあんまり覚えてないですけど、記憶喪失とか、そんなドラマチックなことはないですよ」
まあ、一般的な家庭ではなかったけど。このご時世、珍しいというほどでもない。

「なら、いいんだけどね」
緋色先生が、ほっと息をつく。こういう仕草は、年上っぽくも見えるな。

「私も色々試してみるけど、正直、不透明な部分が多いわ。麗華さ

ん。ＢＭＰ過敏症のこともあるのに申し訳ないけど、悠斗君のこと、見てあげてくれるかしら？」
「了解した」
即答する麗華さん。
正直に言って、頼もしかった。

俺のＢＭＰ能力値は、人類最高らしいけど。

この人を守ってあげられる日は、来そうにないな。

◇◆◇◆◇◆◇

一日の学園生活を終え。
俺たちは、マンションに帰ってきた。
いつまでも同居状態なのはまずいとは思っているのだが、新居が見つからないのだから仕方がない。

今日の夕食はシチュー。
家事は分担しているが、料理だけは必ず俺の当番だった。

「前のより、おいしい」
麗華さんが嬉しいことを言ってくれる（無表情だけど）。
「ども」
正直、『よーい丼』亭でバイトしていた時より、料理の上達が早い気がする。
こんな完璧美少女に食べてもらっているのだから、あたりまえかも

しれないが。

「悠斗君」

と、麗華さんが、口に運ぼうとしたスプーンを一旦置いて話しかけてくる。

「ん？」

「聞きたいことがある」

なんだろうか？

「私の家族を紹介したのに、悠斗君の家族について聞いたことがなかった」

……確かに話したことはない。

というより。

話すことがなかった。

「……あー。俺、家族いないから」

なんでもないことのように、答える。

事実、なんでもないことだった。

「家族、いないの？」

「あ、ああ……」

なんでもないことだと思っていた。

「私には分からないけど、家族がいないのって寂しいことなの？」

な、なかなか凄い質問だけど、麗華さんらしいと言えばらしい。
俺は全然気にしてないんだし、ここは、軽く答えればいいか。

「そりゃあ……。寂しいよ」
？　あれ？
声、暗くないか？

「特に食事時が……ね。生活に困ったというほどではなかったんだけど……」
暗いって、声。
今まで、全然、気にしたことなんかなかったつもりなのに……。
麗華さんと二人の食事に慣れてしまったからか？
腹にずんとくるような、嫌な重さがある。

「ゆ、悠斗……君？」

麗華さんが驚いたような顔をする。
やば。
ひょっとして、ひいた？

「あ、あー。ま、まあ。一般的な感覚だよ。うん！　やっぱ、人間、一人では生きていけないっていうか！　ちょっと寂しいくらいが、正常というか！」
「悠斗君」
「いや、ちょっと大げさに言ったけど、フィクションというか、ドラマチック気味というか、ほんとはそんなに気にしてないから！」
「悠斗君」
「というか、俺は一人でも平気だぜ、的な強がりは男がやっても格好良くないというか、あくまで、一般的なオーソドックスな意見というか」

「悠斗君」
「なんというか……」
自分でどんどん慌ててテンパっていく俺に、麗華さんは冷静に呼びかけ続けている。
な、なんか格好悪いな、俺。
と。
「え？」
麗華さんが、深々と頭を下げた。
「ごめんなさい」
「え？」
え？　え？　え？
「私は、今、とても無神経なことを言ったんだと思う」
「え？」
「だから、ごめんなさい」

あまりの出来事に。
俺の頭はフリーズした。

頭を下げたままの麗華さん。
なんとかギャグで、場の空気を変えようと頭をフル回転させるが、何も思い浮かばない俺。

沈黙を破ったのは、麗華さんだった。

「私は、自分が、悪い意味で普通でないことを知っている」
普段は、とらえどころのない瞳が。
「でも、私が今、悠斗君を不快にさせたことは分かる」
とても真摯な色を宿して俺を見つめている。
「同じことは、もう言わない」
整いすぎた顔立ちよりも。
「だから許してほしい」
今は、その瞳の色に見惚れている。

麗華さんは、確かに世間知らずなところもあるけど。
嘘は通じない。
そんな気がした。

だから。

「気にしてないよ」
「え？」
「自分でも驚くほど動揺したけど。麗華さんを不快に思ったりはし

てない」
これは、本当だ。
「だから、麗華さんも気にしなくていいよ」
「悠斗君」
麗華さんが、ふっと力を抜く。
その緩んだ仕草に、どきりとした。

また、沈黙。
だが、今度の沈黙は不快ではなかった。

「悠斗君」
と、また、麗華さんが声を出す。
「ん？」
「お願いがある」
麗華さんの頼みなら、なんでも聞く。
マジで。

「私は、悠斗君に一切悪意を持っていない」
「え？」
「だから、もし、悠斗君を不快にさせたとしても、それは私の意図するところじゃない」
「は、はぁ」
「だから、そういう時は、指摘してほしい」
「し、指摘ですか……」
「怒ってくれても構わない。でも、愛想を尽かす前に、悪いところを教えてほしい」
「あ、ああ」
「そしたら、前にも言ったように、たいていのことは改善する用意がある」

麗華さんは表情が読みにくいけど。
この時、どれだけ真剣なのかは、いくら俺が馬鹿でも分かる。
だから。

「ああ、分かった」
と答えた。

でも、難しい話だ。
俺が、麗華さんに愛想を尽かすなんてことが起こりえるとは思えないからな。

◇◆◇◆◇◆◇

翌日。

突然だが、イメージに反して、麗華さんは別に無口ではない。
話しかければ無視されることはほとんどないし、麗華さんの方から話しかけてくることも珍しくない。
だが、今日は違った。

「麗華さん」
「なに」
「今日も暑くなりそうだね」
「最高気温は３０度みたい。水分の補給には気を付けて」

という具合だ。
……別に普段と変わらないように見えるかもしれないが、微妙に違うのだ。

だいたい、麗華さんから話しかけてこない。
昨日の一件のせいかな、とも思うけど。
最後は、お互い納得したしな。

女の子は難しいな。
特に、麗華さんは。

◇◆◇

1限目が終わった後、麗華さんは、職員室に行った。
また、こども先生に診てもらうらしい。悪くなってなければいいけど。

それは、そうと。
俺にも、気がかりなことが一つあった。

「なぁ、澄空」
「分かってる」
珍しく心配そうな声の三村に返答する。
気がかりの元は、今日から新たにできたクラスメート。

峰　達哉。

といっても、転校生というわけではなく、もとからこのクラスにいたらしい。
入学してから、俺が編入してくれまでの間に、幻影獣との闘いで大怪我を負って入院していたらしい。
長身でがっしりした体格。

しかし、巨漢というイメージではなく、むしろ均整のとれた体つきをしている。
顔もいい。
三村のような今風のイケメンではないが、ストイックな男前といったところだろうか。
素直に格好いいと思う。

そういう男子高校生が。
どういう訳か、俺を睨んでいた。

睨むように、ではなく、睨んでいた。
まるで、軽い気持ちでちょっかいを出したが、逆に手ひどい反撃を受けて死ぬ思いをしたかのような睨み方だ。

「悠斗、正直に答えてくれ」
「なんだよ」
三村が真剣な顔で問うてくる。
こういう時は、だいたいずれたことを言うのが三村宗一という人間なので、あまり真剣に聞く気にはならないが。
「峰の姉妹か彼女に手を出したんじゃないだろうな？」
「……」
そういうことを言うから、弱ナンパ男とか言われるんだ。
「剣一人で十分だろうが。あいつ一人で、その辺の女の子の１００人分くらいに匹敵するぞ」
「なにを馬鹿なことを……」
１０００人分には、匹敵する。

それは、ともかく。
「言いたいことがあるなら、はっきり言えばいいのにな……」
男相手に、気を使う必要もないだろうに。

と、思っていると。

「なら、言わせてもらおうか」

峰が近づいてきた。

え。今の聞こえたの？

「澄空　悠斗。単刀直入に言う」

峰が俺の机の前に立つ。

どうでもいいが、同級生にフルネームで呼ばれる機会はそうそうないだろうな。

「俺とストリートバトルをしてくれ！」

「……え？」

今、何て言った？

「あの剣すら超えるＢＭＰ１８７の持ち主。しかも、覚醒すると同時にＢランク幻影獣を倒した君と、是非とも闘ってみたい！」

「……」

首相官邸で会った、あのごつい人といい、こいつといい……。

流行ってるのか、このノリ？

「君は、最近ストリートバトルを、……いや、ＢＭＰハンター訓練自体をあまり行っていないと聞く。強者にとって、一番の敵は、驕りだ。俺と闘おう。こういう言い方は好きではないが、これでもこの新月学園で五指に入る実力の持ち主だ。決して失望はさせない」

……その言い回しも、あの人と同じだな。

というか、ＢＭＰハンター訓練をしてないんじゃなくて、まだ素人すぎて、実践訓練に入れないだけなんだがな。

まして、ストリートバトルなんかは、論外なわけで。

その辺を、論理的かつ順序立てて説明しなければ。

「悪いけど遠慮するよ」

「！　なぜだ。ひょっとして、今朝のことを怒っているのか！？　ならば、謝る！　もちろん不意打ちのつもりなんかはなかった。少し実力が見たかっただけだ。」

「……今朝？」

なんかあったっけ？

「それとも、俺の実力が不足か？　それなら、失礼だが、俺を見くびっている。ＢＭＰハンターの強さは、ＢＭＰ値だけでは測れない。たとえ及ばずとも、君にとって時間の無駄ではないはずだ」

「いや、逆・逆」

「逆？」

きょとんとする峰。

「まず間違いなく、お前の方が強いよ。それこそ、時間の無駄ってくらい」

「……ふざけないでくれ。ＢＭＰ３５２の幻影獣を倒した君が、何を言う？　口実なら、もっとうまいのを選んだらどうだ？　それとも、最強の澄空悠斗は、実は、一高校生のストリートバトルすら受けられない臆病者という評判がたってもいいのか？」

「全然、問題ない」

別に、最強じゃないし。

「な……」

驚く峰。

「というか、その方が真実に近いし」

「何を言っている。俺より弱い人間が、Ｂランク幻影獣を倒せるか！」

「俺一人で倒したわけじゃない。国家維持軍の人、新月学園のＢＭ

Pハンター、それから、三村……はイマイチだったが、エリカ。それから……」

……麗華さん。の名前は、別に言わなくていいか。照れくさい。あの場にいた訳じゃないしな。

「俺は、最後に剣を振りおろしただけだ」

しかも、その剣も元は麗華さんのものだ。

と俺が言ったところで。

「澄空……」

「澄空君……」

「澄空さん……」

「悠斗さん……」

クラスメートが何やら、固まっている。

あれ、俺、またなんかやった？

新たな課題

「そうか……。あくまで、弱いと言い張る訳だな」
固まっている（なんか感動しているようにも見えるけど、さすがに気のせいだろう）クラスメート達を尻目に、峰が続けてつっかかってくる。

「悪いけど」
「ならば、君が俺より強いということを証明すれば、君は俺と闘うという訳だな」
「……え？」
ええと。
そうなるのか？

「いいだろう。ならば俺は、俺が君より強いことを証明するために、君が俺より強いことを証明しよう！」
「……」
あれ？
気のせいか。今のセリフ、なんか変じゃないか？

「では、今日はこの辺で。また改めて」
と、教室を出ていく峰。
というか、同じクラスなんだから。『また』も何もないと思うんだが。

……というか、もう休み時間終わるぞ？

「トイレか？」
「そんな訳あるか」

すかさず、三村のツッコミが入る。
そうだ。こいつに……。
聞いても駄目だな。

と、教室を見まわした俺と眼があったのは、委員長。

みつあみと眼鏡がチャーミングな、委員長属性を持つ委員長だ。
しかし、髪を下ろして眼鏡を取ると、新月学園新聞部記者『新條文』となる。
こうなると、パーソナリティがマスコミになるので、話しかけるのは危険である。

でも、今は大丈夫だ。

「何？　澄空君」
「実は委員長に聞きたいことがあるんだ」
「何かしら？」
眼鏡を、クイと理知的な仕草で上げる委員長。
「さっきの峰との話の展開について、説明してくれ。俺には、理解できなかった」
「当事者に分からないのに、なんで私に分かるのよ？」
「その前に、おまえ。俺を見て『コイツに聞いても駄目だ』的な顔しなかったか」
いらんところで鋭い三村が、ツッコんで来る。

「ま、びっくりしたのは確かだけどな。峰とは中学の頃から一緒だったけど、あんなに取り乱してたのを見たのは初めてだ」
三村が妙なことを言う。
「取り乱してた？」
「ああ。分かんなかったか？　あいつ、基本はクールっぽい熱血バ

カだから、あんなややこしい状態になったことはないと思うけどな」
三村は基本、弱ナンパ男だが、時々俺には分からない言い回しをすることがある。
麗華さんが俺のことを、悠斗君は難しい、というのも、似たような感覚なんだろうか。

「私はなんとなく分かるわよ」
と、今度は委員長が口を挟む。
そういえば委員長。委員長モードの時でも、少し口調がフレンドリーになったな。
……いいことだ。

「みんな澄空君みたいに考えたことがないから、いきなり澄空ワールド喰らうとびっくりするのよ」
「どんなワールドだ……？」
返す俺。
と、クラスメートがみんな、うんうんと頷いていた。
え？　みんなは分かるの？

「……ま、いいじゃないか。誰かが誰かより強いことを証明する手段なんて、実際にやりあう以外にないんだしさ」
三村が締めた。

◇◆

一方、その頃。

「うーん……」

アイズオブエメラルドこと、緋色香は難しい声を出していた。
右目の眼帯は外している。
剣麗華を診ている最中だった。

「どうかした？」
「麗華さん。ひょっとして、最近、ＢＭＰ能力を使った？」
「いえ、使っていない。戦闘もなかったし」
「……そうね。だいたい、あなたくらいのＢＭＰ能力者なら、ちょっとくらい使っても影響はないはずだしね」
と、眼帯をかける緋色香。

「ＢＭＰ過敏症が進行しているわ」
「？　ＢＭＰ能力を使っていないのに？」
「ＢＭＰ能力自体がブラックボックスみたいなものだからね。ＢＭＰ過敏症ともなると、どんな原因で進行するか、はっきりとは分かっていないの」
「私、死ぬの？」

まるで、事務処理した数字を読み上げるかのような口調の麗華。
事実、香のアイズオブエメラルドでも、感情の揺らぎは読み取れなかった。
悲しくもあるが、仕方がないことでもある。
１８７ものＢＭＰを持ちながら、人並みの感情を維持している澄空悠斗の方が異質なのだ。
高ＢＭＰ能力の代償。
香にとっても、他人事ではなかった。

「ＢＭＰ能力を乱用しない限りは、さすがに死ぬことはないと思うけど。入院くらいは必要になるかも。復帰にも時間がかかるでしょうね」

「それは困る。そんなに長く、悠斗君を一人にしておけない」
「え？」
香は一瞬止まった。
今のセリフは？

「どうして、悠斗君を一人で放っておけないの？」
「どうして？　悠斗君の二重人格の件があるから、悠斗君を放っておくのは心配と、緋色先生も言っていた」
「そうだけど……。そうじゃなくて」
そう。そういう話ではない。
剣麗華に、澄空悠斗の覚醒時衝動を制御して欲しいと依頼したのも、彼にかけられた強力な精神プロテクトを監視してほしいと言ったのも、いわゆるＢＭＰハンターの任務としてだ。
そして、ＢＭＰハンターは自分の命より任務を優先しないのが不文律。
この世界にとっては、幻影獣に対抗できるＢＭＰ能力者こそが、最も価値ある財産だからだ。
少なくとも、剣麗華は、その原則を忠実に守っていた。

（いや……）

単に香がそう思い込んでいただけで、いつの間にか、そうではなくなって来ていたのか？
だとすると。

「麗華さん。突然なんだけど、最近ストレスを感じてない？」
「ストレス？」
予想外の単語に驚く麗華。

『ＢＭＰ過敏症は、不安定な精神状態の時に進行することもある』

それは知っていたが、剣麗華に限ってはと、選択肢から除外したのだ。
感情があるからこそのストレス。
麗華から帰ってきたのは、意外な言葉だった。

「ストレスかどうか分からないけど、困っていることはある」
「こ、困ってる!?　麗華さんが？」
衝撃の告白だった。

「え、ええと。それは、聞いてもいいのかしら？」

「別に問題ない」
剣麗華は、言い切った。

◇◆

「そんなことがあったの……」
昨夜の夕食時の一件を聞いた香は、呟いた。

事態としては概ね予想通りだった。
一般常識に欠けるところがある麗華が、相手を怒らせる発言をすることもあるだろうし。
澄空悠斗が、それを許すくらいの度量を持っているのは予想していた。
しかし、そのことを剣麗華が理解し、しかも真剣に謝ったとなると。

（悠斗君も、びっくりしたでしょうね……）

それは、もう、眼に浮かぶようだ。

「で、それがどうして、困ったこと、なの？　もう話は決着したんでしょう」

「昨夜の件は確かに。でも」

「でも……」

「悠斗君を不快にさせずに会話をする方法が分からない」

「？」

？？？？

「えーと、ちょっと待って。麗華さんが、昨日、うっかり両親のことを聞いてしまい、悠斗君に嫌な思いをさせてしまったことは分かったわ。でも、それがどうして、会話できないことになるの？」

「昨夜は意識せず悠斗君を不快にさせた。今後も同じことがないとは限らない」

「不安になるのも分かるけど、いくらなんでも、昨夜みたいなことは滅多に起こらないと思うわよ。たとえ起こったとしても、それを指摘してもらって、少しずつ直していくって約束をしたんでしょう？」

言いながら、香は心の中でガッツポーズをしていた。

その約束は、剣麗華が、一般人の感情を学ぼうとしている証ではないか！

「それは確かに。しかし、そこで私は考えた」

「何を？」

「では、悠斗君を快適にさせる話題とはなんなのか？」

「は？」

香の顎が落ちる。

「単純な事務的な会話では意味がない。といって、下手に会話を盛

り上げようと無意味な話題を振ると、昨夜みたいな事件が起こる可能性がある。とても難しい」

「そ、そうですか……」

と言いながら、香は心の中でお手上げポーズをしていた。

なんのことはない。

このモデル並みのプロポーションを持つ完璧美少女は、要するに。

『悠斗君との会話をもっと盛り上げたい』

と言っているのだ。

思春期以前の悩みだ。

こども先生と（主に澄空悠斗に）言われながら、高校教師をしている自分とは良い意味で正反対な子だ。

それはともかく。

「たぶん、それよ。ＢＭＰ過敏症が進行した原因は」

「……なるほど。これが、ストレス……」

感心したように言う麗華。

その様子を見ながら、香は思った。

（誰かしら、高ＢＭＰ能力者が精神を病むなんて言ったのは）

それとも。

（剣さんも『特別』なのかしら）

なにはともあれ。

「次々と予測不可能なことばかり起こるから、感知系能力者の自信無くなってきたな。そろそろ引退しよっか」

冗談とはいえ、耳にすれば政府が青くなるようなセリフを言うアイズオブエメラルドだった。

特訓をしよう

「どうして、峰とのストリートバトルを受けなかったの？」

授業が終わった後、

「下校する前に、何か面白い話をしたい」

という麗華さんのリクエストに応えて面白い話（峰との話）をすると、とんでもないことを言われた。

「いや、あいつ見るからに強そうだし。下手すりゃ怪我じゃ済まないぞ。だいたい、わざわざそんな危険なことする意味がないだろ？」

「そんなことはない。ＢＭＰ能力者同士のストリートバトルは、実践訓練としてはとても優れている。もし心配なら、私が立ち会えば危険も少ない」

ヤバイ。この展開は、なんだかとってもヤバイ。

「だったら、もっと弱いやつでいいだろ？　俺なんか、三村にだって負けるぞ」

「それは謙遜しすぎ。さすがに三村に負けることはない」

「何いってるんだ。三村はデフォルトは弱ナンパ男だが、いざという時は兄貴属性持ちの、なかなか頼れる男だぞ！」

「曲がれない超加速（システムアクセル）も、加速しないと使えない猪突猛進（オーバードライブ）も、ＢＭＰ能力として凄く不完全。横にかわして刺せば、終わる」

「……怖いよ。麗華さん」

と、俺たちがだんだん脱線し始めていると。

「お前ら、峰とのストリートバトルをしたいのか、ラブコメをしたいのか、俺を馬鹿にしたいのか、どれだ？」

三村が怒り出した。

「もちろんストリートバトルの話。三村の話は事実だし。悠斗君と私はラブコメディなんかしていない」
言い切る麗華さん。
「ならいいけどよ……」
そして、はっきり言われて落ち込む三村。

「悠斗さんと峰さんのストリートバトルですカ。それは楽しそうですネ」
しかも、いきなり、金髪が割り込んできた。

「え、エリカ？　なんで、うちの教室に」

エリカは、俺とクラスが違う。
学力に応じたクラス分けがなされるこの学校で、うちのクラスはナンバー1なのだ。
そして、エリカのクラスはナンバー2。
でも、俺よりエリカの方が遥かに頭がいい。
三段論法が成立しない理由は、俺が危険人物だからだそうだ。

「最近、三村さんと一緒に帰って自主訓練しているんデス」
な、なに？

「三村、おまえ……」
「か、勘違いするなよ。ただの訓練だ」
「弱ナンパ男が言うと、世界一説得力無いな、そのセリフ。人にあれだけ言っといて、自分はそれか？」
「ち、違う。本当にそんなんじゃないんだ。ちょうど同じくらいの実力のＢＭＰハンターが他に居なかっただけで……」
「じゃあ、もし居たら、それがひげもじゃのおっさんで、筋骨隆々のマッチョで、でも腹はボテボテにたるんでいて、しかも男色家で、

おまけに結婚詐欺師でも構わないというんだな！」
「なんで、いきなりそんな極端なとこ行くんだよ！　しかも今の人物像、あちこちで矛盾があるぞ！」
「……話、そらさないで欲しいデス」
エリカの不満げな一言で、俺たちのバトルは遮られた。

「なんで、悠斗さん、そんなにストリートバトルが嫌なんですか？」
「だから、実力差がありすぎるからだって。意味がない」
「じゃ、私とシます？」
……。

「ちょ、ちょっと待て！　早まるなエリカ！　こいつ、今は剣の幻想剣を使えるんだぞ！　なのに制御はめちゃくちゃだし。危ないってマジで」
「そう言えばそうデスね。逆に峰さんの方がキケン。ということもありえマスね」
なんだか、納得する金髪少女。
「確かに。怪我をしたんじゃ本末転倒」
おお。麗華さんも納得してくれた。

「じゃあ、澄空君も自主訓練をすればいいんじゃない？」
しかし、また、別の声が割り込んでくる！

って、この声は。

「こども先生？」
「こども先生、言わない」
また、叩かれた。

「でも、緋色先生。悠斗君も、ＢＭＰ課程で訓練はしている」

麗華さんが言う。

ところで、ここで少し新月学園の授業課程の説明をしておこう。
1：まず、学力順にクラスを分ける。
2：普段は普通に授業を受ける。
3：1日か2日に一回、ＢＭＰ能力発動可能（ＢＭＰ１１０以上）の者が集まって、ＢＭＰ課程を受ける。
こんな感じだ。

「一年のこの時期じゃ、ほんとに基礎しかやらないでしょ。実際麗華さんだって、澄空君が来るまで授業でてなかったじゃない」
「確かに」
あっさり認める麗華さん。

そういや、麗華さんが授業を受けるようになったのは、俺が登校中に覚醒時衝動を起こした時に対応するためだったよな。
でも、今でも普通に受けてるよな。なんでだ？

という俺の悩みを無視して、こど……緋色先生は、告げた。

「だから、麗華さんが教えてあげればいいのよ」

一瞬、何を言っているのか分からなかった。
「麗華さんが悠斗さんに闘い方を教えるということですカ？」
だから、エリカが通訳してくれた。
って、ちょっと待て。

「それこそ、無理ですよ」

思わず呟く。
名人がサルに将棋を教えるようなものだ。

「名人には無理でも、麗華さんになら教えられると思わない？」
あっさりと言うこども先生。
どうだろう？　仮にも先生なら『サル』のほうを否定するべきだと思うのだが。

「私は、人に何かを教えたことはない」
はっきりと言う麗華さん。
「だから、いい機会なんじゃない。三村君ならともかく、澄空君に教えるのなら退屈しないでしょ」
「先生。そこで、俺を引き合いに出す理由が分かりません」
三村がツッコミを入れる。
俺にも分からないが、あえて言うなら、こども先生がＳだからだ。

「人に教えるというのは、麗華さんにとってもいい経験になると思いマス」
エリカが自信満々に言う。

「そうなの？」
「そうよ。重要」
それを受けて、こども先生。

「『全力を出さなくてもいい』と『全力を出しちゃいけない』の違いを学ぶことはね」

◇◆◇◆

そして、週末。

３０分ずらし目覚まし掛け（６時、６時３０分、７時、７時３０分と複数回目覚ましをセットしておくことだ。でも、たいてい最初の１回で眼がさめて、止めるのが面倒くさい）で完璧に起きた俺は、心身ともに今日の特訓の準備をしていた。

麗華さんのことは信頼しているが、なんせ実力が竜とミジンコほどに違う。気合い入れていかないと、大怪我して麗華さんを悲しませることにもなりかねない。

「よし、大丈夫」

どこも調子悪いところはない。

ＢＭＰ能力に関しては、調子の良しあしを判断できるところまで扱いきれていないが、まあ大丈夫だろう。空気的に。

という訳で、麗華さんの待っているダイニングに向かった。

「おはよう！　麗華さん」

と言った所で、俺は自分の目を疑った。

「おはよう、悠斗君。ちょうど起きる頃だと思ってトーストを焼いておいた。１分前に焼けたからいいタイミングだと思う」

俺の起床時間予想が進化している（二分前→一分前）。

いや、そんなことより！

「麗華さん。その格好は？」

聞く。

なぜなら、なぜか麗華さんはワンピースを着ていた。

清楚さを前面に押し出した、白いワンピースだ。
完璧美少女が着ると、完璧に令嬢に見える。

「？　変かな？　可愛くない？」
「いや可愛い」
もちろん可愛い。凄く可愛い。間違いなく可愛い。
「でも、変だ！」
特訓するんだよな、今日！

「でも、緋色先生が『麗華さんは美人過ぎて隙がないから、ワンピースとかの可愛い系を着た方が悠斗君もリラックスできるんじゃないかしら』と言っていた」
それ、たぶん今日着ろという意味で言ったんではないと思います。
「でも、他の服は洗ってしまっているし……」
困ったような麗華さん。
そうだ。
この人は、完璧美少女のくせに、服をあまり持っていないんだった。

「今日のところは、この服で手を打ってもらうと助かる」
と、真剣な表情の麗華さん。
「ま、まぁ、俺もどうしてもだめという訳じゃないけど……」
どもる。
まあ、実際、竜とミトコンドリアくらい実力差があるし、大丈夫か？

「うん。次は気をつける」
と、やっぱり真剣な表情の麗華さん。

それは、ともかく。

特訓やめて、デートに切り替えたら、駄目かな？

特訓開始？

二人で並んで歩く。

この辺の人たちは、もう俺の正体を知っているので、完璧美少女の隣を普通少年の俺が歩いていても疑問に思ったりはしない。

とはいえ、面白くないのは相変わらずのようで。

「はぁ……」

思わずため息が漏れる。

こども先生のアドバイスは、片手落ちだ。

麗華さんの『クール美人度（そんな尺度があるかどうかは知らないが）』が落ちた分、通行人の人たちの『なんだか面白くないゲージ（このゲージはあるだろうたぶん）』が上がっているので、俺はやっぱり落ち着かない。

と、前方から、俺たちと同じくらい目立つ二人組が歩いてきた。

なんせ、片方が美少女で金髪だ。

「あー、澄空？　ひとつ聞きたいんだが、今日は特訓でいいんだよな？」

だいたいの事情は察していると思われる三村が聞いてくる。

「ああ、特訓だ」

「麗華さん、可愛いデス！」

そして、事情をあんまり気にしていないエリカが褒める。

「うん。悠斗君もそう言っていた」

麗華さんの何気ない一言。

そう言えば、俺。女の子に『可愛い』って言ったんだよな。
まさか、俺がそんな高等なセリフを言える日が来るとは、人生は分からん。

「ところで、三村たちは何を？」
聞いてみる。
二人とも動きやすい恰好をしているところを見ると、この二人も特訓だとは思うのだが。

しかし、この二人、俺と麗華さんと違って、並んでいても違和感無いな。
三村は、中身はともかく外見はイケメンだからな。
……こいつ、いつも俺のことを羨ましいだのなんだの言うけど、いったい現状のどこに不満があるというんだ。

「いや、緋色先生が『あの二人だけじゃやっぱり心配』って言うからな。付き添いというか見学」
「悠斗さんと麗華さんの特訓がどんなものか興味があったんデス！」
ま、いいけど。

◇◆

俺が首都に来る1か月ほど前、首都のある場所が幻影獣に襲われた。
襲撃自体は小規模だったらしいが、その幻影獣はどうもタチが悪かったらしく、退治された時に呪いを振りまいて行った。
俺は頭が悪いので呪いといってもうまく説明はできないが、麗華さんに聞いても『理屈を説明することはできるけど、結局は呪いとい

うのが一番本質に近い』と、（しっかり理屈を説明してくれたあとで）言っていたので、まあ呪いでいいんだろう。

その呪い汚染された場所が今、眼の前に広がっていた。

「こんなところにマンションを建てようなんて計画があったのか……」

思わず呟く。

「計画があったのは、呪い汚染される前。あれさえなければ、ここは、悠斗君が住むにふさわしいマンションになっていたかもしれない」

麗華さんが応えてくれる。

『複合型ステーションまで徒歩一分。アクセス抜群、環境最高』か。やっぱり、古い情報誌使ってたんじゃダメだな。

途中までは建設が進んでいたらしい。

整地も終わっているし、骨組みも半分くらいはできている。

でも、そこで止まっている。

ついでに、マンション（になる予定の骨組み）の周囲１００メートルほどが、根こそぎ何もなくなっていた。

しかも、土の色が明らかにおかしい。なんというか、紫っぽい。

そして、全身に絡みついてくる違和感。

触覚で感じられる臭気というか、不快感のバーゲンセールというか。

「ほんとに、こんなところで特訓するのか？」

だいたい、俺の壊滅的な言語力が本当に壊滅していなければ、『ＫＥＥＰＯＵＴ』と黄色いテープが張り巡らされているのを、乗り越

えて入ってきたような気がするんだけど。

「ふむ。時間ぴったりね。澄空君、麗華さん」

しばらく茫然としていた俺に、こども先生の声が聞こえてきた。
先生は、今日の特訓の見守り役といったところだ。

「ここ、ほんとに一般人が来て、大丈夫なんですか？」
「大丈夫な訳ないでしょ」
『なにを言ってるのこの子は』的な視線で返される。
中身はともかく外見はこどもなので、屈辱度も二倍だ。
……そういえば、こども先生って、年はいくつなんだろうか？

「頭痛、悪寒、動悸、息切れ、吐き気、嘔吐。その他もろもろ不快感のオンパレードで、最悪、命に係るわ。なんせ『呪い』だから。ＫＥＥＰＯＵＴが見えなかった？」
「だったら、なんでこんな場所で！？」
俺の当然の疑問に。
後ろから、盛大なため息が聞こえてきた。

三村だ。

「あのな、澄空。『一般人には』って言っただろ。お前は一般人か？」
違うとでも言うのか？
「違う！　あのな、澄空。俺たちはＢＭＰハンターなんだ。ＢＭＰハンターは、対幻影獣の切り札にして唯一の戦力。俺たちはまだ高校生だけど、職業としては、弁護士や医者よりも格上なんだぜ。お

前だって知ってるだろうが」
「そ、それは……」
そうだったかもしれない。
が、あんまり実感がないんだよ。自分のこととなると。

「私は残念ながらＢＭＰハンターではないデスが、悠斗さんはもう世界的にも上位ランカーなんデスヨ。単独でＢランク幻影獣を倒したハンターは、ほとんどいませんカラ」
エリカが自分のことのように誇らしげに付け足す。
「いや、あれは、エリカやみんなの力があったからで……」
「デシたね。ありがとうございマス」
と、エリカがほほ笑む。

「あ、いや、礼を言うのはこっちの方で……」
「悠斗君」
「え？」
エリカの奇襲に慌てふためく俺に、完璧美少女の声が被せられる。
「次は、私も一緒に闘えると思う。あてにしてくれて、構わない」
「は、はいな……」
あてにするもなにも、麗華さんがいれば間違いなく主力兼主役になると思うんだが。

第五次首都防衛戦で、ボスの方に来れなかったことを悔やんでいるのか？
陽動軍隊の方で、５０体以上消滅させたって聞いたけどな。

それに、あの時は。
個人的には。

麗華さんのおかげで勝てたって気がするんだけどな。

◇◆

「エリカ。豪華絢爛（ロイヤルエッジ）をお願い」
「ハイです。みなさん、下がっていてくだサイね」
麗華さんに言われて、エリカが豪華絢爛（ロイヤルエッジ）を展開する。
豪華絢爛（ロイヤルエッジ）とは、エリカのＢＭＰ能力で周囲の空間に数十の不可視の刃を発生させる能力だ。
完成すれば恐ろしい能力だと思うが、エリカ自身のＢＭＰが１１９のため（対幻影獣戦闘に使用できる目安はＢＭＰ１２０）。
なんというか、その。
斬れない。

かなり強くこすらないとかすり傷ひとつ付けられない。
しかも、不可視と言いながら隠蔽率が中途半端で、うっすら見えている。

まあ、それはともかく。

「はっ！」
麗華さんが剣を抜いた。
まるで神話に出てくるかのような壮麗な剣。
麗華さんの『幻想剣（イリュージョンソード）』で実体化した断層剣カラドボルグだ。

そのまま振りぬく。
次元に断層を作る剣が、空間を切り裂く。

それに伴い、エリカの豪華絢爛（ロイヤルエッジ）がガラスが割れるような音を出して砕け散った。

そのまま連続でカラドボルグを振る麗華さん。

その度に乾いた音がし、空間が豪華絢爛（ロイヤルエッジ）の破片で満たされていく。

しばらくそんな光景が続き。

唐突に、麗華さんが剣を納めた。

豪華絢爛（ロイヤルエッジ）はもう見えない。すべて、破壊したのだ。

「ジャスト１５秒。さすがね、麗華さん」

ストップウォッチ片手のこども先生。

「す、凄ぇ……」

麗華さん凄ぇ。

格好いい。

「悠斗君には、これからとりあえず、これをやってもらう」

「……へ？」

「とりあえず目標は３０秒以内で。悠斗君には、ちょっと簡単すぎるかもしれないけど」

「え、ええ？」

「準備いいデスか？　悠斗さん。さっきより、ちょっと難しい配置にしマスから、ガンバってくださいネ」

えええええええ？

麗華さん、エリカが連続で無茶なことを言ってくる。

「あれ、わざとじゃないですよね。先生」
「当り前でしょ」
「二人とも頭いいのに」
「期待が大きすぎるのね。ヒーローはつらいってとこかしら」
「澄空、めっちゃ気まずそうな顔してますけど」
「そりゃ、可愛い女の子二人の前で『ごめん。俺、もっと無能なんだ』とは言い出しにくいでしょ」
「助けないんですか」
「逆境を乗り越えてこそ、ヒーローよ」

そして、三村とこども先生が、勝手なことを言い合っている！

１０分経過した。
どうして１０分経過したのが分かるかというと。

「１０分２７秒ジャスト。さすがね、悠斗君」

こども先生が嫌味を言うからだ。
だいたい、１０分２７秒にジャストもくそもあるか。

「こ、こんなに扱いずらかったのか。カラドボルグ……」

思わず呟く。
能力を本格的に使用しての訓練は初めてなので多少苦戦するのは予想していたが、ここまでとは思わなかった。
劣化複写（イレギュラーコピー）自体は驚くほどよく馴染んでいるので、カラドボルグの実体化には困らないのだが、カラドボルグ自体が扱いずらい。
幻想剣というだけあって持っているだけでは重さを感じないのだが、振ろうとすると石のように重く感じる。
おまけに軌道がぶれまくる。
さらに、剣の軌道と、それによって生み出される空間の断層が、またずれる。

結果、遅い・当たらない・危なっかしいと三拍子そろった恐ろしい能力になってしまっていた。

「悠斗君。手を抜いたりはしていない？」
ぐさっ！
という擬音が聞こえた気がした。
麗華さん、そりゃないっすよ。

「ご、ごめん。また、失言した」
と、完璧美少女の申し訳なさそうな姿に、また落ち込む俺。

「なるほど。複写できるからといって使いこなせるとは限らないのか」
「向き不向きもあるでしょうシ……。麗華さんは軽々と振りまわしてイルので忘れそうになりマスが、幻想剣（イリュージョンソード）って最高難度の能力なんデシたね……」
「難度的には劣化複写（イレギュラーコピー）の方がさらに上だと思うけど、同じ幻想剣（イリュージョンソード）を使っている間は、麗華さんとは比べ物にならないということね。案外、使いどころの難しい能力かも……」
三村、エリカ、こども先生が好きなことを言っている……。

「で、デスが、まだ本格的な修業を始めたばかりデスし！　麗華さんだって、最初から幻想剣（イリュージョンソード）を使いこなせたわけじゃないはずデスし！」
「ん？　最初から、使えたけど」
「……」
ハーフっぽいのに一番気配りができるエリカのフォローを、ものの見事に寸断する麗華さん。
「でも、困った。せめて、3分は切らないと、次の段階に進めない」

3分か……。

もう一度、カラドボルグを実体化する。

「悠斗君？　どうしたの？」
実体化したカラドボルグを見て、麗華さんが不思議そうに聞いてくる。
「ん？　どうしたって……。3分切ればいいんだろ？　とりあえず、

切るまでやるよ。エリカ、悪いけど、また豪華絢爛（ロイヤルエッジ）を頼むよ」
「は、ハイデス！」
なぜか、とても嬉しそうに返事をするエリカ。
「せっかく来てもらったのに、麗華さんには悪いんだけど。ちょっと、待っててもらえるかな？」
「……」
なぜか無言の麗華さん。心なしか、意表を突かれたような顔に見える。
？
「麗華さん？」
「あ、うん。分かった。見てる」
微妙な表情だな。
◇
「９分５２秒デス……」
凄く申し訳なさそうな口調で言うエリカ。別に、君が悪いわけじゃないんだが。
え？　ストップウォッチを持ってたのはこども先生じゃないかって？
３回目くらいで飽きたのか、向こうで三村と漫才やってる。あの人も、つかめない人だ。
「あ、アノ……。少し豪華絢爛（ロイヤルエッジ）の配置を簡単にしましょうカ？」
「いや、それじゃ訓練の意味がないよ」
そして、少しぐらい簡単にしたところでどうにかなりそうな問題ではなさそうっス。
「ナラ、別の訓練にするトカ？　せっかく麗華さんと来てるんですカラ……」

「いや、たぶん別の訓練にしても同じだろ。麗華さんは本物の天才だよ」
正直、ちょっと甘く見てたかもしれない。
とはいえ、麗華さんの貴重な休日を、これ以上無駄遣いさせるわけにはいかない。
さすがに退屈してるだろ。
「先に帰ってもらうか……」
残念だけど。
と言おうとしたんだが。
見てる。
麗華さん、めっちゃこっち見てる。
適切な表現が見つからないが、あえて言うなら。
子供が未知のおもちゃを見つめるような眼で。
ほんとに読めない人だな。
◇
一方。
子供が未知のおもちゃを見ているような眼で澄空悠斗を見つめる剣麗華。
「麗華さん、退屈してない？」
「してない」
三村との漫才にも飽きた緋色香は、麗華の隣に腰を下ろした。

「どう？　澄空君は？」
「少しずつ良くなってる」
澄空悠斗から眼をそらさずに言う麗華。

「でも、私と同じくらい幻想剣を使いこなすにはまだ時間がかかる」
「というか、一生無理のような気もするけどな」
いつの間にか、三村も二人の後ろに立っていた。

三人の見つめる先で、澄空悠斗がエリカの応援を受けながら、剣をふるっていた。
その姿は、お世辞にも華麗であるとは言いにくい。

「少し悠斗君を勘違いしてた」
「幻滅した？」
「幻滅？」
緋色香の質問に、疑問符で返す麗華。どうやら、違うらしい。
「ち。奴の不可解なモテフィールドを解除するチャンスだと思ったのに。エリカもなんだか、マイナスどころかプラス補正気味っぽいし」
そして、相変わらず訳のわからない言葉を使う三村。

と。

「え？」

その時。

『ソレ』以外ではあり得ない違和感を感じて、三人は同時に天を見上げた。

空に舞っているのは、翼を持つ異形の怪物たち。

「幻影獣！」

緋色香の言葉に反応して、悠斗とエリカも空を見上げる。
その悠斗めがけて。
一匹の幻影獣が降下してきた。

「悠斗君」
「だめ！　麗華さん！」
幻想剣を実体化させようとする麗華を香が止める。
「あ、そうか」
ＢＭＰ過敏症のことを思い出す麗華。

「任せろ」
二人を置いて、弾丸のような速度で飛び出す三村。

三村のＢＭＰ能力、超加速（システムアクセル）だ。
今にも悠斗に襲いかかろうとしていた幻影獣に、三村の拳がめり込む。

「猪突猛進（オーバードライブ）！」
拳を突き刺し、幻影獣を抱えたまま速度を上げる三村。
その拳がうっすらと青い光を帯び始める。
速度が増すごとに、青い光も強さを増し、少しずつ拳が幻影獣の体にめり込んでいく。

そして、建設途中のマンションの骨組みに幻影獣を叩きつけた。

◇

「げ？　三村が格好いい」
マンションの骨組みに叩きつけられて消滅する幻影獣を見ながら、俺は呟く。
まあ、あの外見でウエポン属性持ちで成績もいいのに、格好悪いというほうが難しい気もするのだが。
というか。そんな場合ではない。

「悠斗さん。下がってくだサイ！」
叫びとともに、エリカが豪華絢爛（ロイヤルエッジ）を展開する。
が、全周囲を囲まれている状況で一体どこに逃げろというんだ。

「く……ぅウ！」
エリカが呻く。
幻影獣が豪華絢爛（ロイヤルエッジ）をすり抜けて向かってきているのだ。
斬れないとはいえ、巨大な幻影獣なら引っかけて動きを封じることもできるが、今眼の前にいるような人間大の幻影獣ではどうしようもない。
ゴツゴツと派手な音を立てて不可視の刃に衝突しながらも、まったくひるむことなく（俺めがけて）向かってくる。

「この！」
劣化複写した断層剣カラドボルグを振り下ろす。
空間にできた断層が一匹の幻影獣を切断するが。
あと１１匹くらい（数えている暇はない）の幻影獣がひるむことなく襲いかかってくる。

はっきり言って、間に合わない。

攻撃に備えて体を固くする。
が、防御系の能力を持たない俺は、幻影獣にひっかかれれば普通に死ぬ。
でも、次の反撃は無理。
そんな、なすすべなく立ち尽くす俺の前で。
幻影獣たちの動きが止まった。

致命的な『合理的』

一瞬、時が静止したように。
次の瞬間、バタバタと地面に墜落していく幻影獣達。
なかには俺のすぐそばまできていた奴もいた。
……やばかった。

それは、ともかく。
「緋色先生……でスカ？」
エリカの声に、そちらに視線をやる。
そこには、右目の眼帯を外し、煌々と輝く新緑の右目で幻影獣達を睨みつける『アイズオブエメラルド』。

「本当は、こういう荒事好きじゃないんだけど。今日は特別ね」
と、黒い左目でウインクする、こども先生。
どうも、アイズオブエメラルドの力で幻影獣達の動きを止めているらしい。感知するだけじゃなくて、あんなこともできるのか。
「凄いな……」
うっかりと惚れてしまいそうだ。
「惚れてる場合ではないデス。悠斗さん、早く逃げまショウ」
「え？　俺、声、出してた？」
などと馬鹿なことを言いながらも、そそくさと地面に落ちた幻影獣の間をすり抜けて逃げてようとする俺とエリカ。

と。

「え、何、この気配！？」
突然、こども先生が視線をそらせた。
建設中で放棄されたマンションの残骸へ。

……両目ごと。

「って、まずいだろ、それ！」

思わず叫ぶ俺。

何に気を取られたのが知らないが、アイズオブエメラルドで睨んでないと、幻影獣が動き出してしまう！

「悠斗さん、危ないデス！」

エリカの警告が飛ぶ。

だが、俺の身体能力では反応できない。

一番近くに転がっていて、突如息を吹き返した幻影獣の腕が俺の眼の前で振り上げられている。

太い腕だ。首相官邸で会ったハンマーウエポン並みに。

しかも、赤いし。ぬるぬるしてる。

あんな腕に殴られて死ぬの嫌だなあ。

などとあまりの恐怖に、面白いことを考えている俺の前で。

幻影獣の頭が、何かに撃ち抜かれた。

「こ、今度はなんですカ！」

次々に襲ってくる予想不可能な展開に沸騰気味の俺の頭を代弁するエリカ。

撃ち抜かれた幻影獣は、声も出さずに、その場にくずおれる。

その後も次々に狙撃される幻影獣達。

いや、狙撃と言うにはあまりに弾の数が多い（それでも、俺とエリカには当たらないが）。

「な、なんなんでしょうカ？」

「援軍？」

エリカの疑問に疑問文で返す俺。
弾は拳大。、無色に近いが、エリカの豪華絢爛（ロイヤルエッジ）と違い、はっきりと認識できる。
おそらくだが、空気を圧縮させて撃ちだしているような印象だ。

「……にしても」

激しい。
発射点と見られる、マンションの骨組みの一角、三階部分あたりから、機関銃のように撃ちだしてくる。

「凄いな」

俺は、さきほどまで死にかけていたことも忘れ、激しい弾幕ではっきりと見えない狙撃手の姿をぼんやりと眺めていた。

◇
◆

「砲撃城砦（ガンキャッスル）だ」

１１匹（ちゃんと数えてもそうだった、俺もなかなかやるな）の幻影獣が、謎の狙撃で動かなくなった後。
唐突に俺たちを助けてくれた狙撃手が、下に降りてくるため一旦姿を消したところで、三村がそう話しかけてきた。

「砲撃城砦（ガンキャッスル）？」

オウム返しに問い直す俺。
というか、最初に決めた猪突猛進（オーバードライブ）以外は、まったくもって戦闘中、

空気になってたのはいかなる理由だ。

「圧縮した空気を打ち出すＢＭＰ能力。俺も見るのは初めてだけどな。話くらいは聞いたことがある。ちなみに空気になってたのは、猪突猛進決めた際に鉄柱に頭をぶつけて、お花畑が見えてたからだ。いや、まいった」

二つの質問に同時に、しかも正直に答える三村。

しかし、やることなすこと、きっちり三枚目だな。せっかくの弱ナンパ風味イケメンが台無しというか、むしろ一周回ってそのうち魅力になるかもしれん。

「どんなやつなんだ？」

「おまえも想像はついてんだろ？」

「？　いや、まったく」

と俺が応えると、三村は『この天然が』という顔をした。

こども先生も『天然ねぇ』という顔をした。

「天然さんデスネ」

エリカは声に出して言った。

「悠斗君を責めてはいけない。きっと慣れない戦闘で、まだとまどってる」

麗華さんはフォローしてくれた。

「って、みんな知ってるやつなの！？」

「本人に、聞いてみたら、どうだ」

「へ？」

三村に言われて振り返る。

そこには。

「無事か。みんな」

数日前にできた俺のクラスメート、峰達哉がいた。

？　なんで、みんな分かったんだ？

「最後まで、判断に迷ったぞ」

「？　何を？」

ありがとう、と言おうとしたところに予想外のセリフを浴びせられて、俺は間抜けな声を出した。

「特訓も戦闘中もずっと見ていたが、どう見ても素人の動きだった。……いや、三か月前に能力覚醒したばかりだと考えれば、あれだけ使えること自体が驚異的なんだが……」

「なんだが？」

「あれが、君の実力とはどうしても思えなかった」

「あのな……」

まだそんなことを言っているのか、こいつは？

「言っただろ。俺は、完全無欠に素人だって。とてもじゃないけど、戦闘なんて」

「分かってないのは、君の方だ」

確信に満ちた峰の声。

「第五次首都防衛戦の時の映像を見せてもらったが、あの時の『カラドボルグ』は、早さ・威力共に完璧だった。そもそも、君は『みんなの力があってこそ』と言うが、実質あのBランク幻影獣を切り裂いたのは君の能力だ。世界の上位ランカーでも同じことができる者は何人もいない」

「そなの？」

「そうだ」

「ちょっと、待って」

ふいに、こども先生が声を挟んだ。

……いや失礼。緋色先生だ。

「第五次首都防衛戦の映像？　峰君、あなた、そんなものどこで見たの？」
「う。そ、それは……」
いきなり口ごもる峰。
ついでに『さ、さすがはアイズオブエメラルド』とか言ってる。
なんかフラグっぽいな、覚えておこ。

「そ、そんなことはこの際、後回しにして……。とにかく、澄空！　君の実力が分からない。それとも、危機に陥らなければ本領が発揮されないのか？」
「物語の主人公じゃあるまいし……」
第五次首都防衛戦の時も、自分的にはそんな大した闘い方をした覚えはないんだがな。

例の第２人格（こちらはもっと自覚はないが）なら分からないが、あの時は、記憶も途切れてないしな。

◇

（とりあえずは、良かった）
峰を囲むように集まった一同。
その一角で、剣麗華は、ひとまず胸を撫で下ろしていた。
少々ＢＭＰ能力を使ったところで急激に症状が悪化するとも思えないが、余計な危険は冒さないに越したことはない。
それに、あの峰達哉は、なかなかのＢＭＰ能力者のようだ。自分がＢＭＰ過敏症を患っている間だけでも、今日のように悠斗君を助けてくれれば、ありがたい。
「ん？」

今の思考、何か違和感があったような？
「気のせいかな」
と、剣麗華が言った瞬間。

本当の違和感が襲ってきた。

たぶん、その場の全員が感じたはずだ。
ＢＭＰ能力の高低や感受性など関係ない。
空が光れば雷を思い浮かべるし、大地が震えれば、基本、地震しかない。
それくらい、誰にでも感じられる違和感だった。

それでも、反応は、剣麗華が一番早かった。
すぐにその場を飛び退く。
その動きは稲妻のように俊敏で、しかも一切の無駄がない。
ＢＭＰ能力者にとって一番大切なのは、自身の安全。
ひとまず危険から遠ざかっておいてから、視線を澄空悠斗達に戻し、状況を確認する。

驚異の正体は『口』だった。

直径……といっていいかどうか分からないが、口の端から端まで５メートルはある。
人間の口をそのまま大きくしたような巨大な口。
唇は紫色。
歯はノコギリのようで。
そして、それ以外は何もない。
口腔にあたる部分には、赤黒い闇がわだかまっているだけだった。

幻影獣か、あるいはそのＢＭＰ能力か。

どちらにしろ、生半可な存在ではない。

剣麗華以外は、ようやく反応を見せ始めたところだ。

少し遅い。

アレの能力は分からないが、どちらにせよ、あのタイミングでは捌ききれまい。

（ん？）

状況把握はできた。

敵の初撃には間に合わない。

流れるような思考で、次の一手を。

考える？

（次？）

何を言っている？

初撃が終わるということは。

彼女の担任と。

クラスメイトと。

クラスは違うが同年代のＢＭＰハンターの仲間と。

そして。

（悠斗君が死ぬということ……？）

何を言っているんだ！？

「幻想剣（イリュージョンソード）・断層剣カラドボルグ！」

一切の躊躇なく、壮麗な剣を実体化させる。

（何を……）

何が、状況把握だ？

（私は、何をやってる）

何が次の一手だ？

「標的との間に障害物はない」

最速で振りかぶる。

……でも、間に合わないかもしれない。

（私は……）

こんなに離れた場所で。

（いったい……）

自分から、みんなと離れた場所で一人。

「いったい、何をやっている！？」

（わずかにだけど、絶対に間に合わない）

そんな嫌な確信があった。

絶対に認めるわけにはいかない、その確信を振り払うように剣を振り下ろす。

自身最速の剣ではあったが、わずかに及ばなかった。
なぜなら、剣麗華が剣を振り下ろす前に『口』は縦に両断されていたからだ。

剣麗華は、剣を振り下ろしていない。
そもそも、この角度では、あんな風には両断出来ない。
『口』を斬ったのは、剣麗華ではなかった。

「悠斗……君？」

劣化複写（イレギュラーコピー）したカラドボルグで天を衝くような体勢のまま、他の誰よりも前で澄空悠斗は立っていた。
両断された『口』の断片は、澄空悠斗の両脇を通り過ぎ。
消えた。

「今のは……」

完璧だった。

反応は決して早くはなかった。
むしろ、（麗華は別格としても）この場にいる他の誰よりも遅かった。
しかし、振り向いて『口』を認識し。
一瞬でカラドボルグを実体化させ。
一切の淀みのない動きで『口』を両断させた一連の戦闘は。
剣麗華と比べても、なんの遜色もない動きだった。

「いや……」

互角などでは決してない。

仲間を庇う様に立つ澄空悠斗の姿を見て、思う。

なぜなら、自分の後ろには誰もいない。

自分は間違った行動はしていない。

まず優先すべきは、自身の安全。

そして、的確な状況判断。

なのに。

「なんだか……」

遠い。

「悠斗君が……」

とても、遠くに感じる。

◇◆

「あ、危なかった……」

今度こそ、まじ死ぬかと思った！

生きていることに感謝しながら、劣化版断層剣カラドボルグの実体

化を解く。
でも。まじで危なかった。
振り向いたときには、もう眼の前に『口』があったもんな。
実体化はともかく、攻撃が良く間に合ったもんだ。
人間、死ぬ気になりゃ、なんとかなることもあるらしい。

「澄空！」
「凄いデスー！」
「ぐぼっ！」
後ろからエリカに抱きつかれ、正面から峰に肩を掴まれ、俺は一瞬、気が遠くなった。

「澄空、澄空！　君はやっぱり！　さっきのが本当の君の実力なんだな！　見ろ！　やっぱり、俺より君の方が強い！」
「が、がふがふ」
峰の力は、相当に強い。油断してると、肩を砕かれそうだ。
「凄いデス！　凄いデス！　悠斗さん、凄いデース！」
「ぎ、あああ……」
そして、エリカの胸は相変わらずの危険物だった。油断していると、あっちの方まで連れて行かれそうだ。

「緋色先生……」
「ん？　なに、三村君？」
「ヒーローとそうじゃない者の違いは、どこにあるんでしょうか？」
「……素直に、本郷さんに抱きつかれた澄空君が羨ましいって言ったら？」
「羨ましいっす！　めっちゃ羨ましいっす！　なんで、なんで、あいつばっかり、あんなおいしんすかー！」
「どうどう」
そして、三村とこども先生は、コントをしていた。

って、そんなことより、麗華さんは？

「あ、いた」

５メートルほど離れた場所で、カラドボルグを片手に、こちら（というより、『口』がいた方向かな）に身構えていた。

「一瞬であんなところまで……。さすが、麗華さん」

でも、なんで、あんな顔してるんだ？

少し気になった俺が、麗華さんに声をかけようとしたところで。

パチパチパチ。

どこからともなく、唐突に拍手の音が聞こえてきた。

ひどく不吉な。

◆

パチパチパチパチ。

「……」

峰がさきほど狙撃していたのと同じ場所。

マンションが完成すれば、四階あたりになったと思われる場所で、

その少年は拍手をしていた。

少年といっても、小学生くらいに見える。
どんな悪い漫画に影響を受けたのか、紫色に染められた髪。
少女といっても通りそうな、線の細い顔。
不気味なほどに均整の取れた四肢。

そして。
体中から発散している違和感。

「お見事」
茫然と見上げる俺たちの前で、ソレはまさに少年の声を出した。
外見に見合った声なのに、ソレが人間の言葉を吐くことに、不快感を覚える。

「いや、ほんとに喰らうつもりはなかったんだよ？　ちょっと刺激して、反応が見たかっただけなんだけど、まさか真っ二つにされるとは驚いた」
少年は、上から目線で、そう言ってくる。
いや、上から目線とも違うな。
こいつは、もっと変な所に立っている。

「あなたは誰！」
こども先生が、鋭い声を出す。
その右眼は、深緑の光をたたえている。
「あれ？　ソータの報告によると、君はアイズオブエメラルドっていう、凄い感知系ＢＭＰ能力者ってなってたけど、僕がなんなのか見当つかない？」
「つくから、聞いているんです！」
いつになく余裕のない声で、こども先生が叫ぶ。

と、ソレは少し驚いた顔をした後。
「なるほど！　うまいこと言うね。さすが人間」
楽しそうな顔で、また乾いた拍手を返してきた。
「馬鹿にしているの……！」
こども先生がうめく。
けど、たぶん違う。
あれは、馬鹿になんかしてない。
そんなところまで、分かりあえない。

「ちょっと待ってね。そっちにいくから」
と。
少年は、四階相当の高さから無造作に飛び降りた。
「ちょ、待て！」
人間じゃないのはほぼ確信していたが、それでも制止しようとするお人よしな俺。

もちろん少年は、予想通り、どこにも異常をみせずに地面に立っていた。
「では、自己紹介しようか」
「ぜひ、お願いするわ」
こども先生が挑むような口調で言う。
俺も含めて、他のみんなは、まだ事態が呑み込めていない。

でも、たぶん、奴の次の一言で呑み込まされる。

やつは、もったいぶって胸をそらし。
そして、言った。

「僕は四聖獣ガルア・テトラ。君らのいうところの、Ａランク幻影獣だよ」

◆

幻影獣は、４つのランクに分けられる。

Ｄランクは、無害な幻影獣。
Ｃランクは、一般的な幻影獣。
Ｂランクは、いわゆるボスクラス。
そして、Ａランクは。
どちらかというと、都市伝説の類に近い。

「どしたの？　せっかく自己紹介したのに。あ、ひょっとして、びっくりして声も出ない？　ま、それは無理もないけど、あんまりボーとしていると、喰われるよ？」
ガルアがそう言うと同時に。
その背後に、巨大な『口』が出現する。

息を飲む俺たちの前で、ガルアは楽しそうに解説する。
「これが僕のＢＭＰ能力。捕食行動（マンイーター）。いわゆる生物の類じゃないから喰われても消化はされない。でも、どこかに飛ばされる。君たちの言葉を借りれば、時空系能力ってところかな？」
「じ、時空系……？」
そんなＢＭＰ能力、聞いたこともない。
人に使える能力じゃない。
「あ、飛ばされるって言っても、９割方は僕らでも帰ってこれないような場所に飛ばされるからね。油断して食べられちゃだめだよ」
ご忠告どうも。

「で、その四聖獣様が、いったい何の用だ？」
頼もしいセリフを吐くのは、峰。
こいつは、なんというか普通に格好いいな。
「ん？　ああ、実はあんまり考えてなかったんだけど、しいて言えば、こいつの紹介かな？」
と、ガルアは『口』の唇を撫でる。
なんか、不気味だ。
「どういう意味だ？」
今度は、三村が口を開く。
あれ、三村もちょっと格好いいぞ？

「そうだねー。ハンデ……というか、調整というか……。君ら人間も、相手のことが事前に分かった方が闘いやすいだろ。その類のことだよ」
「良く分かりまセンが……。なんのために、そんなことヲ？」

「だって、僕は、澄空悠斗に殺されるために、ここに来たからね」

「……」
沈黙の中。
俺は、麗華さんを見た。

（麗華さん、通訳プリーズ。俺には、あいつが何を言っているのか分からないよー）
的な視線だ。

そうすると、麗華さんも、こっちを見た。
（ごめん。私にも、分からない）
的な視線だ。

「あれ？　やっぱり、うまく伝わらない？　うーん。異存在間コミュニケーションは難しいね」
ガルアが残念そうに言う。ああ、確かに難しいな。
「少し、言い方を変えようか」
と、ガルアは軽く手を叩いた。
「僕は澄空悠斗と闘うために、ここに来た。ミッション的には僕が殺されれば成功なんだけど、僕は澄空悠斗を全力で殺さないといけない。……こんな感じなんだけど、分かる？」
わからん。
「だよねー！」
と、ガルアは底抜けに明るい顔で言った。

少し背筋が冷えた気がした。

「じゃ、もっとはっきりさせよう」
ガルアが指を一本立てる。
「今から二週間後、僕は幻影獣軍を率いて、この首都を攻める」
「！！」
全員が息を呑む。
「目標はもちろん、澄空悠斗の抹殺。でも、ついでに首都を落とせるくらいの軍勢で攻めるから、きちんと防御してね」
「ま、待ちなさい！」
緋色先生が、大きな声を出す。
「ん？　ああ、二週間後じゃ曖昧だね。ええと、７月２４日１３時。場所は、澄空悠斗の居る所。ただし、首都から出したら、先に首都を攻撃するからね」
「な……」
絶句する。

「望むところ」

絶対零度声色の麗華さん。
怖頼もしい。
「ちょ、待って、麗華さん！」
緋色先生が慌てて止める。
「ガルア・テトラ！　そんなついでみたいに首都を滅ぼされたんじゃたまらないわ。あなたたちにとって、澄空君はいったいなんなの？　あなたが本当にＡランク幻影獣だというなら、訳を話してくれれば……！」
「そういう訳にもいかないんだよ」
緋色先生の絶叫に、少し困ったような顔で答えるガルア。

なんだろ？
今の顔だけは、普通に見えた。

「そんな簡単にいくなら、僕だって、わざわざ殺されに来たりはしない」

矛盾しない感情

こども先生はじめ、みんな（麗華さん除く）でガルアを説得しようとしたが、奴は聞く耳持たずに帰ってしまった。
城守さんへの報告は自分に任せろという、こども先生に任せて、俺は麗華さんと二人で家に帰っていた（もちろん三村たちも帰った）。

『じゃね。7月24日13時。場所は、澄空悠斗の居る所。忘れないでよ。ま、幻影獣軍が来たら思い出すと思うけど。前よりすごいよ♪』
とは、ガルアの弁だ。

『あ、あんなのハッタリですよね！』と俺が言った時の。
『ええ。澄空君は、そう思っていていいのよ』と返したこども先生の優しい顔が、3か月ほどのトラウマになりそうだ。

……3か月も生きられればだけど。

「悠斗君」
「ん？」
唐突に、麗華さんに呼びとめられた。
「くらくらする」
「は？」
突然の難解な単語に動きを止めた俺の前で、麗華さんがゆっくりと崩れ落ちる。
って、おい！

「れ、れれれれれ麗華さん！」
「ん？」

おお慌てで麗華さんを抱きとめる。
うわ、背高いのに、軽！
「ん。悠斗君、世話掛ける」
「そ、そそそそ」
そんなことはいいから。
「きゅ、救急車、いや、消防車？　じゃない、こども先生！」
混乱しながらも、なんとか解答を導き出した俺は、片手で携帯電話を取り出す。

「いや、大丈夫」
そんな俺を麗華さんが止める。
「ちょっと、視界がぐるぐる回って、頭痛と吐き気がして、動悸と息切れがするだけ」
「って、めっちゃやばいよ、それ！」
「でも、もう治まってきてる」
「ほ、ほんとに？」
表情が変わらないから、わかりづらい！
「ほんとに」

意外としっかりした動きで立ち上がる。
「もう治った」
「治ったって言っても……」
ただの立ちくらみにしては、なかなかマーベラスな諸症状ではなかったか？
と、俺は大事なことを忘れていたのを思い出した。
「って、麗華さん。さっき、幻想剣使（イリュージョンソード）ってた！　ひょっとして、ＭＰ過敏症が！？」
「その可能性はある」
さらりと言う麗華さん。
「ま、まずいじゃないか、まずいじゃないか！　やっぱり、こども

先生を！」
「明日、診てもらう。そんなに心配しなくて大丈夫」
自分の命に係ることだというのに、頼もしいほど冷静な麗華さん。

「本当に大丈夫なのか？」
「大丈夫」
と、すたすたと歩き出す麗華さん。
「いや、大丈夫でもなかった」
いきなり止まる。
そして、こちらに振り返り、真剣な眼で振り返る麗華さん。

「な、なんすか？」
予測不可能な麗華ワールドの真骨頂に、混乱しっぱなしの俺。

「悠斗君に聞きたいことがあった」
「あ、ああ」
「でも、不快になるようなことだったら、答えなくてもいい」
「そんなことはないと思うけど」
と、麗華さんを促す。

「さっき、あのＡランク幻影獣の捕食行動（マンイーター）を斬った時」
「うん」
「どうして、逃げなかったの？」
「え」
……え。
「ＢＭＰハンターは、自分の安全を最優先するのが原則。個々の自立なくして、連携戦闘は成立しない」
「う、うむ」
なんか名言っぽい。
というか、最近、こども先生が同じようなことを授業で言ってた気

がする。

「そう習ったし、それしか知らない」
「あ、ああ。俺も、そう習った」
「でも、あの時……」
「……」
「あの時は、私が間違っていた……？」

この時。
普段、鈍い俺には珍しいことに。
ほんとに、珍しいことに。
麗華さんが、何を言いたいかが、分かったような気がした。

「間違ってないよ、たぶん」
「え？」
「自分の面倒も見れない人間に、他人のことは助けられない。自分を大事にできない奴は、人を思いやることができない。よく言われることだけど、俺もそう思う。いまいち自覚はないけど、ＢＭＰハンターが貴重な存在ってのも分かるしな。麗華さんは間違ってないよ」
「じゃあ、悠斗君が間違ってたの？」
「いや、たぶん、俺も間違ってない」
「？？？」
おお、珍しい。
麗華さんの、ハテナ顔だ。
ま、無理もないけど。

「おかしい、悠斗君。悠斗君の説は、相互に矛盾している」
「いや、それがそうでもないんだ」
「説明を要求する」

「あー、えっと……」
説明、となると……。
まいったな。
麗華さん相手だと、時々、柄にもないことを言ってしまって、困る。
「いや、説明はなしで」
「え」
「結構、人によるから。あんまりハッキリ言いたくないんだよ」
だいたい、恥ずかしい。
「それは、残念」
と、少しすねた顔をする麗華さん。
……可愛いじゃないか。

◆◇

「治ってる……」
こども先生（眼帯外し右眼全開ヴァージョン）が驚いたように呟いた。
俺も驚いた。
麗華さんは普通だった。
そして、上条博士も驚いた。
「ふーむ。今までの経緯を聞いている限りでは、悪化しさえこそすれ、治るはずがないんじゃが……。どういうことなのかの？」
年齢に似合わぬ若々しい声で（といっても、もちろん博士の年齢なんか知らんけど）上条博士が言う。

ちなみに、なんで上条博士がいるかというと。
麗華さんを心配した上条博士が、新月学園職員室までかけつけた…
…訳ではなく、
麗華さんを心配した俺とこども先生が、上条博士の研究所を訪れた
訳でもなく、
Ａランク幻影獣に狙われているということで城守さんにＢＭＰ管理
局の本部に軟禁状態にされてついでになぜか麗華さんも付いて来て
てそこに訪ねて来たこども先生が診てくれている時に管理局の応援
要請でやってきてた上条博士が顔を出した。

という訳だ。
……疲れた。上条博士がいる理由に加えて、今現在の状況説明まで
してしまったじゃないか。

「でも、本当に治っているんですよ。お疑いなら、今度は上条博士
が診察しますか？」
「知っとるじゃろ。ＢＭＰ過敏症は診察できん。おまえさんのアイ
ズオブエメラルドがそうだと言うなら、そうなんじゃろ」
セリフだけ聞くと確かに博士っぽいが、上条博士は明らかに腰が引
けていた。
「あの、上条博士？」
「おお、悠斗君！　君の活躍は聞いとるよ。やはりわしの眼には狂
いはなかった！　……というより、想像のはるか上を行っておるな。
まさか、あれから４か月足らずで能力覚醒し、Ｂランク幻影獣を撃
破し、あげくの果てに伝説と言われていたＡランク幻影獣に眼をつ
けられるとは……」
「……」
「正直、わしには想像もつかなんだ」
「いや、それはいいんですけどね」

今は、上条博士が俺の背中に隠れるようにして、麗華さんと距離を取ろうとしているのが気になる。

「上条博士は、麗華さんが怖いのよ」

「え？」

「おお！　なんで、ばらしてしまうんだ！　香君！」

眼に見えるほど慌てている上条博士。

でも、麗華さんが怖いって？

「高ＢＭＰ能力者は、だいたい検査とか嫌いな人が多いから。上条博士、言ってましたよね。最初からまともに検査をさせてくれた高ＢＭＰ能力者は悠斗君だけだって」

「だからなんでばらすのだ！　ああ、悠斗君にだけは、まともな研究者だと思われてたのに……」

いや、思ってないすよ。

と。

「それだけじゃない」

麗華さんが口を挟んできた。

「え？」

「麗華君？」

怪訝そうな二人。

「私は、１０年前にＢＭＰ覚醒してから、上条博士の研究施設で育ってきた。その時、たくさん迷惑をかけた」

「れ……」

「麗華君」

驚いたような、困ったような様子の二人。

麗華さんが覚醒してからのことは、以前、おじいさんの剣首相に聞いていたけど。

たぶん、二人とも、このことを他人に言う気はなかったんだろう。

「その節は、ごめんなさい」
麗華さんは頭を下げた。

「驚いたの……」
上条博士が今までに見たことがないほど優しい顔をしている（まあ、今まで驚いた顔か、びびった顔しか見てないから当たり前だが）。
「ここ何年かは報告でしか麗華君のことを聞いたことがなかったんじゃが、実際に会ってみると、ずいぶんと違うのう」
「それは、たぶん報告が古いんですよ」
上条博士の独白に、こども先生が意味ありげな顔でこちらを向く。
なんだろう？
「ほうほう。一体、何があったんじゃろうのう？」
「何があったんでしょうねえ？」
そして、二人で俺の顔を見ながら頷きあう。
何があったんだろう？

「まあ、何はともあれ麗華君がＯＫならば、これから悠斗君と男同士二人で『麗華君による研究所半壊事件』とか『麗華君による機動隊殲滅事件とか』とか『麗華君によるＢＭＰコールタワー誤動作事件』とかの、麗華君の嬉し恥ずかし事件簿を語り合えるのじゃな！」
そんなもん。
「語り合いたくないです」
麗華さんと一緒に暮らしている小心者が、ますますびびってしまうではないか。
特に、最後の事件、物凄く不吉な響きがあるぞ。
「私も、できれば、それらの事件は言わないで欲しい」
「ん？　こういうことは駄目なのかの？」
「……それは、恥ずかしい」

……。
ゾクっとした。
完璧美少女と拗ねたような仕草は、無敵のコラボだ。

「ゆ、悠斗君……。わしの心臓が、早鐘のように鳴り響いておる！
これは、いかなる超常現象だろうか！？」
「たぶん、心疾患の類ではないかと」
「どこの世界に、可愛い女の子の仕草を見て心疾患を起こす老人がおるというのだ！」
いい年して、心臓がどきどき、なんてことを言い出す世界的科学者もいないと思うが！

「まあ、しょうがない男性たちは放っておいて。とりあえず、麗華さんはもう学校に行きなさいな。まだ信じがたいけど、ＢＭＰ過敏症も治ったことだし」
「え？　でも、悠斗君は？」
「城守さんが『絶対に出すわけにはいきません』って。まあ、あのＡランク幻影獣が約束通り2週間待ってくれるとは限らないし、私も悠斗君はここを出ない方がいいと思うわ」
「悠斗君が行かないのなら、行く意味がない」

そういう意味ではないと分かってはいるが、それでも破壊力抜群の麗華さんのセリフ。
俺の心臓が、早鐘のように鳴り響いている！
これは、どんな超常現象だろうか！

「そうは言っても、昨日からずっと悠斗君にべったりじゃない。悠斗君にだって、プライベートはあるんだから」
こども先生が説得している。
でも、俺と麗華さんって今、一緒に暮らしているんですが。

「それは気がつかなかった。確かにその通り」
「そうよ。時には少し引いたくらいが、男女の仲は長続きするのよ！」
「分かった。学校に行ってくる」
「うん。悠斗君の分まで頑張って来て！」
すごくいい笑顔で言う、こども先生。

なぜだろう？　なんか、頭がいいくせに時々素直な麗華さんを、こどもなのに先生な緋色先生が騙して学校に行かせようとしているように見える。

ウエポンテイマー

『何かあったらすぐ呼んで』と言い残して、新月学園に麗華さんが行った後。
こども先生が淹れてくれたコーヒーを、上条博士も入れて三人で飲んでいた。
驚いたことに、こども先生はブラックだった。
ちなみに、俺は砂糖もミルクもたっぷりだ。文句ありますか。

「しかし、やはり気になるのぅ」
「まだ言いますか……。まあ。確かにアイズオブエメラルドといえども、絶対ではないですけど」
「あたりまえじゃ。この世に絶対なんかあるものか」
こども先生のセリフに、なんだか格好いいセリフで返す上条博士。

「やっぱり、麗華さんは次の戦いには呼ばない方がいいですか？」
俺は聞く。
俺の命もかなり心配だが、麗華さんには無理をさせたくない。
麗華さんがいるのといないのでは、実質上も心理上も、安心度が7割ほど違うが。
「それは無理よ」
「うむ。執着心が薄いように見られがちだが、昔から決めたことは絶対に曲げん。麗華君をおとなしくさせるのは、そのAランク幻影獣を撃退するより難しいかものぅ」
マジですか？
「大丈夫なんでしょうか？」
「うーむ。ＢＭＰ中毒症の応急措置をするための設備は、ここらへんではわしの研究所くらいにしかないからのう。いざという時に対応できるようにはしておくが」

なんせ、そこそこ距離があるからのう、と上条博士は返してきた。
「おまけに、搬送経路と手段を確保できるかどうか。城守さんが言うには、敵の規模は、この間の第五次首都防衛戦より大きい可能性が高いらしいから」
ブラックを飲みながら、さらに憂鬱になるセリフを吐くこども先生。
しかし、俺は見た！
こども先生は、ブラックを飲みながら、わずかに苦そうな顔をしたぞ！

って、話をそらしている場合でもなく。

「なんか、方法はないんでしょうか？」
このままでは気になって仕方がない。
ただでさえ、自分の命の心配で忙しいというのに。

こども先生は、そんな俺に視線を向けて、少し考えたような仕草をした後。
でも逆に考えるとこれはいい機会かも、とかなんとか呟いた後で。
こう言った。

「悠斗君。調律（メンテナンス）を覚えてみる？」

「調律（メンテナンス）ですか？」
なんか、格調高い響きだけど。
覚えられるようなものなのか？

と、俺が疑問に思っていると。
「まさか、香君。授業で教えとらんのか？」
上条博士が、心底驚いた、という顔で言った。
そして、その表情と、般若のようなこども先生の表情から、たぶん

習ったけど俺が忘れているだけだということに自分で気づけたから、怒らないでと言ったら、こども先生、怒ります？

「ゆーと、くーん！？」

「はい。すみません！　忘れたか、聞いてないかだと思います。ほんとにすみません！」

ほら、怒られた。

「いい、悠斗君？　もう一度だけ教えるから、ちゃんと覚えて？　ここ、ほんとにほんとの基本的なことだからちゃんと覚えてね？」

「は、はい」

大丈夫っす。きちんとメモも取ります。

そして『悠斗君は毎日こうやって香君の授業を受けておるのかー。ええのー』と言いながら、一向に帰ろうとしない上条博士は無視の方向で。

「まずおさらい。ＢＭＰ能力者はいくつかのクラスに分けられるけど、その中でも特に特別だとされるクラスは何？」

「もちろん『ウエポン』クラスです。クラス名に必ず『ウエポン』と付いています」

「では、その特徴は？」

「他のクラスに比べて、幻影獣に対する干渉攻撃力が、かなり高めの能力を使えます。ＢＭＰ能力値が同じなら、だいたい１．５倍から２倍の差があると言われてます」

「ふむ。よくできました」

と、こどもにしか見えない先生に褒められて、少し嬉しくなっている俺。

そして『ええの。ええの！　わしも高校生に戻りたくなってきたわい！』と叫んでいる上条博士。ぜひ、戻らないでください。

「調律（メンテナンス）は、そのウエポンクラスのＢＭＰ能力者に作用する能力よ」

「へ？」
「相手がウエポンクラスでさえあれば、怪我の治療や体力の回復、精神のメンテナンスはもちろん。身体能力の強化やＢＭＰ能力の拡張も可能よ。たぶんＢＭＰ中毒症にも効果があるはずよ」
「ちょ、ちょっと待ってください」
そんなとんでも能力があったのは驚きだが。
そして、それを以前、聞き逃したか忘れたかした俺にも驚きだが。
「俺にそんな能力が使えるんですか？」
「もちろんよ」
こども先生は、あっさりと頷いた。

「悠斗君、あなたの『クラス』名はなに？」
「え？」
えーと。
……なんだったっけ？
「あ、もちろん分かっていると思うけど『１－Ｃ』とか答えたら、ブツから」
にっこりほほ笑むこども先生。……この人、怖いよ。
……えーと、確か、あれは初めて上条博士に会って『属性分析』をされた時。何て言ってたかな？
……そういえば、あの時は突然城守さんプラス黒服ズに引っ張っていかれて、本気でビビったな、確か。
いや、そういうじゃなくて、クラス名を……。
……そう言えば、あの時、城守さん『情報提供してくれた人がいた』から俺を見つけられたって言ってたな？　誰なんだろ？
「ゆーとくーん、まーだかしらー？」
「も、も少しお待ちを」
のど元まで出かかってるんですが！？
と、上条博士の微妙な視線を感じる。
その口が、こども先生に見えないように動いている。

こ、これは！　口の形で、答えを教えてくれている？

「ウエポンハイターです」

「洗剤か！」

結局、ブたれた。

「ほんとに、悠斗君ほどＢＭＰ能力に無頓着なハンターは初めてよ。しかも、それが人類最高のＢＭＰ能力値を持ってるんだから」

ぶつぶつ言う、こども先生。すまんこってす。

「悠斗君、君のクラスは『ウエポンテイマー』。ウエポンの属性持ちより、さらにレアなクラスじゃ」

上条博士が答えを教えてくれた。ああ、そうだ、そういう名前だった。

「ウエポンテイマーは、調律（メンテナンス）が使えるの。……というより、調律（メンテナンス）が使える人のことをウエポンテイマーと呼ぶの」

「え？」

ちょっと待ってくださいな。

それじゃ、俺は。

「そう。劣化複写（イレギュラーコピー）こそが、悠斗君にとって文字通りイレギュラーな能力なのね。悠斗君の本来の能力は、調律（メンテナンス）のはずなの」

「そ、そうだったんですか」

衝撃の事実だ。

「じゃあ、どうやったら、使えるんですか？　それを使えば、麗華さんにもしものことがあっても大丈夫なんですよね」

「ふむ……。本来は、同じウエポンテイマーに教えを請うのが一番なんじゃが」

「なんせレアな能力だから。今、連絡が取れる人がいないのよね」

じゃ、駄目じゃないですか。

「それが、そうでもないらしいのよ」

？
「個人的にはあんまりお勧めしない講師なんだけど……ね」
？？

◆
◇

ＢＭＰ管理局の外層。
誰でも入れて、誰でも座れる、待合所のような場所で、俺は一人で座っていた。

『じゃあ、講師を連れてくるから』と言って、こども先生が去って行ってから。
もうずいぶん待っている。
ひょっとして何か用事ができたか、それとも忘れられたのかとも思ったが、それでもここを離れるわけにはいかなかった。

なんせ、ここにはこども先生に連れて来てもらったから、帰る道がまったく分からないのだ。
ここ、無駄に広いし、複雑な造りだからな。

「はー」
ぼーと眼の前に並んでいる自販機を眺める。
待合室にあるのは５台ほど。
並んでいるジュース缶の数は多いけど。
「全部、メジャーどころばっかりじゃないか。天下のＢＭＰ管理局ともあろうものが、こんな無難な自販機チョイスしてどうするんだよ」
退屈まぎれに訳のわからない愚痴をこぼしてみる。

さすがに『シニタクナイヨー。なんで俺が、Aランク幻影獣と闘わないといけないんだー』とか叫ぶ訳にもいかないからな。

と。

「それは、困りましたね。後で、施設の管理者に話しておきます」

「いや、話さなくていいから」

聞かれた！

驚いて振り返った俺の眼に飛び込んできたのは、麗華さんと同じくらい美人な、赤い瞳の女性。

それから、こども先生。

「悠斗君は、時々とんでもなく変なことを言うから、気にしないでいいわよ。私も何度も注意してるんだけど、未だに時々とんでもなく変なことを言うのよね」

こども先生らしからぬ、くどい言い回し。

もちろん何を言いたいかくらいは分かる。

俺が時々『こども先生』って言うことっすよね？

「まぁ冗談はともかく、姉さん。ほんとに大丈夫なのよね」

「大丈夫、とは？」

「分かってるでしょう？　支配系能力による能力覚醒は、失敗すると後遺症が出る場合があるわ。特に姉さんのアイズオブクリムゾンは、精密だけど乱暴な能力だから」

「ちょ……」

ちょっと待ってください！

今、４つほど恐ろしく不吉な響きのする単語を聞いたような。

特に、最後の方とか！

「あなたが頼んできたのではないですか？」

「それは……。悠斗君が、『自分の身はどうなってもいいから、命に代えても麗華さんを助けたいんだ』と言うから」

「ちょっと！」
待ってくださいな！
そないなことを言った覚えがないんですが！
「え？　悠斗君は、麗華さんがどうなってもいいの？」
「いや、そういう訳ではないんですが……」
「ＢＭＰ過敏症の症状に蝕まれながらも、Ａランク幻影獣に襲われる悠斗君を助けるために、症状が悪化するのを覚悟の上で幻想剣を使った麗華さんなんかのためには、命をかけられないと？」
「そ……」
そういう言い方はなかろうに。
これじゃ、こども先生じゃなくて、大人先生じゃないか。
しかも、いつの間にか、深緑の右目が全開になっている。

「こら」
と、緋色瞳さんがこども先生の頭をこづいた。
「いたー……」
「相手を説得する時に、アイズオブエメラルドを使うのは悪い癖だと言いませんでしたか？」
「分かってはいるんだけど。これをやると、びっくりするくらい生徒が言うことを聞いてくれるものだから、つい」
いや、それは、説得というより洗脳と言わないか。

「少し脱線しましたが。とにかく、心配することはありません。アイズオブクリムゾンは使いませんから」
「え？」
「どういうことなの、姉さん！？　麗華さんを助けようという悠斗君の熱い心意気に応えて、若干嫌がる悠斗君を、無理やり押さえつけるか騙すかして、この機会に能力覚醒させるつもりじゃなかったの！」
劇的に驚く、こども先生。あんた、ほんとに教師か？

瞳さんの前だと、なんだかキャラが違いますよ。
「そんな覚醒に、一体どんな意味があると言うのですか？」
若干呆れたような口調で言う瞳さん。
「私は、ただ、悠斗君とお出かけしようと思っただけですよ」

首都橋の伝説

ほんとに、こんなことをしていていいのだろうか？

言われるがままに、瞳さんとランチを食べて。
ウインドウショッピングをして。
喫茶店でお茶して。
公園をぶらぶらして。
そして、いい感じに日が落ちてきたので、瞳さんの車で首都橋をドライブしている。

まさかほんとに遊ぶだけなんてことはないだろうと思って付いてきたのだが、まさかほんとに遊ぶだけなんだろうか？
それはともかく、首都橋は、首都湾にかかる橋だ。
首都の動脈の一つであるのはもちろん、夜景が綺麗なので、いい感じに盛り上がったカップルが、納期ぎりぎりで焦って飛ばしているトラックの運転手さんの神経を逆撫でしていることもしばしば。
それはともかく、このままだとほんとにこのまま終わってしまう。
別に楽しくなかった訳ではないが、楽しんでいる場合でもないのだ。
なんとか調律（メンテナンス）の極意とやらを聞き出さないと。

とりあえず、ジャブから入るか。
「ええと、いい車ですねー」
どう見ても趣味でしか買えない高級外車を褒めてみる。
「あら、ありがとうございます。でも、ほんとは軽自動車の方が便利で好きなんですよ」
「え？　そうなんですか？」
それは意外だ。
麗華さん年上ヴァージョンとでも言うべき美貌を持っているから、

こういう車はイメージぴったりなんだけどな。
「だからですよ。支配系能力者はイメージが重要。『この人は、こういう存在だ』と思わせることができれば、支配するのも容易くなるのです」
「へえー」
しっかり前を向いたままで、語る瞳さん。
結構、極意的なことだとは思うんだけど、今の俺にはあまり関係ない話だ。

「ところで、調律（メンテナンス）なんですけど」
いきなり本題に入ってしまう俺。だって、もう話題が思いつかないし。
「やっぱり使う気なんですか？」
こちらを向いて、真剣な視線を向けてくるアイズオブクリムゾン。
でも、今は前向いて運転してください。
「そりゃ、何事もなければそれが一番ですけど。もしものこともあるし。それに、内容を聞く限り、使えるようになってれば損はないと思うんですけど」
「悠斗君は大事なことを忘れていませんか？」
「え？」
「ＢＭＰ能力者が最も恐れ、最も待ち望む瞬間。始まりの儀式にして、一生忘れられない悪夢の瞬間」
「？」

「覚醒時衝動です」

「……」
「……」

いや、でも。
「あ、でも、俺、第五次首都防衛戦で劣化複写覚醒（イレギュラーコピー）しましたけど、覚醒時衝動は起きなかったですよ」
「覚醒時衝動のないＢＭＰ能力者など存在しません」
まるでそれが絶対の真理であるかのように、断言する瞳さん。
そうじゃないことを体現したはずなのに、なぜか反論できない。
……あの赤い瞳のせいだろうか。
というか、前向いて運転してください。
「そして、複数能力者は、一つの能力が覚醒する度に覚醒時衝動を起こします」
「え？」
そ、それって！？
「次は、覚醒時衝動が起こるってことですか！？」
「はい」
短い肯定。
そうならない可能性を全く感じさせない声だった。

「悠斗君本人には自覚がないようですが、劣化複写（イレギュラーコピー）は最高難度のＢＭＰ能力です。ウエポンテイマーの身で、それを使いこなすあなたが、本来の能力である調律（メンテナンス）を使えないはずがないんですよ」
「え、でも？」
「使えるはずです。もう、すでに」
ちょっと待ってください。
それは、ドラマや映画なんかだと凄くいい感じの決め台詞ですが、実際当事者になってみると『そんなこと言っても、使えないものは使えないし』感がたっぷりですよ。

「無意識で恐れているんですよ、覚醒時衝動を」
「え？　でも」
「細胞がと言った方がいいかもしれませんね。どんな低ＢＭＰ能力

者でもいいので、一度でも覚醒時衝動を見てみれば、私の言っている意味が分かると思いますよ」

「そうなんですか」

そう言われると、実際に見たことのない俺には返す言葉がない。

それに、周りの人たちの話を聞く限りでは、瞳さんの言葉の方が真実に近いような気もする。

「それに、実際使わない方がいいんですよ。１０年前の麗華さんの覚醒時衝動の話、聞いたことありますか？」

「は、はい」

国家治安維持軍をおもちゃ扱いしたという例のあれだ。

「その麗華さんより高いＢＭＰ値。当時の麗華さんよりも１０歳も上の年齢。そして、二回目の覚醒時衝動」

「……」

「全ての要素が、過去最悪の覚醒時衝動を予想させます。正直な話をさせていただくと、Ａランク幻影獣より、よほど恐ろしいです」

「ま……」

マジですか？

「妹は、支配系能力なら、覚醒時衝動にも効果があると思っているようですが、とんでもない話です。ただでさえ、今はあのＡランク幻影獣の脅威があるのですから、下手をすると首都が落ちます」

「そ、そうですか……」

本人には全く自覚はないが、この人がここまで言うんだから、俺の覚醒時衝動とやらは、それほど凄まじいんだろう。

じゃあ、やっぱり、調律（メンテナンス）はなしか……。

「でも」

え？

「それでも、使いたい。もしくは使わなければならない状態になったのなら」

「……」
「その覚悟があるのなら」
「……」

「使えるでしょうね、簡単に」

衝撃の事実だった。

俺はすでに調律（メンテナンス）を使えるらしく、しかも、使ってしまうと覚醒時衝動で首都を落としてしまうらしい。
それでも使いたいなら、使い方は、瞳さんの妹……こども先生が教えてくれるとのこと。
……気のせいかな。俺、こども先生に言われて調律（メンテナンス）の使い方を瞳さんに教わるつもりだったと思うんだけど。
「ま、いいか」
麗華さんにもしものことでもない限りは、もう俺も使う気ないし。

「ところで、悠斗君。この首都橋について、何か知っていることはありますか？」
「知っていることですか？」
首都の動脈で、夜景が綺麗で、料金が高いことくらいか。
ドライブ中に告白したカップルが幸せになれるとかいった類の伝説は、聞いたことないしい。
「例えば、ＢＭＰ能力者に関することとか……」
「あ！」
そのヒントで思い出した！
超有名な話があった。これを一番に思い出さなかったことが知れたら、また三村に馬鹿にされるくらいに！

「『首都橋の悪魔』ですね！」
「そうです。良く知っていますね」
瞳さんは褒めてくれるが、もちろんリップサービスだ。
むしろ『今まで思い出さなかったのか、こいつ』とか言われても、不思議ではない。
誰でも知ってる話だ。

「１０年前、首都橋に強力な幻影獣が突然現れた。急なことだったので、クリスタルランスしか現場に向かえなかった。当時のクリスタルランスも、すでに最強と呼ばれていたけど、その幻影獣を倒すことはできず引き分けるのが精いっぱいだった」
俺の知る知識を披露してみる。
クリスタルランスが任務に失敗……まあ、失敗とも言い切れないと思うけど、成功しなかったのは、この時だけだったって言われてる。
「でも、それが、一体……」
と、ここで（俺にしては珍しく）閃くものがあった。
「まさか、首都橋の悪魔の正体って、ガルア・テトラだったんじゃ！？　そうか、クリスタルランスにとって、やつは因縁の相手！」
ここに連れて来てくれたのは、その辺の事情を踏まえて、あのＡランク幻影獣はクリスタルランスが倒すという決意を語ってくれるつもりに違いない。
なんて、頼もしいんだ！

「ぷっ」
へ。

「うふふ……。悠斗君って、こんなに面白い子だったんですね」
と、美貌に不釣り合いな無邪気な顔で、瞳さんがコロコロ笑う。
というか、前を向いて運転してください。

「あ、あの、なんか間違ってましたか？」
一応、全部、人から（ソースが三村というところに、一抹の不安はあるが）聞いた話なんですが。
「そうですね。今の話には、三つの間違いがあります」
と、三本指を立てて語りかけてくる瞳さん。
もう、完全にこちらを向いている。なのに、運転に危なっかしいところがまったくない。
……ひょっとして、これもＢＭＰ能力か？

「まず、一つ目。クリスタルランスしか対応できなかったのは、急襲だったからではありません。同日、同時刻に、もう一つの大事件があったからです」
「大事件？」
「剣麗華さんの覚醒時衝動です」
「な！」
なんですと！
「ＢＭＰ１７２であることはもちろん、剣首相のお孫さんですからね。国家治安維持軍が総出で確保にあたりました。首都橋の事件を無視したわけではないようですが。さすがの剣首相も孫娘の危機とあっては、冷静でいられなかったようです」
「そ、それなら、なおさら、クリスタルランスも、そっちに呼ばれるはずじゃ……」
「当時の剣首相は、あまりＢＭＰ能力者を信用していませんでしたから」
と言って、ようやく視線を前に戻してくれる瞳さんだった。

「二つ目。引き分けではありませんでした」
一本指を折って、二本指にする瞳さん。
「え？　実は、勝ってたんですか？」
「逆です。敗北しました。それも完膚なきまでに」

「な」
驚いた！
「クリスタルランスが負けた？　でも、メンバーは今とほとんど同じで……。いや、それどころか、１０年前っていえば、ブレードウエポンが居たはずですよね」
「彼も負けました。剛も彰も光も、もちろん私も。クリスタルランスメンバー総がかりで、まったく歯が立ちませんでした」
「そ、それは……」
一体、どんな化け物だったんだろうか？

「最後の三つめですが」
「あ、あの。その前に、首都橋に現れた幻影獣のことをもっと聞いてもいいですか？　クリスタルランスに勝つくらいなんだから、ガルア・テトラじゃないにしても、やっぱりＡランク幻影獣ですよね？」
「それが、三つ目です」
「え？」
最後の一本の指を立てたまま、瞳さんが告げる。
でも、やっぱり、こちらを向いたまま運転できても、きちんと前を向いて運転するべきだと思うんです。

「首都橋に現れたのは、幻影獣ではありませんでした」
え？

「覚醒時衝動を起こした、一人のＢＭＰ能力者だったのです」

決戦前夜

二週間はあっという間だった。
色々やっても、効果は薄いということで、俺はカラドボルグの特訓に集中した。
具体的には、以前麗華さんに教わった練習方法（ロイヤルエッジを斬りまくる例のアレだ）を人工的に再現してもらい、延々とこなしていた。
その甲斐あってか、タイムは6分12秒まで縮まった。
訓練教官が言うには、なかなかの上達具合だそうだ。ああ、なんか久しぶりに褒められたよ。

あと、こども先生が（対策会議やらなんやらで、BMP管理局に呼び出された帰りに）授業でやったところをかいつまんで教えてくれた。
曰く「悠斗君の成績で出席日数にまで穴が開くと、正直かなり厳しいから」だそうだ。しかも笑顔で言われた。
シャレにならん。
でも、ありがたかった。

ついでに、三村とエリカと峰が訪問して来てくれた。
曰く「澄空がいないと、張り合いがない」（これは峰）
曰く「悠斗さんがいないと、みんな寂しがってマス」（これはエリカ）
曰く「ささみチーズフライが学食に復活したから、早く一緒に食べに行こうぜ！」（これは三村）
そのあと、すぐに新月学園へ行こうとしたら、三村が「うっそぴょーん」と言いやがった。なんてやつだ。
それはそうと。

帰り際に。
「冗談はともかく、早く出てこいよ。おまえがいないと、やっぱり寂しいからさ」
と、三村が凄く絵になる顔で言い残していったのが気になる。凄く気になる。
病気で長期療養している同級生に対するノリではないか。

★

「あのＡランク幻影獣さえ撃退できれば、すぐにまた新月学園に通えるんだからな！」
誰に言う訳でもなく、突然堂々と宣言する俺。
別に頭がおかしくなったわけでもない（良くはないけど）。
ただ、少し不安になっただけだ。

「明日、だもんなぁ……」
呟いて、休憩室のベンチに腰を下ろす。
ここは、ＢＭＰ管理局の中層。俺が止まっている部屋の近くにある休憩室だ。
関係者しか入れない中層にあるだけあって（という訳でもないだろうが）外層の待合室と広さや構成は同じながら、自動販売機が１０台も置いてある。
しかも、うち5台は、なかなか個性ある飲料がそろっている上に、まるでつい最近設置されたかのように新しかった（というか、初めてここに来た日にはなかった気がするんだけど、気のせいだろうたぶん）。

明日は約束の7月24日。
ガルアは紳士的にも、ほんとに約束の日まで一切ちょっかいを掛けてこなかった。
「ついでに、これ以降もずっと来なけりゃいいのに」
思わず、本音の漏れる俺。
と。

「それは困る。早く、あのAランク幻影獣を撃退しないと、いつまでたっても悠斗君が新月学園に行けない」
「まあ、確かにそりゃそうなんだけど……。って、麗華さん！」
驚いて振り返る。
全く気配がなかった（気配なんて読めないけどね）。
「お風呂に入ってた」
と、説明してくれる麗華さん。
確かに、風呂上がりのいい匂いがしてるし、少し上気した顔は、いつ見ても完璧フェイスだった。
だが、ドライヤーもせずに、タオルでわしわし髪を拭いているのはいただけない。あの髪のキューティクルに傷でも付いたら、いったい誰が責任を取れると言うのだ！？

「私の髪の心配はともかく。悠斗君、元気ない？」
「いや、ちょっと緊張してるだけだよ」
言いながら、立ち上がって自販機に向かう。
この2週間、ここで色々なドリンクを試したが、結局普通の微糖コーヒーが一番おいしいと気付いた普通の俺は、麗華さんの分と二つ買う。
ありがとう、と言いながら俺の隣に腰を下ろす麗華さん。

「明日は、前回と違って、クリスタルランス初め上位ハンター達も揃うし、私もそばで護衛する。前回よりも、むしろ安全」

「ああ、確かに」
後半部分が、また俺の悩みの種でもあるんですが。
とはいえ、今日『念のための最終チェック』でこども先生が念入りに診てたけど、ほんとに麗華さんのＢＭＰ過敏症は治っているっぽいしな。大丈夫か。

「こくっ……」
可愛らしい音を立てて、麗華さんがコーヒーを飲む。
俺も、プルタブを開けて……。
「ん……」
開けて……。
「っと……」
開けて。
「……」
開かん。

「縁起悪いよなー。ほら、麗華さん。この缶コーヒー、開かないんだよな」
「……」
と、何も言わずに麗華さんは俺の缶コーヒーのプルタブに手をかけて。
開けた。
しかも、いとも簡単に。
「あれ？」
「悠斗君、震えてる」
「え？」
言われて見てみると、コーヒーが小さな津波を起こしている。
俺は黙って、缶コーヒーを隣に置いた。

格好悪いな。

3割以上の人が、幻影獣のせいで天寿を全うできない、このご時世。
俺の知り合いでも、犠牲になった人は、一人や二人じゃない。
俺も、ある程度の覚悟はできていたつもりだった。
死ぬかどうかも分からない、しかもたくさんの人に守られているこの状況で怯えるなんて。

「悠斗君、ひょっとして怖いの？」
「たぶん……」
今さら、ごまかしようもないので、そう答える。
こんな俺を見て、麗華さんはどう思うだろうか？
ほんとは、怯える麗華さんを俺が慰める、くらいじゃないといけないのにな。

「悠斗君、実は私は、死ぬのが怖いという感情が良く理解できない」
「へ？」
「昔は分かってたと思うけど、今は分からない」
あまりの衝撃的な話に、一瞬手の震えを忘れる俺。
「だから、どうすれば悠斗君の恐怖を取り除けるのか、分からない」
「い、いや、それは……」
そんなことより、今の麗華さんの話の方が気になる。
ひょっとして、今、物凄い大事な話をしてるんじゃないだろうか？

「れ、麗華さ……」
「ソードウエポンも、意外と分かってない」
麗華さんに話しかけようとした俺のセリフが、女性の声で遮られる。
同時に、柔らかな感触に抱きとめられる。

「悠斗君を慰めるには、お姉さんのふくよかな胸に決まっている」
聞き覚えのある声と言い回し。

『お姉さん』というセリフで一発でわかる。
というか『悠斗君』と限定するのと『ふくよかな』という修飾語は抜いてほしい。なんとなく。

「アローウエポン？」
「お久しぶり」
麗華さんの問いかけに返答する柔らかい二つのふくらみ……もとい、二つのふくらみを俺の後頭部に押し付けている女性。
「あ……茜嶋さん？」
「違うユトユト。お姉さんのことはお姉さんと呼ばないといけない。または、光ネエとか」
後頭部から胸を離し、俺を自分の方に向かせ、本人は眠そうだが目の覚めるような美貌で俺の顔を覗き込みながら言う光さん。
「い、いや……でもですね……」
「やっぱりユトユト可愛い。ぎゅーってしたい」
最後まで話す前に、ぎゅーってされた。正面から。

「だから、飛ばしすぎやいうたやろ、光！」
俺をぎゅーっとしていた光さんの脇を抱えるようにして持ち上げる女性が現れた。
猫のような勝気な瞳が印象的な女性。
その横には、俺の軽いトラウマになっている偉丈夫もいるが、この二人の前では、さすがに影が薄い。
「飛ばしすぎてない。むしろ、スロースターター」
マジか！
「スロースターターや、ないわ。ほんまにもう。ごめんな。悠斗君に剣さん。光はちょっと変わりもんでなー」
「いや、確かに女性の胸が男性の落ち着きを取り戻すというのは聞いたことがある。私も勉強になった」
真面目な顔で答える麗華さん。

って、それは麗華さんもぎゅーっとしてくれるということでしょうか！？
いや、そんなことより。

「犬神さんと臥淵さん……でしたよね。なんで、ここに？」
「いや、蓮に呼ばれて打ち合わせに来たんだがな……」
身長２メートルはある大男が、頭を掻きながら居心地悪そうに呟く。
ちなみに、今日はハンマーを持ってない。でも怖い。
「剛と私は、居てもあんまり役に立たないから、ぶらぶらしてていいと瞳に言われた。困ったもの」
答えたのは光さん。それは、ほんとに困ったもんですな。
「あ、ウチは違うで。ただ、剛は放っておくと色々危険やから監視役や。……最近は、光の方がもっと危険やけど」
最後、こそっと付け加えた。俺も確かにそう思う。

「それより、おかしいのはおまえだ。たかだか大規模戦闘ごときで何をビビってやがる？」
と言う臥淵さん。
今の俺にとっては、それより怖いのは麗華さんくらいしかいないんですが。
「確かに。さっきはラッキーとばかりにギュッとしたけど、勇敢で強くてちょっとクールなユトユトが幻影獣との戦闘で怯えるなんて考えられない」
続くのは、光さん。
……それは、いったいどこのユウトくんなんでしょうか？

「ったく。分かってへんなー、二人とも」
遮るのは犬神さん。
おお、分かってくれてる！
「悠斗君は怖がってるわけやあらへん。自分のせいで、他のみんな

を巻き込んだのが心苦しいんや」
……は？
「そっか。ユトユト、優しい」
「ったく、相変わらず損な性分だな、おまえは」
え？　え？
なに、この『口下手だけど、根は優しいナイスガイ』的な扱いは？
「ごめん、悠斗君。私は、そこまで気がつかなかった」
と信じてしまう完璧美少女。
……なんだか俺も、実はそうだったような気がしてきた。

「ったく！　いいか、悠斗」
臥淵さんが、語りかけてくる。
「ＢＭＰハンターってのは、幻影獣と闘うのが仕事だ。それで金も出るし、生きている意味も見いだせる。大口の闘う場所を用意してやったんだから、おまえは感謝されこそすれ恨まれる道理はないんだぜ」
圧倒されるような迫力はそのまま、諭すような口調で話す臥淵さん。
「おまえは、いつも通り派手に暴れまわりゃそれでいい」
いや、いつもそんなに暴れてないですが。
あ、でも、暴れると言えば。

「あの……ちょっと聞いていいですか？」
「何、ユトユト。お姉さんに分かることなら、なんでも答える」
「『首都橋の悪魔』のことについて、聞きたいんですけど」
言った途端に、三人が固まる。

「しゅとばしのあくまがどうかしたのか？」
なぜか、突然棒読みになる臥淵さん。
「い、いや、緋色先生のお姉さんに『首都橋の悪魔』が実は幻影獣でなく覚醒時衝動を起こしたＢＭＰ能力者だったって聞いて。今、

どうしてるのかなーって」
明日、助けに来てくれたりすると助かるなー、と思ったのは内緒だ。
「悠斗君、それは本当の話なの？」
珍しく口を挟んでくる麗華さん。
無理もないか、同時に覚醒時衝動を起こした運命の相手だもんな。
「だとしたら、私も聞きたい」
真剣な眼をする麗華さん。
……若干ジェラシーだ。

「……と言うてもな、うちらもリーダーが話した以上のことは知らんねん。当たり前やけど」
「そうだな。俺らが総がかりで歯が立たなかった化け物だったってこと以外には、特にないな」
なんだか気まずそうな臥淵さんと犬神さん。

と、光さんが俺と眼を合わせ、
「強かったよ、とても。悠斗君と同じくらい」
と言った。

……それは、本当に強かったのか？

ＢＭＰ管理局籠城戦

『７月２４日１０時２９分・エントランス』

「本当に、入れるとは思いませんデシタ」

緊張した面持ちで話しているのは、本郷エリカ。

「別に驚くこともないんじゃないか。峰はもちろん、俺だって一応、ＢＭＰハンターだ」

と返すのは、三村宗一。

「だからと言って、ＢＭＰハンターではないエリカ君を通していい理由にはならないと思うがな」

渋い顔をしているのは、峰達哉。

そして、周りには、ＢＭＰ管理局のエントランスを埋め尽くすほどのＢＭＰハンターたち。

そう。ここは、伝説のＡランク幻影獣率いる幻影獣軍と、ＢＭＰハンター達の決選当日の、ＢＭＰ管理局だった。

６月の第５次首都防衛戦と同じく、ハンター達が次々と集まって来ている。

峰と、一応ＢＭＰハンターの三村が馳せ参じたのも、ごく自然なことだった。

しかし、いくら新月学園の生徒とはいえ、ＢＭＰハンターでないエリカが、これから戦場となるＢＭＰ管理局に入れたのはおかしいと言わざるを得ない。

普段勤務している職員も、戦闘員でない者は最低限の人員を残して避難しているのだ。

もちろん、エリカも最初から中に入るつもりではなかった。

戦場に向かう三村と峰の見送りと、うまく会えれば悠斗と麗華を激励しようと思ってやって来たのだ。

しかし、ＢＭＰ管理局が見えるところまでやってきた時に、

『やっぱり、私も一緒に闘いたいデス！』

とエリカが言いだしてしまった。

最初は反対していた三村と峰だが、結局は押し切られるような形でエリカの入場に協力することになったのだ。

と言っても。

『えーと、この娘、俺たちの付き添いなんですー。一緒に中に入ってもいいですか？　こいつがいないと、調子が出なくてー』

という小学生以前の言い訳をしただけだったのだが。

入れてしまったのだ。

「ひょっとして、俺、演技の才能あんのかな？」

「というより、いちいち厄介事に構っている暇がなかっただけのようにも見えたがな」

三村の軽口に、冷静に返す峰。

彼の言うとおり、受付は、まさに戦場のような有様だった。

普段から受付をやっていると思われる女性はともかく、明らかに増援で連れて来られたような男性陣は完全に眼がイッていた。

おそらくは、今日だけでなく、ここ数日は本来の業務で徹夜続きだったオーバーワーク気味のホワイトカラーさん達なのだろう。

お疲れさまとしか言いようがない。

「それにしても、凄い数デスねー」

人気のある職業とはいえ、特殊な上に高度な適性が要求されるのがＢＭＰハンターである。

そのＢＭＰハンター達が、まるで初売りの福袋に群がるようにして次から次へとやって来ていた。
とはいえ、受付で配られているのは福袋の整理券ではない。
むしろ、その真逆のものだ。

「さてと。俺は……Ｇ－３！？　なんで！？」
受付で渡された小さな紙を見て、三村が叫ぶ。
「俺も、Ｅ－４だ……」
「わ、私もＨ－３デス！」
続く、峰とエリカ。

なんのことか分からないと思うので、説明すると。
このＢＭＰ管理局は、大きく、内層・中層・外層に分けられている。
各層は、さらに細かく分けて。
内層：Ａ～Ｃブロック。
中層：Ｄ～Ｉブロック。
外層：Ｊ～Ｏブロック。
となっている。ちなみに、１～５の数字は階を表す。５は屋上だ。
つまりは、Ｇ－３なら中層Ｇブロックの３階。Ｅ－４なら、中層Ｅブロックの４階となる。
それが、そのハンターが防衛を受け持つ区画という訳だ。

そして、彼らが何に驚いているかと言うと。

「俺らみたいな新人を中層に配置するなんて、何を考えてるんだ？」
「てっきり、外層で壁役をさせられるものだとばかり思ってたデス」
という、三村とエリカの発言が答えだ。
一般的な建物の例に漏れず、この建物も中に行くほど重要な施設となっている。
特に内層はＢＭＰハンターでも基本的に立ち入りができず、Ａブロ

ックになると、非常時以外は誰も入れないシェルターのようになっている。
今回の最重要人物である悠斗も、Ａブロックに保護されている。
つまりは、内層に近くなるほど、実力上位の者が守るのが普通の考え方なのだ。

「いや、逆にこの方が理に適っているのかもしれない」
一人、別の意見を言う峰。
「一番敵と闘わないといけないのは外層だ。そこに上位ハンターを集めておいて、主導権を握る。俺達は外層を潜り抜けてきた幻影獣を足止めするのが仕事だ」
「なるほど、時間稼ぎか」
納得した三村。
「じゃあ、ひょっとして内層はあんまり人がいないんでしょうカ？」
「可能性はあるな。幻影獣に戦術なんかない。わざわざ戦力を出し惜しみする余裕も必要もないだろう」
「ナラ、私たちも、悠斗さんの傍に行ける可能性がありマスね！」
勢い込んで言うエリカ。
しかし。

「あ、す、すみまセン……。勝手なことしたら、他のＢＭＰハンターの皆さんに迷惑デスよね？」
恥じ入るように小さくなる、真面目なエリカ。

と。

「いいんじゃないか？」
三村が答えた。
そこには、普段の、どこか残念な二枚目半の雰囲気はなかった。

「少なくとも、俺は、澄空を助けに来ただけのつもりだけどな」
むしろ、不思議な安心感を感じさせる不思議な表情だった。
澄空悠斗言うところの『三村の兄貴モード』である。

そんな三村に、不覚にも見惚れてしまうエリカだった。

ちなみに、峰は実際に戦闘が始まった際の脳内シミュレーションで頭がいっぱいだった。

『7月24日12時55分・J5』

「凄い数やなー」

BMP管理局ブロックJ5。
すなわち外層の屋上部分で、犬神彰は周囲の空気とまったく相容れない暢気な声を出した。
どういうところが相容れないかというと。Aランク幻影獣ガルア・テトラが指定した開戦時刻は7月24日13時であり、しかも、もう視認できる距離にまで幻影獣の大群が来ているからだ。

「第5次首都防衛戦の時より多い。5倍くらい」
犬神に輪をかけて場の空気に相容れないのは、茜島光。本人は眠そうだが、眼の覚めるような美人の射手だ。

と。

『屋上に展開中のBMPハンターに告げます』
全館放送で、オペレータの声が響く。

『敵幻影獣軍が接近中です。遠距離系ＢＭＰ能力者は、敵が射程距離に入り次第、各員の判断で攻撃を開始してください。それ以外のハンターは護衛をお願いします』

「と言っても、もう射程距離に入ってるけど」
「マジかいな！　１００キロはあるで！」
淡々と告げる茜島のセリフに犬神が驚く。
幻影獣達は、まだ豆粒くらいにしか見えないくらいの距離だ。
とはいえ、さすがに１００キロはない。

「彰、ちょっと離れてて」
右の手のひらを幻影獣に向かって突き出す仕草をする茜島。
「よ、よっしゃ」
犬神が離れる。

「天閃（レイ）」

瞬間。
茜島の手のひらから、眩い光が現れる。
光は光線となり、一瞬で幻影獣軍に到達し。
１０数匹を次々と貫通し。
敵の中央付近で、爆発した。

「うん。いい調子」
眠そうだが、上機嫌な声で言う茜島。
「い、いや、『いい調子♪』いうか……」
対照的に、犬神は眼を白黒させている。

「２、３０匹は、消し飛んだんじゃないか……」
「信じられねえ……」

「あれが、クリスタルランスの射手『アローウエポン』か……」
もちろん他のＢＭＰハンター達も、開いた口がふさがらない。

「今のなんなん？　光！　あんなゴッツイん、初めて見たで！」
「今日は調子がいいから」
「いや、調子とかそういう次元には見えへんのやけど……」
「あと」
「ん？」

茜島は、眠そうな眼を犬神に向けて。
「悠斗君のために戦うのは、今日が初めてだから」
言った。
「……それで劇的に強くなれるような引き出しがあんのは、あんたくらいや……」
呆れたように呟く犬神。

「もう一撃」
言って、茜島が天閃（レイ）を放つ。
そして、敵軍の中央付近で爆発。
ようやく他のＢＭＰハンターの中にも攻撃を始められる者が現れ出したが、茜島の攻撃は、次元の違う破壊力だった。
敵からの攻撃も飛んできているが、こちらに届く前に阻まれる。
建物自体のシステムに加えて、守備的なＢＭＰ能力の持ち主も揃っているのだ。
初手は、完全に人間側が優勢だった。

「でも、数が多い……」
「まあ、蓮も最初から、ここでケリがつくとは思とらへんかったやろうけど」

二人の言うとおり、視認できる敵の数は増え続けていた。

「別に私は乱戦でも、接近戦でも困らないけど」

「周りが困るっちゅうねん」

一応ツッコんだ後で。

「管制室！　聞こえとるか」

『は、はい！　聞こえてます』

犬神の呼びかけに、さきほどの全館放送の声の主が答える。

ここで少し説明を。

このＢＭＰ管理局の放送システム、管制室から全館に放送できるのはもちろん、各ブロックから管制室や他のブロック間へ『放送』できる。

もちろん電話は使わない。

さきほど犬神がやったように、伝えたい場所を念じながら、その場で発言すれば、伝わるのだ。

通信系ＢＭＰ能力を応用したシステムである。使用には若干の訓練とセンスがいるが。

説明終わり。

「ここで喰いとめるのは無理や！　適当なところで切り上げて他のブロックの応援に言った方がええから、指示してな」

『は、はい、了解しました！』

相手がクリスタルランスの『電速（パルス）』であることが分かっているのか、緊張した声で答えるオペレータ。

「悠斗君のところまでは、行かないよね？」

「さすがにうちも、そこまではないと思うけど」
言いながら、犬神も、そして茜島も、この戦いが簡単には終わりそうにない雰囲気を感じていた。

序盤戦

『7月24日13時10分・管制室』

管制室オペレータ・志藤美琴（22歳独身）は後悔していた。
勢いに流されて、電速（パルス）の依頼に了解したことだ。
なぜかというと、今現在、この管制室には作戦行動を司る者がいない。
複合電算（シミュレータ）・雛鳥結城が病欠中なのは仕方ないとはいえ、作戦担当が人事異動の不手際で不在なのは、もう完全に組織のミスではなかろうか。
そもそも、この組織は局長に頼りすぎなのだ。
それは志藤も理解していた。
だが、その局長が。
『当日は私は現場に出ます。国家維持軍に指揮を依頼してはみたのですが、軍としての構成が違いすぎるから力になれない、とのことでした。まあ、私もそう思います』
と言うとは思わなかった。そして、ほんとに当日になっても作戦担当の人間がいない状態になるとは思わなかった。

「こちら、管制室。Aブロック、聞こえますか？」
とはいえ、一応、頼ってみる。
『はい。どうしました、志藤君？』
「城守局長、どうやら建物外で決着をつけるのは無理のようです。乱戦に備えて、配置ブロックの変更に関する指示の依頼が来ています」
『ああ、やっぱり、そうですか』
いつも聞くだけで安心する、確かな実績と実力に裏打ちされた落ち着きのある声。

だが、今日だけは別だった。

『仕方ありませんね、雛鳥君に少し無理をしてもらいますか。セッティングはしておきましたよね？　あとは、管制室で対応してください』

「え？　え、でも？　結城ちゃ……雛鳥さんに手伝ってもらうにしても、今、ここ、オペレータしかいませんよ？」

『問題ないです。非常事態ですから、規則違反に問われることはありませんよ』

「いえ、心配なのは規則だけではなく……」

実力の方である。

当たり前だが、オペレータと作戦司令では求められる能力がまったく違う。程度でなく種類が違う。

『嫌な予感がするんですよ、今日は、やはり私は現場にいるしかないようです』

「で、でも……」

『頼みましたよ、志藤君』

と言って、切れた。

しばらく呆然とする志藤。

そして、周りを見る。

仲間のオペレータも、皆同じ顔をしていた。

一斉に、頭を抱える。

「うっそぉ……」

『7月24日13時12分・A』

「良くない状況ですね」
管制室との通話を終えて、イケメンな上に偉い（ある程度の地位だとは思ってたけど、まさかＢＭＰ管理局の局長だとは思わなかった。というか、なぜ誰も教えてくれないんだ？）男、城守さんは呟いた。

「良くないですねぇ」
とりあえず返答する。
別にお追従した訳ではない。実際に、良くない様子が丸見えなのだ。

少し、状況を説明しよう。

この俺、澄空悠斗は、ＢＭＰ管理局Ａブロック、即ち最深部で保護されていた。
Ａブロックは、一言で言えばシェルターだ。
想定している敵は、あくまで幻影獣だが、直径１００メートルほどの円筒型の空間は、核にも耐える壁で覆われている。
扉は一つ。あそこから、中庭であるＢブロックに繋がっている。
そして、どういう訳か天井が高い。２０メートルくらいある。
その壁面、１０メートルくらいの所に、５０近い数のモニターが掛っているのだ。
どういう用途で設置したかは知らないが、とにかくあのモニターで、管理局内の様子は手に取るように分かるようになっている（でも、制御は管制室にある）。
そのモニターの一つが、現在戦闘中の屋上の様子を映し出しているから、良くない状況なのが俺にも分かるという訳だ。

説明終わり。ああ、疲れた。

「光と彰も良く闘っていますけどね」
「いや、あれは、獅子奮迅……というか、傍若無人というんではないでしょうか？」
城守さんの低すぎる評価に反論する。
カメラが捉えきれないほどの速度で走りまわる（というか実際に捉えてないんだけど、所々に電気が走った跡と横たわる幻影獣の死骸があるんで分かる）犬神彰さんに。
すでに乱戦になっているのに、お構いなしに光線を撃ちまくる（でも、なぜか誤射が全くない。どんなカラクリなんだろうか？）茜島光さん。

強い。
そして、凄い。
あんなのが5人もいるんじゃ、クリスタルランスが最強というのも頷ける。
でも。

「押されてる」
麗華さんが言う。
そうなのだ。
あの二人がいくら強くても、取りこぼしは出る。
無法射撃区間を潜り抜けた幻影獣達が、次々、屋上から建物内部に侵入を始めていた。

ちなみに、ここAブロックにいるのは、俺と麗華さんと城守さんだ。
最後の砦の割に人数が少ないのは、ここまで来られたら負けという認識なんだろう。
とはいえ、麗華さんがいる限り、ここが一番戦力的に安全な気もするけど。

「麗華さん、調子はどうですか？」
「問題ない」
城守さんの問いに答える麗華さん。
今日の午前中にも、念のため、こども先生が最終検査をしていたが、特に問題はなかったらしい。

でも、気のせいか。
なんか、顔色悪い気がするんだけどな……。

「悠斗君の護衛が最優先ですが、そもそもここまで攻められれば負けです。麗華さんには状況によっては、出撃してもらうことになると思いますので」
「ん。分かってる」
城守さんに応える麗華さん。
なるほど、麗華さんがここに居るのは、俺の護衛であると同時に切り札でもあるのか。
でも、できれば、麗華さんが前線に出る事態にはならない方がいいんだけどな。

『きょ、局長、Ｎ４ブロックが破られそうです！』
さきほども聞こえた、オペレータさんの声が聞こえてくる。
「周辺のブロックから増援を。防御の薄いところを使わないようバランスを取りながら」
『バ、バランスと言われても……。あ！　Ｍ３もまずいです！』
「雛鳥君の指示通りに！　中層では足止めが精いっぱいです。なんとしてでも外層で優位に立ってください！」
『は、はいー！』
テキパキと指示する城守さんと、なんだか泣きそうな声のオペレータさん。

しかし。
なんで、この人、ここにいるんだ？
管制室に行った方がいいと思うんだけど。

『7月24日14時24分・管制室』

戦いが始まって一時間ほど経っただろうか。
管制室では、オペレータ・志藤美琴（22歳独身、でもそろそろ彼氏は欲しい）は、しどろもどろになっていた。
ブロックO－1で闘っている、非常に強力なBMPハンターに問いただされているのだ。

『幻影獣どもは一通りは片付いたんだがな。気が付いてみると、仲間のBMPハンターがいない。ひょっとしたら何人か巻き込んだような気もするんだが、それにしちゃ死体もないんだよな』
通信機から聞こえてくるのは、野太い男の声。
どう聞いても冗談を言いそうな声ではなかったが、声の主の素性を知っている美琴からすれば尚更だった。

「え、えーとですね……」
口籠る美琴。
もちろん事情を知らない訳ではない。
が、はっきりと言うのが怖いだけだ。
それはそうだろう。
最強チーム『クリスタルランス』の『怪力無双（ドラゴンバスター）』臥淵　剛に向かって、誰が『あなたの闘いぶりが恐ろしすぎるので、巻き添えを恐れてみんなO－1ブロックから避難しちゃいました♪』などと言えるというのだ。

だが、ここは戦場。情報は可能な限り伝えなければならない。
たとえ、さっきからなんだか美琴にばかりやっかいな通信が入って来ているような気がしてもだ。

「ほ、他のブロックは押され気味でして……。Ｏ－１ブロックは臥淵さん一人いれば大丈夫そうだからと、みなさん別のブロックの応援に……」
『なんだと!?』
「ご、ごめんなさーい！」
少しオブラートに包んだ状況報告を一喝されて、美琴は縮こまる。
『ということは、これからは周りに気を使わないで、全力で暴れられるって訳だな!』
「……あ、あれでも、周りに気を使ってらっしゃったんですね……」
衝撃的なセリフに、思わず失礼な言葉を発する美琴。
それはそうだろう。
まるで漫画に出てくるようなバカでかいハンマーを振りまわして、幻影獣を吹き飛ばしていく様は、モニター越しに見ていても、どっちが怪獣だか分からなかった。
というか、間違いなく臥淵の方が怪獣に見えた。

『俺は全然問題ないから、もっとこっちに回せ。というか、このままだと鈍っちまう』
「りょ、了解でーす……」
力なく返して、通信を切った。

疲れる。
クリスタルランスの方々の相手をするのはとにかく疲れる。

「城守局長ー。早く帰ってきてくださーい……」

力ない美琴の呟きを、聞こえなかったことにする他のオペレーターズだった。

金髪と猫目と

『7月24日15時37分・H－3』

H－3ブロックには、休憩室があった。
そして、金髪のハーフっぽい少女・本郷エリカは、その中にいた。
別にサボっている訳ではない。
ただ、中に入れてしまったとはいえ、見る人が見るとエリカのBMPが120に達していないのが分かるらしく、ここで大人しく待機しているように命令されたのだ。

「でも、あのリーダーさんらしきヒト、いざとなったら闘ってもらうかもしれナイとも言ってましたヨネ」
むん、とばかりに気合いを入れるエリカ。
正確には『君が闘わないといけないくらい状況が悪くなる可能性もあるから、できればその前に逃げろ』と言っていたのだが、まあ、このくらいの記憶の改竄は起こらないこともない。

「でも、このブロック、意外と大丈夫そうなんデスよね」
休憩室の中からでは外の様子は分からないが、時折スピーカーから聞こえてくる報告を聞く限りでは、なかなか優位に闘えているブロックらしい。
まあ、優勢なのはいいことだ。峰も『どうせ最後は乱戦になるから、万一澄空に何かあった時のためにも、序盤は体力を温存しておいてもいい』と言ってたし。
これだけメンバーが揃った闘いで、前回のようにあの少年の力になれるとは思えないが。
と。

「あー、疲れたわ」

乱暴にドアが開かれる。
現れたのは、猫のような眼が印象的な活発そうな女性。
なかなかに目立つ風貌だが、その印象が吹っ飛ぶくらいに強烈な力を感じる。
かなり高ランクのＢＭＰ能力者だ。
戦闘で高揚しているのか、周囲に与えるプレッシャーを隠そうとしていない。
といっても『ついうっかり』抑え忘れた麗華ほどではないが。

そういえば、なぜか澄空悠斗からは、この種のプレッシャーを感じたことがない。
覚醒した当初は力を抑える術を知らないうえに、１８７ものＢＭＰなのだから抑えきれるはずもないのだが。
緋色先生に聞くと『控えめなのが悠斗君のいいところよね』と言っていた。

「そういう問題では、ないと思うのデス」
「ん？」
しまったと思うエリカ。
つい考えていることを口に出してしまったらしい。
どう見ても今まで散々闘ってきてちょっと休憩に立ち寄ったような眼の前の女性からすると、たるんでいると思われても仕方がない。

「自分……」
「は、はいデス……」
猫のような眼をすぼめて見つめてくる女性。
尋常ではない迫力だった。

「めっちゃ、可愛いな！」
「ハイ？」
今度は、エリカが疑問符を浮かべた。
「な、な。その金髪本物やろ？　キラキラしとるもんなー。うちも一時染めようと思ったけど、なんかうまく染まりそうになかったからやめといて正解やったわ。でも、顔の線は柔らかい気がするし、言葉もうまいなー。ひょっとしてハーフさん？」
「は、はいデス。父がこの国の生まれデスが、母が違いマス」
「そうかー。あ、勘違いせえへんといてな。別に変な好奇心とか偏見とかやないんや。ただ、うち、可愛い子がめっちゃ好きやねん！」
「そ、そデスカ……」
それはそれでどうかと思うが、エリカは返事をした。
「光も、昔は、それはそれは美少女やったんやけどなー。今は、どっちかというと美人さんやからなー」
「そ、そデスカ……」
それのどこが問題なのかは分からないが、エリカは返事をした。
だいたい、いきなり光と言われても誰のことか分からない。光という名前で知っているのは、アローウエポンくらいだ。

「名前聞いてもええかな？　あ、ウチは全然怪しいもんちゃうから。電速（パルス）の犬神彰言うんや」
「あ、ハイ。私は、本郷エリカと言いマス」
傍から見ていればかなり怪しいのだが、見た目ロイヤルな割に素直なエリカは簡単に返事をしてしまう。
いや、それよりも。
「って、電速（パルス）って、クリスタルランスの方デスか！？」
「わ、知ってるんや。嬉しいわー！」
知らないはずがない。
クリスタルランスは、麗華と同じくらい有名なのだ。

チームとしては紛れもなく最強。
個人でも、アローウエポンと引退したブレードウエポンは、今でもＢＭＰハンターランクが麗華より上なのである。

「ア、じゃあ、ひょっとして光ッテ……」
「そや。アローウエポン、茜島光。今でもウチ的には全然ストライクゾーンなんやけど、最近は悠斗君のことばっかりやからなー」
「悠斗さん？」
これは、間違いなく澄空悠斗のことを言っているのは分かった。
しかし、なぜ、一か月前に覚醒したばかりの澄空悠斗とクリスタルランスに接点があるのだ？
と。

『え、援助要請です！　Ｇ－３ブロックが非常に危険な状態です。周辺のブロックはできるだけ応援に行ってください！』
さっきから良く聞く、常時慌てているような若い女性の声での放送が聞こえてくる。

「なんや、もう、中層にまで来とるんか？」
少し緊張感を取り戻した、犬神。
そして。
「Ｇ－３！？」
思わず叫ぶエリカ。
三村が配置されたブロックだ。
一応仮にも、三村はＢＭＰ１２０を超えているから、おそらく戦闘配置されているはずである。

「ん？　Ｇ－３がどないしたん？」
「友達が……、同じ学校の生徒が配置されてるんデス」

答えながら、すぐにでも飛びだしたい衝動に駆られるエリカ。
澄空を助けにきたつもりだが、良く考えれば、三村が一番危なっかしい。
彼に比べれば、たとえ能力を使いこなしていないにしても、悠斗の方が妙な安心感がある。

しかし、前回の第五次首都防衛戦とは状況が違う。
この状況で自分が飛び出していっても、はたして役に立つだろうか。

「友達かー。それは心配やな。なんなら、ウチと一緒に行こうか？」
「エ？　いいんデスか！？」
思わぬ申し出に驚くエリカ。
「ウチは今は遊軍扱いやし、誰も文句は言わんやろ」
「で、デモ……。私は邪魔ジャ……」
「なに、言うとんねん！　ウチは可愛い子に応援されると5割増しの実力が出るタイプなんや！　というか、エリカはんが来てくれんと、うち、光の方に行ってまうで。全然、応援を必要にせんタイプやけど！」
「そ、ソデスカ……」
その応援の決定方法には多大な疑問が残るが。

エリカはとりあえず、安心した。
この人なら、きっと三村を助けてくれる。

……だから、すでに死んでるとかは、なしにして欲しい。

『7月24日15時42分・A』

『きょ、局長ー！　Ｄブロックに幻影獣が侵入し始めてますー！』
緊迫したオペレータの声が聞こえてくる。
さっきから、この声の人ばっかり通信してくるけど、他にはオペレータ居ないのか？

「これは……まずいですね」
円筒型の空間の壁面に掛った５０ほどのモニターの一つを眺めながら、城守さんも同意していた。

あの『Ｄブロック』は俺も利用したことがある。自由訓練場だ。
巨大な体育館とでも言うべき構造で、ＢＭＰハンターが自由に訓練できる。
俺もこの２週間で何度か利用し、それなりのイベントもあったが、紙面の都合でここでは省略。
まあとにかく、そのＤブロックが押されていた。

もともと外層で可能な限り殲滅するというプランなので、中層は若干ＢＭＰハンターの層が薄い。
それに加えて。

「凄い数」
と麗華さんが言うように、Ｄブロックは物凄い数の幻影獣が押し寄せて来ていた。広い分、収容キャパがあるのだ。
その分、ＢＭＰハンターも多いのだが、仮にあそこが抜かれた場合は、あの数が内層に飛び込んでくる。

「仕方ありませんね……。ここは……」
『きょ、きょくちょー！』
城守さんが何らかの作戦を思いついた時、さっきのオペレータさんが、さらに焦ったような通信をしてきた。

あまりに焦っているので、ひらがなになっている！

「少し落ち着いてください、志藤君」

落ち着いている城守さん。ふむ、志藤さんっていうのか。

『Ｎ－１ブロックに巨大幻影獣が出現しましたー！　ＢＭＰ３４９です！』

「さ……！」

３４９！？

「Ｂランク幻影獣！？」

「可能性はありましたが……、まさか本当にＢランクを連れてくるとは……」

俺ほど驚いてはいないが、それでも衝撃を受けている様子の城守さん。

確かに、ガルア・テトラがＡランクである以上、ＡランクがＢランクを従えていてもおかしくはないのだが……。

モニターに目を向けると、確かに巨大な幻影獣の姿を映し出しているモニターがある。巨大な亀みたいなやつだ。

「配置的に、クリスタルランスの誰かを向かわせるのは難しいですね……。とはいえ、それ以外でＢランクに対抗できるとなると……」

考え込む城守さん。

「志藤君」

『は、はい！』

「その巨大幻影獣……そうですね、『タートル』とでも名付けますか」

『は、はい』

まんまなネーミングだ。

「そのタートルには、あまり積極的に係らないように各ハンターに伝えてください。無駄に戦力を減らしたくない」

『で、でも、このままだと、タートルが内層に！』

「問題ありません」

断定するような城守さんの返事を聞いて。

嫌な予感がした。

「麗華さんに相手をしていただきます」

麗華さんの力を疑っている訳じゃない。

というか、最強だと思っている。

でも。

嫌な予感がした。

光速のライバル

『７月２４日１５時４５分・Ｇ－３』

三村達は苦戦していた。
元々、幻影獣達は複雑な戦術なんか考えていない。
行きやすいところを攻め、行きにくいところでも気が向けば攻める。
結果、バランスを取って布陣していても、ブロックによって有利なブロック・不利なブロックが出てくる。

そして、Ｇ－３は不利なブロックだった。

「猪突猛進（オーバードライブ）！」
超加速（システムアクセル）から続く連携攻撃・猪突猛進（オーバードライブ）。
直線に加速して突撃するという単純極まりない技のため、確かに以前麗華が言っていたようにかわすのは簡単なのだが、これだけ密集してれば関係ない。
４体ほどまとめて、壁に叩きつけた。

闘いの喧騒を引き裂くような悲鳴を上げて砕け散る幻影獣達。

三村の猪突猛進（オーバードライブ）は、本人のＢＭＰが１２１という低ＢＭＰにしては、なかなかの威力だった。
加速した突進力と、槍に見立てた拳に発生させた力場ですり潰すという単純な技なのだが。

「ナイス！　ルーキー！」
誰が褒めてくれたのかは分からないほど混乱した戦場だが、誰かが褒めてくれた。

単純に嬉しい。悠斗には、分からないかもしれないが。

が。

「あいつは憎らしい！」

思わず叫ぶ。

睨みつけるのは、天井に開いた大穴。

Ｇ－４ブロックと呼ばれていた空間に、人を小馬鹿にしたような様子でプカプカ浮かびながら、こちらに向かって矢のような遠距離攻撃を仕掛けてくる幻影獣ども。

幻影獣の攻撃で天井が吹き飛ばされ、Ｇ－３とＧ－４ブロックが繋がってしまったのだ。

しかも、悪いことに、遠距離系のＢＭＰ能力者達が早々にノックアウトされ（確認した訳ではないが、誰もやつらに反撃していないんだから、そうなんだろう）、撃たれるがままになっている。

「って、うわ！」

気を散らしたのが、まずかった。

何かに足をぶつけて、派手に体勢を崩した。というか、足が地面から離れた。

「やば！」

普段ならいざしらず、これだけの乱戦の中では、格好の的である。

そして、悲しいことに、空中では超加速（システムアクセル）は使えない。

「くそー！」

衝撃に備えながら、自分の運を信じて、地面に足がつく瞬間を待つ。

と。

眼の前に、一つ目の巨人のような幻影獣が立っていた。

「あ」

死んだ。と思った。

一つ目の巨人は、三村の身長ほどもありそうな棍棒のような何か（黒く光る金属のようにも見えるが、たぶんあれも幻影獣の体の一部だ）を振り下ろしてきている。

三村も見たことがあるからわかる。

パワータイプに見える幻影獣は、実際にもだいたいパワータイプで、直接攻撃をくらうと、だいたい原型が残らない。

棍棒が振り下ろされる。

……。

……。

「……」

「ふむ。確かにイケメンやなー」

「へ？」

思わずつぶった眼を開くと。

そこには、天使様ではなく猫のような眼をした女性がいた。

オペラのヒロインにするように、三村を抱き支えながら、好奇の目で覗き込んでくる。

「はれ？」

いきなりの衝撃的な展開に頭が付いていかず、思わず間抜けな声を出す三村。

見ると、さきほどの一つ目巨人は、１０メートルくらい離れた場所で頭を掻いている。

「三村さん。大丈夫デスか！？」
最初にこちらを見ていれば、天国に来たことを疑わなかっただろう。
金髪ゴージャスなのに健気なハーフっぽい少女、本郷エリカが駆け寄って来ていた。
「あ、ああ。大丈夫」
エリカの顔を見て、少し落ち着いてきた。
（この辺が悠斗と違うところだ。ふん）
どうやら、Ｇ－３ブロックの不利を聞いて心配したエリカが、この女性とともに自分を助けに来てくれたらしい。
悠斗を助けに来た自分が、同じく悠斗を助けに来たエリカに助けられているのは褒められた状態ではないが、それでも素直に助かったと思う。

にしても、この女性は一体？

「ちょっと待っといてな」
三村をポンと離すと、トントンと足踏みする猫っぽい眼の女性。
そして。

「電速（パルス）」

視界から消えた。
比喩ではない。本当に消えた。
しかも。
女性が通った（んだと思う）あたりにいた幻影獣が、バタバタと倒れていく。
そして、倒れた幻影獣は、例外なく、漏電したかのようにパリパリと電気を発していた。

「ま、まじか……」

三村は茫然と呟く。
この能力に聞き覚えがあるのだ。
「凄いデスねー」
同心円状に、物凄い勢いで広がっていく電気死体の渦を見ながら、
これがどれだけ凄い能力なのか、いまいちわかっていないエリカが
褒める。

そう、これは、凄いどころではない。
これは、クリスタルランス・犬神彰のＢＭＰ能力。

高速移動系最強と呼ばれる女性の力だ。

三村とエリカを中心として吹き荒れる、電気を纏った暴風雨。
見る見るうちに、乱戦の一角に空白地帯ができてしまった（危なく
て、味方も近づけないのだ）。

「つ、つえぇ……」
思わず呟く三村。
同じ高速移動系と言うのが恥ずかしいくらいにレベルが違う。
互角なのは、最高速度くらいか。三村のは曲がれないが。
……それはともかく。

「やっぱり、あれはどうしようもないよな……」
諦めたように呟く三村。
見つめるのは、天井の大穴の向こうから小馬鹿にしたように激しい
攻撃をしてくる翼を持った幻影獣だ。
いくら犬神が強くても、遠距離攻撃の手段がない以上、あの距離に
居る敵は攻撃できない。
あいつらさえいなくなれば、もう少し落ち着いて戦えるのだが。

と。

「ウザいなー。あいつらー」

現れた時と同じくらい唐突に、犬神が傍に立っていた。

「うぇ！　い、いつの間に……」

驚く三村。確か、１秒前に、１０メートルくらい先で電気を纏った幻影獣が倒れるのが見えたのだが。

「どや、エリカはん。ウチもなかなかやるやろ？」

そんな三村をスルーして、エリカに向く犬神。

「はいデス！　まるで、悠斗さんを見ているようデシた！」

（いや、全然違うだろ）と思う三村だが。

「いやー……。さすがに、あの子には負けるわ」

「？」

意外な反応をする犬神。

少し気になるが、三村にはそれ以上に気になることがあった。

この犬神という女性。

強さも実績もステータスも完全に雲の上の存在なのだが、なぜか、近い将来。

（俺のライバルになる気がするんだよなー）

という訳だった。

考え事をしていると、また宙を舞う幻影獣から攻撃が飛んできた。

エリカを抱えて避ける三村と犬神。もちろんエリカを抱えたのは犬神だ。おのれ。

「エリカはんを抱けたのは役得やけど、あいつらはうざいなー」

「表現に少し引っかかりを感じますけど、あいつらがうざいのは同感です！　どうします？　やっぱり他のブロックから応援を……」

すでにこのブロックのＢＭＰ能力者が何回も呼んではいるのだが。
「やめとき。他のブロックも、手一杯や」
「こっちの方がやばいと思うんですが……」
「ま、そやな。そろそろ片づけよか」
あっさりと返答する犬神。
何か切り札でもあるのだろうか。電速（パルス）が遠距離攻撃できるなんて話は聞いたことがないが。

「さて、エリカはん」
「は、ハイ！？」
「さっき聞かせてもろうたＢＭＰ能力『豪華絢爛（ロイヤルエッジ）』やけど」
「ハイ」
「……え－名前やわー。まさしく、ゴージャスなエリカはんにピッタリやわー」
「口説いてる場合じゃないと思うんですが」
思わずツッコむ三村。
セリフだけ聞いていると和やかだが、実際は幻影獣の攻撃を避けて移動しながら会話している。
エリカを抱えているのは、やっぱり犬神だ。おのれ。
「やばやば。エリカはんがあんまりキュートやから脱線してしもたわ。改めて、エリカはん！」
「は、ハイ！」
「『豪華絢爛（ロイヤルエッジ）』を使ってくれへんかな？」
「で、デモ、さっきも言ったヨウに、斬れないデスよ」
「斬れんでええねん。いや、むしろ、斬れん方がええねん。できるだけ斬れ味を抑えてほしいんや」
「？」
「？」
揃ってハテナマークを浮かべるエリカと三村。

それでも、素直なエリカは『豪華絢爛（ロイヤルエッジ）』を展開する。

「あー、あれは、斬れそうにないなー」

三村の感想。

素直なエリカはほんとに斬れそうにない刃を作っていた。

刃というより、潰れたラグビーボールだ。隠蔽率も低く、いつもより刃が丸見えだ。

「これで一体、何を？」

「あかんで、三村君。これ見てまだ分からんのは。これから先も、悠斗君と一緒に闘っていくつもりなんやろ？」

「す、澄空が何の関係が……」

言いつつも、若干動揺する三村。

それには答えず豪華絢爛（ロイヤルエッジ）を見据える犬神。

エリカを、トンと、三村に渡す。

「じゃ、行こか。二人の共同作業や！」

表現に若干の問題はあるが、犬神は地を蹴った。

上へ向かって。

「ま……」

「マサか……」

呆然とする三村とエリカ。

犬神が通った証の電気が、豪華絢爛（ロイヤルエッジ）に残っていく。

「豪華絢爛（ロイヤルエッジ）を足場にして……」

宙を舞う幻影獣のところまで駆け上がっていく。

豪華絢爛（ロイヤルエッジ）は、宙を舞う幻影獣の高さにも何個か布陣されている。
が、大きさが不揃いなため足場にするには心もとない刃もあるし、
距離が離れ過ぎている刃がある。

「い、いくらなんでも……」
対抗心ではない。
純粋に無理だと思う三村。

だが。

「よう見とき、三村君！　これくらいできんと、悠斗君には歯牙にもかけてもらえんで！」

喧騒の中でも、不思議と届き三村の心を抉る声。

そして。

まるで光の芸術のように、行く筋もの電気の軌跡が空間に描かれた。

中盤戦

『7月24日15時57分・管制室』

管制室オペレータ・志藤美琴（22歳独身。でも、そろそろ彼氏は欲しい。どちらかと言えば年上派だけど、怖い人は苦手）はそろそろイッパイイッパイだった。

「城守局長ー！　Dブロックがもう限界ですー！」

『落ち着いてください、志藤君。G－3はどうなりました？』

「クリスタルランスの犬神さんのおかげで盛り返してますー！　物凄い勢いで！　しかも、なんだか若い男の子と女の子といい感じですー！」

『ふむ、相変わらずですね。彰君。【いい感じ】と言うのは何のことか分かりませんが……』

「そんなことより、Dブロックがー！」

城守局長には、何か算段があるのだろうが、志藤にはどう見ても限界に見えた。

というか、どうしてこれだけテンパっている自分が、こんな大事な報告をしているのだろうか？

『分かりました、Dブロックのことはもういいです。皆さんは、他のブロックに力を注いでください』

「へ……。ちょ、長官？」

いきなりの予想外な発言に、一瞬固まる志藤。

聞き返そうとするが。

『管制室聞こえてるか！　Ｎ－４ブロック突破されそうだ。至急、応援を頼む！』
「は、はい！　えと、Ｎ－４だとどこから出せばいいんだろ……」
そんな暇はなかった。

『７月２４日１５時５８分・Ａ』

「という訳で、私はＤブロックに行きます」
管制室からの通信（やっぱり、あの女の人の声だった。他に人いないんじゃないだろうな、管制室？）を終えて、城守さんが言った。
「い、いや、城守さんが行ってもあんまり意味がないんじゃ……？
それより、管制室に戻って指揮を取った方が」
プロに意見するのは身の程知らずだとも思ったが、俺は言った。
だいたい、ＢＭＰ能力者でもない城守さんがあんなところに行ったら危ないぞ。

「大丈夫ですよ。私に策があります」
自信満々で答える、城守さん。
どんな策かは知らないが、どんな策でも普通に危ないと思うんだが。
……思った以上に底知れない人だな、この人。

「それより、麗華さん」
「うん」
「Ｂランク幻影獣の方は、歩みは遅いですが確実に近づいています」
壁の上の方に設置されたモニターを見ながら城守さん。
そこに亀のような姿をした巨大幻影獣が映っている。

見た目のインパクトは、第五次首都防衛戦の時の奴の方が凄かったが、少しずつにじり寄ってくる姿を見ていると、状況的に今回の方が嫌な怖さを感じる。

……前回はどっちかというと、怖いと感じるほどの余裕もなかったからな。

「いざという時は、お願いしますね」

「問題ない」

これからBランク幻影獣を相手にするかもしれないのに、全く気負いのない麗華さん。

凄い人だよな、やっぱり。

「そして、悠斗君」

「は、はい」

「悠斗君の所にだけは敵を来させないように布陣していますが、万一のことがないとも限りません。あのAランク幻影獣が未だに姿を見せていないというのも、不気味です」

「は、はい……」

それはほんとに不気味だと思う。

あれだけ意味ありげに出て来ておいて、まさか見物だけなんてことはないと思うんだが。

「たとえ万が一のことがあっても、死んでは駄目ですよ」

「も、もちろんです」

まだ死にたくないです。

「いえ、違います」

と、城守さんがちっちっと指を振る。

「死にたくないではなく、死んではいけない、です」

『7月24日16時02分・E－4』

幻影獣は、よく自然災害に例えられる。
殲滅に成功しようとしまいと、時間が過ぎれば過ぎ去っていく。
どれだけ激しく襲撃してこようとも、引き揚げる時は驚くほどあっさりと淡白に去っていくのだ。
奴らの行動様式は謎だらけだが、少なくとも、人類の絶滅を目論んでいるのではないのではないか、という意見もある。

が、今日は違った。

今日のこいつらは、明らかに『目的』がある。
それが本当に澄空なのか、それとも別の何かなのかは分からないが、それが達成されるまで、こいつらは引き揚げない。

そして、幻影獣の実際の数は良く分かっていない。
なにせ、普段はどこにいるのかも分からないのだ。確認のしようがない。
本気になった奴らの増援がどれくらいのものなのか……。あるいは、無限なのか。

峰がそう考え始めるほど、激しい消耗戦だった。

「『砲撃城砦（ガンキャッスル）』！」

味方に当たらないように小刻みに移動しながら、圧縮した空気の塊

を連射する峰。
至近距離から撃とうと威力が落ちる技ではないが、これだけの乱戦で下手に撃つと誤射の危険がある。
なので、威力も数も絞り気味に撃っていた。

そして、気付いた。

（この技、手加減して撃つ方がよっぽどキツい！）

もちろん、それだけではない。
そもそも、乱戦は遠距離攻撃系のＢＭＰ能力者にとっては、鬼門なのだ。
近接状態での回避は難しいし、攻撃も即応性があるとは言い難い。

その意味では、三村よりよっぽどきつい。

おまけに、峰はペース配分が苦手だった。
序盤から全力で飛ばして、後は野となれ山となれタイプだった。
当然、レベルが上の相手には通用しない。
前回の入院及び、そこで知り合った少年に諭されて、そこのところをよーく反省したつもりだったんだが。

「そういえば、あいつは、どうしてるんだろうな？」

確か、小野倉太という名前だった。
一応ウエポンの属性持ちのＢＭＰ能力者だと言っていたから、この作戦にも参加している可能性はあるのだが。

「って、そんな場合じゃないな！」
眼前に迫る幻影獣に『砲撃城砦（ガンキャッスル）』を掃射。

見事撃ち倒すが、やはり全力では撃てなかった。
疲労もストレスもたまる。

「こんなことじゃ、ますます澄空に相手にされない！」

病院で、どこから入手したのか知らないが、小野に見せられた映像は衝撃的だった。
死力を振り絞る仲間（本郷エリカのことだ）を背に庇い、生まれて初めて発動したＢＭＰ能力でＢランク幻影獣を叩き斬った同級生。
こいつだ、と思った。
ＢＭＰハンターは、好敵手が居た方が上達が早いというのは、周知の事実だ。
剣麗華の強さは別格だが、彼女をライバルにしようとは思わなかった。
別に、女性だからというつもりはない。
……何か違うのだ。
澄空悠斗を見て、それが分かった。

あいつはこれからどんどん強くなる。
それに必死で付いていけば俺も強くなる。

峰が考えているのはこれだけだった。
別に、大した伏線も事情もない。
ただ単に強くなりたいだけなのだ。

幻影獣を倒すために。

なのに。

「くそ……」

この間Ａランク幻影獣に奇襲された時、麗華を除いて誰も（もちろん自分も）反応できなかった『捕食行動（マンイーター）』をあっさりと叩き斬って見せた同級生。
あの時は、心底仲間を心配している顔に見えたが。

（ひょっとして、足手纏いと思われたのかもしれない）

そんなことはないとも思うが、もしそうなら屈辱だった。
助けあうのはいい。
だが、足を引っ張るしかできない実力なら、ＢＭＰハンターなんか辞めた方がいい。

幻影獣が目の前に迫る。
泥でできたような、個体と液体の中間のような姿をしていた。

「ふざけるな！　澄空悠斗ー！」
ついにタガが外れた。
全力で『砲撃城砦（ガンキャッスル）』を掃射してしまった。
今までとは比較にならない威力で、幻影獣の体に拳大の穴が無数に開いていく。
幸いに誤射とはならなかったが。

「あ」

力が尽きた。
感覚でわかった。
そして、間が悪いことに、この液体の体を持つ幻影獣は、『砲撃城砦（ガンキャッスル）』では倒せない敵だった。
粘液のような腕に頭を掴まれる。途端、呼吸ができなくなる。

あまりに情けない幕切れ。

せめて最後は潔くしようという思いと、まだ諦めたくないという思いが同時に生まれ。

結局何もできずに、酸素を奪われていく峰。

周りのハンター達も助けに来れる状態ではなさそうだった。

そして、いよいよ限界を迎えようとした、その時。

閃光が走った。

「約束」の解釈

『7月24日16時10分・A』

「中層が破られた」

と、抑揚のない声で麗華さん。

俺も一緒にモニターを見ていたから、状況は分かる。

あの亀みたいなBランク幻影獣が、ついに中層を抜けてCブロックに突入してきたのだ。

ちなみにCブロックは、中層と内層Aブロック（要は、ココな）を繋ぐ、いわゆる中庭だった。

ついでに言うと、内層にはBMPハンターを配置していない。つまり、あのBランク幻影獣を止める者はもう誰もいないということだ。

どうだろう？　こんな状況の時くらい「中層が破られたー！」と思いっきり悲痛に叫んでもいいと思うのだが。

「じゃ、行ってくる」

あっさりと告げる麗華さん。

ちょ！

「ちょっと待った！」

「ん？」

振り返る麗華さん。

「……」

「何？　悠斗君」

「……えーと」

何を言うつもりだったんだろう？

状況的には、先ほどの打ち合わせ通りの展開だ。
戦力を無駄に消費させないために、あのBランク幻影獣には外層・内層を素通りさせて、Bブロックで麗華さんが撃退する。
切り札を使っている時点で良い状況でないのは明白だが、作戦的には間違いないんだと思う。
それは分かっている。
分かってはいるんだけど。

「か、代わりに俺が行っちゃ駄目かな？」
「？　敵の狙いは悠斗君なんだから、私がここに残っても意味はない」
「そ……」
そですよね？
「それに、少なくとも今は私の方が、安定した戦闘ができる」
「いや……」
今に限定しなくても、おそらく未来永劫、麗華さんの方が強いっす。

……強いのは分かっているんだけど……。

「私は抜かれたりしないから、Aブロックは安全。悠斗君は大丈夫」
いや、そんなことは心配……してないのもまずいけど、今はそれよりも。
「れ、麗華さんだって『絶対』は、ないだろ？」
「そんなことない」
「へ？」
「悠斗君が『私のいないところでは死んではいけない』以上、私も悠斗君が見ていないところでは死なない」
「あ……」
そのセリフは覚えている。

第五次首都防衛戦の時に、別れ際に麗華さんが言ったセリフだ。
「それが、絶対」
「……そっか」
『絶対』ならしょうがない。

「分かった。首を長くして、帰ってくるのを待ってるよ」
「そんなにかからない。すぐ帰ってくる」

『7月24日16時16分・管制室』

管制室オペレータ・志藤美琴（22歳独身。でも、そろそろ彼氏は欲しい。どちらかと言えば年上派だけど、怖い人は苦手。局長みたいにパーフェクト過ぎる人も、プライベートで付き合うにはどうかな？）は、戦闘中にも関わらず戦闘によらない興奮で顔を赤らめていた。

（い、今の会話、聞いていて良かったのかしら？）
そんなことも考える。
今は戦闘中で、ここは管制室だ。プライベートだのなんだの言っている状況ではなく、まして会話が筒抜けになっているのは、あの二人も承知のはずだ。

（というか、今の。なんだか愛の告白みたいにも聞こえたんだけど！）
もちろん、ただの『戦友同士の再会の約束』にも聞こえたが。
そういえば、あの二人は一緒に住んでいるとのことだ。ちょっと変わり者とかなり朴念仁のカップルとはいえ、若い二人だ。どうにかなってないとも限らない。

（いや、そんなことはどうでも良くて……）
今は戦闘中だ。
「でも、あの二人……。なんだか、いいなぁ」
とても、いい。
まるで、映画の主人公達みたいだ。こんな時に不謹慎だが。
と。

「新たな幻影獣の反応あり！」
志藤ではないオペレータの切迫した声が飛ぶ。
たまたま、目立つタイミングで志藤の出番が多いだけであって、別に他のオペレータが仕事をしていない訳ではない。
「ひ、非常に強力な幻影獣です！」
「またＢランク！？　ＢＭＰを測定して、早く局長に連絡を！」
どう見てもオールドミスタイプなのに、地味だけど優しい男性と結婚して可愛い子供もいるらしい主任オペレータの指示が飛ぶ。

「そ、それが……」
問われたオペレータが口籠る。
「どうしたの？　早く、測定を」
「いえ、測定結果は出ました……。機器の故障でなければ、ＢＭＰ３６８……です」
「さ……！」
「３６８！！」
管制室内に衝撃が走る。

「こっちでも確認しました！」
「こっちでもです。誤差なし！　間違いありません！」

「こっちもです！」
次々と最初の報告者を肯定する同僚達。
「Ａランク幻影獣……！」
主任が呻く。
「とにかく！　どの方向から来てるの？　確認して、局長に報告を！」
「そ、それが……」
最初の報告者及び、追加で確認したオペレータ達が、皆一様に一目で緊急事態だと分かる顔をする。
「今度は、何！？」
オールドミス（っぽいけど違う）主任が、少しイラついたように叫ぶ。
オペレータ達は一瞬顔を見合わせ。
結局、最初の報告者が口を開いた。
「敵幻影獣、すでに建物内に侵入しています」
「なんですって！」
あまりの展開に、大声を出す主任。
妄想を途中で寸断され少し思考停止していた志藤も、ようやく我に返って、敵幻影獣のＢＭＰと位置を確認する。
「嘘……」
そして、知った。
ＢＭＰ３６８は間違いない。
どうやったのか、すでに建物内に侵入しているのも間違いない。

そして、その場所は……。
志藤はマイクを取る。
「Aブロック！　澄空悠斗君！　応答してください！」

『7月24日16時18分・A』

「お久しぶり」
小学生くらいの少年の外見をした『何か』が言う。
「……」
「結構元気みたいで何より。実はミーシャに『あんなことして追いつめたら逆に力を出せなくなるタイプもいるのよ』って怒られたんで、心配してたんだ」
なんでだ？
さっきまでいなかったはずだ。
高BMP能力者と同じく、強力な幻影獣にも、それなりの気配がある。
傍に居るだけで全身が総毛立つような違和感の存在を、どうしてここまで接近されるまで気付かないんだ？

「……どこから入った？」
「？　決まっているじゃないか。あそこの扉だよ。他に出入り口はないし」
少年が指し示すのは巨大な扉。
こいつの言うとおり、Aブロックの唯一の出入り口だ。
しかし、あそこからは、さっき麗華さんが出て行ったはず。

そもそもBブロック『中庭』で麗華さんが待機している以上、誰もAブロックに入れるはずがない。

「劣化複写(イレギュラーコピー)：超加速(システムアクセル)！」

小粋な会話に応じると見せかけて、三村のＢＭＰ能力『超加速(システムアクセル)』を使い、唯一の出入り口からの脱出を図る俺。ありがと三村、物凄く役に立ったぞ。

が。

「あれ？」

この場の状況にそぐわない、自分でも驚くほど間抜けな声が出た。だって。

「扉がない……」

さきほどまで確かにあり、目の前の少年が入ってきたと主張する、Aブロック唯一の出入り口がない！

というか、俺は扉に向かって『超加速(システムアクセル)』したはずなんだが。眼の前で突然、扉が消えた。

慌ててAブロック全体を見渡すが、やっぱりどこにも扉が見当たらない。

「思い切りの良さは感心するけど。悪い獣を倒す正義の勇者が、そんな臆病風じゃダメなんじゃないかな？」

眼の前の少年（って、いつまでも現実から目をそらしていても仕方ない。ガルア・テトラだ。Aランク幻影獣だ）は、人さし指を立て腰を折って上半身を突きだす、いわゆる『駄目だぞ♪』ポーズを取っている。

「……」

こいつの能力なのか？

扉をなくす能力なんて聞いたこともないぞ？

「あ、心配そうな顔をしているから言っておくけど、僕のＢＭＰ能力は『捕食行動（マンイーター）』だけだよ」
「なら、これは一体なんだというんだ？」
扉のない壁面を指して言う、俺。
「『お友達』かな？　誰も一人で来るなんて言ってないよね？　って、あれだけゾロゾロ連れて来てるんだから、いまさらか♪」
腰に手を当て、胸を天に向かって張った姿勢で楽しそうに宣言するガルア。
「まさか！」
別のＢランク幻影獣がいるのか！？

「大丈夫。誰にも邪魔はさせないから。もし、この場に乱入してくる奴がいたら、敵味方関係なしに僕が食べてあげるよ」
ぺろっと小さい舌で唇をなでるガルア。
そして。
ガルアの背後の空間から、滲みだすように巨大な『口』が姿を現す。

「僕の『捕食行動（マンイーター）』がね！」

紹介された『口』は。
ガルアと同じような舌の動きで、唇を撫でた。

天閃（レイ）

『7月24日16時23分・E－4』

光が走る。
敵が砕け散る。
光が走る。
敵が吹っ飛ぶ。
光が走る。
敵がなくなる。

それは、一言で言えば光の芸術だった。
もしくは、光の暴力だった。
峰を窒息させようとした泥の幻影獣を一瞬で焼いた光線は、それから立て続けにこのE－4ブロックを襲った。
一目で分かる、圧倒的なまでにレベルの違う遠距離攻撃。
いや、遠距離と言っていいものか？　なぜなら、ここは室内だ。

「凄い……」
峰は、レーザーのような威力よりも、そこに感心していた。
あれだけ攻撃範囲の広い光線なのに、これだけの密集・混戦状況で、味方のBMPハンターに一切あてずに幻影獣だけを攻撃している。
しかも『狙い澄ました』というような頻度の攻撃ではない。
それこそ、雨あられと光線が飛んで来ているのだ。
あまりに危なっかしくて、BMPハンター達は誤射を恐れてさっきから動けなくなってしまっている。
と。
不意に、光線が止んだ。

すでに動きを止めていたＢＭＰハンター達に加えて、めっきり数を減らした幻影獣達も逃げまどうのをやめる。
最初に光線が走ってから１０分弱。
一方的な光の殺戮で、形成は一気に逆転していた。
その、ほぼ勝負のあったＥ－４ブロックに、靴が床を叩く乾いた音が響く。
人も獣も、皆、その方向を見た。

「初期の迎撃フェイズが終了して、遠距離攻撃系ＢＭＰ能力者としてのノルマは終わったから」
それは、眠そうな眼をした眼の覚めるような美女。
「姉として悠斗君の応援に行こうとしていたのに」
少し不満げな表情で、その女性はなんの警戒もなく近づいてくる。
「悠斗君の名前が聞こえたから寄り道したら」
獣と付いていても本能はないのか、一匹の幻影獣が女性に襲いかかる。
「天閃（レイ）」
呟きとともに、かざした右手から照射される必殺の光。
全身を光に包まれて消滅する幻影獣。
「やっぱりいないし、悠斗君」
女性はそう言って、あの光線を出したとは思えないほど可憐な手を口に当てた。

「しょうがない、片づけようか」
『さ、掃除始めよ』くらいの軽い口調で、眼の覚めるような美女が言う。
差し出される右手。
その前に、直径６０センチほどの光の輪が姿を現す。
光の輪は回転を始め。
徐々にその速度を上げていく。

「天閃（レイ）」
呟く、女性。
次の瞬間、回転する光の輪に合わせるように、次々に光線が撃ちだされる！

「ふ、伏せろー！」
誰かの声がする。
さきほどまでの、この攻撃のコントロールを忘れた訳ではないだろうが、反射的に伏せてしまいたくなるくらい、圧倒的な光の量だった。
事実、ほとんどのＢＭＰハンターは伏せた。
幻影獣も何体かは伏せたが、光線は容赦なく獣がいる地面を抉った。

そして、峰は。
数センチと離れない空間を、必殺の光が横切っていく状況にもかかわらず。
ただ、その光景に見とれていた。

★

戦闘は終わった。
幻影獣軍の増援には底がなく、今でも敵戦力は増え続けているだろうが、少なくともＥ－４ブロックには敵の姿は完全になくなった。
完全にだ。
破壊の光線が、最後の一匹まで、完全に根こそぎ焼きつくしてしまった。
しかも、あれだけの攻撃で無駄撃ちや誤射が全くなかった。
制圧型の攻撃力と狙撃型の命中力を高い次元（ほとんど反則なほど

に）で融合させた完璧な攻撃だった。

峰はこの人物に心当たりがあった。

というか、その人以外に、こんなことができる人が居るとは思えなかった。

最強ＢＭＰチーム『クリスタルランス』支援担当にして、メインアタッカー。

個人のＢＭＰランクでも、あの剣麗華を上回っている凄腕ハンター。

「アローウエポン。『天閃（レイ）』の茜島光」

男とも女とも取れる名前だったこともあり、峰は、今の今までアローウエポンが女性という話を信じていなかった。

別に、女性軽視をしている訳ではない。

単純に『氷のような心を持って、機械のように正確に淡々と仕事をこなすプロフェッショナルで屈強な男性』をイメージしていたのだ。

自分の。いや、全ての遠距離攻撃系ＢＭＰ能力者にとっての憧れの存在。

イメージギャップは甚大だった。

眼の覚めるような外見に反して、その表情は眠たげで優しげで。

両手を組んで、上にのばして「うーん」とか伸びをしている姿はプロフェッショナルとも屈強ともかけ離れていて。

でも強い。圧倒的なまでに。

話したい。

なんでもいいから話して、聞きたい。

澄空悠斗どころじゃない。自分の最終目標が、すぐそばにいるのだ。

戦闘の方法、能力制御のコツ、闘う理由、好きな食べ物、趣味・嗜好なんでもいい。
とにかく、何かを話さないと！

「君」
「と、とりあえず、好きなタイプは何ですか！？」
「？　それは、もちろん、ユトユトだけど？」
「へ？」
固まった。
今自分が口走ったセリフと、なぜか茜島光が自分に話しかけてきたという事実と、聞きなれない渾名でさらりと答えられてしまったことに固まった。
「え、えーと……」
（何はともあれこれはチャンスだこれを足がかりにもっとお話をというかまず不躾なことを聞いたことを謝らないとその前にユトユト氏のことはメディア等に話さないと約束しないとというかアローウエポンに恋人がいたなんて話は初めて聞いたまあ性別すらはっきり信じてなかったくらいだからあたりまえだけどというかそんなことより）

とりあえず、自己紹介をしないことには。

「す、すみません。唐突に。俺は、新月学園１－Ｃの峰達哉と言います！　能力名は『砲撃城砦（ガンキャッスル）』です！」
「あら、ユトユトと同じクラス。どうりで名前を呼んでたわけだ」
「へ？」
今、何て言った、この人？

いぶかしむ峰の前で、茜島光は優雅に一礼し。
「初めまして。私は『クリスタルランス』所属、アローウエポン・

茜島光です。いつも、弟がお世話になっています」
「いや、こちらこそ……。って、弟！」
びっくり仰天した。
「い、いや、ちょっと待ってください。うちのクラスには茜島なんて名字はいませんよ！」
もし居たら、土下座してでも頼み込んで家に案内してもらっているところだ。小遣いギリギリのお土産持参で！

「まだ、正式には姉弟になっていないから」
「そ、そうですか……。って、ちょっと待ってください！」
正式一歩手前の姉弟とかあるのか、この世界に！？

「実際に、ここにいる」
「で、ですよね！」
思わず同意してしまう。
というか、彼女の言うことを否定する奴がいたら、自分が代わりに論破してやらなければと瞬間的に決意した。

（しかし、『ユトユト』か……）

どういう関係かは分からないが、この渾名が本名をもじって付けているのなら、候補はかなり絞られる。
峰は、クラスメイト全員の姓名を完全に覚えている真面目な生徒なのだ。

今まで全然聞いたことがなかった：あんまり話したことのない奴の可能性が高いな。もしくは最近知り合った奴か。
ユトユト：単に繰り返しているだけの可能性が高い。
ユト：ユト、ユトウ、ユトオ、ユウト。
どうりで、名前を呼んでいた訳だ：さっき名前を呼んでいた奴だな。

……。

（ちょっと待て）

「すみません。ユトユト氏の本名をお聞きして、よろしいでしょうか？」

必要以上の敬語になる。

「澄空悠斗」

「やっぱりですか！」

思わず、大声を出す。

しかし、良く考えれば、周りは名だたるハンターばかりで、しかも今は戦闘後で、話している相手はアローウエポン。

このノリはひょっとして、かなりまずいのではないだろうか？

というか、自分はこういうタイプではないはずだ。こういうのは、むしろ三村のキャラだ。

「ところで、峰君」

「は、はい！」

勢いよく返事する。

あとで顰蹙を買ったって構うものか。今、この人と話せるのなら。

「君は、悠斗君のために、ここに来たの？」

「それは……」

もちろん。と言おうとして止まった。

眠そうな目が、わずかに真剣な色を帯びている。

これは、ノリや勢いで答えてはいけない質問だと感じた。

よーく考えて。

考えて……。

考える必要などなかったことに、気がついた。

「そうです。俺は、澄空の助けとなるために、ここに来ました」

言った途端、彼女の顔が明るくなった。

その表情を見て、さっきからの一連の話が、彼女にとっては伊達でも酔狂でもなかったことを確信する。

「良かった。今でも、やっぱり、悠斗君は悠斗君みたい」

いや、これはひょっとしたら、ただの姉弟なんかよりも、もっと……。

「あ、あの……。聞いてもいいですか？」

澄空と貴方のことを。

「会ったのは二週間前。私は、悠斗君と家族になりたいと思っている」

「え」

「それだけ」

「……」

もちろんそんなことはないはずだが。

これ以上聞くのは無理そうだった。

いや、でも、一つだけ。

「どうして、澄空のお姉さんになりたいんですか？」

「強いから」

「え？」

「本当の意味での強さを持っていると思うから」

「……」

「でも、無理するタイプだから」

不器用な嘘

『7月24日16時43分・A』

「劣化複写（イレギュラーコピー）：超加速（システムアクセル）！」

三村の能力を借りた超バックステップで距離を取る。

勢い余って5メートルほど後方移動してしまったが、全然無駄ではなかった。

さっきまで俺の居たところの床が半径1メートルほどごっそりなくなっていた。

「喰った……」

思わず呟く。

あの『口』がまともな生き物ではないのは分かっていたが、さすがに床をガリガリと咀嚼されると気が滅入る。

「駄目じゃないか。なんでもかんでも食べたら駄目だって言ったろ？」

『メッ』みたいな口調でガルアが言うが、もちろんそんな可愛らしい状態ではない。

あの『口』に呑み込まれたら異次元に飛ばされるという触れ込みだが、あの歯……というか牙も、相当な破壊力があるみたいだ。

「劣化複写（イレギュラーコピー）：幻想剣（イリュージョンソード）：断層剣カラドボルグ！」

麗華さんの能力を借りて、断層剣カラドボルグを創り出す。

この技は当たりさえすれば最強の攻撃力（こども先生談）がある。

この二週間、この動作ばかりを練習してきた。

二週間前、麗華さんの前で大恥をかいた時の速さとは、『使用前』

『使用後』くらいの差があるはず！

「ひょいっ」

が。

小馬鹿にした口調とともに、わずかに身をかがめたガルア・テトラの上に、必殺の断層が姿を現す。

外れた！

「もう一丁！」

体勢が崩れた（と信じたい）ガルアに向けて、今度は振り下ろすような一撃を見舞う。

俺の剣の軌跡をトレースし延長するかのように空間に亀裂が走り。

「ひょい」

今度は横にかわされた。

「な、なんでだ……？」

思わず嘆く。

二週間前とは違うはず。

麗華さんみたいに神業的な速さで振りまわすことはできないけど、『これなら実戦でもなんとか使えるかな？』と訓練教官の人も言っていたのに……。

「全然駄目だね。澄空悠斗」

『口』の唇を撫でながら、ガルアが言う。

「剣が『重すぎる』んだよね。振りかぶった瞬間から、剣の軌跡も、空間亀裂のでき方も完全に予測できるよ」

「な！？」

「そのオリジナル……剣麗華はさ、速いだけじゃなくて色々小細工もしてるんだよ。もちろん僕はあんまり興味ないけど」

「……」
「君は、フェイントすらできないんじゃないかな？」
「……」
できないよ。
できるか、こんな剣で！
麗華さんの技術は、一体どうなってるんだ？

「だいたい！　だね」
ガルアが『口』に命令を出す。
『口』が向かってくる。
「劣化複写（イレギュラーコピー）：超加速（システムアクセル）」
まともに走ったんじゃ逃げきれない。
三村の能力を使って、とにかく逃げまくらないと。

「管制室！　聞こえますか！　管制室！」
『……』
逃げながら管制室に呼びかけるが返答がない。
というか、ここをモニターしてないはずはないから、すでに向こうから連絡があっていいはずなんだけど、管制室に何かあったのか？

「君は間違ってるんだよ」
何がだ！？
「人類最強のＢＭＰを持ちながら、よりによって複写系能力なんて」
「？」
「自分より弱いやつらを真似て、一体どうするつもりだい？」
「？」
なんの話だ。

「君は、自分から最強になることを放棄したんだ」

『7月24日16時52分・C』

中層とAブロックを結ぶ中庭。
ブロックC。

一人でBランク幻影獣を任された剣麗華は。
苦戦していた。

「断層剣カラドボルグ」
亀のような幻影獣の腕の一撃をかわしながら、一瞬でカラドボルグを具現化、居合抜きのような速さで振りぬく。
今の澄空悠斗が見れば、それがどれほど芸術的で無駄のない動きか少しは理解できるだろう。
もちろん亀のような大型幻影獣にかわせるはずもなく、甲羅の部分にまともに空間亀裂が走る。

が。

「やっぱり、効いてない」
さしたる動揺も感じさせない声で呟く。
が、疑問には思っていた。

外見からして防御力重視の幻影獣だという想像は付いていたが、カラドボルグでダメージを与えられないというのは異常だった。
そもそもこの剣は、『どれだけ使いにくくてもいいから、とにかく当たれば敵を倒せる、それもできれば大量に』という大胆なコンセプトで創造した剣だった。
天賦の才がある麗華が使うにはこれほど向いている剣もないかもし

れないが、おかげで悠斗は苦労している。
それはともかく。

「っ」
ガクンと膝が落ちる。
別に攻撃された訳ではない。
ただ、唐突に膝をついた。
「っ」
立ち上がって場所移動。
さっきまでいたところに、Bランク幻影獣タートルの腕が振り下ろされる。

「当たると、少しまずい」
何の特殊能力もなさそうだが、その重量だけでも十分な脅威だ。
それでも、普段ならまず当たることを心配するようなスピードではないのだが。

「ちょっと、まずい」
息が乱れている。
限界を超えて動き回ったとか、極度の緊張で一気に疲労が蓄積したとかではない。
麗華にして見れば、朝のランニング程度の動きしかしていない。（麗華が毎日朝のランニングをしているということではない。念のため）

現実から目をそらしてもしょうがない。
明らかに麗華の体調はおかしかった。
攻撃が通じないのも、敵の防御力が高すぎるのではなく、カラドボルグの威力が落ちているからだ。

というか、頭が痛い。
割れるように痛い。
頭痛なんて、覚醒時衝動の時以外したことなかったのに。
体も鉛のように重い。手足の先の方の感覚が、どんどんなくなっていく感じがする。

「少し無理があったかもしれない」

とてもとても冷静に分析する麗華。

『7月24日17時00分・M－4』

開いた窓から幻影獣が飛び降りていく。
窓という窓からどんどん飛び降りていく。
襲撃方法から考えて、ほとんどの幻影獣は空を飛べるはずだが、飛び方を忘れたかのように地面に向かって一直線に落ちていく。
このくらいの高さで滅びるような連中ではないが、地面に落ちた幻影獣は立ちあがる気配がない。
どころか、小さい幻影獣から、どんどん消滅を始めている。

「相変わらずの支配力ね……」
こども先生（呼んでいるのは、澄空悠斗だけだが）こと緋色香が言う。
相手は、紅蓮の瞳を輝かせている姉だ。

「大したことではありませんよ。彼らに『もう存在を保てない』と認識させただけです。万一のことを考えて、先に飛び降りてもらいましたが」

姉の『アイズオブクリムゾン』こと緋色瞳が答える。
ちなみに『万一のこと』とは、たまに消滅の間際に爆発する幻影獣がいるからだ。滅多にいないが。
「ところで、せっかく注意したにも関わらず姉さんの眼を見ちゃったハンター達が動かなくなっちゃったんだけど、大丈夫なの？」
「大丈夫ですよ。『アイズオブクリムゾン』は、強い意志を持つ人間にはかかりませんから」
「その『強い意志』の要求が高すぎるような気もするんだけどな……」
M－4ブロックに居た三分の一近くのハンター達が、呆けたような顔で涎を垂らしながら、突っ立ったまま動かない。（ちなみにあとの三分の一は腰を抜かしていて、その他は単純にビビっている）。
どうして人間は、「見ちゃだめ！」と言われると見てしまうのだろうか？

「小学生でも耐える子もいるんですけどね……」
「え？」
「なんでもないです」
フイっと眼をそらす瞳。

「支配系最強と言われて長いのに、まだまだ支配力が増しているんじゃないかしら？　我が姉ながら驚くばかりね」
悠斗がいれば、「むしろ、二人が姉妹ではなく親子に見えそうなことに驚きを感じます」とか言って小突かれるところだが、幸い悠斗はいなかった。
が。

「私は、むしろ、あなたがこんなところで油を売っていることの方に、驚きを感じますが」
「え？」

思いもかけぬ強い口調に、驚く香。
「油なんて売ってないわよ。姉さんほどじゃないけど、私もなんとか役に立とうとしてるわよ」
「……ほんとに分かってないんですか？」
「な、なにがよ……」
悠斗でなくても、お母さんに怒られているお子様にしか見えない仕草で返答する香。

「危険なのは分かっているけど意思を尊重したい、とか、いざとなったら自分が何が何でも守るから悔いのないよう行動させてあげたかった、とか、そういう考えなら私も理解できたのですが……」
やれやれ、という仕草をする瞳。
「だ、だから、なんのこと！？」

「麗華さんのＢＭＰ中毒症」
「！？」

「忘れた訳ではないですよね？」
「忘れてなんかないわよ。でも、今朝も念のため調べてみたけど何の異常もなかったわよ。そりゃ、何にだって絶対はないけど」

「あなたの『アイズオブエメラルド』には、欠点があります」
「……え？」
唐突なセリフに、言葉を失う香。
「何よ。姉さんほど支配力がないこと？」
「それは単なる個性でしょう？　欠点ではありません」
「じゃあ、何？」
逆に問われた瞳は、二・三回瞬きをした。
次に眼を開いた時、赤い輝きが幾分弱くなっていた。

「『アイズオブクリムゾン』を抑えました。香、今の私の状態を診れますか？」
「そりゃ『アイズオブクリムゾン』さえ抑えてくれれば……。って、あれ？」
近くに寄る。
普段悠斗にしているように、ほとんどすがりつくくらいの距離で姉の瞳を覗き込む。
ここにはいないが、三村が居れば「な、なんだかちょっとどきどきする絵だな、悠斗！」と盛り上がるに違いない。

「ど、どうして？　診れない……」
呆然とする香に、瞳は瞬きをひとつして。
「『アイズオブクリムゾン』は嘘に弱い」
「嘘？」
「対象者が見せたくないものは見えないし、見せたいものには騙される」
「ま、待ってよ！　今まではそんなこと一度も！」
「幻影獣は嘘なんか吐きませんし、あなたに診てもらおうという人たちにも嘘をつく動機がありませんでしたから」
「そ、それって……」
ようやく香にも、瞳が何が言いたいか分かった。

「麗華さんはそれを知ってた……？」
「侮っていた訳ではないでしょうが、あの子はあなたが思っているよりも聡明な子です。知っていてあえてそれを伝えなかったのは、たぶん私と同じ理由なんでしょう」
「……私は、こんな欠点のあるＢＭＰ能力で、今まであの学園で教師をやってたの？」
澄空がいても三村がいても、ここで「そんなことより、その外見の

方が驚異です」とは、さすがに言わないだろう。

「欠点のない能力などありません」

「……」

「問題があるとすれば、それは使い手の方です」

「っ！」

辛辣とも取れるセリフに、俯く香。

が。

「姉さん。ごめん。ここ、任せてもいい？」

「それこそ、愚問というものです」

ここで、ようやく僅かな笑顔を見せる瞳。

「ほんとごめん！　あとで、ビッグチョコサンデーマンデー風味をおごるから！」

謎の商品名（といっても、新月学園学食で売っている）を叫びながら、走り出す瞳。

と、その足が止まった。

「姉さん、実は一つだけ聞きたいんだけど……」

「なんですか？」

「姉さん、ひょっとして、悠斗君に昔会ったことある？」

「？　どうして？」

聞き返す瞳。

「あ、い、いや。ごめん。やっぱ、いい。へんなこと聞いてごめん！」

その顔を見て、あっさりと質問を撤回して、こんどこそ走り去る香。

「どうして……？」
その後ろ姿を見ながら、ひとり呟く瞳。

「そういえば、どうして今まで言ってなかったのかしら？」

ブレードウエポン

『7月24日17時07分・A』

俺の劣化複写（イレギュラーコピー）は、一度見た能力なら（劣化状態でだが）真似できるという能力だが。
実はもう一つ大きな特徴がある。

なんとこの能力、発動に特別な手順が必要ないのだ。
一度見たことがあり、それが使える能力であれば、何の苦労もなく発動することができる。
……使いこなすのは、別の問題だが。

「劣化複写（イレギュラーコピー）：砲撃城砦（ガンキャッスル）！」
一度も試し撃ちしたことのないＢＭＰ能力だが、今回も問題なく発動してくれた。

圧縮された無数の空気の弾が（どうやって圧縮したかは分からん。とりあえず、能力だということで納得してほしい。もしくは峰に聞いてくれ）ガルア向かって飛んでいく。
いくらなんでも、これは避けられないだろう。
致命傷は無理でも、牽制くらいには……。

「あーん」
間抜けな声を出したのは、ガルアだ。
そして、それに答えるようにガルアの前に立ちふさがったのは『口』だ。

「な！」
驚愕する俺。
紫の唇を見せつけるように、『口』が大口を開ける。
と、無数に撃ち出した圧縮空気弾が『口』に吸い込まれていく。

「ちょ……」
思わず文句を言いそうになる俺。

「やれやれ……。僕の『捕食行動（マンイーター）』をただのイロモノＢＭＰ能力とでも思ってたの？」
イロモノというより、ゲテモノだと思うけどな。
「これでも僕は、Ａランク幻影獣だよ。単体戦・集団戦、接近戦・遠距離戦、攻撃・防御。全てにおいて、この子には隙なんてないよ」
紫の唇（『口』の方のだ。ガルア自身も紫の唇を持ってる）を撫でながら言う、ガルア。
ヤバイ。こいつ、マジで強い。

と思う間もなく、『口』が襲いかかってくる。
「劣化複写（イレギュラーコピー）：超加速（システムアクセル）！」
『口』の下を潜り抜けるようにして、ガルアに接近する。
近づいたところで、カラドボルグにＢＭＰ能力を切り替えて突き刺す！

……カラドボルグは、刺すのにも使えるのかって？
麗華さんは「たぶん、大丈夫」って言ってた！

と。

「いい！」
眼の前に、『口』が居る。

なんでだ！？
さっき振り切ってきたのに！
いずれにしても、これはマズイ。
「止まれー！」
両足に力を入れて、地面をこする。
が、全く止まりそうにない。なんて、融通の利かない能力だ。
「あーん」
ガルアのセリフが今度は冗談に聞こえない。
マジで死ぬ。
「お、おおお！」
全力で地面を蹴って、右に曲がる。
ほんのわずかな方向転換には成功したが、とても体勢を保っていられない。
完全にバランスを崩して、転倒する。
それでも勢いは止まらず、まるでコントのように、ぐるぐると回転しながら転がっていく。
壁にしこたま背中を打ちつけて、ようやく止まった。
「な、なんなんだよ……」
涙目になりながら、ガルアの方を見ると。
口の端から端まで5メートルはある『口』が『二つ』。
空中に漂っていた。
「今のは良かったよ、澄空悠斗」

『7月24日17時12分・D－1』

陸のナイフが、幻影獣の肩口を捉える。
明らかに浅い。幻影獣も、構わず反撃してくる。
が、その動きが途中で止まる。
その隙に、陸のナイフが一閃。
深手を負いながらも反撃しようとした幻影獣の動きが、また止まる。
そして、陸のナイフが幻影獣にとどめを刺した。

傍から見ていれば、何が起きたのか分からないだろうが、これがクリスタルランスのルーキー、ダガーウエポン・坂下陸のＢＭＰ能力『連携攻撃（ラピッドアタック）』である。
陸の攻撃を受けた敵は、陸の連続攻撃が中断されるまで反撃できなくなる。
原理は分からない。精神に作用しているのか、なんらかの力で動きを抑えるのか、あるいは空間制御系のＢＭＰ能力なのか。
とにかく、陸の連続攻撃中は何人たりとも反撃できない。
それを知っている人間ならば、連続攻撃が終わるまでひたすら防御に徹すればいいだけだが、幻影獣にはそんな知能はない。
むやみに反撃しようとして、できず、追撃で倒されるだけだ。

だが、集団戦には明らかに向いていない。
それでも、陸は踏みとどまっていた。

とっくに撤退命令は出ていた。
聞き逃した訳ではない。
ただ、クリスタルランスの先輩方なら、これくらいの劣勢は一人で覆せるだろうと思うと。

せめて、しんがりくらいは務めないとと思っただけだ。

「潮時かな……」

もう他のＢＭＰハンターの姿は見えない。

代わりに、１００体近い幻影獣で、実践訓練場・Ｄブロックは埋め尽くされていた。

もう役目は果たした。

ここを抜かれると内層まで、すぐ。

まずいとは思うが、さすがにもうどうしようもない。

というか、ここから１００体の幻影獣をかわして逃げるのが、そもそも至難の技だった。

しかも、うまく逃げだせたとしても、おそらく誰も褒めてはくれないだろう。

弱いのは罪だ。最近、本気でそう思う。

ふと、あの男・澄空悠斗の顔が浮かんだ。

剣麗華さんに認められ。

クリスタルランスの先輩方とも何らかの関係がある（ようにしか思えない）あの男。

あいつなら、こんな状況でもなんとかできるというのだろうか？

と。

「ん？」

おかしなことに気がついた。

幻影獣の間をすり抜けるように逃げようとした陸だが、あまりにも幻影獣の動きがないのだ。

最初は、もう自分に興味をなくして内層に攻め込もうとしていると思ったのだが。

「ふむ。闘いの気配は感じていたのですが」

静まり返ったＤ－１ブロックに響く、涼やかな男の声。
長身と眼鏡をかけた整った顔に加え。
手には、わずかに反った片刃の剣を持っていた。

「まさか、一人で踏みとどまっているＢＭＰハンターがいようとは……。気が合いそうですね」
整った顔に場違いに爽やかな笑顔を浮かべている。
すると、一匹の幻影獣が飛びかかって行った。
眼にもとまらぬ速さで刀を振るう男。
そして、縦に両断される幻影獣。

幻影獣達は動かない。
が、別の一匹が飛びかかって行く。
今度は横に両断された。

その男について。

澄空悠斗が居れば「城守さん！？」と呼んだことだろう。長所に恵まれまくった男が隠し持っていた新たな特技に「不公平だ！」とか怒りながら。
剣麗華が居れば、やはり「城守さん」と呼んだことだろう。「久しぶりに闘うところを見た」と無感情に事実だけを語りながら。
緋色瞳が居れば、なんと言っただろうか。
そして、坂下陸は。

「ブレードウエポン……」

かつて……、いや、現在でも最強と呼ばれる男の名前を呼んでいた。

飛びかかって行く三匹目の幻影獣。

今度は、首を刎ねられた。

内層へと続く扉の前に立ちふさがり、一歩も動かずに淡々と刀を振るう城守。

四匹目、五匹目。

一体ずつ飛びかかってくる幻影獣を、順番に斬り捨てていく。

そして、陸の方を見て。

「クリスタルランスの新旧フォワード揃い踏み、といったところですが。邪魔にならないようにしますので、よろしくお願いしますね」

『7月24日17時29分・A』

「痛っ」

太ももに走る鋭い痛み。

一匹目の『口』を超加速（システムアクセル）でかわし、止まったところをもう一匹の『口』に狙われたのだ。

牙にひっかけられた程度だと思うが、油断はできない。

ガルアに注意しながら、すばやく怪我の具合を確認すると。

右足の膝から先がなくなっていた。

「う、うわあああああ！」

な、なんだこれ、なんだこれ、なんだこれなんだこれ！

全然痛くないのに、こんなこんなこんな！

「ミーシャ」
「う、うわああ……え？」
絶叫する際に一瞬外した視線を戻すと。
太ももを浅く切り裂かれているが、何事もなく無事の右足があった。
「？？？？」
？を浮かべる俺。
なんだ？　テンパり過ぎて、幻覚でも見たのか？
「少し休憩しよう。息を落ち着けるといいよ」
「な？」
いきなり優しいことを言い出すガルア。
「ちょっと邪魔が入ったからね」
？　なんのことだ。
言っている意味は分からないが、とりあえず距離をとって息を静める俺。
大した時間は闘っていないはずだが、完全に息は上がっていた。
一時なくなったように見える右足は、健在ではあったが無傷ではなかった。
最初は滲みだす程度だった血が、少しずつ量を増している。
一旦休憩すると、体のあちこちの痛みが気になってくる。
特に左腕が結構痛い。まさか、折れてないだろうな？
「そろそろいい？」
ガルアが言う。
よくないよ。

幻影の破り方

『7月24日17時35分・管制室』

「悠斗君！」
美琴が叫ぶ。
二つの『口』に追い回される悠斗が、少しずつ追いつめられていく姿を見ていることしかできないのがもどかしい。

「悠斗君、聞こえますか!?　悠斗君！」
さきほどから叫び続けているが、モニターの中の悠斗は一向に気づく気配がない。
いや、悠斗だけではない。
他のオペレータも各所に救援要請をしているが、誰も反応を示さないのだ。

「どうなっているんだ、これは！」
「通信機器に異常は見られません！　音声は届いているはずです！」
「Aブロックに関する発言以外は伝わるのに……」
「じゃあ、BMPハンター達がみんな精神支配されているとでも言うの！」
先輩オペレータ達も、あまりの事態になすすべがない。
せめて、局長か結城がいてくれれば良かったのに！

「なんで今日に限ってこんな……。おかしいよ、こんなの……」

『管制室、聞こえますか？　管制室！』
澄空悠斗の切迫した声が聞こえる。
「聞こえてる！　聞こえてるよ、悠斗君！」

叫ぶが、こちらの声は聞こえない。
あのガルア・テトラの能力なのか、それ以外のモノのＢＭＰ能力なのかは分からないが、ＢＭＰ能力者ではない自分の手に負えるような状況でないのは確かだった。

「なんで私、オペレータになんかなったんだろ……？」
ＢＭＰハンターでもない、一般人でもない。
こんな中途半端な場所が自分の目的地だったのだろうか？

『いい加減に気づいたらどうだい？』
「っ」
少年の姿を取ったＡランク幻影獣、ガルア・テトラに呼びかけられて、どきりとする。
いや、違う。
自分に呼びかけてきたんじゃない。

『何の……話だ！？』
澄空悠斗が叫び返す。
息が完全に上がっている。
傷の数も増えて来ている。

『ちょっと考えれば、分かるんじゃないかな？』
それまでとは違う。底の暗い声。
嫌な予感がした。
『いや、全然、分からん』
ストレートな澄空悠斗の声。案外、この子、大物かもしれない。
『通信機器の故障にしても、管制室が全滅したにしても、ここに誰も来ないなんておかしくないかい？　ＢＭＰハンター達が全滅した訳でもあるまいし』
『お前には原因が分かるとでも言うのかよ！』

『あるじゃないか。簡単な理由が』
『なんだよ』
『僕は、君が死ねば帰る。他の連中はどうか知らないが、たぶん帰るんじゃないかな？』
『……』
「な、何言ってるの、コイツ……」

『君がどれだけ重要人物だとしても、全滅するよりはましだって考えても不思議はないんじゃないかな？』

「ふ、ふざけないで！　悠斗君、こんなやつの言うこと、聞いちゃだめ！」
聞こえないと分かっていても、叫ばずにはいられない志藤美琴。

『どう思う、澄空悠斗？』

「悠斗君、お願い！」
叫びながら思う。
これだけ優位に闘いを進めておきながら、どうして揺さぶりなんかかける必要がある？
いくら潜在能力が凄いといっても、本格的に戦闘をするのはまだ二回目の、まだ高校生の男の子の心まで折る必要がどこにある！

『……なるほどな』

澄空悠斗の声。
驚くほどさばさばして聞こえたのが、逆に不安を感じさせた。

『あれ？　認めるの？』
『いや、幻影獣のくせに頭いいんだな、って感心してた』
『じゃあ、認めないの？』
『別にどっちでもいいよ』

「……え？」
今、何て？

『偉い人たちの陰謀とか、勝つための苦渋の決断とか。そんなこと、俺が考えたって時間の無駄だろ？』
『でも、見捨てられた怒りくらいは感じてもいいんじゃないかな？』
『それだって、時間の無駄だよ』

「……」

『俺のやることは、一分一秒でも長く生き延びることだ。他のことは、あとから考えればいい』

「悠斗君」
頭をがつんと殴られたような衝撃だった。
そして、同時に胸が熱くなるような感覚だった。

そうだ。

悠斗君の言うとおりだ。

自分の力が及ばないことに、いくら考えを巡らせても仕方がない。

今できることをやる。

それがプロだ。

と。

『あーあ。失敗か。やっぱり、幻影獣に人間を挑発するなんて無理なのかな？』

『……』

『それとも、君が特別なのかな？』

『それはない』

攻撃が止んだ隙に息を整える悠斗。

『でもね、澄空悠斗』

『……なんだよ』

『僕は、そんな君には興味がないんだ』

モニター越しでも分かるくらい、ガルアの気配が膨れ上がる。

『僕が興味があるのは、僕を殺せる君だけなんだよ』

『……』

その背後に控えるのは、二つの巨大な口。

『闘おうよ、澄空悠斗。でないと、ほんとに死ぬよ？』

「っ！」
Ａブロックのモニターから眼を離す。
見ていられなくなった訳ではない。
自分にできることをするためだ。

傍らの受話器を取る。
「出てよ……。お願い」
そして、番号をコール。
風邪でダウンした『複合電算（シミュレータ）』雛鳥結城の部屋の電話番号だ。

そして、美琴の願いは通じた。

「ひゃーい……。ひなろりでふー」
半分だけ。
「結城ちゃん。大丈夫？　話、できる？」
「できるおー。で、美琴ちゃん？　悠斗君と剣さんの『闘い終わって、正面から抱き合って、悠斗君が剣さんの肩に頭を載せて、剣さんが少し困ったような顔をしてる』スナップ写真は手に入ったー？」
「ごめん。そんな約束初耳」
そして、そんなスナップ写真がこの世界に存在しないのは、この間のボーナス全額かけてもいい美琴。
ちなみに、彼女、雛鳥結城の名誉のために言っておくが、普段はこんなはっちゃけたキャラではない。
年に似合わぬ落ち着きを持つ、知的な女性なのだ。
作戦途中で気絶するほどの高熱が下がっていないらしい。
でも、悠斗君と剣さんのファン（それもちょっと偏った）なのは、友達だけど初めて知った。

「お願い、聞いて結城ちゃん」
でも、この状況を何とかできるのは彼女しかいない。

美琴は、現在の状況を可能な限り簡潔に結城に伝えた。
しばらく返答はない。
結城が電話の向こうで気を失っていないことを願うばかりだ。
と。
「精神支配で間違いないと思う」
まるで、コンピュータが話しているかのような冷たい声。
「ゆ、結城ちゃん！」
良かった。やっぱり、雛鳥結城もプロだ。
「でも、この管理局のＢＭＰハンター全員を支配するなんて、一体どうしたらいいの……？」
「違うよ。支配されているのは、ＢＭＰハンターの人たちじゃなくて、美琴ちゃんたち」
「え？」
思わず、聞き返す。
「たとえ、ＢＭＰハンター全員を支配できる能力があったとしても、管制室のオペレータ全員を支配する方が楽だもん。美琴ちゃん達、『少しも』その可能性を考えなかったでしょ？　それが、その証拠」
「そ……」
あまりな推論に、言葉が出ない。
「これだけの精神支配、あのＡランク幻影獣のセカンドアビリティとはとても思えない。他に強力な幻影獣がいるはずだよ。モニターには表示されているはず。それも見えてないでしょ」
「う、うん」
モニターには特に強い反応は二つ。
Ａブロックのガルア・テトラと、Ｃブロックのタートルだけだ。

「どうすれば、この精神支配を破れるの？」
一番聞きたいことを聞く志藤美琴。
「この状況でできそうなのは、強いショックを受けることくらいだけど。話を聞く限り、媒介も必要としないようなＢＭＰ能力を破るのは無理かもしれないわ」
「そう」
「役に立てなくて、ごめん」
「そんなことない。十分役に立ったよ」
雛鳥結城も、十分プロの仕事をしてくれた。

「んにゃ、『どういう理由でか、カラドボルグを悠斗君の首に突き付けた剣さんと、何か剣的なものを突き付け返している悠斗君の姿を描いたカレンダー』約束にぇ」
いきなり、崩れる結城。
そして、ゴトっと何かが落ちる音がした。
どうやら、完全に倒れたらしい。頭とか打ってなければいいけど。

ともあれ、自分のやることは決まった。

「志藤さん？」
オールドミスに見えるが、実は子持ちで家族思いの主任に呼びかけられながらも席を外す。
みんなに説明している暇はない。というか、説明しても意味はない。

「あった」
整然と片づけられたロッカーから、一つだけ異彩を放つ奇妙な物体を取りだす。
「いつ見ても、禍々しいわね」
それは、木製の台座に金属製の棒のようなものがついたネズミ捕り

のようなものだった。
というか、これはいつかの忘年会で誰かがとち狂って余興用に持ち込んだと噂の（一説には城守局長という話もあるが、さすがに嘘だろう）ネズミ捕りだった。
ネズミを『捕る』どころか『潰して』しまうほどのパワーが売りらしい。アホか。

「ごくっ」
息を呑んで、左手をネズミ捕りにセットする。
城守局長が言うには、骨くらい折れる可能性があるので、冗談でも誰かの手を挟んだりしないようにとのことだ。
「でも、冗談じゃないんですよ」
美琴は大まじめだった。
でも、怖かった。

「って、いつまでも怖がっててもしょうがないよね」
全身に力を入れる。
足を踏ん張る。
歯を食いしばる。

そして。
「えーい！　女は度胸！」
ネズミ捕りを発動させた。

「……」
「……」
「……」

彼女が何をやっているか分からない先輩オペレータ達の沈黙が痛い。
傍目に見てても痛そうな、ネズミ捕りに挟まれた志藤の左手を見て、

卒倒しかかる人もいる。
でも、それが問題にならないくらい左手が痛い。ほんと痛い。
ひょっとして、折れたかもしれない。

これで何もなかったら、ほんとに骨折り損ね、などと自嘲気味に思いながらモニターに眼をやると。

「いた……！」
ほんとに居た。

管制室最外層ブロックＯ－４。
そこに、ガルアと同じくらい大きな反応が二つ。

幻影獣だ！

志藤美琴は、自分の席に駆け戻り、右手でマイクを取った。

紡ぎたい明日があるという予定で

『7月24日17時45分・O－4』

『今日、この場で闘っている、全てのBMPハンターの皆さまにお伝えします！』

良く響く声。

『現在Aブロックで、澄空悠斗君がAランク幻影獣ガルア・テトラに襲われています！　付近のハンターは最優先で救援に向かってください！』

今日飛び交った数多の声の中で、その慌てぶりから一番印象に残っていた声。

『また、ブロックO－4に非常に強力な精神支配系BMP能力を操る幻影獣が潜伏しています！　放っておくと危険です！　今から指示するブロックのハンターは連携を取りながら対応に向かってください！　Aランク相当の幻影獣が二体です、無理はしないように！』

だが、さきほどまでの慌てぶりが嘘のように堂々とした声だった。

何か痛みを堪えているような様子が気にかかるが。

「どういうことだい？」

ブロックO－4。最外層に位置するこのブロックにはBMPハンターがいない。

幻影獣が襲ってこなかったブロックだからだ。

いや、正確には、襲ってこなかったと思われていたブロックだからだ。

そんなブロックに、一人の少年と一人の美女がいた。

「何が？」

線の細い儚げな少年の問いに、まるでこれからパーティに出るかのような格好と雰囲気の美女が聞き返す。
「もちろん、今の放送だよ。媒介を必要とせず、『支配されたことにすら気がつかない』君のＢＭＰ能力には、たとえあのアイズオブクリムゾンですら抗えない、って言ってなかったかい？」
一見すると、貴族の令嬢と執事見習いの少年に見えるが、その口調は意外にフランクだった。

「アイズオブクリムゾンには無理でも、抗える人もいるってことでしょ」
何を当たり前のことを。といった口調で美女が答える。
「なるほど。そう言われると、返す言葉もないね」
納得したのか、どうでもいいと思っているのか、儚げな雰囲気の少年は素直に頷いた。
少年と言ってもガルアほど幼くは見えない。高校生くらいだ。

「で、どうするの？」
「Ａブロックとここに来れないように、全ＢＭＰハンターに暗示をかけるわ」
「できるの？　そんなこと」
「どうかしら？　さっきのこともあるし、何人かは抜けてくるかもね」
と、人差指を唇にあて。
「その時は守ってくださるかしら、ソータ」
妖艶に囁いた。

「感情も付いてきてないのに人間の仕草をするのはどうかと思うな」
「あら、それはガルアの努力を否定するんじゃないかしら？　あの子、澄空悠斗を本気にさせるためにあんなに悪役ぶって頑張ってるのに」

「僕も最初はそう思ってたけど、あれはひょっとすると地なんじゃないかな？」
「あなたも、演じてるんじゃないの？」
「僕だって必要があってやってるんだよ」
と、儚げな少年は右手をかざした。
その先にあるのは、なぜか片づけられていない掃除用のモップ。
それが、まるで吸い寄せられるように少年の手に収まる。

「よっと」
軽い声で、モップを投げる。
2メートルも飛べばいい方というくらいの力の入れ方だったが、モップはまるで弾丸のように物理法則に喧嘩を売りながら飛んでいく。
そして、壁にぶつかって粉々になった。

「うん。問題ない。君に護衛なんて必要ないとは思うけど、微力をつくして頑張るよ」
「失礼な。四聖獣唯一の非戦闘員を捕まえて」
「非戦闘員だけど、僕やガルアよりは強いよね」
これから何人ものＢＭＰハンターと闘わなければならないというのに、まるで緊張したところのない二人。

「そういや、ガルアの方は大丈夫かな？」
「問題ないでしょ。あの子、もともと大勢をいっぺんにやる方が得意だし」
「僕らがＢＭＰハンターを食べるのはほどほどにした方がいいんだけど……」
「優先順位の問題よ」
豪奢な美顔が、冷酷な笑みに染まる。

「澄空悠斗が頑固だから、あの子困ってるじゃない。私が加勢しようとしても怒られるし。仲間が死ねば、少しは彼も本気になるでしょ」

『7月24日17時50分・C』

「あ」
ぽつりと呟く麗華。
何が起こったかと言うと。
「カラドボルグが……」
消えたのだ。

さきほどの全館放送で、若干平常心をなくしたことによる影響は否めない。
ちなみに、その直後、峰・三村・エリカ（ここに来ていたとは知らなかった）が、ここを通ってAブロックに向かったが、あまり安心材料にはならなかった。
結果、なんとかこのタートルを倒そうとして、少しペース配分（あくまで今の体調での）を乱してしまったのだ。
幻想剣（イリュージョンソード）を実体化できない。実体化しようとすると、異常なまでの頭痛がする。
そこまでやって分かったことと言えば、あのBランク幻影獣は、切り札と言うべきBMP能力を全く持たない代わりに、弱点らしき部位もないということだった。
亀を模した姿なので、試しに眼を狙って見たところ、瞼を閉じただけでカラドボルグが防がれるくらいだ。

「困った」

口調だけ聞けばあまり困ったように聞こえないかもしれないが、本当に困っていた。
もうＢＭＰ能力の使用の有無に係らずに、とにかく頭が痛い。
全身が重い。
手足の感覚がない。

ＢＭＰ過敏症……いや。
ＢＭＰ中毒症だった。

覚醒時衝動の時の経験から、医者の言うことを聞かないことの恐ろしさは、痛いほどに分かっているつもりだった。
本人も気づいていない『アイズオブエメラルド』の欠点をついてまで、この場所に来たのは、別に中毒症を甘く見ていたからではなかった。
実際、他の敵であれば問題はなかったはずだ。
だが、出力が上げられない今の麗華にとって、このタートルは天敵だった。

「これは……無理かもしれない」
冷静に受け止める。
幸い、タートルは麗華にそれほど興味はなさそうである。立ち塞がらなければ、襲ってくることはないだろう。
加えて、澄空悠斗ならば相性がいい。劣化状態とはいえ、彼のカラドボルグは威力の点ではオリジナルと大きな差はないのだ。
もちろん彼の体調は問題ない。この巨体と文字通り亀のような動きのタートル相手なら、勝機は十分にある。
Ａブロックに向かった、峰・三村・エリカのトリオも多少は助けになるだろう。

「でも……」

放送によると、今澄空悠斗はＡランク幻影獣ガルア・テトラと闘っている。タートルの乱入は、命取りになりかねない。
しかし、今ここで自分が死ぬまで闘ってもタートルは止められない。
結果は同じ……どころか、澄空悠斗に加えて、もう一人最高ランクのＢＭＰハンターが失われることになる。

「ここは、退くのが正解？」
成果は大きく、犠牲は少なく。
同じ死ぬなら、二人よりも一人の方がいい。
ＢＭＰハンターは、この国……いや、世界の財産なのだから。

「悠斗君だけが死ぬのが……正解？」
澄空悠斗の潜在能力は凄まじい。
今、自分が代わりに死ねるのならば、長い目で見ればその方が人類のためになる。
だが、両方死ぬとなれば話は別だ。澄空悠斗だけを助けるのが無理な以上、自分が助かるしかない。

「私だけが生き残るのが……」
決められない。
今までの考え方や経験で決めてしまうことができない。

確かに、澄空悠斗を失うことのデメリットは大きい。

「……」
たとえば授業。
最初は、澄空悠斗の覚醒時衝動を止めるために受けていたが、なぜか今でも受けている。
別に受けなくても、澄空悠斗が勉強を教えてほしいと言ってきた時に対応できる自信はあるが、細かいニュアンスは一緒の授業を受け

ていた方が伝えやすい。
「いや、そんなことはどうでも良くて」
ああ、でも。授業を一緒に受けていると、休み時間に一緒に話をすることができる。
未だに話題選びには困るが、だいたい三村やエリカ（最近では峰も）がやってくるので、会話が途絶える心配はない。
昼ご飯だって一緒に食べに行ける。
教室に買ってきて、机をくっつけて食べてもいいし、学食に行ってもいい。
澄空悠斗は、ささみチーズフライのない学食なんてクリープのないコーヒーだ、と言っていたが、案外なんでも美味しそうに食べている。

「そういえば……」
彼は言っていた。
食事時が一番寂しかったと。
自分はどうだっただろうか。
家族と一緒に食べていたころの記憶はほとんどない。
人生のほとんどの時間を一人で食べていた……ような気がする、が。

「どんな感じだったかな……」
あまり覚えていない。
どんなものを、どんなことを考えながら食べていたのか。
澄空悠斗と一緒に食べている食事なら、日付指定でメニューを思い出せるのに。
それ以前は、食生活が貧しかったからだろうか？
最近では食事そのものにも興味が出てきた。幸い、経済的には恵まれているのだし、どんなものでも買って来れるし、どんなところに食べに行ったっていい。

「でも……」
澄空悠斗の作ったカレーだけは、二度と食べられなくなる。

タートルがゆっくりと動き出す。
動かない麗華を無視して、ゆっくりとＡブロックに向かって歩みを進め始める。
数ヶ月前にＢＭＰ能力を覚醒し、生涯二度目の本格的な実戦で幻影獣最強のＡランクと闘っている少年に、さらに一体で一軍に匹敵すると言われるＢランク幻影獣が向かっている。

澄空悠斗と二度と会えなくなる。
澄空悠斗と二度と食事ができなくなる。
澄空悠斗と二度と話ができなくなる。
澄空悠斗と二度と一緒に歩けなくなる。

「ああ、そっか……」

ガルア・テトラに奇襲された帰り道。
『どうして逃げなかったの？』
やはり愚かな質問だったのだ。

『麗華さんも俺も間違ってない』
その後に続く言葉。
あの後、澄空悠斗が何と言おうとしたのか、ようやく分かった。

「でも、守りたかった」

★

物凄い勢いでタートルが振り向いてきた。
今まで三味線を弾いていたのかというくらい、全身で警戒を示してきている。
それもそのはず。

剣麗華の右手に、再び具現化したカラドボルグが握られていた。
しかも、今までと迫力と言うか、存在感が全く違う。
好調時でも、ここまでの出力は出したことがない。
生まれて初めて見せる『本気』だった。

『悠斗君が遠い』

そんなことはない。
「すぐ近くにいる」

『とても遠くに感じる』

そんなことはない。

同じ気持ちを持っている！

「タートルを倒して、悠斗君の所に駆けつける」
何も問題はない。

二人とも助かれば、誰にも文句は言わせない。
必ず、二人で、明日を紡ぐ。

想いを抱えたヴァルキリーは、無敵の剣を振り下ろした。

幻影戦闘『四聖獣ガルア・テトラ』

『7月24日18時01分・A』

ストン、と。腰が落ちた。
やっぱり訓練と実戦は、消耗の度合いが違う。
ヘトヘトになるまで逃げ回って。

『悠斗くん！　幻影獣の精神支配は破りました！　もう少しで援軍がやってきます！』

管制室のオペレータさんの頼もしい援護に、わずかばかりの光明が見えてきたところで。

ガルアが召喚した。
三つ目の『口』を。

「……勘弁してくれ」
それ以外、どう言えというんだ？

「一応、説明だけしておくけど、別にさっきの彼女の放送で焦っている訳じゃないよ」
対するガルアは涼しい顔。
どう見ても『いよいよ切り札を出してしまったぜ』的な雰囲気はない。
つまり、まだまだ余裕がある。
「たとえ、残りの全ハンターがここに雪崩れ込んで来たって、全て喰らうくらいの自信はあるんだ」

だろうな。
「でも、このままだと、君は倒れるまで逃げ回りそうだからね」
同時に大口を開ける三体の『口』。
召喚数が増えても、その動きにはわずかの乱れも見られない。
「これが最後だよ、澄空悠斗。もう僕を倒すしかないのは分かるよね？」
小学生くらいの外見をしているのに、まるで駄々っ子を諭すような口調の幻影獣。
分かってる。超加速（システムアクセル）じゃ、もう無理だ。
「だからといって、倒せる訳も……。な！」
心が折れ掛けているのか、戦闘中にも関わらずガルアから目線を外した俺の目に、衝撃の映像が飛び込んできた。
「な、なんで……？」
壁にかかっているモニター群の一つ。Cブロックを写しているモニター。
世界最強の女の子の闘いを写しているモニター。
映っているのは、当然のように両断され消滅しかかっているBランク幻影獣タートルと。
うつ伏せに倒れたまま動かない麗華さん。
「れ、麗華さん！」
もはや、ガルアそっちのけで叫ぶ俺。
なんなんだ！
あれは『ちょっと休憩』的な倒れ方じゃ、断じてないぞ！

「驚いた……」
興味を示したのか、同じようにモニターを眺めながらガルアが呟く。
「時間稼ぎにもならないと思ってたのに、まさか相討ちに持ち込むなんて……。あいつも意外に頑張ったなー」
ふざけたことを言う、ふざけた存在。
「ふざけるなよ！　麗華さんが、あんな亀に負けるか！」
「ま、そうだね」
「へ？」
あっさりと認めるガルアに、拍子抜けする俺。

「あの子、相当に調子が悪そうだったからねー。ま、仕方ないんじゃないかな」
「え？」
今、何て言った？
「ん？　だから、調子悪かったんだよね？　『ＢＭＰ中毒症』だっけ。身体がＢＭＰ能力に付いてこなくなるなんて、いくら強くても不便だね。君達、人間は」
ちょ、ちょっと待て……。

「嘘つけ！　こども先生は、ＢＭＰ過敏症は治ったって言ってたぞ！」
「知らないよ、君達人間の事情なんて。でも、本当に君は気付かなかったの？」
何気ない一言。
さっきは俺を本気にさせようと不慣れな挑発をしてたみたいだけど、この言葉は違うのが分かる。
本当に何の気なしに言った一言。

「あ……」

しかし、今までで一番俺の心を抉った一言だった。
「そうだ……」
確かに違和感は感じていた。
感じていたからこそ、「麗華さんの代わりに自分がタートルと闘う」なんて身の程知らずな提案をして、麗華さんを驚かせたんだ。
こども先生がどうして間違ったのかは分からない。
でも。
「こども先生がどうとかじゃなくて……」
俺は気づいてあげられなかった。
麗華さんが苦しんでるのを。

そして。
麗華さんも言わなかった。

「なんでだ……？」
俺が弱いからか？
俺がバカだからか？
それとも、その両方か？
確かに、その通りだ。
でも、言って欲しかった。
たとえ結果的に役に立たなくても……。

「言ってくれさえすれば……！」

こんなところで「倒れるまで逃げる」なんて、悠長なことは言ってなかった！

『ま、しゃあねえやな』

ペース配分、なんて高等なことが俺にできるとは思ってなかったけど。
心のどこかで何かが外れたのが分かる。
「劣化複写：幻想剣断層剣カラドボルグ（イレギュラーコピー　イリュージョンソード）」
熱い。
カラドボルグが今までと比較にならないくらい熱い。
いや、カラドボルグだけじゃない。
全身が燃えるみたいだ。

「驚いた。まだそんな力が……。って、余裕を見せてる場合でもなさそうだね」
ようやく真剣な顔を見せるAランク幻影獣。
「それが君の本気かい？　澄空悠斗！」
「俺はいつだって本気だ」
そのベクトルが変っただけだ。

『いいか、悠斗。これは戦争だ』
分かってる。
『遠慮はいらねえ』
だれがするか。
『全ての技、全ての戦術、全ての能力』
全ての力で。

『痕跡残さず、消し去ってやれ！』
もちろんだ！

「おおおおお！」
凶暴な吠え声をあげながら、カラドボルグを横殴りに振り切る。

それまでとは比較にならない次元の断層が空間を上下に裂く。
「くっ」
ガルアが宙に舞う。

「だめだよ、澄空悠斗。威力はダンチだけど、モーションがダダ漏れじゃないか？　そんなんじゃ……」
うるさい。

「さらに続けて……」
カラドボルグが一瞬で虚空に消える。
「劣化複写（イレギュラーコピー）：超加速（システムアクセル）！」
宙に浮いて身動きできないガルアめがけて、三村の超加速（システムアクセル）で追撃をかける。

「かふっ」
少年の外見をした獣の腹に、深々とめり込む俺の肘。
「猪突猛進（オーバードライブ）！」
止まらずに、ガルアを宙に押し上げていく。
肘に集中する力が、槍に見立てた俺の肘を青白い光で覆っていく。
そのまま、ガルアをさきほどのモニター群に叩きつけた！

「がふっ」
別に狙った訳ではないが。
Cブロックが見えるモニターが、すぐ近くに見えた。

★

「ちょっとだけ、驚いたよ」
モニター群に身体をめり込ませ、貫通しそうなほど深く俺の肘を身体にめり込ませながら。

ガルアは少しも堪えた様子はなかった。
「異なるＢＭＰ能力の連続起動とはね。君は最強を目指すことはできない、って言ったことは撤回させてもらうよ」
どうでもいいよ、そんなのは。
「でも、忘れてないよね？　こんなナリでも、僕はＡランク幻影獣なんだよ。この程度の攻撃じゃＢランクにだって傷一つ付けられな……」
「さらに続けて……」
肘を戻して。
呼ぶ。

「劣化複写（イレギュラーコピー）：捕食行動（マンイーター）」

Ａブロックに四体目の『口』が現れる。
他三体と外見、大きさ、存在感、全てが同じだが。
こいつは、ガルアの命令は聞かない。
俺の背後の空間で、俺の命令とエサを待っている。

「な……」
「悪いな」
驚愕するガルアに告げる。

「俺はあんまり興味がないんだ」

誰の方が優れているとか。
誰が一番強いとか。

「君は、人間だけじゃなく、僕らのＢＭＰ能力まで……」

「そんなものより、今はおまえを倒す力があればいい」

倒して麗華さんの所へ駆けつける力があればいい！

ガルアの胸倉を無造作につかみ上げる。

そんな俺の背後には、大口を開ける捕食行動（マンイーター）。

「やはり、やはり君こそ……」

外見通りではあるが、意外に軽いガルアの身体を、背後の口に投げ込む俺。

ガルアは、抵抗もせずに『口』の中に呑みこまれていき。

「『境界の者』……」

『口』が閉じた。

譲れない大仕事

『7月24日18時21分・管制室』

「やったー！」

管制室オペレータ・志藤美琴（22歳独身。でも、そろそろ彼氏は欲しい。どちらかと言えば年上派だけど、怖い人は苦手。局長みたいにパーフェクト過ぎる人も、プライベートで付き合うにはどうかな？　というか、悠斗君かなりいんじゃね）は、飛び上がって喜んだ。

「やった、やった！　悠斗君がやったー！」

もちろん嬉しいのは分かるがなんで君がそこまで喜ぶんだ、的な視線を同僚オペレータ達からもらいながらも、志藤ははしゃいでいた。

嬉しいのだ。

まるで自分があのガルア・テトラを倒したかのように、いや、それ以上に嬉しかった。

局長が、普段から澄空悠斗の話を良くする理由も分かる。

彼は確かに英雄的ではないかもしれない。

でも、それ以上に特別だった。

「志藤さん。嬉しいのは分かるけど、まだ闘いは終わってないわよ」

「！　そ、そうでした」

オールドミスに見えるけど、優しい旦那さんの居る主任オペレータに注意されて、我に返る。

そう、まだ終わってない。

幻影獣軍団はまだ残ってるし、あと二人のAランク幻影獣も気にかかる。

それに何より。
Cブロックで倒れたまま、身動き一つしない剣麗華が気にかかる。
志藤美琴は、受話器を取り、上条研究所の電話番号をコールした。

『7月24日18時24分・A』

「やった……」
ほんとにやってしまった。
なんだか頭がカーッとして良く覚えていないが、俺があのAランク幻影獣を倒したのは間違いない。
みんなに『褒めて褒めて!』と言って回りたいところだが、まだ一番大事な仕事が残っている。
麗華さんを助ける。絶対に!

でも、その前に。
「どうやって降りよう……」
思わず呟く。
今現在、俺は半壊したモニター群の一つにしがみついていた。
Aブロック自体の高さは20メートルほどだが、モニター群は10メートルくらいのところに設置されている。
飛び降りても死ぬことはないかもしれないが、今は骨折なんかしてる暇はない。
とはいえ、Aブロックの壁面はツルツルで取っ掛かりもないので、這って降りることもできない。
え? ここまで来れたんだから、逆に超加速(システムアクセル)で降りればいいんじゃ

ないかって？
あの技はブレーキが利かないんだ。さっきは、ガルアの身体をクッション代わりにしたけど、今度は自然落下プラス超加速（システムアクセル）で地面に激突して、スプラッタなことになる可能性大だ。おのれ、三村め。

「でも、迷っている暇もないよな……」
俺がしがみついているモニターにはCブロックの映像が映し出されている。つまり麗華さんが映っている。
うつ伏せに倒れたまま動く気配が全くない。
もう管制室が助けを呼んでくれているとは思うし、俺が行っても何もできないとは思うが……。

行かない訳にはいかないだろ！

「えーい！　男は度胸！」
気合一閃。
モニターを蹴って飛び立とうとして。
「澄空！」
誰かの声が聞こえた。

「三村？　それに、峰とエリカ？」
Aブロックの入り口（そういえば、いつの間にか復活してるな）に現れたのは、俺のクラスメイト達（エリカは違うが）だった。
大きな怪我はないようだが、戦闘の跡が見える。まさか、闘ってたのか？
「ちょっと待て、澄空！　自慢じゃないが、超加速（システムアクセル）でそこから飛び降りたら、間違いなく大怪我するぞ！」
ほんとに自慢じゃないことを大声で忠告してくれる三村。
大丈夫だ。普通に飛び降りるつもりだから。

「それでも、怪我するぞ！　ちょっと待ってろ！」
と告げて、エリカになにやら話しかける三村。
まさか、クッションとか持ってくるつもりじゃないだろうな？
麗華さんのことが心配でそんな暇はないし、麗華さんのことがなくても、俺の情けない握力がそろそろ限界だぞ。
と。

「豪華絢爛（ロイヤルエッジ）！」
良く響く澄み切った声が、Ａブロックを満たす。
瞬間、空間に出現する（ちょっとだけ）不可視の刃。
しかし。
「なぜ、この状況で、豪華絢爛（ロイヤルエッジ）……？」
呟いてみる。
しかも、闘いの疲れのせいか、隠蔽率も鋭さも、いつもより遥かに悪い。
と。
「超加速（システムアクセル）」
三村の姿が消える。
次の瞬間、少し高いところに出現する。
そして、また上へ。
「ま、まさか……」
豪華絢爛（ロイヤルエッジ）を足場にして……！
しかも、極短距離に絞っているせいか、ブレーキが利いている。まあ、利いてなかったら、三村の身体がサックリだけど！

なんどか、そんな移動を繰り返して。
「ま、こんなもんか」
麗華さんの映ったモニターにしがみつく俺のすぐ隣。
不可視の刃を足場にして、三村が空中に立っていた。
そして、『さあ俺の胸に飛び込んで来い』とばかりに、腕を広げて

いる。
三村の兄貴モード全開だ！　でも、若干飛び込みたくないぞ！
とばかりも言ってられないので、モニターを蹴ってジャンプする。
「おっとと」
三村の腕に（不本意ながらも）収まりながら、豪華絢爛（ロイヤルエッジ）の足場に立つ。
が。
「わわわわわわ！」
バランスを崩す。
こんなツルツル滑る、できそこないのラグビーボールみたいな物体の上に立てれるか！
「ほら、しっかりしろ。澄空」
が、三村は涼しい顔で立っている。
「さ、行くぞ。超加速（システムアクセル）」
そして、俺の肩を抱いたまま、登って来た時と同じように、豪華絢爛（ロイヤルエッジ）を足場にして下まで降りてしまった。

「凄いな、三村」
三村達がここに来た一通りの経緯を聞いた後。
光速のライバルに教わったとかいう、エリカとのコンビネーションスキルに、俺は素直に感心していた。
が。
「ぶへっ！」
峰に思いっきり、背中を叩かれた。
「どほ！」
そして、三村にボディを決められた。
「ん？」
エリカには、なぜかデコピンされた。
なんなんだ？

「凄えのはおまえだろ、澄空！」
叫ぶ三村。
「本当に、Ａランク幻影獣を倒してしまうとは……」
「凄すぎデス！　悠斗さん！」
峰とエリカも、褒めてくれる。
……そっか。
やっぱり、これだよ。
新聞とか、テレビで『Ｂランク幻影獣を倒した奇跡のＢＭＰハンター現る！』とかって報道されるのも嬉しくない訳じゃないけど。
やっぱり……。

「って、こんなことしてる場合じゃないんだ！」
と、麗華さんが映っているモニターを指差す俺。
「あれっテ……」
「……剣？」
「彼女にしては苦戦しているとは思ったが……。あまり良い状態ではなさそうだな」
そう。峰の言うとおり、麗華さんの状態は良くない。というか、なんでまだ誰も助けに行ってないんだ！

「いや、しかし、お前こそ大丈夫なのか？　最後、とんでもない大技使ってたけど」
「大丈夫だ！　まだ、あと3セットはいける」
三村に応える俺。
ちなみに『1セット＝断層剣カラドボルグ・超加速（システムアクセル）・捕食行動（マンイーター）コンボ』だ。
「それは凄いな……」
素直に感心する峰を置いて、走り出す俺。

「あ、マ、待ってくだサイ！」
エリカの声を聞きながらも、足は止めない。
若干ふらふらしてるけど。

名誉ある闘い

『7月24日18時36分・C』

Cブロックには、先客がいた。

「緋色先生！」

三村が叫ぶ。

仰向けにした麗華さんを膝に抱いて、先生が待っていた。

「悠斗君！？　ガルア・テトラは？」

「退場してもらいました！」

「嘘……」

先生が、信じられないものを見るような眼をした。

「そんなことより、先生！　麗華さんの状態は！？」

「良くない！」

俺の質問に、簡潔に答える先生。

その顔色は悪い。

「ＢＭＰ中毒症……。それも、かなり重度の。今すぐ上条博士のところで処置をしないと、命に係るわ！」

「そんナ……」

呻くエリカ。

上条博士の研究所は遠い。

それでも、行くしかないだろ！

「管制室！　こちら、Ａ……じゃなかったＣブロック澄空悠斗！　麗華さんが危険な状態です！　すぐに上条博士の研究所へ行く車の

手配を！」
『駄目です、悠斗君！　管理局の車は全て破壊されています！　車は呼びましたが、幻影獣が外にまで溢れ出して道路が寸断され始めています！　なんとか、応急処置を！』
「お……」
応急処置って言ったって！
ＡＥＤとかで何とかなる状態じゃないぞ！

「か、回復系のＢＭＰ能力者とか居ないんですか！」
『いないことはないですが……』
「ＢＭＰ中毒症を治せるような能力はないわ」
管制室に叫ぶ俺に、先生の声が浴びせられる。
まるで冷水のように。

「じゃあ、どうすればいいんですか！？」
「……」
俺の問いに、下を向いてしまう先生。
やめてくれ。
そんな簡単にあきらめないでくれ。

そんな簡単に麗華さんがいなくなってたまるか！

上条博士も、ＢＭＰ能力者も駄目だって言うんなら！
言うんなら……。
……。
「あ」
唐突に思い出す。
アイズオブクリムゾン、緋色瞳さんの言葉。

『その覚悟があるのなら』

ある。
麗華さんがいなくなるくらいなら、そんな覚悟いくらでもしてやる！

「先生！」
声を上げる。
「何、悠斗君」
「調律（メンテナンス）ですよ、先生！　俺はウエポンテイマーです！　先生のお姉さんも、先生に聞けば基本的な使い方を教えてくれるって！」
言ってたよな、確か！
「調律（メンテナンス）の使い方を、先生が？」
「そレハ、緋色先生ハ、ＢＭＰ能力についてノエキスパートではありマスけど」
「さすがに、ウエポンテイマーの技は教えられないと思うが……」
三村、エリカ、峰が余計なことを言う。
教えられなくても、教えてもらわないと困るんだよ！

「そうか。そういうこと」
が、先生は何か分かったようだ。よし！
「教えてくれるんですね！」
「教えると言うか……。いい？　良く聞いて悠斗君」
まずは落ち着けとばかりに、先生。

「私は、別にウエポンテイマーのことに詳しくはないわ」
おい！
「だから、私に聞けば分かるということは、たぶん誰に聞いても分かるということ」
？
「姉さんは、悠斗君はもう調律（メンテナンス）が使えると言いたいのよ」
「でも、現実に使えないんですって！」

もう、そのドラマ的な言い回しはいいから！
「落ち着いて悠斗君。もし悠斗君が調律（メンテナンス）を使えるなら、誰もが知っている有名で基本的なウエポンテイマーの技があるの」
「そ、そうなんですか！」
そうか！　そう繋がるのか！

「ああ、あれか」
「そう言えバ、聞いたことありマス」
「マジで。あれを？」
峰、エリカ、三村も何やら心当たりがある様子。三村のトーンが若干気になるが。
いや、気にしている場合じゃない！

「いい、良く聞いて悠斗君。調律（メンテナンス）の最も基本的な技は……」
「は、はい！」
技は！？

「マウストゥーマウスなの」

……。
「……」
……。
えーと。

「……なんですか、それ？」
思わず聞き返す、俺。

と、先生は顔を真っ赤にして。

「だ、だから、マウストゥーマウス！　いわゆる人工呼吸！　というか、見たことくらいあるでしょ！　先生は、こども先生だからして、実演はできないけど！」
叫んだ。
いや、もちろん人工呼吸が何かくらいは、いくら俺が馬鹿でも知っているが。
というか、こんなときだけ『こども先生』を自称するとは、黒いな。

ポンと肩に手が置かれる。
三村だ。
「俺は子供ではないからして、やることにやぶさかではないが。後で剣に首を刎ねられる可能性が大だから、お前に任せるよ」
俺が刎ねられない保障でもあんのか！
「ないが、ここはやるしかないだろう」
と峰。
「学園一の美人さんノ唇を奪えるコトを考えるト、決して損な役回りではないデス！」
無責任に焚きつけるエリカ。
そ、そりゃ、麗華さんとキスできるなら役得でないとは言わないけど。
首と引き換えとか言われると！　……それでも、損ではないかもしれないが。
これからも、麗華さんと一緒に学園生活を送れると考えると。

……やるしかないか。
（俺の）心臓止まるかもしれないけど。

「で、では、悠斗君。こちらへ」

（なぜか）かちんこちんに緊張したこども先生が、膝に乗せた麗華さんの頭の位置を少しずらす。
形の良過ぎる麗華さんの桜色の唇が、上を向く。
「……」
あ、あんなところに、俺の口を持っていくのか！　マジで！
「覚悟を決めろ澄空。どんな美少女とやったってキスはキスだ」
三村の励まし。意味が分からん。
「調律（メンテナンス）の発動も忘れるなよ」
峰の注意。ああ、それもあった。本当にキスするだけで発動するんだろうな？
「フ、不謹慎かもしれないですケド、ドキドキしてきましタ」
エリカ。勘弁してくれ。
俺の心臓なんて、もう破裂しそうだ。

へ、変に意識しないで。
本当に人工呼吸のノリで。
いや、むしろ、様子を見ようと麗華さんの顔を覗き込んだら、ちょっと唇が当たっちゃった、くらいのノリで。

「ごくっ」
これからも、麗華さんと一緒に生きていくために。

俺は、顔を近づけた。

「……」
「……」
「……」
痛いほどの沈黙。

唇には湿った感触。
脳を蕩かす麗華さんの香り。

そして。

俺の身体から、唇を通して、何かが流れ込んでいく。
俺の命が、力となって、麗華さんの身体に溶け込んでいくような、
不思議な感覚。
本体の俺が嫉妬するくらい勇敢に、俺の力が麗華さんの身体に住む
悪い病を駆逐していく。

それは、とても名誉ある闘いに思えた。

Bランク幻影獣を斬り捨てたことよりも、Aランク幻影獣を次元の
彼方に放り込んだことよりも。
誰かに最強と称えられることよりも。

自然に離れる唇。
確信があった。
俺は勝ったんだと。

「……ん」
ゆっくりと眼を覚ます麗華さん。
麗華さんが状況を把握する前に距離を取らないと、俺の首が危険と
いう気もしたが、そんな気力はもうどこにもなかった。
というか、もうひょっとして俺の心臓は止まっているかもしれない。
と。

「麗華さんー！」
後ろから、麗華さんの頭を抱え込むような体勢で抱きしめるエリカ。

「こっの、ヤロォー！」
三村に殴られる俺。
「見事だ。さすがは、俺の永遠のライバル」
微妙にノリの違う峰。
「……あうあぅ」
顔を真っ赤にした、こども先生。意外とウブだ。

そして。

「私は……」
麗華さん。
麗華さんが、自分の唇に手をやる。
胸が物理的に締め付けられるような、強烈な感覚。

麗華さんはどう言うだろう。

怒ってカラドボルグを振り回すくらいなら、まだいい。
もし仮に泣かれでもしたら、俺も泣いてしまいそうだ。

「れ、麗華さん……。そ、その……」
「調律（メンテナンス）……」
「へ？」
１０パターンほど瞬時に浮かんだ反応の、どれにも当てはまらない単語が飛んできた。

「ありがとう。悠斗君」
「……あ」
「助けてくれて、ありがとう。悠斗君」

死んだ。

たぶん、俺もう死んだ。

覚醒時衝動

『7月24日18時45分・管制室』

「ーーーー!!!!!」

志藤美琴（22歳。澄空悠斗ファンクラブ初代会長）は、コンソールをドンドン叩きながら悶えていた。

悶えまくっていた。

あんなの見せるからだ！

まるで自分がキスされたかのように、顔が熱い。

「ーー!!」

勤務中であることも忘れて、完全に腐女子と化していた。

が、誰も咎めるものはいない。

皆（オールドミスに見えて、実は家族思いの主任も）、Aブロックの様子を眺めていた。

志藤のような愉しみ方をしている者はさすがにいなかったが。

それでも皆、見入っていた。

強さに依らない、澄空悠斗の強さに。

英雄よりも英雄的な、澄空悠斗の勇気に。

誰もが感じていた。

いくら本人が否定しようとも。

やはり、彼は何か特別な意味を持って生まれてきた少年なのだと。

と。

「いや、まだだ！」

鋭い男性の声が響く。
ちなみに（どうでもいいが）、声の主は、クール系のかなりの美形だった。でも独身。
「澄空悠斗君の様子がおかしい！」
その声で、志藤も我に返る。
そういえば、大事なことを忘れていた。

澄空悠斗が、今までに調律（メンテナンス）を発動したという記録はない。
つまりは、これが初めての調律（メンテナンス）。
……ということは。
「Ａブロック！　悠斗君から離れてください！」
見る見るうちに膨れ上がって行く、澄空悠斗のプレッシャーを感じながら叫ぶ。

「覚醒時衝動です！」

『７月２４日１８時４８分・Ｃ』

（甘かった……）

アイズオブエメラルド・緋色香は、歯噛みする。

別に、澄空悠斗が覚醒時衝動を起こさない体質などと超希望的観測をしていた訳ではない。
たとえ覚醒時衝動を起こしても、せいぜい剣麗華の時と同程度（それでも、一大事だが）だと思っていたのが甘かった。

澄空悠斗がレジストを持たない支配系能力ならば、少しは効果があるのでは、と予測したのが馬鹿げた妄想だった。

身体が重い。
息が苦しい。
空間そのものが重みを持ったような、まるで自分達が陸に打ち上げられた魚のように場違いの存在であるかのような。
そんな感覚だった。

「お、重いデス……」
「エリカ！」
プレッシャーに耐えられなくなったのか。くずおれるエリカを三村が支える。

「なんてこと……」
呟く香。
強すぎるＢＭＰ能力は、特に具体的な能力発動をしなくても、ＢＭＰ能力の低い人の精神に悪影響を与える。
常日頃から、剣麗華に気をつけろと言っていることだ。
しかし、肉体にまで影響を及ぼすプレッシャーなど聞いたこともない。
しかも、エリカはＢＭＰ１１９とはいえ、立派なＢＭＰ能力者だ。

見つめる視線の先。
つい先ほどまで顔を真っ赤にしていた少年は、まるで幽鬼のように虚ろな表情で立ち尽くしている。
生気の全く感じられない立ち姿から、冗談のように膨大な力を垂れ流している。

「深い……」

眼帯を外した深緑の右眼に映るのは、奈落の底を彷彿とさせる深い闇。
圧倒的な力を感知して焼けるように痛い右眼に、芯の凍えるような闇が突き刺さってくる。

「ヤバイ……なんてもんじゃないよな？」
「絶体絶命……だな」
エリカを支えたままの三村の問いに、峰が短く答える。
こんな時だが、香は、二人が取り乱していないことに少し感心する。
『アレ』は、元がクラスメイトというだけだ。
純粋な力だけで言えば、恐らく、あのＡランク幻影獣以上。

「せ、先生……。どうしましょうか？」
三村が聞いてくるが、もちろんどうにもできない。
このメンツでなんとかできる相手ではないが。
このまま放っておくと、幻影獣軍とＢＭＰハンター達の闘いの真っただ中に、彼が飛び込んでいくことになる。
そのせいで人死がでるような事態になれば、澄空悠斗がどんな想いをするかなど、考えたくもない。

（せめて、麗華さんが万全なら……！）

膝に抱く麗華は、意識こそしっかりしているが、とても起き上がれる状態ではなかった。
暴走する澄空悠斗を見つめたまま、身動き一つしない。

「プレッシャーは凄いけど、今のうちなら……！」
具体的な能力発動をしていないことに（最後の）希望を託して飛びかかろうとする三村の前で。

澄空悠斗が右手に剣を出現させた。

「ちっ……」

「カラドボルグか……」

峰が呟く。

剣麗華の幻想剣を複写して具現化した剣。

（ん？　まてよ？）

思いつく香。

澄空悠斗の劣化複写（イレギュラーコピー）は、『必ず劣化状態で複写する』能力だ。

とすると、たとえ澄空悠斗のＢＭＰ能力自体が底上げされたとしても、オリジナルのカラドボルグより強くはならないのではないか？

だとすると（それでも十二分にやっかいだが）勝機はある！

が。

「お、おい……。あれ……」

「なんだ、あれは……？」

三村と峰が指差すのは、澄空悠斗の背後。

そこに、壮麗な剣が『浮かんで』いた。

その数、５０ほど。

「か、カラドボルグか？　あれ？」

「ＢＭＰ能力の多重起動？　い、いや、しかし、なぜ浮いているんだ？」

「豪華絢爛（ロイヤルエッジ）デス！　完全に不可視化した豪華絢爛（ロイヤルエッジ）で保持していマス！　なんテ、応用力ト制御力……！」

同一能力の多重起動に加えて、異なる能力の複合起動。

力の総量はもとより、超絶技巧どころではないテクニック。

（普通は、覚醒時衝動が大きくなるほど、制御は大雑把になるのに……）

もし、あの一本一本がオリジナル並みの力を持っているとしたら……。

「緋色先生……。来る」

「え？　あ、ああ！」

現実逃避しかけた意識を、剣麗華の一言が引き戻す。

確かに、澄空悠斗の背後に浮かぶ幻想剣が、動きを見せ始めている。

「や、ヤバイって、これ！」

「三村！　エリカ君を連れて逃げろ！　俺は、緋色先生達を……！」

驚愕の精神力で、回避行動を取ろうとする三村と峰。

だが。

「ダメ！　二人とも、動かないで！」

緋色香の声が制止する。

あまりといえばあまりの指示だが、従ってくれなければ死ぬ。

ここは、『アイズオブエメラルド』……いや、緋色香と生徒達の信頼関係を信じるのみだ。

そして、５０の刃が振り下ろされる。

祈りにも似た気持ちが通じたのか、三村と峰は動かなかった。

★☆

この世の終わりのような轟音が響いた後。
Cブロックは、本当にこの世の終わりのような惨状を示していた。
複写版カラドボルグは、オリジナルの威力を忠実に再現し。
中層側はおろか、核にも耐えうるAブロックをもズタズタに引き裂いていた。
だが、何よりひどい惨状なのは地面だ。
幼子に戯れに引き裂かれたキャンバスのように、深い深い亀裂が、縦横無尽に走っている。
浅い所でも、１０メートルほどの深さのある亀裂だ。

そして、香達の立っている場所は、文字通り陸の孤島と化していた。

「や、ヤヤヤヤヤヤ、やばかった……。さ、さすが、緋色先生……」
「動いていれば、死んでいたな……」
峰の言うとおり、香達が立っている場所以外には、どこに逃げても安全地帯はなかった。
攻撃の軌道を『アイズオブエメラルド』で見切った、緋色香のファインプレーだった。

（良かった……。今日初めて役に立った気がする……）
若干自信を取り戻す香。
いや、それどころか。
（この至近距離で外すなんて……。力の総量もテクニックも凄いけど、やっぱり制御しきれてない？）
考えてみれば、当たり前かもしれない。
どれほど澄空悠斗が凄かろうが、彼はまだ能力覚醒して３カ月程度の、いわば初心者。
こんな超絶能力を意識して制御できるわけがない。

「いけるかもしれない」

意識があるのかどうかも分からない、虚ろな眼をした澄空悠斗を見ながら、香は呟く。

「みんな良く聞いて」

麗華を抱いたまま、語りかける香。

「覚醒時衝動を抑える一番いい方法は、空っぽになるまで能力を使わせること。これは知ってるわね？」

授業の時のような問いかけに、三村と峰とエリカが頷く。

「でも、この状況でそんなことしてたら、冗談抜きで首都が落ちるかもしれない」

少なくとも、ＢＭＰ管理局は、この世から消えてなくなる。

「もう一つの方法は、本人を気絶させること」

この状況では、そちらの方が難しいという話もあるが。

「今なら、可能よ」

と、三村と峰を見る。

「名誉ある任務ってやつですね」

「元より、ここで退く者にＢＭＰハンターを名乗る資格はないでしょう」

「わ、私も、やれマス！」

三村、峰、エリカが迷いのない返事をする。

「ありがとう……」

と、最高の生徒たちを見る香。

（こんな私でも……。教えてきたことは間違いじゃなかったのかもしれない……）

僅かな感傷を振り切って、説明を始める。

「作戦は、簡単よ。まず、私が『アイズオブエメラルド』を最大出力で悠斗君に叩きこむ」
「はい」と峰。
「ひるんだ一瞬の隙に、三村君と峰君が攻撃して悠斗君を気絶させる。この時、絶対に手加減しないこと。ちょっと表現が悪いけど、殺すくらいの覚悟で今の悠斗君にはちょうどいいわ」
「ふっふっふ……。問題ないですよ、緋色先生。合法的に、やつの不可思議モテフィールドに審判を下すチャンスなんですから。ちょっと不必要なくらい本気で行きます」と三村。
「本郷さんは、万一の時、麗華さんを連れて逃げること。こんなこと言いたくないけど、私を含めて誰にどんなことがあっても、麗華さんだけは逃がしてね」
「わかりましタ！」と麗華を抱える香の所に駆け寄るエリカ。

「じゃ」
と、緋色香は、エリカに麗華を託して立ち上がる。

「いくよ、悠斗くん！」

普段は眼帯で隠されている緋色香の右眼からほとばしる深緑の光。

「『超加速（システムアクセル）・猪突猛進（オーバードライブ）』！」
「『砲撃城砦（ガンキャッスル）・全力突撃（アサルトチャージ）』！」
そして、三村と峰は、アイズオブエメラルドを信じて、大地を蹴る。

覚醒時衝動2

作戦に穴があったとは思えない。
澄空悠斗が完全に自身の力を制御できておらず。
精神支配に対するレジストを持たず。
身体能力そのものを強化していない限り。

澄空悠斗は、三村と峰の同時攻撃で確実に意識を失うはずだった。

「が……はっ」
「な、なんで……？」
絞り出すように声を上げる、峰と三村。
それぞらの腹には、お互いの拳が捻じりこまれている。

「三村君！　峰君！」
声を上げる緋色香。
彼女の眼の前で、二人がゆっくりと崩れ落ちていく。
「な、なんてコト……！」
エリカも声を失っている。

何が起こったのか分からない。
確かに、澄空悠斗は『アイズオブエメラルド』で一瞬意識を失っていたはずだし、三村と峰の攻撃は彼の身体を捉えたように見えた。

「一体、何が……？」
最悪の事態に、ほとんど条件反射で澄空悠斗を分析しようとする深緑の瞳。
「あ、あれッテ……！」
だが、その必要はなかった。

原因は一目了然だった。
一番初めの、一番肝心な前提が間違っていたのだ。

「そ、そんな……」
澄空悠斗を守護する騎士のように、空間に浮かぶ５０の剣。
その半分近くが、断層剣カラドボルグではない別の剣に代わっていた。
あれは……。

「干渉剣フラガラック……」

全てを引き裂く無敵の剣ではなく、通常攻撃では倒せない相手を攻撃するための精神干渉剣。
今の今まで、あんな剣はなかった。いや、見えなかった。

「フラガラックの多重起動デ、私達に幻覚を見せてイタんでしょうカ……？」
エリカが言う。
「嘘でしょ……」
対して香は、恐怖を通り越して驚きを感じていた。
あれはあくまで精神体を攻撃するというだけの剣だ。
単純に多重起動したところで、人間に幻覚など見せられるはずがない。
しかも、対象の一人は感知系最高峰の『アイズオブエメラルド』だ。

「甘かった……」
アレに隙なんかない。
攻撃のための剣を多重干渉させて幻覚をみせるなど、剣麗華本人にもできるかどうか……。

「……もう嫌。なんで今日は失敗ばっかり……」

いや、違う。

たまたま今日明らかになっただけで、今まで自分に問題がなかった訳じゃない。

能力が及ばなかったのはまだいい。

しかし、澄空悠斗が能力を完全に制御しているのを見誤ったのは、完全に自分のミスだ。麗華の時と同じミスだ。

たとえ、澄空悠斗が初撃を外していたとしても……。

「？　待ってよ……」

そうだ。おかしい。

あれだけ超絶テクニックを駆使する今の澄空悠斗が、ただ斬り裂くだけでいいカラドボルグの斬撃を、この至近距離で外すだろうか？

それに、三村と峰のことも。

あれだけ言ったのにお互い手加減したおかげで、二人とも気を失うだけで済んでいるが、そもそも幻覚を操れるなら、そこら辺に空いている大穴に突っ込ませればいい。確実に死ぬ。

（まさか……！）

「意識があるの……？　悠斗君！」

声。

届くかどうかわからない声。

「ねえ、聞こえてる、悠斗君！　私よ！　あなたの担任のこども先生よ！」

外見は小学生だが、この場で一番の『大人』である香が必死に声をかける。

「っ……」
と、初めて澄空悠斗に変化があった。
掻き毟るように頭を抱える。
「ゆ、悠斗君！？」
届いたかもしれない声に、駆け出そうとする香。
「駄目、先生」
「れ、麗華さん……！？」
その香を、いつの間にかエリカの腕の中から起き出していた剣麗華が引きとめる。

「先生は、直接攻撃に対する防御手段を持ってない。うかつに近づくと危険」
「き、危険なのは、あなたの方でしょ！　さっきまで、あなた死にかけていたのよ！　ここは、私がなんとかするから、本郷さんと一緒に逃げて！」
「悠斗君も闘っている。私だけ逃げられない」
危険な状態は脱したとはいえ、未だ顔面は蒼白でとても本調子とはいえない状態だが、その声には力があった。
「れ、麗華さん……。でも……」
「先生だって知っているはず。気絶させる方法は、ＢＭＰ能力が高い場合にはとても危険。もう一つの方法を取った方がいい」
「ば、馬鹿なことを言わないで！　今の悠斗君の力を全部使わせるなんて、首都の全ＢＭＰハンターがかかっても足りないわよ！」
「私も昔、おじい様達に、そうやって助けてもらった」
「あ……」
「だから、今度は私の番」

ふらつく脚で、カラドボルグを具現化させる。
実物と見紛うほどに澄空悠斗の背後に顕現し、周囲を押しつぶすほどの力を放っている偽物に比べて、その剣はひどく頼りない。

向こう側が透けて見えるほどの儚さは幻想剣の名前通りではあるが、この剣でいまの澄空悠斗に立ち向かうなど、無謀を通り越して喜劇だった。
だが。
「首都の全ＢＭＰハンターなんていらない。私が全て、受け止める」
剣麗華に迷いはなかった。

★☆

『おい！　おい！　悠斗！　聞こえてるか！　聞こえてないと思うけど、しっかりしろ！』
痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い。
頭が痛い！
いや、頭じゃない、身体だ！
パンパンに空気を入れて膨らませた風船みたいに、破裂寸前。
どんどん抜かないと、本当に破裂する。
でも、発散させるだけじゃだめだ。
せっかくのＢＭＰ能力なんだから、うまく使わないと。
幻影獣をコロさないと。
力は有り余ってるけど、無駄遣いはしないで。
効率よく殺すんだ。
じゃないと、渇きは満たされない。
そうだ、俺は渇いてる。
全部の力を使いきって、全部の幻影獣を殺し切って。
誰も死なない世界を作るまで。

あの子が寂しくない世界を作るまで。

『悠斗！　おい！』

そんな世界は来ないって？
そんなことは知ってるよ。
でも、皆が俺を見てるだろ。
俺のＢＭＰ能力に注目してるだろ。
使うんだ、限界まで。
後に何も残らなくてもいいから使うんだ。
この渇きは死ぬまで満たされない。
けど、使うんだ。

『悠斗！』

分かっている。
これが覚醒時衝動だ。
自分だけがならない体質だなんて思ってなかった。
けど、話に聞いていたほどゴツイ感じはないな。
むしろ、ひもじい。
寂しい。
渇く。
力が溢れているのに、中身がどんどん空っぽになっているみたいだ。
でも、使わないと。

『悠斗！　力を発散するのはいいが、前を見ろ！』

「え？」

薄ぼんやりと開いた眼に映るのは、折り重なって倒れる二人の少年。
見覚えはある。が、名前が出てこない。
でも、たぶん知り合いだ。
俺を殺そうとした知り合いだ。
でも、殺したくなかった知り合いだ。
だから、なるべく怪我をさせないように無力化した。
……これでいいのか？
いいんだよな。
頭が痛い。

「悠斗君！」
「悠斗さん！」

こどものような姿をした先生と、美しい金髪を持つ少女が俺に呼びかけて来ている。
あの二人も、たぶん知り合いだ。
俺を殺そうと……？
分からない。けど、無力化しないと。
守るために無力化しないと。
次はどうやろうか？
おれのちからはおおきすぎていろいろなことにふべんだな。

そして。

「どうしたの、悠斗君？」

この世の者とも思えないほど美しい少女が。

「私はここ」

明らかに弱り切った身体と剣に渇を入れながら。

「悠斗君が全ての力を使いきるまで、相手になる」

俺の背後の５０の剣に、一瞥だにくれずに。

「来ないなら、こっちから行くよ？」

世界で一番澄んだ瞳で、俺を見ている。

『そりゃあ、無理だぜ。ソードウエポン……』

頭が痛い。

あの子の名前が思い出せない。

俺より強いのに、俺が一番守りたいあの子のことが思い出せない。

俺が守りたいのに俺を殺そうとしているあの子を無力化するには、どうすればいい？

「難しいな……」

みんなが俺を嫌ってる。

みんなが俺を殺そうとしている。

でも、俺が憎い相手は一人もいない。

俺はみんなを守らないといけない。

今度は、あの時と違って、敵はいない。

だから、うまく無力化しないといけない。

いや、あの時も、結局は俺の早とちりで敵ではなかったんだっけ……。

「？　……あの時……？」

待てよ。

ひょっとして。

前にも、こんなことなかったか？

ブレードとダガー

『7月24日19時00分・D－1』

「二時間半ほどですか……。まあ、時間が問題ではありませんから、良しとしましょう」

普段はBMPハンター同士が腕を磨く武道館のような造りをした鍛錬場。
その広大な空間の中で、二人のBMPハンターが向かい合って立っていた。
2時間前までこの空間の主人だった100体を超える幻影獣は、全て霧と化しており。
100体を超える幻影獣を一体ずつ順番に斬って行ったBMPハンターが吐いたのが、さきほどのセリフと言う訳だ。

「な、なんなんですか、あなたは……」
「？　私のことを聞いていないのですか？　しょうがないですね、彼らも……。いいですか、私のBMP能力は一騎討ち（グレイトバトル）といって……」
「そんなことは知ってますよ！」

意外に強い声で遮るダガーウエポン・坂下陸。
ちなみに、ブレードウエポン・城守蓮のBMP能力、一騎討ち（グレイトバトル）は、敵味方に一対一を強いる能力だ。
どういう理屈なのかは分からないが、この能力の発動中は、誰も城守に複数で敵対できないし、誰も城守に加勢できない。
精神に干渉しているのか、肉体を操っているのか、空間を制御して

いるのか。
誰に聞いてもうまく説明することができないので、概念能力なのでは、とまで言われている。

「そんなことじゃなくて……」

その能力自体も、聞くのと見るのとでは大違いだったが、それよりなにより。

「1体ずつとはいえ、１００体以上の幻影獣を斬り倒して、無傷だなんて……」
というか、息一つ乱していない。

「ああ、そんなことですか」
「そ、そんなことって……」
「一対一で強いからこそ、この能力が意味があるんですよ。１００体くらい斬り殺せないようじゃ、剛にだって負けているじゃないですか？　まあそれでも、時間当たりの効率でいえば光には敵いませんけどね」
それがどうしました、と言わんばかりの口調で、愛用の刀の手入れを始める城守。
眼鏡をかけた線の細い知的な顔とマッチしている優雅な仕草だが、その刀がさきほど１００体以上の獣を斬り殺していると考えれば、逆にシュールだ。

「は、はは……」

唐突に渇いた笑い声を上げる陸。

「これが、僕の前任……。無敵の城守。歴代最強ブレードウエポン

か……」

今までの緊張の糸が一気に切れたみたいだ。

どうしてクリスタルランスの仲間は認めてくれないのかとか、澄空悠斗が特別扱いされるのと何か関係があるのかとか。

全く見当違いのことばかり考えていた。

「あなたが比較対象じゃ、誰だって僕になんか期待しませんよね」

次世代のホープだなんて呼ばれていても、所詮自分は数合わせだったのだ。

「ふむ。あなたの抱えている問題は一見深刻そうですが、何か勘違いをしていませんか？」

「勘違いなんかじゃないですよ！　何度出撃しても迷惑かけるばかりだし、なかなか一緒に特訓はしてくれないし、ミーティングにだって呼んでくれないし……」

「あの連中は付き合いが長いですからね。すぐに連携に付いていけなくて当然ですよ」

「で、でもですね……」

「そもそもあの連中は、自主的にミーティングなんかしませんよ。一緒に訓練するのも、光と彰くらいです」

「え？」

「リーダーや剛が仲良く訓練しているところを、想像できますか？」

「そ、そりゃ、そうかもしれませんけど……」

「考え過ぎですよ」

「で、でも、それじゃあ、澄空悠斗のことはどうなるんですか？　あいつと先輩方は絶対に何かあるはずなのに、誰も教えてくれない！」

言った後、陸はしまったと思った。

このことは言うつもりはなかったのに。

「ふむ。そう言えば、どうなりましたかね、Ａブロックは？」
刀をしまい、今思い出したとばかりに言う城守。
というか。
「そうですよ、Ａブロック！　城守さんに見惚れてすっかり忘れていたけど、Ａランク幻影獣が現れて、なんとか倒したら、今度は澄空悠斗が覚醒時衝動を起こして！　なんかめちゃくちゃやばい状況らしいじゃないですか！」
忘れるなよ。
「そうですね」
「そうですねって……！　いいんですか？」
「良くはないですけど……」
と、眼鏡の位置を治す仕草をして。
「あなたのところのリーダーに『もし悠斗君が覚醒時衝動を起こしてもあなただけは絶対に来ないで』と釘を刺されてますからね。私にも怖いものはあるのですよ」
「？」
意外な人物の名前がでてきたことに驚きを覚える陸。
「そ、そっか……。あなたも、澄空悠斗と何かあったんですね……？」
「ふむ、それも聞いていないと」
「そ、そうですよ！　これってやっぱり、俺が信用されていない証拠だと……！」
「それこそ考え過ぎですよ」
と、踵を返して歩き出す城守。
「ブレードウエポン？」
「少し休憩しましょう。我々の出番はないとは思いますが、万が一

のことはありますから。どこがいいか……。ああ、そうそう。悠斗君が来てから急に品ぞろえが良くなった自販機コーナーがありましたね。あそこにしましょう。奢りますよ」

「は、はぁ……」

それでいいのかとも思うが、ＢＭＰ管理局長にして最強のＢＭＰハンターでもある城守蓮が間違った判断をするとも思えない。

とりあえず付いていくことにする。

「ああ、そうそう。さっきの話ですが、あの連中にちゃんと尋ねましたか？」

「え？　澄空悠斗の話ですが、もちろんそれとなく……」

「それとなくでは駄目ですよ」

ちっちっと指を振る城守。

「どうも、あの連中に複雑なイメージを抱き過ぎのようですね」

「そ、そうなんですか？」

「外見や能力に騙されがちですが、あの連中は基本、大きな子供です。必要のないメンバーなど絶対に入れないし、不要だと思うならハッキリ言います。悠斗君と過去のクリスタルランスの関係など、今のあなたに必要ないと思ったんでしょう。試しにきちんと聞いてみてください。『あれ？　聞きたかったんだ』とか言いながら教えてくれますよ」

「そ、そうでしょうか？」

自分の頭の中にあるクリスタルランスのイメージと、かつてのメンバーが語るイメージの違いに、いまいち修正が追い付かない陸。

「いや、良く考えるとペナルティものですね」

「は？」

「いくらあの連中が鈍いとはいえ、可愛い後輩をこんなに悩ませるなど」

「は、はぁ」
肩を並べて歩きながら、ＢＭＰ管理局長ではなく、先輩の顔で語りかける城守。
「この役得、私がもらいましょう」
「え？」
「光あたりは『ユトユトのスタイリッシュさを伝えるのは私の役目だったのにー』とか後から言いだしそうですが、悪いのは彼らですからね」
「は、はぁ。……いや、はい。聞かせてください。大事なことのような気がするんです」
居住まいを正す陸に対して「そうでもないと思いますけどね」と咳払いをする城守。

「と、その前に一つ。さっきあなたが言っていたことですが」
「はい？」
「私は無敵でも最強でもありませんよ」
「はい？」
何を言っているのかと思う陸。
１０年前に引退した今でも、ＢＭＰハンターランク一位に君臨し、どんな乱戦でも制する一騎討ち（グレイトバトル）を持ち、そして一対一で決して負けないこの男のどこが最強でないというのか？
「といっても、実際に負けましたしね」
「え？」

衝撃的な一言。
真偽を確かめようとする前に、城守が口を開いた。

「では、語りましょうか。私が世界で一番強いと思う少年の話を」

追想～首都橋の悪魔～

『１０年前・首都橋にて』

「なるほど。こりゃひでぇ」
首都橋の一角、ワゴン車から降り立ったばかりの５人のうちの一人、高校生くらいの、大柄な身体を持つ少年が言った。
その直後、『もう僕の用事は終わりっすね』とばかり、ワゴン車は逃げて行った。

「ここまで派手なんは、さすがにウチも初めて見るわー」
逃げ去るワゴン車を気にもせず、勝気な眼が印象的な少女が言う。
眼の前に広がるのは、盛大に玉突き事故を起こして沈黙している車の群れである。

「と言っても、直接的なＢＭＰ能力による破壊が行われた形跡はありませんけどね」
続けるのは、線が細く、眼鏡をかけた美少年である。
が、腰に下げた刀と相まって、その存在感は大柄な少年を圧倒している。
「そんなの分からない。リーダーみたいに支配系能力者かもしれないし、直接攻撃しなくても、走っている車の制御を乱す方法なんて、いくらでもある」
美少年に応えるのは、さきほどの少女と同じくらいの年の美少女である。
トロンとした眼のせいか、５人の中で一番おっとりした印象を受ける。

「ともあれ、このプレッシャーは本物です。幻影獣ではないようですが……。みなさん、気を抜かずに」
５人の中で一番年上の少女が、締める。
どんなＣＧ補正をかければこんな美少女ができるのか、というくらいの美形だが、その容姿の中で一番眼を引くのは、燃えるような深紅の瞳である。

と、まるでその声に応えるかのように。
数百メートル、数十台に渡って玉突き事故を起こしている大惨事の車の群れの中から、一人の少年が姿を現した。
小学生くらいに見える。まだ幼い男の子だ。

「あいつか？」
「そうだと思う」
「動ける人は避難し終わっているみたいですね」
「ゆうても、車の中に取り残されとる人らも結構おると思うで」
大柄、眠そう、眼鏡、猫目の順で口々に感想を言う。

「救助も大切ですが、第一の任務は、あの少年の確保です。覚醒時衝動を起こしているのはほぼ間違いないので、油断はしないでください」
「こんなプレッシャーの中で油断できるのは、リーダーと蓮くらいやわ……」
わずかに緊張した面持ちで、猫目の少女が赤目の少女に返す。
「リーダー。あの子、ＢＭＰどのくらいだと思う？」
「私のアイズオブクリムゾンは、分析にはそれほど向いていないのでなんとも……。ただ、私より上なのは間違いないですね」
おっとり眼の少女に、赤目の少女が返す。

「リーダーより上？　ＢＭＰ１７０以上は理論的にありえないんじ

ゃなかったか？」
「今この瞬間に覚醒時衝動を起こしている剣大臣のお孫さんも、１７２と聞いていますが？」
「ああ、そういやそうだった。あっちは国家維持軍で対応するからって外されたんだっけな、俺ら」
大柄な少年と美少年のやり取り。
「正直腐ってたんだが、ひょっとしてこっちの方が大当たりなんじゃね！？」
「相変わらずの戦闘狂ですね、あなたは。……しかし、否定はしません」
水と油どころか、全く接点のなさそうな外見の二人だが、妙に気が合っている。
もちろん、見た目と中身にギャップがあるとすれば、眼鏡美少年の方だろうが。

「ま、とりあえずはお手並み拝見だな」
ひょい、といった感じで、近くに転がっていた軽トラックを持ちあげる大柄な少年。
「ちょ、ちょい待ち……、剛！」
「っけぇー！」
猫目の少女の制止も聞かず、沈黙した車の群れの中で虚ろな目でたたずむ少年に向かって、軽トラックを投げつける！

軽トラックは、冗談のように高く綺麗な放物線を描き。
覚醒時衝動を起こした少年を叩き潰した。

「……」
「……」
「……死んだのではないでしょうか……？」
眼鏡美少年が、ぽろっと呟く。

「アホか？　蓮。これだけ馬鹿でかい気配を振りまいてるやつが、これくらいで死ぬか」
「アホは、あんたや！」
すぱん、と、猫目の少女が大柄な少年の頭に突っ込みを入れる。
「んだよ、彰？」
「あのな！　いくら強力なＢＭＰ能力いうても、それが戦闘系とは限らんやろが！　うちのリーダーかて、ＢＭＰ１６８やけど、飛んでくる車を受け止められると思うか！」
「……あ」
「……あ、や、あらへんわ！　この脳筋が！」
やっちまった、的なポーズを取る大柄な少年に、再度の突っ込みを入れる猫目少女。
どうやら、この二人は仲がいいらしい。

「どうやら、その心配はなさそうですよ」
赤い瞳のリーダーの澄んだ声が告げる。

それに応えるように、大柄な少年……ハンマーウエポン臥淵剛が投げたのと同じくらい高く綺麗な放物線を描いて、軽トラックが橋の下の海に投げ込まれる。
後には、傷一つない虚ろな眼の少年。

「どうやら、戦闘系みたい」
「しかも、身体能力強化系かよ！　大当たりどころか、超大当たりじゃねえか！」
眠そうな眼の少女の感想に、語彙の少ないことをアピールするかのようなセリフで続く剛。
「リーダー。とりあえず、俺が行っていいか？　いや、行く！　絶対行くから邪魔すんなよ、お前ら！」
リーダー……アイズオブクリムゾン緋色瞳はおろか、クリスタルラ

ンスメンバー全員に釘を刺して、剛が駆けだす。

★☆

「どうりゃあーーー！」

丸太のような太い腕が、無防備な少年の頭を捉える。

ピンポン玉のように跳ね飛ばされる。

と思いきや、少年は、まるで恋人に訳のわからない理由で頬を叩かれて訳のわからない男のような仕草で、緩慢に頬を指で掻いていた。

「おおおおー！！」

雷のように激しい蹴りが、少年の身体に深々と突き刺さる。

くの字に身体を折り曲げるが。

次の瞬間には、何事もなかったかのように虚ろな眼で佇んでいた。

「ま、まじかよ、こいつ……！」

純粋なる身体能力強化系の怪力無双（ドラゴンバスター）の攻撃を歯牙にもかけない少年を前にして、剛は怯えるどころか、ますます闘志を滾らせた。

「面白れぇじゃねぇか！　こうなりゃ、どっちかが倒れるまで……！」

最後まで言えなかった。

華奢というほどではないが、決して強そうには見えない少年の腕に、がっちりと首を抱え込まれたからだ。

「……この！」

それまで無反応だった少年の突然の反応に驚く剛だが、さすがにそこはＢＭＰハンター。

逆に、少年の胴を掴み返した所で。

腹に、思いっきり膝を叩きこまれた。

「が……。がはっ……」

不意を突かれたことを差し引いても、胃液が逆流しそうな程の強烈な一撃。

ダンプカーと正面衝突しても、相手が車両保険に入っているかどうかを心配する（主に仲間がだが）剛にとって、初めての衝撃だった。

「や、やべぇ……」

危険な相手どころではない。

先日、クリスタルランスで初めて倒したBランク幻影獣が可愛く見えるくらいの、暴力的な力だった。

続いて、下げられた剛の頭を、引っこ抜くようなアッパーカットが襲う。

一瞬、剛の足が地面から離れる。

頭の中に星が舞う、という表現が比喩ではないことを実感する。

「ぐ、お……」

気力で地面に倒れこむのは拒否したが、防御どころではない。

まだ視界さえ定まらない。

その揺れ動く視界の中で。

虚ろな眼をした少年が、その頼りなさげな拳を凶悪に振りかぶっているのが見えた。

最大級の危機を迎えながら、ガードを固めず、あえてカウンターを狙いにいった剛の拳は空を切り（そもそもまだ焦点があっていない）。

代わりに灼熱の衝撃が頭を貫通した。

★☆

「死にましたかね……」

「ど、どうやろ……」

眼鏡美少年……ブレードウエポン城守蓮と、猫目少女……電速犬神(パルス)彰が思わず呟く。

視線の先には、１０メートル近く吹っ飛ばされ、柱に強く打ちつけられて、そのまま動かなくなる剛。

「剛が力で負けるなんて……」

「恐ろしい能力ではありますが、純粋な身体能力強化系なら、それほどやっかいな相手でもなさそうですね」

眠そうな眼の少女……アローウエポン茜島光に、どこか残念そうな様子で答える蓮。

「どうでしょう、リーダー。ここは、私が片づけましょうか？」

「油断しないでください。さっきから私が……」

「うあ！　ヤバイで、あれ！」

凄く行きたそうにしている蓮に、瞳が何らかの警告を発しようとしたところで、彰が弾かれたように飛び出した。

虚ろな眼をした少年が、地面に伏したままぴくりとも動かない剛に向かって歩き始めたからだ。

★☆

「電速（パルス）！」

一陣の風が通り過ぎた後。

虚ろな眼をした少年の身体に電気が走りぬける。

「？」

まるで、コントのように目視できるほど激しい電撃だったが、少年はキョトンとしていた。

「マジかいな……」

眼を疑いながらも、返す刀で少年の傍を走り抜けると同時に再度の電撃。

「……」

が、やっぱり、これといった反応を示さない虚ろな眼の少年。

「攻撃力だけでなく、防御力も半端やなく上がっとる……。まるで、剛の怪力無双（ドラゴンバスター）や……」

あまりの鉄壁ぶりに閉口する。

とりあえず、剛の無事を確認しながら、少し距離を取ろうとする彰。

が。

「……え？」

少年が居ない。

剛の方を向いた一瞬の隙に、身体中を電気で焼かれていたはずの少年が姿を消していた。

「ど、どこに……？」
不安げにあたりを見回す彰。
敵にそうさせたことは何度もあるが、自分がするのは初めての経験だった。
と。
「え？」
腰のあたりに、温かい感触。
見ると、小さな二つの手が、後ろから回されていた。
「あ……」
彰の顔が、眼に見えて青ざめる。
さきほどこの男の子は、全開で怪力無双（ドラゴンバスター）を発動させていた剛の防御をたやすく吹き飛ばした。
並みの防御力しか持たない自分が、あの力で攻撃されればどうなるのか。
「あ、ああ……」
上半身と下半身が二つに引きちぎられる絵が頭に浮かぶ。
が、それも決して大げさな妄想ではない。
一か八かの想いで、自分の腰に後ろから回された少年の手を掴む。
全ての力を使い切る覚悟で、電撃を放とうとした彰に。
逆に紫電の衝撃が駆け抜けた。

追想～クリスタルランスｖｓＢＭＰ１８７～

少年の発した電撃により、犬神彰は静かに倒れた。

「え、え……？」

茜島光が疑問を浮かべる。

一瞬予想した最悪の惨劇は起こらなかったが、別に状況が良くなった訳ではない。

「生半可な速度で、彰の眼を掻い潜れる訳もなし。おまけにあの電撃……」

「まるで、電速（パルス）……」

加速度的に底が知れなくなっている少年を前にしても、さして動じていない蓮に対し、若干不安そうな光。

「複写系能力ですね」

リーダーが断定する。

「ただの複数能力の可能性はありませんか？」

「さっきから、私のアイズオブクリムゾンが全く通じません。相当高位の支配系能力を使っています」

「なるほど。アイズオブクリムゾンまで複写されていましたか」

言いながらも、むしろ楽しそうな顔をする蓮。

「彼のことを探ろうとしたのが失敗でしたね。初手で支配しておけば良かった」

言う瞳に。

「それじゃ、面白くないじゃないですか」

と、蓮は刀を抜き放った。

「私が行きます。問題はないですね」

「いきなりやっかいな能力を3つも複写されてしまいましたからね。もうあなたでなければ歯が立たないでしょう」
お手上げポーズをする瞳。
「怪力無双（ドラゴンバスター）の攻撃・防御力と電速（パルス）のスピード。そして、アイズオブクリムゾンのレジスト効果で精神支配も効果なし……と。お手軽万能戦士の出来上がりですね」
いつになく軽口を叩く蓮には、気負う様子は全くない。
絶対の自信があるようだった。

「蓮……。油断しない方がいい」
「おや、めずらしいですね、光。あなたが心配してくれるとは」
「別に心配はしていない」
冷たい一言にも、蓮は、そうですか、と薄く微笑んだだけだった。
クリスタルランスと言うチームを組んでいるが、蓮も他のメンバーも大した仲間意識はない。
特に蓮にいたっては『強い者同士で集まっていれば、大きな仕事に呼んでもらいやすくなる』という理由でしかなかった。
そもそも蓮の能力は、仲間の存在を必要としない。

★
☆

「一騎討ち（グレイトバトル）」

落ち着いた足取りで少年に向かいながら、蓮は呟く。
地を揺るがすような振動もなく、強い風に煽られるような波動もないが、蓮にだけは発動したことが分かる。
ただ一人の敵以外は、敵味方共に蓮の戦闘に関して一切の手を出せ

なくなる『現象』だ。

「一応言っておきますが、別にあなたの仲間がどこかに隠れていると心配している訳ではありませんよ」

「……」

答えが返ってこないのを承知で話しかける。

「もちろん、私の仲間に手を出させないための騎士道精神でもありません」

「……」

「単なる習慣です」

刀を握りしめながら続ける。

少年は何を言っているのか分からないだろうが、別に構わない。

これも単なる習慣だから。

負けたことがない男の。

（それはともかく）

思う。

少年の瞳が赤く染まっていない。

アイズオブクリムゾンを複写しているのはほぼ間違いないのだが、レジストをするのが精いっぱいで、相手の支配まではできないということだろうが。

「まあ……。例えオリジナルでも私には通じませんが」

アイズオブクリムゾンを破るのには、実は特別な能力は必要ない。

誰にも侵されない強力な意志さえあればいい。

「それでも、あなたが私を倒せる唯一の可能性だったのですがね……」

若干残念そうに言う蓮。

と。

少年の姿が掻き消えた。

「やはり電速（パルス）ですか」

慌てることなく視線を動かし。

動かし……。

そのまま１８０度振り向いた。

「意外に慎重ですね」

語りかける蓮。

少年は、攻撃することなく蓮の横を駆け抜け、背後に回ったのだ。

しかも、最初より蓮との距離が離れている。

いきなり勝負がつくかと思ったのだが。

「臆病風に吹かれたのでないとすれば、少しはできますか」

と言ったところで、僅かな違和感を覚えた。

（慎重……。臆病？）

あの少年は、覚醒時衝動を起こしているのではなかったか。

どちらも、あり得ない言葉だ。

怯えるとすれば自分のＢＭＰ能力に対してだけのはず。

「まあいいでしょう。電速（パルス）で動き回られると時間がかかりそうですが」

と、自身の敗北を１パーセントも勘案していないセリフを蓮が吐いた瞬間。

少年が驚きの行動に出た。

「ほう」

最初に剛がそうしたように、近くにある自動車（普通のセダンだ）を持ちあげたのだ。

そのまま投げつけてくる。

「やれやれ」

接近戦は分が悪いと悟ったのは立派だが、この戦法は論外だ。

最高速では劣るはずだが、蓮は電速（パルス）よりも速いと錯覚させるほど見事な動きでセダンの下を潜り抜ける。

そして、そのまま少年に向かってあっという間に距離を詰める。

（やはり、複写したＢＭＰ能力の切り替え時にわずかな隙ができる）

動きを止めた少年に向かって、容赦なく突進しながら刀を構える蓮。

「これで……」

終わりです。と思った瞬間。

少年の姿が消えた。

★

少年の姿はない。

代わりにあるのは柱。

そして、身体の前面に感じる痛み。

「あ、あ……？」

大したダメージではなかった。

が、唯一の武器である刀を無様にも取り落としてしまうほどの衝撃だった。

「あ……」
視界の定まらない中、手探りで刀を求める蓮。
頬に感じる灼熱と、口の中の血の味。
どれも初めての経験だった。
状況は分かる。
アイズオブクリムゾンだ。
確かに蓮にあの技は通じない。
が、それは平常時、普段通りの状態であればの話。
愚策を取ったと相手を侮り、勝負はついたと気の緩んだ一瞬に、支配の魔手を差しこまれたのだ。
「く……！」
ようやく刀を探り当てた蓮は、弾かれたように顔を起こして周囲を見回す。
今、自分は完全に無防備だったはずだ。
なのに攻撃してこなかった。
覚醒時衝動だから正確な判断ができていないとか言うなよガキが。
（あれほどの戦術がとれる者が、我を失っているはずが……！）
と怒りの感情を露わに（これも初めてのことだった）する蓮の瞳に、少年の姿が映る。
そして、滾った血が急速に収まった。
少年の瞳は燃えるような赤色に染まっていた。
まるで幽鬼のように生気のない仕草で立ちながら、その瞳だけはま

るで炎のようだった。
「あ……」
その瞳をまともに見た蓮の手から刀が滑り落ちる。
油断だった。
あの少年がここまでアイズオブクリムゾンを使いこなせることが、まったく予想できなかった訳ではない。
自分すら欺く高度な戦法を、今日目覚めたばかりの少年が使ったことが受け入れられない現実なのではない。
あの眼だ。
アイズオブクリムゾンを使えるかどうかなんて、ささいなことだった。
彼の眼は。
自らの力に怯えて泣き叫ぶ子供の眼でも。
自らの力に酔いしれて暴れまわる狂人の眼でもなく。
「ぐ……あ……」
全身の筋力と気力を総動員して向かうが、一度侵入を許した支配の力は、易々とは出ていかない。
刀を持っていれば、太ももあたりに付き刺す手もあったが、さっき取り落としてしまっていた。
そして、なにより、蓮自身が見惚れてしまっていた。
確たる目的を持ち闘う戦士の眼に。
負けることなどないはずだったブレードウエポンに敗北を教えよう

としている少年の意思に。

「あなたはいったい……」

何者なのですか、という言葉は声にならず。

蓮の意識は闇に閉ざされた。

★☆

「リーダー……」

「ここまでですね」

光の言葉に、短く応える瞳。

「完全に闘い方を間違えました。蓮まで破れてしまっては、もう誰も彼を止められないでしょう」

「……」

「撤収します。後は、ＢＭＰ管理局に任せましょう。どのみち、あの少年はもう長くないでしょう」

言って、近くの車を物色し始めるリーダー。

「どういうこと、リーダー？」

「身体に比して、ＢＭＰ能力が大き過ぎます。あれでは、遅かれ早かれＢＭＰ中毒症を発症するでしょう」

「……そうなの？」

「高ＢＭＰ能力者が精神を病むのは良くあることですが、身体に収まりきらないほどの能力とは……。どんな神様の悪ふざけなんでしょうね」

幸いと言うべきか、当たり前と言うべきか、一台目でキーの差し込まれたままの車に当たった。

「さ、乗ってください、光」

「……」

運転席に座って呼びかける瞳だが、光は少年の方を見つめたまま動こうとしない。

「あの三人なら大丈夫ですよ。あの少年の力は確かに凄まじいですが、どれも致命傷になりそうな攻撃はありませんでし……た？」

言いながら、自分のセリフにわずかな違和感を覚える瞳。

その原因を探ろうとするより前に。

光が両腕を頭上に振り上げて、クロスさせた。

「光！？」

「まだ私が闘っていない」

「な、なにを！？」

慌てるリーダーの前で、光の両手に力が集束していく。

彰と同時にクリスタルランス入ったこの少女は、どうにも掴みづらい性格だとは思っていたが。

自分から進んで闘いたがるようなタイプでは、決してなかったはずだ。

「私も、あの子と闘ってみたい」

言うと同時に、天閃（レイ）を少年に向かって放つ光。

が、少年は眼にもとまらぬ動きで、光線をかわす。

「電速（パルス）……」
呟くリーダー。
やはり、あの少年を倒すことは容易ではない。

「だったら」
今度は、クロスさせずに両手を頭上に掲げる光。
それぞれの手に、力が集束していく。
連撃で勝負するつもりのようだ。
だが……。

「待ってください、光！」
「天閃（レイ）」
リーダーの制止も聞かず、右手の光線を投げつける光。
瞬間、少年からも同種の光線が放たれる。

そして、正面衝突した光線同士が爆発を起こす。

「う……」
「や、やはり……」
天閃（レイ）まで、複写されてしまった。

反射的にもう一つの光線を投げつける光。
今度は抵抗なく、少年がいたあたりで爆発を起こす。

「あ、当たった？　リーダー？」
「いえ、おそらく外れました」
おまけに、再度の爆発で、完全に少年の姿を見失ってしまった。
これは、まずい。

「早く乗ってください、光！　逃げますよ！」
「ま、まだ」
なおも意地を張る光。
やむなく、一人で発進しようとした瞳の眼の前で。
小さい影に、光が押し倒されるのが見えた。

☆

完全に勝負はついた。
光はうつ伏せに組み伏され、後ろ手に固められている。
決して大きくはない光の背中に乗っているのは、さらに一回り小さい少年である。
一見すると、高校生のお姉さんに小学生の男の子がじゃれついているだけのように見えるが、彼は普通の小学生ではない。
怪力無双（ドラゴンバスター）を複写した彼にとっては、あのまま光の腰をねじ切ることも朝飯前だろう。
瞳もアイズオブクリムゾンを全開にして睨みつけるが。
「……」
「……やはり、通じませんか」
瞳と同じく、煌々と輝く深紅の眼を持つ少年には通じない。
……通じないのだが。
「気に入りませんね」

リーダーは言った。

「どうして、そのまま光を殺さないのですか？」

「……」

物騒なセリフにも、まるで反応を示さない少年。

「さきほど、同じような状況で彰も気絶させただけでしたね？」

「……」

「剛と蓮にいたっては。柱に叩きつけるなどせず、そのまま海に落としていれば、確実にとどめをさせたはず」

「……」

「あなたはいったい、何がしたいのですか？」

問いかける瞳。

少年は応えない。

答えないが、無防備な瞳に襲いかかっても来ない。

光の背中に乗ったまま、静かな眼で瞳を見つめていた。

「どうすれば、その子を放してくれますか？」

切り口を変えてみる瞳。

と。

「これ以上……。みんなを……傷つける……な」

少年が初めて口を開いた。

が。

「？　なんのことですか？」

瞳が疑問符を挟む。

むしろ、被害を受けているのはクリスタルランスの方なのだが。

と、その時。

「あうっ」

光が短く悲鳴を上げた。

どうやら、少年に後ろ手に握られている腕を変に捻ってしまったらしい。

その瞬間、少年が腕を放した。

「「……え？」」

疑問符を浮かべる瞳と光。

光の背中に乗ったままの少年は、気まずそうな顔をしながら、今度はどこを掴めばいいのか迷っている風だった。

それを見て、瞳が再び話しかける。

「あなた、ひょっとして、ほんとは私達と闘いたくないのですか？」

というリーダーの問いに、少年は首を縦に振った。

そして、背後の玉突き事故現場に視線を移して。

また、瞳と光に戻した。

その瞬間、瞳の脳裏に閃くものがあった。

「あなたもしかして、私達クリスタルランスから、ここで事故を起こした人達を守っているのですか？」

追想～はじまりの物語～

「えーと……。つまり、全部俺のせいって訳か？」

さきほどまでの暴れぶりが嘘のように大人しくなった少年を、クリスタルランス５人が囲んでいた。

瞳の見立て通り、やられぶりのわりには誰もほとんど怪我らしい怪我をしていなかった。

「それ以外に解釈のしようがないでしょう」

もっとも、蓮あたりは、プライドに多大なダメージを負ったようだが。

「ま、いきなり軽トラが飛んできたら、普通は敵やと思うやろなー」

「いや、しかし彰よ。あの馬鹿みたいなプレッシャーは覚醒時衝動のもんだと思っても無理ないだろ？」

「万が一そうでない可能性があるから、みんな気をつけるんや！見事に裏目ったやないか、この脳みそ筋肉君が！」

元気いっぱいの彰に対して、剛は若干疲労の色が濃い。

少年に一番手加減されなかったのかもしれない。

「それが……。覚醒時衝動を起こしていたのは間違いないようなのです」

「「へ？」」

リーダーの言葉に、揃って声を上げる彰と剛。

「というより、まだ覚醒時衝動中です」

と、瞳は、さきほどまでの暴れぶりが嘘のように虚ろな眼で座り込んでいる少年を見た。

ちなみに、なぜかさきほどから光がしゃがみこんで少年の頭を撫で続けている。

「覚醒時衝動中？　確かに、プレッシャーは凄まじいままですが……」

と、疑問符を浮かべる蓮。

ちなみに、今すぐにでも再戦したくてたまらない闘志を全く隠していない。さきほどの戦闘は相当なショックだったらしい。

「もう闘う理由がなくなったから闘わないんだよね。悠斗君」

しゃがみこんで視線を合わせ、少年の頭を撫で続ける光が言う。

その顔は、今までに見たことがないくらい優しい。

ちなみに、名前は瞳がアイズオブクリムゾンで読み取った。

「事故の原因がなんであれ、いきなり襲いかかってきた剛を敵だと勘違いし、事故を起こした人達を守ろうとしたというのは理解できます。しかし、覚醒時衝動となると話は別です」

「だよな。覚醒時衝動中は、普通は意識なんかねえよな」

蓮と剛が頷き合う。

自分達の覚醒時衝動の時のことを思い出したのだ。

そして、結論。

……いや、やっぱ無理だろ、と。

「覚醒時衝動ん時に出るのは、本性だ。力に酔うか、恐れるか」

「その力をどう使うかなんてことに悩みが及ぶのは、気絶するほど暴れた後の話ですよ」

剛と蓮が神妙に言う。おそらく実体験なのだろう。

「その辺は同意見ですけどね……」

深紅の瞳で少年を見詰めたまま言うリーダー。

『力に対する依存も恐れも半分半分……』

ということが読み取れる。
なかなかバランスの取れた『本性』ではある。
そもそも、どんな性根であれ、最終的には大した問題にはならない。
たとえ自分がどんな人間だとしても、目指す目標のために自分を律する意思というものを人は持っているからだ。

だが……。

「ああ、良かった」
いきなり瞳が言う。
「リーダー？」
「だ、そうですよ」
彰の疑問符に応える瞳。

「こんなのは嫌だ。誰かが傷つくのは嫌だ。誰かが傷つけるのは嫌だ。あの子が傷つくのは嫌だ。そんなのは嫌だ」
「……」
「そんな感情ばかりでした」
と言うなり、二・三度瞬きして赤い瞳の力を落とすリーダー。
「こいつは、聖人君子か何かか？」
「だったら力ずくでも大人しくさせる、というあたりの発想は好みですが」
軽口を叩きながらも、剛と蓮に覇気がない。
色々な意味で衝撃だったらしい。

「リーダー。この子、クリスタルランスで預かれない？」
くるん、と視線を向けて聞いてくる光。
「お、それは……」

「名案ですね！」
なぜか、剛と蓮が割り込む。

「このＢＭＰ値だ。どうせ、まともな施設じゃ面倒見切れねえ。力に心が潰される暇もないくらい、徹底的に鍛えてやろうぜ！」
「あなたにしてはまともな意見ですが、どうせいい遊び相手ができる、くらいに思っているのでしょう。言っておきますが、このまま彼が強くなれば、すぐにあなたでは相手にならなくなりますよ？」
「阿呆か、おまえは。そうならないように、俺も強くなんだろが！　……って、そういや、てめえも負けたんだっけな。自分こそ、いきなり、リベンジです、とか言いだすなよ」
「やだなぁ、剛さん。脳幹まで筋肉のあなたと一緒にしないでくださいよ」
「ちょ、ちょい待ち蓮。今はやばいって。真面目な話をしとる最中やから、邪魔するとリーダーに殺される！」
いい感じにヒートアップしてきた剛と蓮を、彰が止める。
もちろん、とばっちりが恐ろしいからだ。

「で、でもリーダー。クリスタルランスで預かる言うんは、悪い話やないと思うで。剣大臣はんは、ＢＭＰ能力者があんまり好きやないみたいやし、こんだけとんでもないＢＭＰ能力者を預かれるとこは他にないやろ？　……光もその気みたいやし」
最後の一言を、なぜか苦虫を噛み潰したような顔で言う彰。
「うん。彰の言うとおり。そして、私がお姉さんになろうと思う」
「お、お姉さんやて」
「うん、私が一番悠斗君と年が近いから。たくさん可愛がってあげようと思う」
「う……。そ、そうやな。それがええわ」
『うちとも遊んでくれるよな！』というセリフを噛み潰して、親指を立てて答える彰。女性だけど漢である。

が。

「みんなの気持ちは分かりましたが」

「？」

「悠斗君はクリスタルランスには入れません」

「……どうして、リーダー？」

「というよりも、政府に報告しません」

瞼を閉じたまま言い放つ瞳。

「それは、違反行為ですよリーダー」

「違反は結構だが、意味があるのか？」

蓮と剛が疑問符を浮かべる。

「この子は、身体に対してＢＭＰ能力が大きすぎます。このままでは、遅かれ早かれ異常をきたすでしょう」

「でも、高ＢＭＰ能力者にとって、精神に異常をきたすリスクは当たり前のもんやろ？」

「この子の場合、精神ではなく身体です。精神ならば、専門の医師の指導のもとで過ごせばそれなりになんとかなるものですが」

彰の疑問に答えるリーダー。

「身体がＢＭＰ能力についていかない？　そんなことは初めて聞いたぞ」

「でしょうね。私も初めて見ましたから」

剛にも答える。

「どうすればいいの、リーダー」

心配になったのか、少年の頭をぎゅっと抱きしめている光。

「身体がある程度成長すれば、負担も軽くなるはず。小さい頃から鍛えた場合に比べて爆発的な成長は望めないかもしれませんが、そ

のくらいの方が逆にいいでしょう」
「それまでＢＭＰ能力を封印でもすんのか？」
「あら、察しがいいですね、剛。その通りですよ」
さらりと答えた瞳に、剛は驚く。

「今から、この少年に呪いをかけます」
「の……！」
物騒な単語に、彰がひく。
「今日のことを含め、自身のＢＭＰ能力に関する記憶の一切を封印します。そして、成長し、自身のＢＭＰ能力に対応できる身体と、それを使う意思を宿した時、解けるように設定します」
「そんなことができるのですか？」
疑問を投げかける蓮。
アイズオブクリムゾンなら記憶の封印はできるかもしれないが、任意のタイミングでそれを解除するとなると想像もつかない。

「私の弟を捧げますから」
「弟？　捧げる？」
何を言っているのか分からない、クリスタルランスメンバー。

「光、悠斗君の顔をこちらに」
「……記憶は本当に戻るの？」
「戻らなければその方が幸せかもしれません」

残酷でもあり優しくもあるリーダーの言葉。

「急かすつもりはありませんが、あまり時間はありません。今この瞬間にも、悠斗君の身体は衰弱し続けています」

光はしばらく考えていたが。

やがて、少年を促して瞳の方へ向かせる。
少年は完全に無抵抗だった。

「あなたのためとはいえ、これから私は、あなたにとても酷いことをします」
「……」
「できるだけＢＭＰ能力に関する記憶に限るつもりですが、それでもかなりの部分の記憶を失います」
「……」
「生活環境も、おそらく今まで通り暮らすことは不可能でしょう」
「……」
「納得してくれているとはいえ、私の弟にも……。いえ、翔には、すでに謝り切れないほどのことをしていますね、私は」
「……」
「恨んでくれても結構です。結局、これは私の勝手な考えに過ぎないのですから。ただ、できれば恨むのは私一人にしてください」
「……」

一度深紅の瞳を閉じて。
見開く。
その眼は、今までにないほど強い光を放っていた。

「うっ」
少年が呻く。

「短くて１０年ってとこか。ま、気長に待つとするか」
剛が言う。
「長いですね。けれど、退屈はしないかもしれません」
蓮も言う。
「ああは言うけど、リーダーの呪いは強烈やからな。ちゃんと帰っ

てきいや」
彰が心配する。
「悠斗君、私は待ってる。今度会えたら、ちゃんとお話ししよう」
光も約束する。

「では、頼みますよ、翔」
「……」

「また、いつか。私の呪いが解ける日に会いましょう、澄空悠斗君」

『7月24日19時15分・D－1』

「とまぁ、意外に大したことのない話なんですが」
澄空悠斗が泊まり出してから急に品ぞろえが豊富になった自販機コーナーで、『どくどく緑クン』なる謎のドリンクを片手に、ブレードウエポン城守蓮は語り終えた。

「いや、十分大したことありますって！」
大声で反論するのは、後任のダガーウエポン坂下陸。
「そうですかね」
「そうですよ！　知っちゃいけなかったり、知らない方が良かったりする秘密が5・6個ありましたよ、今の話！　先輩方が話してくれない訳で……」
「大したことのない話なんですよ」
静かに、しかしはっきりと断定するブレードウエポン。
「あなたはクリスタルランスなんですから」

「あ……」

その一言で。

ブレードウエポンが何が言いたいのか分かった。

「ほんとに……、俺が聞けば、先輩方はこの話、してくれたんでしょうか？」

「お疑いなら、改めて聞いてみればいいと思いますよ」

まだ迷っている様子の陸に、涼しい顔で返す蓮。

「……そうしてみます」

陸も頷く。

「澄空悠斗が覚醒時衝動を起こしていても城守さんが落ち着いているのは、あいつが一度、覚醒時衝動を克服したことがあるからですか？」

「ええ。覚醒時衝動といっても、悠斗君にかかれば解法の分かっているパズルのようなものです。心配には及びません」

陸の問いに、信頼しきった表情で答える蓮。

「ブレードウエポン……。城守さんがクリスタルランスを辞めたのも……。やっぱりあいつに負けたからなんですか？」

「そうですね。それまでの生き方を全否定されるくらい、見事なまでに酷い負け方でしたからね」

セリフに比して、とても穏やかな表情で言うブレードウエポン。

「あまりに酷過ぎて……。悔しいとか、憎いとかを通り越して、憧れてしまったんですよ」

「あ、憧れた……？」
「目標ができた、と言っていいかもしれません」
と、飲み終えた『どくどく緑クン』をきちんとゴミ箱に捨てながら（意外にうまかったらしく満足そうな顔をしている）城守は続ける。
「ただ、それまで何も考えずに生きてきたツケは大きかった。確たる目標ができたのに、どうすればそこに至れるのか、さっぱり分かりませんでしたからね」
「……」
口を挟まず蓮のセリフを聞きながら、陸も空き缶をゴミ箱に捨てる（こちらは普通の缶コーヒーだった）。
「１０年は長かった。色々な経験をして、多くのことを学んで、色々な闘いに挑戦して……」
と、一旦、言葉を切って。
「あの日の少年の背中に、一体どれくらい近づけたんでしょうね？」

ソードウエポンｖｓウエポンテイマー

『７月２４日１９時２０分・Ｃ』

「幻想剣（イリュージョンソード）：断層剣カラドボルグ」

数発撃つたびに現世から撤退しようとする『カラドボルグ』を、麗華は再度召喚する。

とっくに限界を超えている麗華には、安定した状態でカラドボルグを具現化することができないのだ。

もちろん、こんな中途半端な召喚は、さらに燃費が悪いことは間違いないのだが、もうそんなことを言っている場合ではなかった。

「悠斗君！」

呼びかけると共に、澄空悠斗に向かって断層剣を振るう。

別に、血迷った訳ではない。

その証拠に、澄空悠斗の背後に浮かぶカラドボルグもどきが数本反応し、迎撃の断層を作りだし、麗華の断層攻撃を受け止める。

「はぁ……はぁ……」

カラドボルグの空間亀裂で空間亀裂が受け止められるというのは、ついさっきまで麗華自身も知らなかったが、おかげでだいぶ助かっていた。

わずかながらも、牽制に使えるからだ。

とはいえ、発射口の数が違い過ぎる。

麗華はもちろんカラドボルグ一本だが、宙に浮かぶ悠斗のカラドボルグは、２０数本はある（幸いと言うべきか、後の２０数本は干渉剣フラガラックのままだった）。

「くっ……」

大きく飛び退く。

カラドボルグもどきの攻撃によって、地面に出来そこないのアスタリスクのような亀裂が走る。
一本一本の動きは緩慢だが、威力はオリジナルカラドボルグと大差がない。当たると死ぬ。

「く……」
かわした先にも、またカラドボルグが3本ほど。
視界を覆うように、複数の断層が迫ってくる。
反射的に放った麗華の空間亀裂が受け止める。

「うっ……く。は……はぁ……」
やんわりとした吐き気のようなものをこらえながら、麗華は焦っていた。
とてもじゃないけど、最後まで持たない。
自分の調子が最悪なのは最初から分かっていたが、あれだけ馬鹿げた力を振りまわしている悠斗が、まるで息切れしそうにないのは誤算だった。
いつも肉体の方が先にバテているらしいから気付かなかったが、どうやら、あれが澄空悠斗の本来の容量らしい。

「れ、麗華さん……」
「え？」
予想外の声に、振り返る。
そこにいたのは、緋色先生と本郷エリカ。あと、倒れたまま動かない三村と峰。
悠斗のカラドボルグによって、どんどん悪くなる足場を逃げ回っているうちに、最初の場所に帰って来てしまったらしい。

（これは……まずい）
倒れたままの三村と峰はもちろん、緋色先生とエリカも、悠斗の多

重カラドボルグをかわせるとは思えない。
悠斗のカラドボルグズは、今のところ麗華をターゲットにしているが、その後ろに他人が居ても全く気にしないだろう。
というか、すでに８本ほどが攻撃態勢に入っている。
牽制してやり過ごせるような状況ではない。完全に相殺するしかない！

「幻想剣（イリュージョンソード）：断層剣カラドボルグ！」
残った最後の力を振り絞るつもりで、断層剣を実体化させる。
そして、一閃。
かなり際どかったが、なんとか相殺できた。
が。

「あ、あれ……？」
また消えた。
カラドボルグが。
当然、もう一度具現化しようとするが。
「……」
出てこない。
どうイメージしても。
どう集中しても。
ついでに、手のひらを上下にブンブン振ってみても。
出てこない。
「これは……」

『エンプティ』。

ＢＭＰ能力の枯渇である。
麗華にとっては、ほぼ１０年ぶりの現象だった。

剣麗華は確かに天才ではあるが。
さすがにＢＭＰ能力なしで、２０数本のカラドボルグの攻撃をかわし続けるのは不可能だった。
「……」
使えないものは仕方がないので、今できることに思考を巡らせる。
あの宙に浮かぶ断層剣にとっての弱点は、言うまでもなく澄空悠斗本人である。
攻撃の軌道に彼を入れてしまえば、必殺の断層を作ることはできなくなる。
だが、ちまちま動いていたのでは、一歩間違えれば、澄空悠斗が自身の作りだした断層で真っ二つになってしまう危険がある。

「組みついて羽交い絞めにする」

そうして、澄空悠斗自身を『盾』にして、彼がＢＭＰ能力を使い切るのを待つ。
実は、この作戦は最初から考えてはいたのだが。
その隙がなかったのだ。
が、ＢＭＰ能力を使い切ってしまった今となっては、もうこれしか方法がない。
自分でも驚くほど、悠斗を見捨てるという選択肢は浮かんでこなかった。

「行くよ。悠斗君」
宣言とともに、飛び出す。
同時に、牽制を受けなくなった２０数本のカラドボルグズが、元気いっぱいに麗華を狙う。
繰り返すが、麗華は天才である。

本体にほとんど意識がない状態での、遠隔断層剣の攻撃パターンなど、ここまでの戦闘でほぼ解析できていた。
飛び越え、潜り、かわし、抜け。
完璧な動きで、澄空悠斗に迫る。
が。
「っ……！」
足元に鈍い衝撃。
酷使に酷使を重ねて、限界以上に疲労していた麗華は激しく転倒した。
普段の優雅さからは想像できないほど、無様で豪快な転倒だった。
繰り返すが、カラドボルグの攻撃は全て把握していた。
だから、これまでの戦闘で歪に歪み、斬り裂かれ、そして隆起した地面の一つに足を取られた麗華を誰が責められるだろうか。
「……」
仰向けに寝そべるような体勢で大地に投げ出された麗華。
見上げる先に浮かぶのは、彼女自身のＢＭＰ能力を模した２０数本の断層剣。
彼女は天才である。
逃げるルートも術も、ただの一つもないことがすぐに理解できた。
「……」
約束は破っていない。
なぜなら、自分が死ぬのは澄空悠斗の目の前だ。
だが、それを悠斗が悲しむかもしれないということは……。
あえて考えないことにした。

だって。
「これは……無理」
いや、最初から無理だったのだ。
相手のＢＭＰ能力は、とても強大で。
しかも、自分はＢＭＰ能力が使えず。
守りたい誰かのために、逃げることもできない状態で。
それでも何とかできる人間など。
「……」
人間など。
「……」
たった一人だけど。
「知っている……！」
稲妻のように起き上がる剣麗華。
そのまま『宙に浮く悠斗が召喚したカラドボルグ』の一つを引っ掴んだ！
どうしてそんなことができると思ったのか分からない。
というか、ほんとにそんなことができると思ったかどうかも分からない。
まあ、悠斗なら『たぶん大丈夫』とか言うだろう。うん、たぶん大丈夫。

掴まれた劣化版カラドボルグは、一瞬、抵抗するように激しく動いたが。
「悠斗君は遠くなんかない」
握る力の強さに圧倒されるように。
「私も、同じ気持ちを持っている！」
想いの強さに屈服するように。

あっさりと、その抵抗をやめた。
同時に、完全に不可視化しカラドボルグを保持していた豪華絢爛（ロイヤルエッジ）が、ガラスが割れるような音とともに砕け散る。

「幻想剣（イリュージョンソード）：断層剣カラドボルグ！」
渾身の力を込めて、剣を振るう。
２０数本マイナス１本のカラドボルグズは、全員一致で、その一撃を受け止め。

そして、動きを止めた。

「……？」
カラドボルグを奪った麗華の前で、宙に浮いたまま動きを止めるカラドボルグズ。

何かとんでもない攻撃の前振りかと警戒する麗華だが。
カラドボルグ達は、動き出す気配が全くない。

麗華の仰天行動に面喰ったのか。
それ以外の理由なのか。

澄空悠斗は、苦しんでいるように見えた。

「どうして……？」

全ての力を使い切らなければ、覚醒時衝動は終わらない。

「どうして止めるの？」

自分が『全て受け止める』と宣言したのに。
澄空悠斗が苦しまないで済むように、全ての力を自分に吐き出してほしいのに。

何度か呼びかけて。
それでも反応がないと分かった剣麗華は。
澄空悠斗に近づき。

断層剣カラドボルグを澄空悠斗の首筋に当てた。

同時に、しぶしぶといった感じで宙に浮かぶカラドボルグ達が麗華の身体を取り囲む。
一歩間違えれば身体を輪切りにされる状態ではあるが、悠斗にもカラドボルグズにも戦意は感じられない。
若干の焦りと疑問と共に、彼女は言う。

「応えて、悠斗君」

癒えない渇きを癒すモノ

『7月24日19時30分・C』

長い夢を見ていたような気がする。

現実に還った俺を出迎えたのは、首筋に当たる冷たい感触だった。
それから、至近距離にあるとんでもなく美しい少女の顔だった。

というか、麗華さん……だよな？

どういう超絶テクニックを使ったのかは知らないが、俺を守る劣化版幻想剣の攻撃を悉く退けて、この至近距離まで間合いを詰めたらしい。
そして、『断層剣カラドボルグ』を俺の首筋に当てている。
麗華さんがその気になれば、いつでも俺の首が胴体とおさらばする危険な位置だ。

「どうして止めるの悠斗君？」
言う麗華さんを取り巻いているのは、20数本の劣化版断層剣カラドボルグ。
麗華さんの肌数センチの所に浮かんで、鋭利な切っ先を向けている。
もし今命令があれば、麗華さんの身体は数十の断片に変えられてしまうくらい危険な状態だ。

「全ての力を使いきらないと、覚醒時衝動は収まらない」
と続ける麗華さんには、怯えの色は全く見られない。
というか、若干怒っているような気さえする。

「ＢＭＰハンターは、まず自分の命を守るのが原則。……じゃなかったっけ？」
嫌味のつもりじゃない。単なる軽口だ。
「そうだと思う。でも、今の私も間違ってない」
「そうなの？」
「守りたいと思ってるから。悠斗君と同じように」
「……」

参った。
ほんとに参った。
麗華さんに参った。

麗華さんを取り巻く、俺の劣化版断層剣カラドボルグセットが消えていく。

「悠斗君、どうして？　まだ、悠斗君のＢＭＰ能力は全部使い切っていない」

そんなこと言ってもな……。
「もう十分だよ」

逃げない君の強さが思い出させてくれたから。
全てを失くした始まりの日のことを。

「もう全部吐き出した」

逃げない君の優しさが満たしてくれたから。
決して癒えるはずのない渇きを。

「だから、もう十分だ」

もう立っているのも億劫で。
前のめりに倒れそうになる。
今日は散々痛い目にあったけど。
それでもやっぱり、地面に顔面ドカンは勘弁してほしいと思っていると。

ふわ、と。
温かくて柔らかい感触に抱きとめられる。

「麗華……さん？」
いつの間にかカラドボルグを消して。
この細い腕のどこにこんな力があるのか、力強く抱きとめられている。
でも、麗華さん。物凄くキョトンとしてる。

「ゆ、悠斗君……。ひょっとして、覚醒時衝動、終わったの……？」
「たぶん」
終わったと思う。

こんなにすがすがしい気持ちになってるんだから。

★☆

「えーと……。一応、どんな状況なのか聞いてもいい、のかな？」
三村にしては、珍しく歯切れ悪く聞いてくる。
フラガラックの多重干渉にやられて、さっきまで峰と折り重なるように気絶していたのが気まずい、という訳でもないようだ。

「できれば、無言で察してくれると嬉しい」
と返すのは、この俺、澄空悠斗。
なぜなら、今、俺は麗華さんに抱えられて、なんとか立っていられる状態だからだ。
第三者から見れば、抱き合っているようにも見える、というよりそうとしか見えない状態だからだ。
座ればいいじゃん、と言われればその通りなのだが、俺も麗華さんもなんとなくタイミングを逃してしまい、座るに座れない不思議な状態なのである。

「じゃあ、ちょっといいかしら、悠斗君」
と、今度はこども先生が手を伸ばしてくる。
アイズオブエメラルドで診察してくれるつもりだということは分かるのだが、この体勢だと麗華さんの身体をサンドイッチすることになってしまい、若干俺が良い思いをするのは、いいのだろうか？

「悠斗君」
「は、はい！」
いや、不埒なことなんて考えてません。というか、そんな体力ありません。
「嘘は……つかないでね」
「はい！　……って、え？」
嘘って、なんのことだ。

「ううん、ごめん。なんでもない。今のは忘れて」
言うと、こども先生は眼帯を除けて、アイズオブエメラルドを全開にした。
背伸びをし、俺の顔を両手で固定して、瞳を覗き込んでくる。

「え？」
「あ、あれ？」
同時に驚きの声をあげる、こども先生と俺。
なんか、これ。今までと全然違うぞ。
深緑の瞳がいつもより強く輝いているような気がする。
その光が、心の隅々まで行きわたっているようで。
でも、不快じゃない。

「翔！？」
「へ？」
いきなり聞きなれない名前（だよな。まさか、ショウ！　なんてすっとんきょう叫び声をアイズオブエメラルドが上げるとも思えん）を呼ぶ、こども先生。
「あ、ううん。なんでもないの……」
「そ、そうですか」
明らかになんでもなくない顔をしていたが、とりあえず俺は何も聞かなかった。

しばらくして、こども先生が顔を離す。

「緋色先生？」
「うん。信じられないけど、ほんとに覚醒時衝動が収まっているわ」
峰の言葉に、眼帯をしながら（しかしやっぱりごつい眼帯だ。もっとファンシーなのにすればいいのに）答えるこども先生。
「でも、ＢＭＰ能力を使いきったって感じじゃないですけど？」

今度は三村が質問している。
「そ。まだたっぷり残ってる。これからBランク幻影獣と闘うことだって可能じゃないかしら」
いや、さすがに無理です。

「ということは……」
「自分の意思で覚醒時衝動に打ち克った、ということなのか……」
「悠斗さん、凄すぎデス……」
三村、峰、エリカが心からの賞賛を贈ってくれているのが分かる。
褒められるのは基本的に好きなんだけど、今回はちょっと遠慮をしたいところだ。
なんせ8割方……いや、9割以上麗華さんのおかげだからな。

「悠斗君」
その麗華さんが話しかけてくる。
背が同じくらいだから、真横に顔がある。
「ん？」
「私はどうすればいい？」

麗華さんの言葉は唐突な上に、短すぎることがある。
まあ、今回は大丈夫だ。何が言いたいかちゃんと分かる。

「何も」
そう、何もしなくていい。
もう十分過ぎるくらいしてもらった。
「そう……なの？」
これ以上何も……。

いや。
ひとつだけ。

「そういや、麗華さん」
「ん？」
「嘘、吐いたろ？」
「え？」
キョトンとした顔で、こっちを向いて（めっちゃ近いす）くる麗華さん。
「タートルと闘いに出る前に。麗華さん『絶対にすぐ帰ってくる』って言った」
「実際に、ちゃんと帰ってきた。嘘にはなっていない」
ほう、そう来ますか。

「……」
「……」
「……」
「……」
「……悠斗君、怒っている？」
「煮えたぎった俺の臓物で、モツ鍋ができそうなくらいに」
もちろん嘘だけど。

「それは……困った。どうすれば許してもらえる？」
真剣な麗華さんの顔。
少し胸が熱くなる。
でも、ちゃんと言わなきゃな。

「一つだけお願い……というより、提案があるんだけど」

「うん。なんでも聞く」
「え？」
マジですか！
……って、そうじゃなくて。

「麗華さん、前に言ってたろ。自分の言うことで俺を不快にさせることがあったら、ちゃんと指摘してくれって」
「うん」
「それと逆にさ」
そう逆に。
「俺が麗華さんを怒らせたり。いや、俺じゃなくても、麗華さんにとって苦しいことや、つらいことがあったりしたらさ」
「……」
「教えて欲しいんだ、俺に」
どんなことでもいいから。
あまり役に立たない可能性も大だけど。
「俺は悪い意味で普通だからさ。言ってくれないと分からないんだ」

麗華さんが、わずかに俺を掴む手に力を入れた。

「……でも、そうすると、悠斗君を不快にさせるかもしれない」
「いいんだよ、それで」
それでいいんだ。

「麗華さんが俺を怒らせて」
俺が麗華さんを怒らせて。
「二人がお互いにすれ違うことがあったりしたら……」
衝突することがあったりしたら。

その時は。

「二人で」

一緒に。

「喧嘩しよう」

第2章『ウエポンテイマー』エピローグ

エピローグ

Aランク幻影獣率いる幻影獣軍とのBMP管理局での籠城戦という、なんらかの節目であるのは間違いない大きな闘いが人類の勝利で終わってから1週間。
世界は、未だ興奮の中にあった。
Aランク幻影獣を撃破した英雄について、本人のプライバシーを尊重するということで顔出しNGにしたのが、逆に神秘めいた魅力を加味してしまっているらしい。

それは、ここ、賢崎グループ傘下・アドバンテック新月の社長室でも同じだった。

「失礼します。賢崎社長」
いかにも強面の、しかしダンディな中年男が重厚なドアをノックする。
「どうぞ」
と若い女性の声に促されて中に入る。
社長室の中から聞こえてきたにしては意外な声だが、ダンディは別に驚きはしなかった。

なぜなら、ここアドバンテック新月の社長は、実際に高校生くらいの少女なのである。
もちろんスーツは着ているが。

が、この日ばかりは、若干驚いた。

「どうしました、佐藤部長？」

「いえ、今季の決算報告を持ってきたのですが……」

娘より若い少女に、最上級の敬意を払いながらも、やはり佐藤部長は疑問符を浮かべていた。

「賢崎社長がとても楽しそうな顔をしていましたので。何か面白い記事でも載っているのですか？」

と、佐藤部長は、書類を少女の机に置いた。

「もう勤務時間も終わりですし『社長』はいいですよ」

眼鏡の位置を直しながら、少女は微かに微笑む。

その顔は、少し整いすぎではないか、というくらいに美形だった。

そんな風に言われたのもずいぶんと久しぶりだったので、ダンディは若干驚きはしたが。

「でしたら、昔のように、お嬢様とお呼びしましょうか？」

「藍華でいいですよ」

「それは無理です」

佐藤部長は断固として断った。

「いったい、何をお読みで？」

「これです」

と差し出される、やけに薄っぺらい新聞。

「季報・新月？　これは、ひょっとして学校新聞と言うやつですか？」

「ＢＭＰ管理局の情報統制はなかなかですが、さすがにここまで手を回したりはしなかったみたいですね」

盲点だったというよりやり過ぎだと思ったからでしょうね、と付け足す眼鏡美少女社長。

商売柄身に付いた速読で、ざざっと読み通す佐藤部長。
編者は新條　文というらしい。
高校生なので技術的にまだまだの所はあったが。
「なかなかいい文章を書きますな」
センスはあると思う。
それに何より、文章から感じる真摯でひたむきな感じが良い。
（うちの娘も、これくらい頑張ってくれればな）
と佐藤部長が思ったのは余談だ。
ちなみに、佐藤部長の娘さんが意外に頑張り屋さんなのも、まあ余談だ。

それよりも。
「しかし、これはひょっとして、本人に直接取材ができているのでしょうか？」
気になるのはそこだ。
想像で描いたにしてはやけにリアリティがある。というか、これがフィクションならば、この編者は新聞記者ではなく、作家にでもなった方がいいのではないだろうか？
「でしょうね。澄空悠斗と同じ高校に通っていますから」
「なんと」
言われて見れば、ＢＭＰ管理局籠城戦の話だけではなく、澄空悠斗の普段の高校生活についても事細かに書かれている。
学食にささみチーズフライを復活させる意見書を毎週欠かさず出しているエピソードなどは、さすがに同じ高校に通ってなければ無理だろう。
「ちなみに、ソードウエポンも同じ高校ですよ」
「なんと。……といっても『新月』はＢＭＰハンター養成校としては超名門ですからな。別に驚くことでもありませんか」
載っているのが澄空悠斗と剣麗華の話だけで、他のことが一切書か

れていないのは、学校新聞としては軽く驚きではあるが。

「澄空悠斗ですか。まさしく救世主と呼ぶに相応しい活躍を見せてくれていますが、お嬢様も気になるので」

「ええ、かなり。覚醒したてでBランク幻影獣を破った頃から気にはなっていたのですが、最近では、仕事中以外はしょっちゅう彼のことを考えています。ひょっとして、これが恋なのでしょうか？」

「……！」

いきなりの意表を突いた少女のセリフに、佐藤部長はオーバーアクションで後退した。

部下が見れば、半年は仕事帰りの飲み会のネタにされそうなくらいイメージと合わない仕草だった。

一応、昼間は強面な管理職なのである。

「お、お嬢様の考えることは、私などには到底理解の及ばないところです……」

「冗談ですよ？」

「わ、分かっちょります」

噛んだ。

「ところで、佐藤部長。社長をやる気はありませんか？」

「は、はい！？」

今度は奇声を上げてしまうダンディ。

「もう、このアドバンテック新月の経営も軌道に乗ったみたいですし、私がいなくても大丈夫でしょう。佐藤部長なら、取締役の方たちにも部下の方たちにも評判がいいですし。人事的にはちょっと無茶ではありますが」

「ま、まぁ、お嬢様が言えば通ると思いますが。お嬢様以外なら、誰がやっても大差ないですし」

自嘲ではなく、心底そう思う佐藤部長。
「では、お任せしてもよろしいですか？」
「い、いえ、少し待ってください。私自身の心の準備や社内の反応はともかく、お嬢様はどうされるつもりなのですか？　もう賢崎グループ内の不採算部門はあらかた片付きました。私はこのまま、賢崎グループを継がれるまで、お嬢様はここで羽を休めるつもりだと思っていたのですが」
この超一流企業の社長席を腰かけと評してしまうのは相当なセンスだが、この少女の場合は、あいにく間違いではなかった。

「あ、ひょっとして、お父様の所で本格的に後継者としての修業を……」
「いえ、高校に入ろうかと思います」
少女のセリフにダンディは一瞬止まった。
確かに、この少女は高校には行っていないが、小学生くらいの時に国外の超一流大学を首席卒業した彼女に、どうして高校が必要だというのだろうか。

……いや。

「もしや、お嬢様……」
「賢崎の本当の役目は、企業経営ではないのですよ」
「それは……確かにその通りですが。今のお嬢様は、国内どころか世界でもなくてはならない経営者の一人になっております。ソードウエポンや澄空悠斗など優秀なＢＭＰハンターが次々と生まれている今、お嬢様はもっと他の形で彼らの助けになることができるのでは？」
佐藤部長は、アドバンテック新月の優秀な管理職ではあるが。
同時に、賢崎本家と浅からぬ因縁がある。
一言で言うと、丁稚奉公をしてただけだが。

「賢崎のＢＭＰ能力は特殊です。他の誰にも代わりはできません」
「……」
「その時が来れば使わなければならないと。……母も言っていました」
僅かに表情を曇らせて言う、賢崎藍華。

その表情をなるべく見ないようにして、佐藤部長は問う。
「澄空悠斗がその人物だと？」
「それは、分かりません」

アドバンテック新月最上階から見える街並みを見下ろし。
そして言う。

「だから、それを確かめに行こうと思います」

第２章『ウエポンテイマー』完。

おじい様とのナイショの話

ここは、この国のトップの居城、首相官邸である。

その最奥、首相の執務室内で、一人の客人を迎えているのが剣首相。

そして、その客人というのが、この俺、澄空悠斗である。

一般人偏差値４９くらい一般人な俺がこの国のトップと一対一で面談しているというのは、もう超常現象と言っていいのではないだろうか？

「すまんな、澄空君。若者の貴重な時間を年寄りのわがままで浪費させてしまって」

「いえ、とんでもないです……」

剣首相の時間の方が、１００万倍貴重だと思います。

俺も一応（本人の自覚そっちのけで）この国のトップＢＭＰハンターの一人と見られているみたいだから、首相と面会する機会くらいはあってもおかしくないのかもしれないが、俺と剣首相の場合はちょっと事情が違う。

なんとこの人、俺が同居（同棲じゃないぞ、断じて）しているＢＭＰハンター剣麗華さんのおじいさんなのだ。

だから、麗華さんと剣首相と俺の三人で会うというのは、プライベートでも十分起こりうるイベントなのだが。

麗華さん抜きで会うとなると、やはり異常事態だ。

「そう緊張せんでも大丈夫だよ、澄空君。麗華からも『悠斗君は大人しいところもあるから、あまりプレッシャーをかけてはいけない』と言われたばかりだからね」

「そ、そですか……」

麗華さんナイスフォロー！
でも、もっとはっきり『単にビビリだから、あの子』みたいな言い方でいいっすよ。

「……」
「……」
「……」
「……い、いただきますね」
沈黙に耐えかねて、コーヒーに手を伸ばす。
素人鼻（うまい表現が思いつかん）にも良い香のコーヒーに口を付ける。
たぶん高いんだろう。俺は芸能人ではないからして『実は安いんですよ、それー』とか言われても、別に落ち込んだりはしない。

「そ、そいえば、今日は緋色瞳さん、いないんですね？」
さきほどコーヒーを持ってきてくれた美人さんの顔を思い浮かべながら言う。
ちなみに、緋色瞳さんというのは『アイズオブクリムゾン』という支配系最強のＢＭＰ能力を使うＢＭＰハンターで、『クリスタルランス』という最強ＢＭＰチームのリーダーで、おそらく『こども先生』系最強と思われるうちのこども先生のお姉さんにして、剣首相の秘書みたいな仕事もしているらしい女性だ。
え、設定詰め込み過ぎて意味が分からないって？
奇遇だな、俺もだ。
と、いつまでも現実逃避している場合ではなくて。

「うむ、来てはいるんだがな……」
「え？」
意外な剣首相の一言に驚く。
忙しい人だから居ないのは仕方ないと思うけど、いるのなら顔くら

いは見たかったな。
「まあ、彼女にも色々都合があるようだ」
「そ、そですか……」
なら仕方ないか。

それより、そろそろ本題に入っても良さそうな……。

「時に、澄空君」
「は、はい！」
いきなり来た！

「君は、麗華の恋人になるという意味を理解しているのか？」
「は、はい？」
なんのこっちゃ？
「こういう言い方は直接的すぎて好きではないが、あの子は剣財閥唯一の継承者だ。あの腰ぬけ息子に継がせるつもりは毛頭ないからな」
「は、はい……」
なんの話が始まるのかは分からないが、とりあえず黙って聞く世渡り上手な俺。
ちなみに、剣首相の息子さんは、現在剣財閥を動かしている辣腕で鳴らしている実業家だ。どの辺が腰ぬけなのかは俺が聞いてもたぶん一生分からないから、あえて聞かないでおこう。怖いし。
「麗華はあの通り完璧だが、その夫が無能でいいという訳ではない。剣財閥にもしものことがあれば、この国はおろか世界の経済が揺らぎかねんからな。まあ、賢崎や神のところは張り切るだろうが」
「は、はい」
ちなみに、今出てきた3つの財閥が本気で手を組んだら、世界の半分くらいは狙えるらしいすよ。
……今はそんなことしてられる時代じゃないけど。

「その男の決断一つ、行動一つ。あるいは想い一つで、数万……いや、数億の人の生活が脅かされかねんのだ。そのことが君には分かっているのか？」
「いや、でも大丈夫ですよ」
「ほう」
驚いた顔をする剣首相。
『こやつ、意外にやりおるかも』的な顔をしている。

「どんな人なのかは想像もできませんけど、麗華さんの選んだ男性ですから、そのくらいはプレッシャーにも感じないんじゃないでしょうか？」
麗華さんが選ぶくらいだから、きっと麗華さん男性版とでもいうべき完璧で天才な男なんだろう。
あまりに凄過ぎて、たぶん嫉妬すらしないに違いない。
「そ、そうか……」
至極まっとうな意見を言ったつもりなのだが、剣首相はなんだかずっこけたような姿勢をしていた。
気のせいか『こいつは、どうしようもないかもしれん』的な顔をしている？

「少し、回りくどかったようだな……」
「？」
？
「単刀直入に聞こう。君は、麗華とできているのか！？」
「……」
……え。

「えーーーーー！」
思わず大声を上げてしまった。

「で、でででで、できてないですできてないです！　お、俺と麗華さんは節度を守って同居生活を……！」
節度を守るのなら、そもそも同居するなとか言うな！
どうしても、引っ越し先が見つからないんだよ、どう言う訳か！

「ありえん！」
「え？」
あ、ありえんとか言われても……。
「元々の事情が事情とはいえ、あの麗華と同居しているんだぞ、君は！　男なら、すでに二桁後半くらいは不埒な行為に及ぼうとしているはずだ！」
「そんなことしたら、首飛びますって！　比喩じゃなく、リアルで！　断層剣で」
一国の首相が何言ってんだ！
というか、この人、キャラが変わり過ぎではなかろうか。
「だから、君の首と胴体がくっついている以上、できていると考えるしかないだろう！」
「いや、そもそも襲っていないと考えてください……」
断層剣を抜きにしても、あり得ない。
俺達ほど彼我の戦力差（もちろん男女としての）があれば、畏れ多いを通り越して滑稽だ。
剣首相は、自分がナイスガイだからそんな自信があるに違いない。

「ほう、あくまで違うと言い張る訳だな、君は」
「ち、違いますです」
噛んだのは許してほしい。
剣首相の口調が、国会で質問に立った野党の党首を逆にいびっている時と、凄く似てきた。

「尾藤君、あれを！」

なんだか芝居がかった剣首相の声に応えて現れる、さきほどもコーヒーを入れてくれた秘書らしき女性（というか秘書だろたぶん）。
緋色瞳さんと比べるのは相手が悪過ぎるが、この人も相当の美人だ。
いやにアナログな機械を持っている。
テープレコーダーとか、もう骨董品だと思っていた。

「ここを押してください。問題の部分が流れます」
そのテープレコーダーを机に置き、上記のセリフだけを言い残して、尾藤秘書は退室していった。

「テープレコーダーなのは、雰囲気を出すためだ。特に意味はない」
「そ、そうですか……」
聞いてもいないのに教えてくれるというのは、本人にはそれなりにこだわりがあるらしい。
「これは、先日のＢＭＰ管理局籠城戦の時の録音記録だ」
「え？」
「もちろん極秘データだ。が、ここに問題の記録がある。心して聞きたまえ」
「りょ、了解です」
さきほどまでの話と全く繋がらない展開のような気がしたが、なんだかおおごとなのを察した俺は素直に頷いた。
そして、剣首相が再生ボタンを押す。

『
「か、代わりに俺が行っちゃ駄目かな？」
「？　敵の狙いは悠斗君なんだから、私がここに残っても意味はない」
「そ……」
「それに、少なくとも今は私の方が、安定した戦闘ができる」

「いや……」
「私は抜かれたりしないから、Aブロックは安全。悠斗君は大丈夫」
「れ、麗華さんだって、『絶対』は、ないだろ？」
「そんなことない」
「へ？」
「悠斗君が『私のいないところでは死んではいけない』以上、私も悠斗君が見ていないところでは死なない」
「あ……」
「それが、絶対」
「……そっか」
「分かった。首を長くして、帰ってくるのを待ってるよ」
「そんなにかからない。すぐ帰ってくる」
』

「という訳だ」
停止ボタンを押す剣首相。
「……」
いや、もちろんあの籠城戦が記録されていることくらいは知ってたけど。

俺、ほんとにあんなこと言ったのか？

顔が熱くなる。

「君は、この一連の会話が、できていない者同士の会話だと主張できるのかね？」
「と、ともに死線を潜り抜けようとする仲間同士の会話にも聞こえます！」
先日の国会で、野党の売り出し中の新人議員を完全粉砕した時と同

じ口調で迫る首相に、驚異的な精神力で反論する俺。
というか、反論しないと殺されるぞマジで！

「なるほど……。なら、これはどうかね？」
ま、まだあるんすか？

『
「悠斗君」
「ん？」
「私はどうすればいい？」
「何も」
「そう……なの？」
「そういや、麗華さん」
「ん？」
「嘘、吐いたろ？」
「え？」
「タートルと闘いに出る前に。麗華さん『絶対にすぐ帰ってくる』って言った」
「実際に、ちゃんと帰ってきた。嘘にはなっていない」
「……」
「……」
「……」
「……」
「……」
「……悠斗君、怒っている？」
「煮えたぎった俺の臓物で、モツ鍋ができそうなくらいに」
「それは……困った。どうすれば許してもらえる？」
「一つだけお願い……というより、提案があるんだけど」
「うん。なんでも聞く」
「麗華さん、前に言ってたろ。自分の言うことで俺を不快にさせることがあったら、ちゃんと指摘してくれって」
「うん」
「それと逆にさ」

「俺が麗華さんを怒らせたり。いや、俺じゃなくても、麗華さんにとって苦しいことや、つらいことがあったりしたらさ」
「……」
「教えて欲しいんだ、俺に」
「俺は悪い意味で普通だからさ。言ってくれないと分からないんだ」
「……でも、そうすると、悠斗君を不快にさせるかもしれない」
「いいんだよ、それで」
「麗華さんが俺を怒らせて」
「二人がお互いにすれ違うことがあったりしたら……」
「二人で」
「喧嘩しよう」
『
「あ……」
あうあうあうあう。
穴があったら入りたいっす。
「これが、恋人同士の会話でなくてなんだと言うのだ。いや単なる恋人同士どころではない！　わしだって、妻とこんな会話を交わしたことは二桁はないぞ！」
ということは、9回近くはあるのか！　凄いな！
などと言っている場合ではない。
なんとか言い訳しないと（社会的に）命に係る。
「え、ええとですね……。そ、その時は色々戦闘状態で興奮してアドレナリンが出てて、いやもちろん麗華さんは冷静なんですけど、俺が一方的に熱くなって、その前に刺激的なイベント……はどうでも良くて、というか甘ったるい気分では決してなく大事なことを伝えないといけない必要があるような気がして……」

ああ、もう、文章になっていない。

「ふむ。どうしてもできていないと言い張る訳だな？」
「もちろんです！　いくらなんでも麗華さんと俺とじゃ釣り合いが取れなさすぎますよ」
ついうっかりできてしまう、にしても程度というものがある。

「わしは、そこまで釣り合いが取れていないとは思わんがな」
「え？」
え？
「いや、なんでもない」
と、コーヒーに口を付ける剣首相。

「少しからかい過ぎたようだな」
「え、えーと？」
じょ、冗談だったのですか？
って、当たり前か。ちょっと調べれば、分かるよな。
でも、冗談にしては手が込んでるような。

「麗華と過ごすのは大変ではないかね？」
一転して穏やかな口調で聞いてくる剣首相。
「いえ、結構楽しいですよ」
時々ハプニングイベント（麗華さんに危機感がなさすぎるせいで）で下着姿とかそれに類する何かを見てしまった時に心臓止まりそうになるくらいで。

「そうか」
という剣首相の声は、なんだか優しげで。

俺たちはそのまま、１０分ほど、麗華さんの話題で盛り上がった。

★☆

「そう『釣り合いが取れていないとは思わん』」

澄空悠斗が去った首相官邸。

剣首相は、すっかり冷めたコーヒーを片手に、ひとり呟く。

「麗華と過ごすのを、ただ『楽しい』と表現できる君が相手ならばな」

そう呟く剣首相をドアの隙間から覗いているのは、支配系能力最強『アイズオブクリムゾン』緋色瞳。

「彼はもう帰ってしまったよ」

「わ、分かっています」

珍しく気まずそうな口調の緋色瞳。

「気まずいのは分かるが、彼は君のことを恨んでいるようには見えんかったぞ」

「だから、困っているのです」

部屋に入って来て、剣首相の前に腰を下ろす。

彼女……緋色瞳は、１０年前、澄空悠斗に呪いをかけた。

ＢＭＰ能力に関する全ての記憶を奪い、覚醒自体を『なかったこと』にしてしまったのだ。

精神はおろか、身体そのものを蝕むほどの異常なＢＭＰ能力から澄空悠斗を守るための止むをない措置だったとはいえ、澄空悠斗の人

生を大きく歪めてしまったのは間違いない。

「たとえ殺されても文句は言わない。くらいの覚悟はあったのですが……」

「彼がそのような男でないことくらいは、分かっていただろう？」

「ですが、あの無頓着ぶりは正直予想外です」

彼女の言うとおり、澄空悠斗の反応は、用意していたどの謝罪策でも対応できないものだった。

というか、そもそも忘れているとしか思えないくらいのものだった。

「この時のために、１０年がかりで償いの方法を考えていたのですが……」

「ま、まぁ、そのうち機会もあるだろう」

たぶんないだろう、と思いながら答える剣首相。

「ＢＭＰ能力は精神を蝕む。記憶を封じられた為に、彼の精神は影響を受けることなく成長できた。だから、彼はあの通り『普通』である。そういうことで、いいのかな？」

「それは違います。封じている間はともかく、再覚醒した途端に精神を蝕まれるはずですから。私が呪いをかけたのは、あくまで身体が成長するまで時間を稼ぐためです」

そして、身体の成長がＢＭＰ能力に追い付き、呪いが解かれる条件が揃ったため、上条博士と緋色香に引き合わせて常時ケアしていたのだ。いつ、精神に異常をきたしても対応できるように。

「上条博士も香も首を捻りっぱなしですよ。第五次首都防衛戦であれだけ激しく再覚醒したのに平気な顔で学園生活を送り、超難度の劣化複写（イレギュラーコピー）を他者にプレッシャー一つ感じさせずに操り、あげくの果てには覚醒時衝動を自分の力で克服してしまうなんて……」

「ふーむ」
「一応仮にも同じＢＭＰ能力者として、完全に理解の範疇を超えています」
半ば呆れたように、しかし半分は嬉しそうに、赤い瞳を持つ女性は言った。

「わしにはＢＭＰ能力者のことは良く分からんが、やはり彼のようなタイプはあまりおらんのか？」
「少なくとも、私は他には知りませんね」
「そうか」
と言ったきり、何か考え込むような仕草をする剣首相。

「ならば、やはりＢＭＰ能力があったからと言って、彼のようになれるとは限らんのだな……」
「剣首相？」
それまでとトーンの違う声に、緋色瞳が疑問符を浮かべる。

「わしの妻も、ＢＭＰ能力者だった」
「え？」
「麗華と同じで、才色兼備という言葉がしらじらしく聞こえるほど完璧な女性だった」
「……」
どうやら話したいことがあるらしい、ということを察した瞳は、黙って聞くことにした。
「わしもそこそこ異性には人気があったのだがな、彼女の前では有象無象の一人に過ぎんかった。もちろん、声をかける度胸があるうちの有象無象だがな」
「はい」
映画俳優と言っても通りそうなほどの雰囲気ある美形に加えて、剣財閥の次期党首が約束されていた若者だ。『そこそこ異性に人気が

ある』どころではなかったはずだが。
とりあえず、瞳は流した。
「人生であれほどプライドを傷つけられる出来事は他になかったというくらいの振られ方もした。ほぼ週一で」
「そ、そうですか……」
以外に感想のいいようがない。
「が、わしには他の有象無象とひとつだけ違うところがあった」
「……」
「それは彼女のことを本当に分かってやれる自信があったことだ。彼女の美しさや才に惹かれたことは否定しない。しかし、わしだけが彼女の本当の苦しみに気づいてやれる。そういう自信があった。だからこそ、最終的に妻と結ばれることができた」
「ご立派です」
「……とんでもない思い上がりだった」
「え!?」
予想外の話の展開に、思わず声をあげる瞳。

「それが分かったのは、麗華が覚醒時衝動を起こした時だ」
「あ……」
ようやくここで、瞳にも剣首相が何を言いたいか分かった。
「剣財閥を信頼できる部下と、ついでに腰ぬけ息子に押し付けて政界に転身し、麗華のためにできる限りの環境整備をしたつもりだったが、結局のところ麗華が上条博士の研究所を出るまで一度も会いに行けんかった」
「それは、上条博士が面会を止めていたからで……」
「麗華があそこを出た後も、わしは何もしてやれんかった……。そこでようやくわしにも分かった。妻はただ、わしに合わせていてくれただけなんだと」
「……」
「あの少年と会ってからの麗華は、毎日ほんとに楽しそうだ。彼と

同じＢＭＰ能力があっても、わしにはとてもできん。……今更の話だが、わしはああいう男になりたかった」

特に意味のある会話ではなかったのだろう。

剣首相も、クリスタルランスのリーダーとしての緋色瞳に、なにかしらの意見や感想を求めていた訳ではないのは明白だった。

だが。

「１０年前……。クリスタルランスが悠斗君と闘った後。私が取った行動を聞いても、剣首相……当時は大臣でしたが、一言も責めませんでしたね」

「そうだったな。今思えば、あれがわしの唯一のファインプレーだったか。あの時、無理やり澄空君を探し出して訓練施設に入れてしまっていては、麗華のあんな顔を見ることはできなかったかもしれん」

「そのことだけではありませんよ」

「む？」

「動機は麗華さんのためだったとはいえ、剣首相はＢＭＰ能力者が社会に溶け込めるよう様々な手を打ってくださいました。１０年前であれば、私がここに居ることですら考えられなかったはず」

「……」

「今、麗華さんが充実した生活を送っていられるのなら、彼女が悠斗君と出会えたことも含めて、それは剣首相の１０年の成果でもあると思います」

「緋色君……」

「悠斗君に負けてないですよ、剣首相も」

そう言って。
どんな虚言でも信じさせる瞳を持つ女性は。
ただ単なる感想を述べていた。

ちなみに。

ずいぶんと盛り上がってしまったが、まだ序章である。

新たな予感

剣首相と別れた帰り道。
カレーを待つ麗華さん……。失礼、俺がカレーを作って二人で喰う約束をしている麗華さんが待つ家路に急ぐ俺。

「にしても、俺と麗華さんができているねぇ……」
思わず呟く。
まぁ、覚醒時衝動を今度こそ完全に乗り切ったんだから、俺の覚醒時衝動対策で一緒に住んでくれていた麗華さんとこれ以上一緒に住む必要は全くなく、今でも同居を続けているというのは誤解を生む素地ではある。
「でも、新居が見つからないんだよなー」
探しているのは俺である。
麗華さんの新居を探すのであればともかく、もともと屋根さえあればいいような俺がそうそう部屋を選り好みする訳もなく。
すぐ決まると思ってたんだけど。
なぜか見つからない。
契約寸前までいって断られたケースも何度かあったし、最近では不動産屋に入った途端に、なぜか店側が『お断りモード』に入っている気すらする。

まるで、何らかの国家権力が俺の家探しを拒んでいるかのように！

「……アホか」
と一連の思考を踏まえたうえで結論を出した俺は、改めて家路を急ぐ。
と。

「あれ……」
背筋にわずかな違和感を感じた。
が、不快なものじゃない。
これは……。
「ＢＭＰ能力者のプレッシャー……？」
久々に感じる。

と、ここで少し補足説明を。
ＢＭＰ能力者のプレッシャーは、もちろん能力が高ければ高いほど大きいが（例外俺）、自分の意思で他人に与える影響を抑えることができる。
ちなみに麗華さんクラスになると、抑えないと新月学園がまともに運営できないくらいのプレッシャーをまき散らす（例外俺）から侮れない。
まあ、それはともかく。
麗華さんクラスでなくても、ＢＭＰ能力者であれば誰もがそれなりにプレッシャーを与える（例外俺）ものである。
ＢＭＰ能力者でない人にとっては、それほど大きくないプレッシャーでもやはり不安に感じる人はいる。
だが、このプレッシャーというやつ、実は慣れることができるのだ。
ＢＭＰ能力者によらないプレッシャーと同じで、何度も接していると次第に気にならなくなってくるらしい（例外麗華さん）。
人間の適応能力は素晴らしい。
以上説明終わり。ああ疲れた。

いや、疲れたじゃなかった。
要するに、このプレッシャーの持ち主は、今まであんまり会ったこ

とがない人だということだ。
「……」
それだけなら別に珍しいことではない。
が、このプレッシャーの持ち主……。
と、曲がり角から『その人』が姿を現した。
「ボクサー？」
というのが俺の第一印象だった。
かなりのスピードでランニングをしているその人は、ボクサーが来ているようなウエットスーツを着ていたからだ。
両手には、総合格闘技の選手がしているような指を露出するタイプのグローブ。
フードのせいで顔は見えないが、ウエットスーツの上からでも引き締まった身体をしているのが分かる。
ただ。
「女性？」
グローブから覗く白くほっそりした指と、胸のあたりの膨らみがそれを物語っている。
まあ女性ボクサーだろうと、ダイエット中のモデルさんだろうと別に構わないのだが、このプレッシャーだけはやはり気になる。
抑えてはいるが、まるで突き刺すような鋭いプレッシャー。
麗華さんとはまた違ったタイプ。
「強い……よな」
すれ違いざま、思わず呟いてしまう俺。
別に語りかけた訳じゃなかった。
けど。

「え？」
彼女には聞こえたようで、顔をこちらに向けてきた。
フードの中の顔が露わになる。
「え！？」
そして、今度は俺が驚いた。
なぜなら。
物凄い美人だったからだ。

★
☆

「というようなことがあったんだ」
というようなことがあった翌日。
俺は、麗華さん、エリカ、三村と四人で登校していた。
「それデそれデ！　それから、どうしたんデスか！？」
エリカは、謎の美人との遭遇について、早速喰いついてきた。
基本どんなことでも真剣に聞いてくれる、見た目ゴージャスなのに健気なハーフ少女なのだが、俺のつたない話でもやっぱり真剣に聞いてくれる。
なんとなく予想通りの良い子だって？　うん、俺もそう思う。
「いや、そのまま普通に走り去って行った」
「そデスか……。でも気になりマスよね、麗華さん」
「うん。悠斗君が強いって感じるくらいだから、たぶん相当に強い

んだと思う」
エリカの問いに応えるのは麗華さん。
いつもと同じで、特に喰いついてくるという訳ではないが、つまらなそうにもしていない。
というか、俺は麗華さんがつまらなそうな顔をしている所を見たことがない。
え、予想外だって？　うん、俺もそう思う。

で、三村は……。

「安心したぞ、澄空」
「は？」
いきなりの唐突なセリフに思わず疑問符を浮かべる俺。
「おまえの美女遭遇率の高さには今更文句を言うつもりはないが、その美人とフラグ的だったりクライマックス的だったりする恋愛イベントを起こさなかったことは良かった。俺はてっきり、その美人が実はお前と結婚を約束した幼馴染とかじゃないだろうと気が気じゃなかったんだ」
「……」
いかん。また、三村の脳に何かが沸いている。

「大丈夫だ、俺には幼馴染とかいないから」
たぶん。
「血の繋がってない妹は！」
「い、いない」
と思う。
「分かるもんか！　げんに、お前の姉になりたがっている遠距離攻撃系最強の美女がいるじゃないか！　俺は、お前とクリスタルランスの関係について、まだ疑ってるんだからな！」
「ぐ」

疑わしいどころか完全に黒なのだが、それを言う訳にもいかない。
俺自身がどう思っているかはともかく、１０年前の緋色瞳さんの行動は完全に違反行為だからな。
いくら三村達が相手でも、うかつに話すとクリスタルランスの皆に迷惑がかかる可能性がある。

「と、とにかく大丈夫だ。昨日の美女は本当に知らない人だったから」
「昨日まで知らない人でも、これから恋愛イベントを起こすかもしれないだろ！」
どうしろと言うんだ？

「そんなの決まってるだろ！　これ以上、ピンク色のイベントを起こさないでくれ。俺は、クラスメイトが三角関係を作っているのを見ると、喘息を起こす体質なんだ」

それは、難儀だな。

★
☆

「大ニュースだ！　澄空！」

１限目の休み時間。
自販機にコーヒーを買いに行ったはずの三村が、教室に飛び込んできた。
だが、俺は驚かない。

「分かってる、三村。ついに新月の学食にささみチーズフライが復

活するという話だろう？」
喜ぶべきことだ。
週一で、学園に投書をし続けたかいがあった。

「誰が、ささみチーズフライの話をしてるんだよ！」
「違うのか……？」
衝撃の事実だった。
「なら悪いけど、俺抜きで大いに盛り上がってくれ。俺は今忙しい」
学食に行くのを昼休みまで待つか、２時限目の休み時間に行ってしまうかで悩まなければならない。
「何が忙しいんだよ？」
「昼休みまで待った方が、適度に腹が減ってささみチーズフライを楽しめるのは間違いないが、売り切れてしまう可能性が否定できない。かといって、腹の減っていない２時限目の休み時間に行くというのも、ささみチーズフライに対して不誠実ではないだろうか？」
「……？」
三村が「いかん。今のこいつとはまったく話が通じない」といった顔をしているが、気にしない。

「とにかく、聞いてくれ。おまえに一番関係のある話なんだよ」
「嫌だ」
俺は珍しく意固地になって、ぷいと横を向いた。
なぜなら、ささみチーズフライの付け合わせを考えなければならない。
「俺的定番のソースかつ丼と組み合わせるのもありだが、よりささみチーズフライを味わうために白米のみというのもありだし、ヘルシーにサラダバーと組み合わせるのもささみチーズフライの味を引き立てるかもしれない」
「分かった。昼休みに俺も一緒にささみチーズフライを食いに行こうじゃないか」

麗華さんも捕まえて、俺の席に戻ってきた。
峰の席に近づいていって何事かを話し、ちょうど教室に帰って来た
言って三村は俺の席を離れる。
「え？」

「峰と剣も一緒にささみチーズフライを食べに言ってもいいと言ってる」
「み、三村……」
「あとでエリカも誘っておく。だから、今はとりあえず俺の話を聞いてくれ」
「わ、分かった」
俺は感動していた。
そして、麗華さんと峰は普通にキョトンとしていた。

ナックルウエポンの噂

「見てほしいのは、これだ」
と、麗華さんと峰も見守る中、三村が俺の机の上に一冊の雑誌を広げた。
『季刊ＢＭＰ最前線ＶＯＬ１５６・歴代ＢＭＰ能力値上位１００傑特集』だそうだ。
開かれたページの一番上に見覚えのある名前が載っている。

『歴代最強のＢＭＰ１８７。覚醒より半年でＢランク幻影獣とＡランク幻影獣を撃破した救世主、澄空悠斗』だそうだ。
顔出しＮＧにしているせいか、上位者は基本的に写真入りなのに、画像部分が「シークレット」になっている。

「三村、いくら俺が田舎者でも、もう雑誌に載ったくらいじゃ感動しないぞ」
最初はしまくってたけど。
「俺だって、おまえが雑誌に載ったからって、騒がないよ」
と、三村は女性側の上位者を見るように促してきた。

女性側の１位は……、麗華さんだよな、やっぱり。
『ＢＭＰは歴代２位の１７２。人類には不可能と言われたＢＭＰ１７０の壁を初めて破った女性。超人的な戦闘能力のみならず、ＢＭＰ研究の分野でもすでに数々の功績を上げている才女。最近では澄空悠斗のパートナーとして共に闘っており、彼にとってなくてはならない存在となっている』だそうだ。
そして、顔写真は俺と同じシークレット。
こういう風に顔を隠すと『実はすんごい美形なんじゃないか？』という噂はたつが実際にはそこまででもなくて、本人結構悩むが、実

際麗華さんはすんごいどころでない美形という、俺達の顔写真を一緒に載せれば、何も悪いことはしてないのに、なぜか俺だけいたたまれなくなるという……。
ええい！　不公平な！

「澄空？　何を難しい顔をしてるんだ？」
どんな顔をしていたのか、峰に心配されてしまった。
「俺には分かる。その愚痴は後でたっぷり聞いてやるから、とにかく先読め」
そして、三村が兄貴モードを発動しつつ『頼むからこれ以上脱線するな』光線を発している。

「なんだか照れる」
意外な一言を言うのは麗華さん。しかも、なんだか嬉しそうだ。
「でも、この文章、まるで麗華さんが俺のサポートをしているみたいに書いてるぞ」
俺は少し憤慨している。実際には、どうやったら麗華さんの足を引っ張らずに済むのか、自問自答している毎日だというのに！
「私が悠斗君のサポートすると、まずいの？」
心底不思議そうに聞かれた。
「い、いや。これじゃ、まるで麗華さんが脇役みたいじゃないか？」
「？　別に構わない。悠斗君の役に立っているのなら、嬉しい」
「……」
やばい。たぶん、俺、顔真っ赤だ。

と、思わず顔をそらした俺の顔の前に、なぜかカメラがあった。
「？」
そして、三枚ほど撮られた。

「いー表情の提供、どーも♪」

とてもいい笑顔でカメラを構えているのは、俺のクラスの委員長、新條文（新聞記者バージョン）だった。
「頼む、今のは載せないでくれ」
「大丈夫、すぐには載せないから」
いずれ、載せんのか！
「ネタに詰まったらね。さっきの顔を載せられるのが嫌なら、せっせと活躍すること」
普段の真面目ぶりが嘘のように、恐ろしい裏取引を持ちかけてくる委員長。
と。
「どんな写真が撮れたんデスか？」
金髪の美少女が、委員長のデジカメを覗き込んでいる！
「アラ、悠斗さん、こんな顔するんデスね」
「え、エリカ！　なんで！？」
思わず、俺は叫んだ。

ここで少し説明しておこう。
ここ新月学園はＢＭＰ能力者育成機関として名高い高校ではあるが、生徒全員がＢＭＰ能力者ではない。もちろん能力者ではなくても、対幻影獣関係の仕事に就く者が多いが。
そして、俺のクラス「１－Ｃ」は、別に全員がＢＭＰ能力者という訳ではなかった。
ＢＭＰ能力者は、１日か２日に１回集まって、ＢＭＰ課程を受けるが、それ以外はばらばらにクラスに配置されている。
そして、クラス分けを決めるのは純粋に学力だった。
エリカも非常に優秀ではあるが、学年２位のクラスなので、学年１位の１－Ｃとはクラスが違うのだ。
というか、ＢＭＰ能力者のくせに、頭までいいという麗華さんや、

峰や、三村（こいつが一番意外だが）の方が異常なのだ。
え、俺？　俺は大丈夫、このクラスにいるけど頭は悪いし、実際に成績も悪いから。
以上、説明終わり。

「三村さんが、走って行くのガ見えましたのデ。興味があったので、やって来ましタ！」
全く含む所のない微笑みで言うエリカ。
美人でスタイル良くて金髪で性格に裏表がない。この娘はこの娘で凄いキャラだと思う。
……麗華さんが凄過ぎるだけで。

「い・い・か・ら・さ・き・よ・め！」
「りょ、了解っす！」
やばい、三村がそろそろ限界だ。
１０個の目が見つめる中、俺は女性側の２位の人を見る。

女性側２位（男性も含めると３位）は、緋色瞳。
ＢＭＰチーム『クリスタルランス』リーダーにして、最強の支配系能力『アイズオブクリムゾン』を使う、うちの担任のお姉さんだ。
ＢＭＰは、１６８。
この人は、顔写真を載せている。
麗華さんと同じくらいの美形に加えて、なんと両目が深紅だ。これが素顔だということは俺が良く知っているが、この人が載っていると、高ＢＭＰ能力者ってほんとに実在の人物なのか怪しくなってくるな（と自分のことを棚に上げて言ってみる）。
ああ、それから、２位はもう一人いた。
緋色瞳さんと並んで歴代３位のＢＭＰ１６８を持つ女性。

「賢崎、藍華さんか……」

まず、美人だ。

このページを見る限り、高ＢＭＰ能力者はどう言う訳か美形が多い（俺除く）ようだが、この賢崎藍華さんは緋色瞳さんと並んで別格だった。

どれくらい別格かと言うと、麗華さんと同じくらい美形の緋色瞳さんと同じくらい美形なので、最終的に麗華さんと同じくらい美形なのだ。

眼鏡が凄い良く似合っている。『知的な美人』としか、俺のボキャブラリーでは表現のしようがない。

しかも、俺達と同い年だったりする。恐ろしい。

まあ、それはともかく。

問題は、文章の方だった。

『ＢＭＰは緋色瞳と並んで歴代３位の１６８。近年は経営者として賢崎グループ内の不採算部門を軌道に乗せ続けてきたが、近いうちにＢＭＰハンターとして復帰予定？』

世相に疎い俺だが、この人のことは知っている。

剣財閥と同格の賢崎財閥の正統後継者にして、歴代３位のＢＭＰ能力値を誇る女性。

賢崎はそもそも優秀なＢＭＰハンターの家系でもあるから、この人も強力なＢＭＰ能力があるのは間違いないらしいが、それ以上に頭脳の方が凄いらしい。

小学生くらいの時に海外の超難関大学を卒業し、この文章にもある通り、俺達と同い年でありながら、どんなコンサルでも立て直せなかった賢崎グループ内の不採算部門を次々軌道に載せているとか。

要するに社長さんなのだ。それも超やり手の。

「どうだ、澄空？」
「あ、ああ、驚いた」
「だろ。そろそろ、あの賢崎グループを継ごうかって御令嬢様が、なんで今更ＢＭＰハンターに復帰するんだろうな？」
「い、いや、でも、『？』って付いているし、本人がそう言っている訳じゃないんだろ？」
この『季刊ＢＭＰ』は誤ネタを載せないことで有名な雑誌ではあるのだが。

「あ、デモ、この話、本当らしいデスよ？」
意外な所からの意外な発言。
みんな、一斉にエリカを見た。

「犬神さんが『これ、すんごい極秘情報なんやけどな。近々、あのナックルウエポンが復帰するらしいで。いやービックリやなー。悠斗君に刺激を受けたんやろうか？　あ、もちろん、この話は秘密な。エリカはんが国家機密並みに可愛いから教えたんやでー』と言ってましタ」
「……」
何をやってるんだ、クリスタルランスは？
そして、この国の情報管理は本当に大丈夫なのだろうか？
あ、ちなみに、犬神さんというのは、最強ＢＭＰチーム・クリスタルランスのメンバーで、ＢＭＰ能力・電速（パルス）を使う猫みたいな目が印象的な女性だ。フルネームは犬神彰。

「……ほ、ほら見ろ！　クリスタルランスが言うんだから間違いないだろ！？」
と言いながらも、なぜか顔が引きつっている三村。
犬神さんの名前を聞いた途端だな。どうしたんだろう？　三村は三

村なりに、何か俺のうかがい知れないドラマでも抱えているんだろうか？

「でも、三村。ナックルウエポンが戻ってくるのは大ニュースかもしれないけど、どうして三村がそんなに興奮するの？」

と至極もっともなことを言うのは麗華さん。

あ、ちなみにナックルウエポンと言うのは賢崎藍華さんの称号だ（と思う、たぶん）。

「なに言ってんだ剣。ここをどこだと思ってんだ？　天下のＢＭＰ能力者養成高校『新月学園』だぜ。しかも、賢崎藍華さんは俺達と同い年。ここに転入してくる可能性は大いにあるだろ？」

と言う三村。

いや、しかし。

「賢崎藍華さんって、もう大学出てるんだろ？　復帰するにしても、もっと本格的な訓練機関に通えばいいんじゃないか？」

と俺は言ってみる。

確かに新月学園は、ＢＭＰ能力者養成高校としては最高峰だが、あくまで高校だ。

ＢＭＰ能力の訓練をするだけであれば、もっといい場所は他にある。

と。

「どうしたんだ、澄空？　今日に限って、なんでそんなまともな意見を言うんだ？」

驚いた顔の三村。

失礼な男だ。とっても失礼な男だ。

「これだけの才色兼備美少女が自分と同じ高校に転入してくるかもしれない可能性があるのなら、少々の設定の無理には目をつぶるのが男だろう！　それともおまえは、剣さえいれば、他の世界中の美少女がいなくなってもいいとでも言うのか！」

「む……」

無茶苦茶だ。今日の三村は、なんだかとっても無茶苦茶だ。

「ま、分からないでもないけどな」

「え……」

峰が意外にも口を挟んでくる。

「強者と共に学ぶことは、とても意義のあることだ。特に俺たちみたいな成長途中の若者にとってはな。容姿端麗というのも、悪いことじゃない。少なくとも三村みたいな連中はさらにやる気をだすだろう」

……おまえは、一体何歳だ？

「同い年で、しかも同性の高ＢＭＰ能力者と友達になれるなんテ、私ももちろん嬉しいデス。麗華さんだって、そうデスよね」

「うん。否定する理由はない」

エリカと麗華さんも肯定したっす。

というか、俺だって別に嫌だと言っている訳じゃないんだけど……。

「というかさ。澄空って、ひょっとして女嫌いなのか？」

「ぶっ！」

唐突な三村のセリフに、吹いた。

「な、何言ってんだ、お前は！？　健全な男子高校生が、そんな漫画やアニメみたいな設定を持ってるわけないだろ！」

持っているわけがないとも！

「と言ってもな……。剣にはなんとか慣れてきたみたいだけど、俺、おまえが剣やエリカ以外の女子と話してるのあんまり見たことないぞ」

「ぐっ」

そ、そんなことないと思うぞ、たぶん。
た、たまたま麗華さんと話す機会が多いだけで。
「だいたい、おまえはＡランク幻影獣を倒した救世主様なんだからな。ＢＭＰ能力者の守護者を自称してる賢崎の後継者様が、おまえ目当てに転入してくる、くらいの妄想しても誰もおかしいとは思わないぞ」
「それが、一番、困るんだよ……」
と、言ってから、しまったと思った。
みんなキョトンとした目で俺を見ている。
ちなみに、みんなというのは三村達５人だけじゃない。
クラスメイト全員に注目されてる！

「澄空君……やはり」
と委員長がメモを取り始める。
ヤバイ。これはなんだかとってもヤバイ。
「ち……違うんだ、委員長。俺は別に女子が苦手な訳じゃない」
「？　別に私は何も言ってませんけど？」
と首を傾げながら『もっと頑張って言い訳しないと、既成事実として季報・新月に載せちゃうよー。あ、既成事実というのはヤオイということね、もちろん』オーラを発している委員長。
「た、確かに、美人は少し苦手ではあるけど、基本的には普通だ、ほんとだ」
と言ってから、またしまったと思った。
俺は何を言ってるんだ？

これは、麗華さんが苦手、と言っているに等しいではないか！

「悠斗君は、美人が苦手なの？」
と麗華さんが聞いてくる。
麗華さんが俺なんかのことで怒るとは思えないけど、もともと表情

が読みにくい人だから、怒ってるのかいないのかさっぱり分からん。
「ち、違うぞ、麗華さん。ほ、ほら、麗華さんはもちろん、緋色瞳さんや茜島光さんみたいな美人とも普通に話してたろ？　全然、そんなことないよ」
茜島光さんは、クリスタルランスのメンバーだ。あとでまとめて説明する！
「た、ただ、こういうクール系というか傲慢……は言葉が悪いな。えーと、そ、そう、厳しそうな美人さんはちょっとだけ苦手というか……。ほ、ほら、俺は三村みたいに『美人に踏まれて感じる属性』とかないから……」
「なぜ、そこで俺を引き合いに出す」
とツッコム三村。そんなもん、もう他にどうしようもないからに決まってるだろ！

「ふーむ。まあ、言っていることは分かりました」
と、しっかりメモを取りながらも、一応引き下がってくれる委員長。クラスメイトもなんとか納得してくれている（と見せかけて、たぶん俺に気を使ってくれている）。

「最強のＢＭＰヴァンガードも、女性には勝てないか」
「なんカ、いいですネ、こういうノ」
妙に暢気な峰とエリカの会話を聞きながら。

俺は、もう一度、さっきのページに目を戻した。
賢崎藍華さんの顔写真をもう一度見る。
大丈夫だ。こんなハイスペックあんどハイソサエティな美少女がクラスメイトになるなんてこと、一生で二回もあるはずがない。
全部、三村の単なる願望だ。
と。

「ん？」
思ってたんだけど。
「この顔……」
見覚えがある。
基本的に人の顔を覚えるのが苦手な俺の脳裏にも、一度見ただけで焼きついてしまった美顔。
眼鏡のせいで、気がつかなかったのは、いかにも俺らしいが。
この人……。
昨日、帰り道で会った人じゃないのか？

笑顔の練習

ここは、新月学園１－Ｃ最寄りの女子トイレ。

良く清掃されてはいるが、ごく普通の女子トイレに、明らかに場違い（と言われても本人は困るだろうが）な美人女子高生がいた。

剣麗華だ。

どんな美人であれ、生理現象からは逃れられない。

そんなことは当たり前なのだが、この日ばかりはなにやらいつもとは違っていた。

「ある程度、謎は解けた」

淡々とした口調で呟く、天才美少女こと、剣麗華。

その眼は、ガラスの中の整い過ぎた自分の美顔を、睨むように見つめている。

確かに少し整い過ぎている。疑いようもない美人だ。

彼女自身は「まあ、顔が整っていても悪いことはない」くらいの認識しかなかったが、周囲にとってはそうでないことくらいは知っていた。

特に男性の中には、彼女のＢＭＰ能力以上に外見に価値を見出している者も少なくないことは分かっていた。

そして、現在一番近くにいる（なんせ一緒に住んでいる）少年にとっては、自分の外見のせいで周囲の視線を浴びるのは、若干気疲れする事態であることにも気付けていた。

が。

「悠斗君は、私の顔が整っていない方が良かった？」

と聞いたら。

「そんなもの、美人さんの方が嬉しいに気まってますよ！」
と（なぜか敬語で）とてもいい笑顔で答えたので、まあ、整った顔が嫌いと言う訳ではないらしい。

しかし、一緒に暮らし始めて４か月になろうとしているのに、未だに自分に慣れておらず、二人で居る時いつもどこか緊張した様子なのは、やはり澄空悠斗になんらかの異常があると考えざるを得ない（と本人は思っている）。

「まともに対人関係を学んで来れなかった私でさえ、今の生活にずいぶん慣れてきたのに」
呟く麗華。
「けど」
分かった。鍵は『クール系』という言葉だ。
俗語か造語の類だろうから、言葉自体を調べても無駄だろうが、さきほどの話の流れから「いつも隙がなく、厳しそうな女性」のことをイメージしているのは分かる。

思い出してみると、同じ美人でも、緋色瞳さんのような女性を前にしている時は緊張しているが、アローウエポンやエリカを前にしている時は、なんだかデレっとしている（ような気がする）。

「アローウエポンやエリカとの違い……」
ポイントは……。

それまで以上に真剣な顔で、鏡の中の自分の顔を見つめる麗華。
あの二人にあって自分にないもの。
それはおそらく。

「笑顔」

それも、同性も異性も、見ている者が思わず和んでしまう、穏やかな微笑み。

……超難問だった。

挑むような笑みや、蔑んだ笑いなら、できそうな気もするのだが。
誰かを癒すような微笑みとなると……。

「いや……」

最初から逃げていても仕方がない。
この数カ月は、きちんと人と会うようにしてきたという自覚はある。
今のところあまり活用できてないが、他人の顔を見て学んだ表情のパターンに関するデータの蓄積もある。
そして、なにより。
自分は……剣麗華は、微笑みたくないと思っている訳ではない！

剣麗華は、覚悟を決めて、鏡の中の自分に向かって、微笑んだ。

★

エリカは初めに「ソレ」を見た時、純粋な恐怖を感じた。
第五次首都防衛戦の時より、ＢＭＰ管理局籠城戦の時より、怖かった。

そして、次の瞬間「ソレ」は見てはいけないものなんだと気がついた。
「彼女」が悪いのではない。それを見た自分が悪いのだ。
今日のこの時間、１－Ｃ最寄り女子トイレに本郷エリカが来た、という事実ごと「ソレ」を見た事実を封印してしまうのが最善だと結論付けたのは、あまりにも当然の帰結だった。
……帰結だったのだが。

「ソレ」の衝撃があまりにも強すぎて、回れ右をしようとした時に豪快に転倒してしまうエリカだった。

「エリカ？」
いつもの無表情（でも、やっぱりあり得ないくらいの美顔ではある）に戻って、女子トイレの床に女の子座りをしてしまったエリカに問いかけてくる剣麗華。
そのことに少しほっとして、未だ力の入らない足でなんとか立ち上がるエリカ。
床が揺れてなくて良かった。

「どうしたの、エリカ？　顔色悪い」
全く悪意のない様子で聞いてくる剣麗華。
「れ、麗華さんこソ、どうシタんですカ？　す、凄い顔してましタけど……」
実際には「凄い」程度の形容詞で表現できる表情ではなかったが……。

「ん？　笑顔の練習だけど」
「は、ハイ！？」

甲高く語尾を上げるイントネーションで返事をするエリカ。

「コンセプトは、納期直前、連夜の徹夜残業を乗り越え、一週間ぶりに帰宅した夫を迎える、新妻の笑顔。……だったんだけど、違ってた？」

「ぜ、全然、違いマス！　むしろ、一週間後に保険金殺人する予定の旦那さんにデモ見せちゃいけない類の顔でしタよ！」

鏡越しに見た麗華の表情があまりに衝撃的だったせいか、珍しく大きな声で反論してしまうエリカ。

「うーん。結構、難しい」

呟く、麗華。

「難しい」というレベルの問題ではなかった気もするが、エリカはそれ以上に気になることがあった。

「そもソモ、どうして、いきなり笑顔なんて気にするんデスか？」

「ん？」

予想外の質問だったのか、麗華がきょとんとした顔を向けてくる。

「ひょっとして、さっきの話……気にしてるんデスか？」

「もちろん。パートナーとして、悠斗君にマイナスとなる要素はできるだけ排除しておく必要がある」

「……」

くらっとした。

そして、危なかった。

エリカが男性だとしたら、今のセリフで、間違いなく惚れていたことだろう。

そんな麗華が微笑ましくて、そんな気持ちを受ける悠斗が少し羨ましくて。

エリカは薄く微笑んだ。

と。
麗華の手が、エリカの頬に伸びてきた。
「え？　エ？」
「エリカの微笑みは凄く自然。魅力的……なんだと思う」
魂を抜かれそうな程に美しい瞳で、エリカを見つめてくる麗華。
「どうしたら、そんな表情を作れるの？」
「ど、どうしタラと言われましテモても……」
完全に混乱しているエリカ。
「教えてほしい」
顔を近づけてくる麗華。

と、物音と息を飲むような気配がした。
次の瞬間、黄色い奇声とともに、誰かが逃げ去っていく。
なにか誤解されたかもしれない。

いや、そんなことより。

「で、デモ、麗華さんも、表情だいぶ柔らかくなってマスよね？」
「え？」
それは、完全に予想外のセリフだったらしい。
麗華の顔が離れた。
女子トイレの鏡を見つめて。
「そうかな？」
「そうデスよ。入学式で初めて会ったときとハ、別人デス！」
別にお世辞ではない。
本当に、そう思うのだ。
しかし。

「自覚がない」

本人に自覚がないらしい。

「ほんの少しデスけど、微笑んでいると思うんデスけど……。ほんとに、心当たりがないデスか？」

「ない、と思うんだけど……」

言いつつ、もう一度思い出してみる。

澄空悠斗が、哀れなくらいに慌てた様子で、朝までに終わらなかった宿題の手助けを求めてくる時。

三村が馬鹿なことをやった時。

峰が大真面目な顔で持論を展開し、澄空悠斗が助けを求めてくる時。

緋色先生に遠まわしに責められて、澄空悠斗が困っている時。

エリカの頬笑みを見て、自分まで和んでしまった時。

「笑ってた……かもしれない」

「デスよ！」

勢い込んで答えるエリカ。

正直、普段の麗華の表情には、他人から見て微笑みと分かるようなものはあまりなかったが、エリカには雰囲気で麗華も結構笑っているのが分かる（ような気がしていた）。

「焦る必要はナイと思いマス。麗華さんは、少しずつ素敵な微笑みを身につけていると思いマス」

その言葉は、本心からのものだったが。

鏡からエリカの方に振り返って。

「ありがとう、エリカ」

と言う彼女の。

薄く笑みの形を作る顔を見て。

エリカは思った。

（麗華さん……。これ以上可愛くなって、どうするつもりなんでしょうカ？）

続・ナックルウエポンの噂

その日の放課後。
俺は麗華さんと二人で下校していた。
峰は賢崎さんの話でさらにやる気を出したのか特訓。エリカは買い物、三村も買い物（エリカと一緒に行ってるんじゃないだろうな）、こども先生は普通に仕事（そもそも一緒に帰ってない）。
なので二人きりだ。
住んでいるところが同じなので最後は必ず二人きりになるのだが、最初から二人で下校するのは珍しい。

二人きりだとやっぱり緊張する。
三村やエリカがいればもちろん、峰でもいてくれれば基本的に話題に困ることはないのだが。
二人きりだと、俺か麗華さんのどちらかが話題を振らなければならない。
悪い意味で普通な俺と、悪い意味で普通でない麗華さんには、なかなかの難題だった。

「悠斗君」
「ん？」
「面白い話をしよう」
……ほらな。

「え、えーと、面白い話……？」
「うん。面白い話。下校時にまで、実用的な話ばかりしても仕方がない」
そ、それは、俺もそう思うけどね。
方向性として面白い話をするのは大賛成だが、「面白い話をしよう」

と宣言するのは、いわゆるムチャ振りというのではないだろうか？
基本的に、俺は口下手（美人相手にはさらに口下手）だというのに……。

あ、でも待てよ。

「賢崎さんの話なんかどうだろう？」
「ナックルウエポンの話？」
「そ、そうそう」
やはり、賢崎さんの称号は「ナックルウエポン」で間違いないらしい。素手で闘うのだろうか？
しかし、女の子なのに「ナックル」とは、ちょっとゴツい感じはするな。
……まあ「ソード」が女の子らしいかと言えば、悩ましいところではあるが。
というか。

「麗華さん。賢崎さんのこと知ってるのか？」
「上条博士の研究所に入る前、何度か会ったことがある。パーティーとかで」
「あ、なるほど」
麗華さんは剣財閥当主の孫娘。賢崎さんは賢崎財閥の次期後継者。
セレブ同士繋がりがあっても別におかしくない。
俺みたいなスーパー庶民と麗華さんに繋がりがある方がおかしいんだ。
……いや、それはともかく。

「どんな人？」
と俺が聞くと、麗華さんは少し考え込んで。
「一言で言うのは、難しい」

「え？」
セリフ自体よりも、その声の調子に少し驚いた。
嫌悪しているという感じではなかったが、友好的とは程遠く。
認めてはいるが油断できない相手と言うか、好きにはなれないが頼りにはなるというか。
どうも、俺の交友関係には存在しないタイプの、ちょっと訳ありの関係らしい。

「悠斗君も会ってみれば、分かる」
「そ、そう？」
俺も健全な男子高校生だから美人に会うのが嫌という訳ではないが。
……やっぱり、できたら会いたくないかもしれない。

「たぶん、向こうから会いに来る」
「え！」
なんですと！
「三村の言うことは、あながち間違いではないから」
言うと、くいっと顔をこちらに向けてくる天才美少女。
身長差がほとんどないから、美少女に見上げられる構図にならないのが唯一の難点だ。でも可愛い。

「つい最近になって対幻影獣に力を入れ始めた剣財閥とは違って、賢崎は元々ＢＭＰ能力者の支援に積極的だから」
「あ、その話は俺も聞いたことがある。賢崎グループは創業以来、幻影獣から世界を守ることを理念にしてるって」
ソースは三村だ。
「というより、賢崎は元々ＢＭＰハンターが本業」
「え？」
「賢崎一族は幻影獣を倒すために存在する。企業経営は、彼らにとって副業。もしくは手段」

淡々と話す麗華さん。
俺も賢崎がＢＭＰ能力者の家系ってのは聞いたことがあるけど（もちろんソースは三村）。
……というか、この話、俺が聞いてもいいものなのか？

「私が知っていることで、悠斗君に教えられないことなんてない」

そういうつもりじゃないと分かっていても、どうしても惚れてしまいそうになる麗華さんのセリフ。
ほんとに惚れたら、麗華さん、責任とってくれるんだろうな？

それはともかく、麗華さんの話をまとめると。
１：ＢＭＰ能力には遺伝的な要素もあり、代々ＢＭＰ能力の強い家系というのも存在する。
２：賢崎一族はその中でも特に強力な家系（ちなみに麗華さんのところは、代々という訳ではなく、麗華さんのお祖父さん……剣首相の奥さんが凄いＢＭＰ能力者だったらしい）。
３：賢崎一族は強力なＢＭＰ能力者を多数輩出しているが、なかでも多いのが「流れの先を読む」タイプのＢＭＰ能力者。
４：その力を生かして経済界で成功し、その富をＢＭＰ能力者の支援と対幻影獣に充てている。
ということらしい。

「対幻影獣とは言っても、幻影獣はＢＭＰ能力者にしか倒せないから、彼らにとっては強力なＢＭＰ能力者はどんな富よりも貴重な宝。普通は適齢時判定が出た段階で、生涯にわたっての支援を申し出てくるはず」
続けて話す麗華さん。

よーし。今日は出血大サービスで、もいっちょ説明行くぞ！

～適齢時判定について～

1：この国に生まれた者は皆「ある年齢」に達するとＢＭＰ能力値の検査を受ける。

2：「ある年齢」が決まっていないのは、毎年学会で見直しがされるからだ。ちなみに今年は6歳だったはず。

3：というのも、ＢＭＰ能力は先天的に素養が決定するにも関わらず、生まれてすぐは観測できないからだ。

4：ちなみに俺も5歳の時にちゃんと受けたと思う。その時は確かＢＭＰ１０３という、この国の平均値まんまの数字だったはず。なのに、今年の４月に再検査した時にはＢＭＰ１８７というとんでもない数字になったのは周知の通りだ。

5：あの時の検査機関がなんらかのミスをしたのか、その後、俺に何か超常的な出来事があって劇的に伸びるはずのないＢＭＰ値が増えたのか、あるいは上条博士が極秘裏に開発した非合法の「ＢＭＰ値を上げちゃうぞ薬品」の投与を受けてしまったのか、は神のみぞ知るところだ。

という感じだ。

それはともかく。

「でも、俺には、賢崎財閥からは今まで何のアプローチもなかったけど？」

「私のせい。……なんだと思う」

無表情で言う麗華さん。

普段から無表情なので、無表情にならないといけない話題なのかそうでないのか分かりにくい。

「えーと……。それは、麗華さんが剣財閥の人だから？」

「そう。おじい様が対幻影獣に力を入れだして以来、剣財閥と賢崎財閥はそれなりに良好な関係を築いているから、気を使ってるんだと思う」
そう言った後に、麗華さんは一呼吸入れて。
「でも、これだけ悠斗君の評判が高まってしまうと、さすがに限界みたい」
と相変わらずの無表情で言った。
その時。
俺の『本質的にはもちろん全然分からないんだけど時々麗華さんの表情の意味が分かるような気がする』スキルが発動したような気がした。
具体的に言うと、麗華さんがなんだか嫌な顔をしたような気がした。
なので聞いた。

「えーと……。俺、何か酷いことされるのかな……？」
「そんなことはない。賢崎はＢＭＰ能力者に危害を加えたりはしない。対幻影獣の大義を盾に、ＢＭＰ能力者の自由や権利を阻害するようなこともしない。せいぜい、悠斗君専用のディテクトアイテムの開発提案をしてくるか、悠斗君の対幻影獣活動全般の資金支援を申し入れてくるか、ライセンス契約を結んでＣＭ出演の依頼をしてくる程度だと思う」
「……」
ちょい待ち！
最後なんか一つ、とんでもないのが混じってましたが！

「ただちょっとだけ気になるのが……」
俺の『麗華さんならともかく俺の顔なんて公共の電波で飛ばしちゃダメだろ』的な心配をよそに、麗華さんは何やら考えている。
「悠斗君の資質を考えると、あり得ない話ではないけど……」
珍しく言いにくそうに、俺の顔を覗き込んでくる麗華さん。

……いや、言いにくそうというか、なんだ、この顔？
こんな表情の麗華さんは、初めてみるぞ？

「麗華さん？」
「うん……。悠斗君。ひょっとしたらなんだけど……」
と、また、一瞬口ごもって。
何か考えるような顔をして。
それから俺の方を向き直って。
もう一度、口を開……。

開こうとしたところで、携帯電話が鳴った。
大して件数の入っていない俺のメモリーの中で、一つだけ着信音の違う登録先。
しかも、同時に麗華さんの携帯電話も鳴っている。
ＢＭＰ管理局からのエマージェンシーコールだった。
慌てて出る。

「はい、もしもし、澄空ですけど」
「はい、剣です」

『突然すみません、悠斗君！　オペレータの志藤です！　ご無沙汰してます！　緊急事態です！』
『城守です。いや、困ったことになりました』

「何があったんですか？」
「何があったの？」

『市街地にＢランク幻影獣が出現しました！　近くには、悠斗君と

麗華さん以外にＢＭＰハンターが居らず、非常に危険な状態です』
『Ｂランク幻影獣です。下位ハンターでは、犠牲が増えるだけなので下がらせています。なんとか、お二人で喰い止めてください。もちろん退治していただいても結構です』
「び、Ｂランク幻影獣……！？」
「位置は？」
『今から位置を転送します。すでに応援要請はしていますので、なんとか時間を稼いでください！　このままでは、大惨事になります！』
『座標の転送は終わっています。ＢＭＰ値は３４５。Ｂランクとしては高い方ではありませんが、何やら嫌な予感がします。油断はしないでください』
「あ、ええと……。と、とりあえず、向かいます（見方が分からんっす）！　麗華さんに付いていけば大丈夫ですよね？」
「位置は確認した。悠斗君と足止めに向かう。可能なら撃破する」
『く、くれぐれも無茶はしないでくださいね。いくら悠斗君が凄くても、実戦経験はまだまだ多いとは言えないんですから……。というか、なんで悠斗君にばっかり大変な敵が来るんだろ？　不公平ですよね！』
『そういえば、悠斗君と麗華さんの共同戦闘は初めてですね。どんなコンビネーションを見せてくれるのか楽しみです。仲良く闘ってくださいね』
「そ、そうですね……」
「うん。分かった」

という訳で、俺も麗華さんも電話を切った。
……なんだろう？　良く聞こえなかったけど、同じ会話をしているとは思えないくらい、緊張感というかテンションが違う会話だったような気がする。
まあ、それはともかく。

「行くよ、悠斗君」
颯爽と走り出す麗華さん。
「りょ、了解っす」
やっぱり、格好いいよな。

アナザーヒロイン

「クラブって名前はどうだろう？」
「うん、いいと思う」
5分ほど走って現場に駆けつけて、初めに俺達が交わした会話だ。

20階建てくらいのビルを、ハサミ状になっている腕で殴り続けている大型幻影獣。
まさしく蟹に見える。
俺のネーミングに麗華さんが賛同してくれたのも当然と言えよう。

いや、そんなことより。

「あのままだと、あのビル崩れる」
「わ、分かってる」
俺の束の間の現実逃避を破る、冷静な麗華さんの声。
周りの人も次々と逃げている最中である。あのビルの中の人達の避難が完了していると考えるのは、希望的観測に過ぎるだろう。

「いくよ、悠斗君」
と、壮麗な剣を実体化させる麗華さん。
……。
「……りょ、了解！」
頭の回転の鈍い俺は、3秒遅れくらいで麗華さんの意図を理解して、彼女と同じ剣を実体化させる。

神話や伝説上の剣を、自分なりの解釈で実体化させるのが、麗華さんの幻想剣（イリュージョンソード）。
それを真似ているのが、俺の劣化複写（イレギュラーコピー）。

「周りの人や建物に当てないように気をつけて」
「りょ、了解！」
「……呼吸を合わせて」
「了解！」
二人で『断層剣カラドボルグ』を振りかぶり。
振り下ろす。
空間を切り裂く断層が、エックスを描いてクラブに向かっていく。
カラドボルグは、麗華さんの体調さえ悪くなければ防御不可の攻撃だ。
そして、俺のカラドボルグも威力だけは麗華さんのものに引けを取らない。
当たりさえすれば、Ｂランク幻影獣でもただでは済まない！
っと思っていたのだが……。
「……」
「……あ、あれ？」
思わず疑問符を浮かべる俺。
クラブの身体には傷一つ付いていなかった。
俺達の断層剣を防いだのは、クラブがこちらに見せつけるようにしている二本のハサミ。
「あのハサミ……。ひょっとして、めちゃくちゃ固い？」
「最近のＢランクは、厄介なのが多い」

面白くなさそうに麗華さん。
……いやいや麗華さん。Ｂランク幻影獣は昔からボスクラスですよ？
そんなことはともかく。

「正面からじゃ無理。悠斗君、前後から挟み撃ちにしよう」
「りょ、了解！」
「同時攻撃よりも、少しタイミングをずらした方がいい。クラブが向いている側が先に攻撃して、防がれると同時に、逆側が背後から」
「分かった！」
さすが麗華さん。
素早く、かつ、的確な判断力だ。

「劣化複写（イレギュラーコピー）、超加速（システムアクセル）！」
麗華さんは天才美少女だが、移動系の能力は使えない。
俺が友人の三村宗一からコピーした超加速（システムアクセル）で、クラブの後ろに回り込む。

クラブは動きが鋭い訳ではない。

俺の姿をあっさり見失い、仕方がないのでビルを一度激しく殴りつけ、それから麗華さんの方を向いた。
……というか、あのビル大丈夫だろうな。３分の１くらい削り取られてるように見えるんだけど……。

と。
クラブを挟んで反対側の麗華さんから力の高まりを感じる（ような気がする）。
お互いの距離は１００メートルほど。
武器は断層剣カラドボルグでいいらしい。

そして、麗華さんが必殺の断層を放つ。
さきほどと同じく、クラブは避けようとする素振りを見せない。

よし。
あとは、クラブが防御すると同時に……！
……。

「……え？」

思わず間抜けな声が漏れた。

なぜなら……跳んだ！

さきほどまでの鈍重な動きが嘘のように、２０階建のビルの屋上近くまで、クラブが跳躍した！
すげえ！

いや、そんなことより！

「や、やば……！」

クラブが防御しなかったということは、断層剣カラドボルグの攻撃も消滅しなかったということで。
クラブを挟んで麗華さんの反対側には、俺が居る訳で。
そして、何より、俺は防御系のＢＭＰ能力をコピーした覚えがない。
このままだと……死ぬ？

じょ、冗談じゃないぞ。
こんな死に方、あり得るか！

カラドボルグで迎撃……いや、今の状態でできるかどうか自信がない。
超加速（システムアクセル）で後ろか横に回避……無理だ。ちょっと無理だ。
上か下に回避……これしかない！

と言いつつ、最後に二択を残したのが失敗だったかもしれない。
ジャンプしようとして、思いっきりつんのめってしまった。

「ゆ、悠斗君！！」
麗華さんの叫びが聞こえたような気がする。

体勢を崩した俺の眼の前には、無慈悲な空間断層。

今まで麗華さんの近くに居た俺には分かる。
この断層には、万一、なんて絶対にない。
死ぬ。絶対に身体は真っ二つになる。間違いなく死ぬ。

もう回避は不可能。
ほとんど反射的にカラドボルグの実体化を始めているが、間に合うか？
間に合ったとして、相殺できるのか？

……できるのかじゃない。するんだ！
こんなところで死ねるか！

「カラドボ……ぶっ！」

渾身の力を振り絞ろうとした、その時。
俺の身体は、地面に転がされていた。

★

……最初から、こうすれば良かったんだ。
大地に仰向けに寝転んだ俺の上を、空間断層が通り過ぎていく。
無敵の断層剣も当たらなければ無意味。
ただ寝転がるだけで、かわせたのに……。情けない話だ。

それはともかく。

「大丈夫ですか？」
俺を押し倒した人が声を掛けてくる。
疑うまでもなく命の恩人だ。
しかも、声は女性のものだ。

俺は三村ではないが、それでも何かドラマ的なものを感じずにはいられなかった。

「す、すみません！　大丈夫です！　た、助かりました……！」
一拍置いて、恐怖がぶり返してくる。
ほんとに助かった。
この死に方だけはシャレにならない。
いや、どんな死に方だってしたくはないけど！

「それなら、良かったです」
「いや、ほんとに助かりました！　あなたは命の恩人です！　ほんとに助かり……」
繰り返しお礼を言いながら身体を起こして、命の恩人の顔を見なが

らもう一度お礼を言おうとして。
固まった。

見覚えがある。

「け、賢崎……藍華……さん？」
「あら。名前をご存じとは光栄です。澄空悠斗さん」
タイムリーすぎる。
そう思う俺の心中を知ってか知らずか（もちろん知っている訳がないが）、俺の勝手な想像とはまるで違う穏やかな笑顔でほほ笑む賢崎さん。
眼鏡をしていないせいかもしれない。

「あの幻影獣……。澄空さんには、少し相性が悪いようです」
「は、はい」
相性ではなく、単に実力不足なだけだと思うのだが、とりあえず頷く俺。
「私が隙を作ります。澄空さんは、ソードウエポンと共に攻撃を」
「す、隙を作るって……？」
思わず引き留めようとする俺。
賢崎さんがどんなＢＭＰ能力を持っているかは知らないが、あの幻影獣は結構ヤバイ気がする。
「まぁ、ブランク明けの初実戦にしては厄介な相手ですが。なんとかなると思います。でも、危なくなったら助けてくださいね」
ウインク一つ残して、賢崎さんは幻影獣に突進していった。

★

「悠斗君、大丈夫！？」
Ｂランク幻影獣に突進していく賢崎さんを茫然と見送る俺の前に、青い顔をした麗華さんが駆け寄ってきた。

「あ、ああ。大丈夫」
「ほんとに！　斬れてない！？　切れてない！？」
若干取り乱しているのか、斬れているんじゃないかと疑わしい（麗華さん的に）箇所を撫でまわしてくる麗華さん。

「だ、大丈夫だから、ほんとに！」
そんな麗華さんをなんとかなだめる俺。
というか、今、麗華さんが撫でた箇所が斬れているのなら、いわゆる一刀両断状態です。
いや、そんなことより。

「麗華さん！　それより、あれ！　賢崎さんが一人で幻影獣に！　援護しないと！」
Ｂランク幻影獣が弱い訳はないのだが、あの『クラブ』は、特別やばい気がする。
全開の『カラドボルグ』を弾くハサミも、あの巨体でジャンプするようなふざけた運動能力も、今までのＢランク幻影獣にはなかったものだ。
が。

「ううん、ナックルウエポンなら大丈夫」
「へ？」
「接近戦で『あの能力』に対抗できる幻影獣なんか、ほとんどいない」

と、認めてはいるが油断できず好きにはなれないが頼りにはなる相手に対する表情を賢崎さんに向ける麗華さんだった。

幻影戦闘『Bランク幻影獣クラブ』

ナックルウエポンと言うくらいだから、接近戦に強い能力なんだろうな、とは思っていた。
だが、身長こそ高いが、まるでモデルのようにほっそりとした体格からして、まさか怪力無双（ドラゴンバスター）の臥淵さんのような純粋なパワータイプではないだろう、とも思っていた。

だから、その光景を見た時は、心底驚いた。

「れ、れれれ、麗華さん？」
「うん、良い打撃だと私も思う」
俺の言いたいことを完全に誤解したまま返事をしてくる麗華さん。
だってそうだろう。
高校生くらいの女の子に、全長１０メートル近くはある怪物が吹っ飛ばされ、５メートルは先にあったビルに叩きつけられたのだ。

ビルに突っ込んだ頭を引っこ抜きながら咆哮を上げるクラブ。
さきほど大ジャンプを見せた時と同じく、巨体からは信じられないくらい素早い動きで賢崎さんに迫る。
そして、あのハサミでなぎ倒すように横薙ぎを繰り出す。

「あ、危な……」

思わず呻く。
僅かに身を逸らした賢崎さんの身体すれすれを、空間断層ですら防ぐハサミが通り過ぎていく。
そのまま、まるで暴風雨のように二つのハサミを振りまわすクラブ。

対して、賢崎さんのかわし方は、あまりに危なっかしい。

「れ、麗華さん、麗華さん。やばいって、やっぱり。なんとか援護を！」

麗華さんの指示で！

「良く見て、悠斗君。ナックルウエポンは、危なくなんかない」

いや、危ないって、あれ！

どう見ても、ギリギリで！

……ギリギリで？

「ギリギリで……。わざと？」

「あれが、ナックルウエポンの『アイズオブフォアサイト』と『自律機動（ブースト）』。敵の動きを完全に読み切って、最適化した動きで対処する。一撃が当てられないなら、何度攻撃しても当てることはできない」

賢崎さんの動きそのものは、三村の超加速（システムアクセル）のように人間離れしたスピードじゃない。

けど、まったく当たらない。

自分の身体より大きいハサミを高速で振りまわすクラブの攻撃を、まるで脚本通りに進行する舞台のような自然な動きで軽やかにかわしていく。

それはまさに舞踏のようで。

状況も忘れて、思わず見入ってしまう俺。

と、鮮やかな舞踏に、わずかに異質な動きが混じる。

それまでの横の動きに対して、縦の動き。

例えるなら、サマーソルトキック。

……。

「って、サマソ！？」
「うん。いい斬れ味だと思う」
またまた俺の言いたいことを完全に誤解した麗華さんは置いておいて。
賢崎さんは、それまでの流麗な動きから一転、まるで格闘ゲームのような見事なサマーソルトキックを繰り出していた。
格ゲーでも、あんな大技そうそう当たらないが。
そして。
斬り飛ばされたクラブの片方のハサミが宙を舞っていた。
……マジか？
「悠斗君、準備して」
「え？　あ、ああ！　了解！」
ボーとしている場合ではない。確かにこれはチャンスだ！
「劣化複写（イレギュラーコピー）：幻想剣断層（イリュージョンソード）……」
「待って、悠斗君。まだ早い」
「剣……って、まだ？」
「うん、まだ」
言われて見ると、残った右側のハサミの根元に賢崎さんが絡みついていた。
「何を……」
と見ていると、賢崎さんの右肘と右膝がまるで大蛇のように口を広

げ。
噛みちぎるように交差した。
断末魔の叫びと共に引きちぎられる、クラブのハサミ。
痛そうっす。敵ながら。
が、賢崎さんはそれでも止まらず、今度はクラブの正面に回り込む。
そして。
気合一閃。
引っこ抜くようなアッパーカットを抜き放った。
高い。
全長１０メートルはある怪物が、俺と同い年の女の子のアッパーカットで、ビルの５階くらいまで浮き上がっている。
壮観だった。
というか、非現実的だった。
「悠斗君」
「！　りょ、了解！」
呆けている場合ではない。
いまこそ、好機。
「幻想剣（イリュージョンソード）：断層剣カラドボルグ」
「劣化複写（イレギュラーコピー）：幻想剣（イリュージョンソード）：断層剣カラドボルグ！」
二つの声が交差する。
厄介なハサミは既になく、クラブは空中で身動きがとれない。
そして、攻撃力だけなら最高ランクのカラドボルグによる同時攻撃。
これで倒せない訳がない！

俺達二人の初めての同時攻撃は、空間に大きなエックスの文字を描いて、クラブの身体を四つに引き裂いた。

★☆★☆

翌朝。
俺は三村にヘッドロックを決められていた。

「どういうことだ、澄空ー！」
おまえがどういうことだ！
どうして、朝の挨拶をした直後に、頭を締めあげられなければならない！

「悠斗さん、凄いデスー！」
俺の頭を締めあげる三村の腕のさらに上から、エリカの胸……もといエリカが抱きついてくる。
この位置関係では、良い感触……もとい良い思いをするのは三村だけで、俺は普通に息苦しい。

「というか、朝っぱらから、なんなんだ！」
「しらばっくれるのか、澄空！　俺がニュースを見ないとでも思ったのか！」
「というカ、ゴールデンタイムに特番が組まれてましタ！　録画しましタ！」
「分かっているか、おまえは！　お前と剣が未だに顔出しＮＧだけど、賢崎さんは顔出ししてしかも凄い美人だったから、視聴者はみんなお前も超二枚目だと思ってるんだよ！　剣は後ろ姿だろうと、

輪郭だけだろうと、もうどこからどう見ても美人だと想像するしかないから、おまえもやっぱりハンサムなような気がしてくるんだよ、だんだん！　というか、俺も若干ドキッとしたよ格好いいな、お前！」

「デスネ！　デスネ！　顔なんか出さなくても、悠斗さん、すっごく格好良かったデスねー」

「顔出さなかったから、格好良いんだよ！　撮影のトリックだ！」

俺の頭を二人で抱えたまま、仲睦まじげに叫び合うエリカと三村。

……なんなんだ、一体？

★

「なぜ今日は、あの三人あんなに仲がいいの？」

「君らがBランク幻影獣を倒したからだろ」

悠斗を中心にクルクル回りながら通学路を歩く不可解な三人組を見ながら、剣麗華は横を歩く峰達哉と話している。

「特別番組が組まれてたの？」

「賢崎グループがメインスポンサーでな。今まで澄空については目立った応援はしてなかったのに、急にどうしたんだか」

「……」

わずかに顔を曇らせる麗華。

「というか、剣はあんまり嬉しそうじゃないな。Bランク幻影獣を倒したっていうのに。剣くらいになると、Bランクくらい大したことないのか」

「そんなことはない。私もBランク幻影獣を倒したのは、昨日で三体め」

「そっか。奴ら、もともと数が少ないからな」
「私でも、評価されたら嬉しくない訳じゃない。Bランクは厄介な敵が多いから、達成感もある」
「そうなのか？」
「……最近は、だけど」

ふと向けた麗華の視線の先では、ようやくヘッドロックから脱出した悠斗と三村が何やら言い合っている。

「じゃあ、その顔は喜んでいる顔なのか？」
「いくら私が表情に難があるとはいえ、それはない」
言いきる麗華。
「じゃあ、何が気に入らないんだ？」
と問われると、麗華は一息置いて。

「失敗したから。大失敗」

新キャララッシュ

そんなこんなで波乱含みで始まった、ある夏の日。
その朝のホームルームでのこと。

帰りたい。
俺は、この学園に通い始めてから、初めてそう思った。

「……」
「……」
教室には沈黙が満ちている。
壇上には、右眼にごつい眼帯をした『アイズオブエメラルド』こと、このクラスの担任・緋色香先生。別名・こども先生。
そして、その横には麗華さんクラスの美少女。
あんな物理法則を無視した美形がそう何人もいる訳がない。

賢崎藍華さんだった。

昨日、Bランク幻影獣を倒した後、『すみません。まだ新社長への引き継ぎが残っているので、これで』とロクに話もできないまま別れて以来の再会だった。
今日は眼鏡をしているけど。

「えーと、質問は、なしでいいのかなー？　先生今日は気分がいいから、なんでも答えちゃうわよー」

なぜか上機嫌のこども先生。
「質問に応えるのは先生ではなくて、賢崎さんのはずです」などという意見は、まったく通りそうにない。

一応いまのうちに誤解を解いておくが、別に賢崎さんが取っつきにくそうだから皆が黙ってしまった訳ではない。
こども先生に促されて自己紹介した賢崎さんは、昨日感じた通り、知的な美人ではあるが、冷たいという印象は全くなかった。
凛とした雰囲気の中にも、どこか親しみやすい空気を漂わせているというか。
麗華さんの無表情を見慣れているから、余計にそう感じるのかもしれないが。
まあ、賢崎さんが（俺の時とは違って）怖がられている訳ではない。
では、何が問題なのかというと……。

「は、はい！」
と手を上げたのは三村。
皆、「おお！　ついに行ったか！」的な視線を送っている。
「け、結局のところ、澄空とはどんな関係なんですか？」

言った途端。
クラス全員の視線が、俺と賢崎さんの二手に別れる。

どうも、昨日俺達がBランク幻影獣を倒した時の特番は、賢崎グループがかなり露骨に前面に出てきたらしい。
『彼こそ時代に選ばれた救世主』とか何とか。
それまでどちらかというと俺に無関心だった賢崎グループの豹変は、昨日から（俺が知らなかっただけで）かなり噂になっていたらしい。
そして、今日、突然の俺のクラスへの編入。
ほんとに偶然だとしても、皆が気になるのは当然と言えば当然だっ

た。

「そうですね……」

失礼な三村の質問にも、全く気分を害した様子を見せない賢崎さん。

「尊敬に値するＢＭＰハンターだと思っています。ただ、みなさんが想像されているような大げさな話はないと思います。賢崎本家が少し騒ぎすぎているので無理ないのかもしれませんが。私がここに通うことにしたのは、あくまでＢＭＰハンターとしてのブランクを取り戻すことが目的ですから」

返答も無難だった。

「ただ……」

が。

「賢崎の次期後継者として『ＢＭＰ１８７』に興味がないと言えば、嘘になりますね」

一瞬だった。

ほんの一瞬、それまでの親しみやすい目から一転、心の底まで見通すような、底知れない視線をこっちに送って来た。

こ、これが、ひょっとして噂に聞く（というか、昨日麗華さんから聞いたんだけど）賢崎藍華さんの『アイズオブフォアサイト』か！　敵の動きはおろか、心の動きまで先読みし、思い通りの方向へ誘導できるという！

……と。

「せ、宣誓！」

懐かしい言い間違いをして、俺の右隣りの席の子が立ち上がる。

「私、中央付近の席に強い憧れがあったのを思い出しました！　今から移りますね！」

と、賢崎さんのために用意されていた真ん中最後尾の席に高速移動する。

「……」
「……」
質問に立ったままの姿勢で立ち尽くす三村と、さらに静まり返るクラスメイトと、もう穏やかな表情に戻っている賢崎さんと、とりあえず一通りテンパってみる俺。

「う、うーんと、どうする悠斗君。先生的にはどう見ても断れる雰囲気じゃないとは思うけど、一応無駄な抵抗してみる？」
Sなこども先生が、妙に嬉しそうな顔をする。
俺も無理だと思うけど、一縷の望みをかけて麗華さんの方を見た。
「……」
麗華さんは、我関せず、と言った顔で黒板を眺めつづていた。

……どうやら、無理みたいです。

★
☆

「疲れた……」

思わず声に出して呟いてから、俺は柵に寄りかかった。
ここは屋上。
何年か前に失恋を苦に自殺した女生徒が居るとかいう噂も事実もないうちの屋上は、普通に出入り自由だった。
フェンスのようなものもなく、安全設備と言えば、俺が寄りかかっている俺の胸までくらいしかない柵のみ。

「はぁー……」
最近お気に入りになっている『レッドマウンテン』というパチモン缶コーヒーを飲みながら、俺はため息をついた。
疲れたのだ。

賢崎藍華さんは、会う前の俺の予想とは違って、本当に良くできた女性だった。
知的で冷静なのは予想通りだったが、相手を見下したり、威圧感を与えるような所が一切ない。
休み時間中、自分の机を取り囲んで質問の集中砲火を浴びせてくるクラスメイトに、いちいち完璧な受け答えをしていた。
問題なのは。

質問する度に、クラスメイトが俺の方をちらっと見ることだ。
そして、3回に1回くらいの割合で、賢崎さんも俺の方を見ることだ。
俺のＢＭＰ１８７が人類最高で、賢崎財閥がＢＭＰ能力者の守護者を標榜する一族なのは分かったが、それと賢崎さんが俺の隣で学生生活を送る因果関係が分からない。
同じ『天才美少女類考えていることが分かりづらい系』でも、麗華さんの方が、まだ分かりやすい。

「ふぃー」
『レッドマウンテン』をもう一口飲んで、ため息を吐きだす。
そうだった。麗華さんの様子もおかしいんだ。
朝から機嫌が悪い。
いや、麗華さんだから例によって感情が読みにくいんだけど、あれは機嫌が悪いと断定していいだろう。
なぜなら、俺が『麗華さん。ちょっと。無茶苦茶居心地悪いから、何か俺と会話して』と目線で訴えかけても『ごめん、今、予習で忙

しい』と視線で返されてしまう（普段予習なんかしない癖に）。
つまり俺は、机の両サイドから異なる天才系美少女のプレッシャーを受けて満身創痍と言う訳だ。
だから、２限目の休み時間はこうして屋上に逃げ出してきた。

と。
「良くないね」
突然後ろから声が掛けられてきた。

「昼休みならともかく、２限目の休み時間から黄昏れるのは良くない」
「え？」
「慌ただしいだろう？　時間がなくて」
声をかけてきたのは、新月学園の制服に身を包んだ見知らぬ少年だった。
美少年と言えばいいのだろうか。
峰や三村とはタイプの違う、線の細い少年だった。

「昼休みは駄目だ」
「どうして？」
「ささみチーズフライを食べに行かなくてはならない」
そして、今現在、教室に猛烈に戻りたくない。
「悩みがあるなら、相談に乗るよ」
と、少年は、まるで１０年来の友人のように当然に、俺の隣で俺と同じように柵に肘をついた。
不思議なことに、俺の方も驚くほど違和感を感じない。

「いや、悩みなんて偉そうなものじゃないんだけどな……」
俺は普通に話していた。

～事情説明中～

「ふむ」
と少年。
「剣さんのことは分からないけど、賢崎さんの方は簡単なんじゃないかな？」
「へ？」
「スカウトだよ」
「スカウト？」
なんのこっちゃ。

「賢崎一族が、積極的に優秀なＢＭＰ能力者を一族に加えていることは知っているだろう？」
いや、知らん。
「……加えているんだ。賢崎一族の中だけじゃ限界があるからね」
俺の無知にもくじけることなく、話を進める少年。
「さすがに、賢崎藍華本人の婿にするのは無理があるけど、一族の優秀な女性『達』を紹介するつもりなんじゃないかな」
「しょ、紹介って……」
「後継者づくりだよもちろん。優秀なＢＭＰ能力者は、他に生産の方法がないからね。君の遺伝子なら競争率も高そうだ」
「せ、生産って……」
別に女嫌いではないが、若干奥手な俺は絶望的なうめき声を上げる。
というか、話が生々しすぎる。

が。
「……と、ミーシャが言っていた」
……伝聞情報か。
「……という、設定はどうだろう？」
しかも、オチかよ、おい！

少年の破天荒な言動に、思わず（格好つけて吊り下げ持ちをしていた）缶コーヒーを取り落としてしまった。

「しまった！」
まだ、６０円分は入っているのに！

まるで映画のように、黒い飛沫をまき散らしながら自由落下していく『レッドマウンテン』。
と、突然、コーヒー缶が空中で停止した。
「……？」
いぶかしむ俺の前で、重力を完全に無視した動きで缶コーヒーが浮き上がってくる。
隣で腕を伸ばす少年の右手に向かって。

「……」
『レッドマウンテン』は少年の右手に収まっていた。
６０円分のコーヒーが、まだその缶の中に残っている。
と、少年は、缶に口を付けた。
って、飲むんかい！

「ああ、しまった……」
俺の非難の視線に気づいたのか、少年は気まずそうな顔をした。
「これじゃ、間接キスになってしまうね」
そんな話はしていない。

が、少年は意に介さず、全部飲んでしまった。

「よっ……と」

カラになった缶の上下を押さえる少年。

と次の瞬間、レッドマウンテンの缶は小気味いい音と共にぺしゃんこになった。

そして、手首のスナップだけでそれを投げる少年。

缶は、完全に物理法則を無視したあり得ない速度で飛んでいき。

たぶんそこを狙ったのであろう中庭のゴミ箱の、1メートルくらい離れた地面に突き刺さった。

「……」

「……まあ、コントロールは別だから」

……なんやねん、それ。

と。

「悩むことなんてないよ」

突然、さきほどの失敗を完全無視したかのように、少年の声のトーンが変わる。

「君の望むままにすればいい」

ＢＭＰ能力者特有のプレッシャーが今更のように感じられる。

「欲しいものを手に入れて、嫌いなものは遠ざければいい」

そして、わずかな悪寒……いや、違和感。

「君はＢＭＰ１８７なんだから」

と、唐突に少年は踵を返した。

茫然とする俺の前で、少年は5・6歩ほど歩き。

また、こちらに振り向いた。

「僕は『アックスウエポン』小野倉太。能力名は引斥自在（ストレンジャー）」

「……」
「近いうちに、必ず君の前に立つ存在だよ」
「な、なんで？」
「秘密」

と、少年……小野倉太は儚げな顔をし、
「でも、その時はよろしく」
言った。

新キャララッシュ2

「という訳で、今日からこのクラスに編入してきた『アックスウエポン』小野倉太君です」
何が『という訳で』なのかは全くもって不明だが、こども先生は言った。
先生の横には、二時限目の休み時間に屋上で会ったばかりの線の細い美少年。
そして、今は四時限目。

『早過ぎだ』と思った。
なにが「近いうちに」だ。めちゃくちゃ直後じゃないか！
と。

「倉太……？」
意外な所から声がかかる。峰だった。
「久しぶりだね、達哉」
小野も答える。
……知り合いか？

「入院中にちょっとな」
俺と同じ疑問を抱いたクラスメイツの視線に応える峰。
そういや、峰はしばらく入院してたんだったな。

「じゃ、みんな何か質問はないかな？」
こども先生がクラスメイツに問いかける。
？　妙だな？　微妙にテンションが低い気がする。
「その前に、僕から自己紹介をさせてもらってもいいでしょうか？」
「ああ……。それもそうね。どうぞ」

こども先生が、あっさり譲る。
確かにそれが普通の段取りだろうが、何か違和感がある。

「ご紹介にあずかりました『アックスウエポン』小野倉太です。ＢＭＰ能力は『引斥自在（ストレンジャー）』。主に、物体を引きよせたり、引き離したりする能力です」
自然に自己紹介を始める小野。

「ＢＭＰは１６１です」

そのセリフで、クラスにざわめきが起こる。

俺や麗華さんが異常に高いだけで、たいていのＢＭＰハンターはそれほど高いＢＭＰ値を持っていない。
いわゆる一流ハンターと言われる人たちの中でも、ＢＭＰ１４０以下の人はざらにいる。
かいつまんで言うと。
ＢＭＰ１０３：人類の平均
ＢＭＰ１１０：ＢＭＰ能力発動下限。
ＢＭＰ１２０：幻影獣に有効な攻撃が加えられる。
ＢＭＰ１３０：普通に強い。
ＢＭＰ１４０：エリート。
ＢＭＰ１５０：超エリート。
ＢＭＰ１６０：伝説級。
ＢＭＰ１７０：基本的に人類には不可能。
ＢＭＰ１８０：異常。
こんな感じだ。
もちろんＢＭＰ能力値の高低だけで強さが決まる訳ではないが。

１６０以上のＢＭＰ値の持ち主なら、普通の人なら知っていて当然

のはずなのだ。
だが、俺もクラスメイトも、この小野という少年のことを知らない。

「皆さんに馴染みが薄いのは当然です。僕は、つい最近まで能力が制御できなくて、ＢＭＰ能力者関係の施設で過ごしていました。ＢＭＰ管理局にハンター登録したのも先月のことです」
クラスメイツの疑問に答える小野。
……麗華さんと同じような境遇か？
「もちろん覚醒時衝動も経験済みなので、心配は要りません」
皆の意識が一斉に俺の方に向いた。
……ような気がした。

しかし、こども先生が妙に大人しいな。
何か気になるぞ。
と。

「で、ここに来た目的は何なのかしら？」
こども先生が急に口を挟む。
先生とはいえ、自己紹介の途中で口を挟むのはルール違反なのだが、誰もそれを指摘しなかった。

こども先生が、ごつい眼帯を外し、深緑の右眼を全開にしていたからだ。

「賢崎一族が悠斗君に接近を始めたのとは逆に、色々と彼に思うところがある人達もいるそうね？」
深い瞳と深い声を出す、先生。
俺は思わず賢崎さんを見る。
……彼女は、浅い笑みを浮かべていた。

え、何これ？
今、シリアスパートだっけ？

「そういう人達がいるのは否定しませんね」
しれっとした顔で言う小野。
「そういう人たちとお友達という可能性は？」
「友達ではありませんね」
「へえ……」
こども先生の『アイズオブエメラルド』の輝きが、目に見えて強くなったような気がした。

教室内に緊張が走る。

「小野君」
「はい」
「あなた」
「はい」

「実は男の子が好きってことはない？」

はい？

「？　僕は人間……あ、いや、そういう方面には疎いんですが……」
いきなりの超展開に、小野も困惑している。
……というか、これは……。

「えー。このタイミングで美少年系が登場ってことは、絶対ボーイズラブ展開だと思ったのにー」

何を言っているんだ、この子供は？

「あ、あの、先生？」

クラス全体が唖然とする中、三村が口を開く。

「い、今の、シリアスっぽい会話は……」

「あー。最近ほら、学園に刺激がなくてみんな退屈してるかなと思って。先生からのドッキリサプライズ」

コロコロと笑いながら言う、こども先生。

「そ、倉太は？」

峰も聞く。

「いや。……ビックリしたよ」

と答えるところを見ると、どうやら小野も聞いていなかったらしい。

「いや、先生もびっくり。打ち合わせなしで、あれだけ完璧に対応するなんて。一瞬、本当に悠斗君を狙う悪の組織の手先かと思ったわよ」

嬉しそうな、こども先生。

「と言う訳で、後藤さん」

「は、はい」

返事をしたのは、俺の前の席に座っている女子高生・後藤さん。

なかなかの美人なのだが、両斜め後ろに反則級の美人が二人もいるので、色々と損をしている（と三村が言っている）気の毒な女性である。

まあ、それはともかく、そんな後藤さんに向けて、こども先生は言った。

「席開けて。そこに、小野君に座ってもらうから」

無茶苦茶だ。この人、今日は特に無茶苦茶だ。

☆
★

結局のところ、小野は俺を狙う黒幕の手先でも、男の子が好きな男でもなかった訳だが、それでもかなりミステリアスなクラスメイトには違いなかった。
１６１という高ＢＭＰや、麗華さんと似たような経歴はもちろん、もうとにかく雰囲気がミステリアスだった。
おまけに美少年。
クラスの女の子達が集まるのは当然と言えた。
それ自体は問題ないのだが……。

５回に１回くらいの割合で、俺の方をちらっと見るのが気になる。
仮にもＢＭＰ能力者であれば、『ＢＭＰ１８７』に興味を持つのはおかしいことではないと思うけど……。
何か、気になる。
これが俺の前の席の話。

そして右隣りは、小野に『賢崎藍華は澄空悠斗に一族の優秀な女性達を紹介するつもり』と与太話を聞いて以来、ますます分かりづらくなった賢崎さん。
左隣は、まだちょっと機嫌が悪い（んだと思うんだけど、実際のところは良く分からない）麗華さん。

まあ、とにかく、今は教室には、あんまり戻りたくない気分と言う訳だ。
なので、いくらお気に入りのささみチーズフライとはいえ、がっつ

いたのはまずかった。
食堂を出たものの、昼休みが終わるまで、まだあと３０分はある。
「うーん……」
どうしよう。
できたら、もう少し時間を潰したい。
と。
「ん？」
『保健室』と書かれたプレートが目に入った。
「保健室か……」
そういえば、これだけデンジャラスな生活を送っているのに、この学園の保健室には入ったことがなかった。
「……」
ちょっといいことを思いついた。
午後の授業が始まるまで、ここで寝るというのはどうだろう？
別に仮病と言う訳じゃない。
俺は昨日、Ｂランク幻影獣を激闘のすえ倒した３人組のうちの一人。
しかも、今日は朝から二人も新キャラを迎えて、精神的にちょっと疲れている。
ベッドに空きさえあれば、３０分くらい寝かせてもらっても、バチは当たらないはずだ。
わずかな後ろめたさを覚えながらも、保健室の扉に手を掛ける。
「大丈夫……」
保健室の先生は、人の良さそうな年配のおばさんだと三村が（悔しそうに）言っていた。

きっと、今の俺の微妙な気持ちを踏まえて、ベッドを貸してくれるはず！

俺は意を決して、扉を開いた。

「……！」

そして、閉めた。

「……」

どうも俺は、自分で思っているよりも疲れているらしい。

あり得ないものが見えてしまった。

「……帰ろうか」

もう今日は帰ろう。

保健室でちょっと寝るよりも、家に帰って明日の朝まで眠りこけたい。

というか、もう一度この扉を開けて、中身を確かめたくない。

「よし、帰ろう」

俺が決心して、踵を返したところで。

「さっきから何をやってるの？」

扉が開いた。

新キャララッシュ3

それは不思議な光景だった。

保健室の前で、あーだこーだとやっていた俺を迎え入れてくれた女性は。

……えーと、何と言うんだろう？

ゴスロリ……じゃなくて、あー。

まるで、これから舞踏会にでも出かけるような……。

黒いイブニングドレス？　とか、そんな感じの服を着ていた。

しかも、年配のおばさんではなく、妙齢の美女。

黒いドレスの上から白衣を羽織っているから、保健医さんなのは間違いないと思うのだが（人の良さそうで無害な、おばさん保健医さんはどこいった、三村！？）。

そんな美女と、保健室の中で向かい合って座っている俺。

疑う余地もなく、異常事態だった。

よし、帰ろう、帰って寝よう。

と、席を立とうとした時。

「で、なにか悩みごと？」

いきなり声をかけられて、驚いた。

「な、なんで悩みごとだと？」

「だって、どう見ても怪我してるようには見えないし。でも、すっきりしない顔しているし」

という保健医さん。

それ洞察自体は不思議でもなんでもないのだが……。

「ひょっとして、保健医さんはＢＭＰ能力者ですか？」
それも、精神系の。
「あら、どうして」
それは。
「こどもせん……。いや、俺の担任の緋色先生に感じが似てるもんですから」
心の底を見透かすような感覚が。

「ふーん……」
面白がるように、薄く細められる目。
真っ黒のイブニングドレスに浮かぶ真っ白の顔は、意外なことに化粧っけがない。

と、彼女は、すっと立ち上がり。
「道標（センスレス）のミーシャ・ラインアウトです。以後、お見知りおきを」
まるで、貴族の令嬢のように。
豪奢で芝居がかった仕草で、保健医さん……ミーシャ・ラインアウトさんは、自己紹介をした。
「あ、澄空悠斗です。よろしくお願いします！」
席を立って、お時儀をしながら自己紹介をする俺。
……まあ、優雅さの欠片もないことは認めよう。

それはともかく。
「カウンセラーみたいなことができる能力なんですか？」
お互いに席に付きながら、俺は聞く。
「ううん。得意なのは外科。医療系のＢＭＰ能力ね」
「おお！」
感嘆する俺。

医療系のＢＭＰ能力は、レアだ。
ＲＰＧをやったことのある人なら回復役の重要性は嫌になるほど分かっているだろうが、回復のできる能力者は少ない。
ウエポンの属性持ちよりもレアだ。
……ウエポンテイマーほどじゃないけど。

「腕くらいなら付け直せるわよ」
それは、頼もしいです。
「でも、もちろん悩みを聞くことだってできるわよ」
「え？」
「話してみなさいな」

★

俺は話した。

突然、癖のある美少女と美少年が転校してきて面喰っていること。
美少女は、賢崎という凄い一族の人で、俺に何らかの興味を持っているらしいこと。
美少年は、とにかくミステリアスだが、俺に何らかの興味を持っているような気がしないでもないこと。
麗華さんの機嫌が、微妙に悪いこと。
クラスメイトに、意味深な視線や怪しげな視線を向けられている気がして、若干居心地が悪いこと。

そして、話してみて思う。

「気にし過ぎじゃない？」

ですよね。

イベントが立て続けに起きたから（このファンタジーな保健医さんとの出会いを含めて）混乱してたけど、良く考えるとそんな大したことはないような気がしてきた。

賢崎一族は、ＢＭＰ能力者に危害を加えるようなことはないらしいし、小野はミステリアスなだけで、害がありそうには見えない。

クラスメイトが俺に悪い感情を持っていないのは、確信しているし。

麗華さんの機嫌が悪いのは気になるが、これ単体なら、単なる日常の喧嘩レベルの話だ。

なんだろう？

話しているうちに、くだらないことで悩んでいた気になって来た。

「漠然とした予感……じゃないかしら」

「え？」

「四聖獣ガルア・テトラを倒して、流されるままだったＢＭＰハンター体験期間も終わり。本格的にこっちの世界に足を踏み込もうとした矢先の、ミステリアスで重要そうな美少女。しかも、立て続けに怪しそうな新キャラが二人も」

その片方が自分だってことは分かっているらしい。

インパクトある外見に反して、なかなかの常識人なのかもしれない。

……ちなみに俺は規定訓練も試験もなしにＢＭＰハンターになってしまった（城守さんあたりが適当に押し込んだらしい）から、体験期間どころか、未だに自分がＢＭＰハンターという自覚すら乏しかったりする。

「ちょっと不安になっているだけよ。というか、あなたの調書を読ませてもらったけど、少しくらい情緒不安定にならないほうがおかしいくらいよ。特に、ここ数カ月のイベントは」

「そ、そうですよね！」
それまで何不自由なく（金銭面以外で）一般人を満喫していたのに、突然世界最高のＢＭＰ能力値とか言われて、麗華さん達と出会って、教科書でしか見たことがないＢランク幻影獣や、挙句の果てに、都市伝説だとばかり思っていたＡランク幻影獣と闘って……。
「家に帰って寝ることをお勧めするわ。眠れそうになかったら、お薬も出すけど？」
「いえ、大丈夫です。俺もなんだか、気にし過ぎだった気になって来ました」
なんとなく声が弾む。
ほんの５分足らずの間に、朝から感じていた漠然とした不安が綺麗に消えていた。
カウンセラーって、凄いな！

「そうよ。ほんとに気にしなければいけないのは、最初の一つだけ」
「ですよねー……。って、え？」
最初の一つ？
疑問符を浮かべる俺に、保健医……ミーシャさんは、真剣な表情を見せ。

「賢崎藍華には気をつけなさい」
言った。

「……な、なんで、でしょうか？」
「あの子は、あまり貴方に良い感情を持ってない」
ドレスに白衣と言う、非日常的な格好をした保健医が迫ってくる。
「利害が一致しないと分かると、即座に敵に回る可能性があるわ」
「け、賢崎一族は幻影獣を倒すことが唯一の目標だって聞きました。俺と利害が一致しないなんてことがあるんでしょうか？」
というか、なぜに俺は嫌われているのだろうか？

「仲間割れは、人間の得意技じゃない」
と言って、プイっと背を向けるミーシャさん。

「あ、あの……」

「可能性の話よ。基本的には、賢崎藍華は貴方の味方よ。ただ、貴方は今まで仲間に恵まれ過ぎてた。麗華さんと藍華さんが根本的に違うことを理解しておくことをお勧めするわ」

★

ますます混乱した顔で澄空悠斗が出て行った後の保健室。

「もういいわよ」

カーテンの向こうのベッドに呼びかけるミーシャ。
と、カーテンが開いて、一人の男子生徒が姿を現す。

「隠れる必要はあったのかな？」
小野倉太だった。

「自分で勝手に隠れたんじゃなかった？」
「焦ったんだよ」
若干、小馬鹿にした口調で言ってくるミーシャの前に、当然のように腰を下ろす小野。
「それより、話の続きをしよう」
「なんだったかしら？」
「緋色教授の件だよ」

本当に忘れているらしいミーシャに、別に怒った様子もなく先を促す小野。

「ああ、思い出したわ。なかなか素敵な歓迎をされたみたいね」
「君はこの学園の支配は完璧だと言ってたと思うんだけど？　それとも、あれは君の趣味かな。本気で焦ったよ、実際」
「失礼な。私の支配は完璧よ。もちろん、緋色香に対してもね。そして、今更あなたをからかって遊ぶような趣味はないわ」
と言い切られた為に、恐ろしい想像をしてしまう小野。
「……では、あれは……」
「本人が言ったんでしょ。『先生からのドッキリサプライズ』って。可愛い転校生が入って来たから、からかいたくなったんでしょ。別に正体に気づかれた訳じゃないわ」
「恐ろしい人間だ……」
戦慄の表情を浮かべる小野。

「それより、剣麗華の方に気を付けた方がいいわ」
「？　彼女のＢＭＰ能力は戦闘系だろう？」
「前回のこと、もう忘れたの？」
「……あぁ、そっか。『アイズオブエメラルドには無理でも』……か」
何やら納得したような顔で、うんうんと頷く小野。
と。

「そういえば、さっきの澄空悠斗との話なんだけど」
「うん？」
「賢崎藍華が危険と言うのは、何？」
「何って、言葉通りの意味だけど？」
「何かの作戦とかじゃなくて？」

「純粋な忠告よ。澄空悠斗にもしものことがあったら、私達も困るでしょう？」
ミーシャが小野に嘘をつくはずがない。
ということは、賢崎藍華は、澄空悠斗にとって危険人物の可能性があるということで間違いないらしい。

「じゃあ、排除しておこうか？」
「ああ。それは駄目。というか、彼女にもしものことがないように注意してなさいな」
「？」
「彼女は、私達にとっても重要な存在よ」
顔中に疑問符を浮かべる小野に応えるミーシャ。

その表情で、小野が気づく。

「ひょっとして、あのＢＭＰ能力……、本当に存在するのかい？」
「少なくとも、賢崎藍華本人は使えると自覚してるみたいよ」
「それは……凄いな。このゲーム、勝ちの目が出てきたかな……？」
「どうかしら……。さっきも言ったように、賢崎藍華自身は澄空悠斗の仲間であるとは限らないし……」
と、思案するように言葉を切り。

「にしても……ねぇ。偶然にしては、でき過ぎなのよね」
今度は、年齢不詳の笑みでコロコロ笑う保健医。
「まるで、彼、運命の女神様に溺愛されてるみたい。もしくは、嫌われてるか」

「問題なし。もーほんとに、全然、問題なし。絶好調」

放課後。

突然、剣麗華が『ＢＭＰ中毒症はたぶん治ったと思うけど、念のため診て欲しい』と職員室までやってきたので、エメラルドの瞳を持つ童顔教師は相手をしていた。

もちろん問題などあるはずがない。

ガルア・テトラとの闘いの後、みっちり精密検査はしていたし、あれからもう2週間も経っている。

今頃いきなり『念のため』とか言われても、言葉通りに取ることは難しい。

というか、はっきり言って口実なのは丸分かりだった。

「ところで、麗華さん。悠斗君と喧嘩でもした？」

「？　なぜ？　そんなことはない」

「でも、今日一日、様子が変だったじゃない？　麗華さんが相手をしてくれないから、悠斗君、陰でしっかり落ち込んでたわよ」

まあ、剣麗華だけが原因でもなかったろうが。

「それは困る。誤解を解かないといけない」

「うーん……。誤解を解く前にやることがあるんじゃないかしら？」

と、こども先生の眼帯をしていない左目がキュッと細まる。

でも、いつ見ても武骨な眼帯。もっとファンシーなのにすればいいのに。

と、剣麗華は神妙な顔をして。

「この間のＢＭＰ管理局籠城戦の時のことなら、もうちゃんと謝ったと思う」

「え？　あ、いや、そうじゃなくてね……」
「違うの？　悠斗君が『緋色先生は、凄く根に持つ上にSだから、一度許してもらったからと言って油断してはいけない。きっと、間隔を開けて、チクチクチクチク嫌味を言ってくるに違いない』と言っていた」
「あのガキャア……」
小学生の外見を持つとはいえ、教師にあるまじきセリフを吐く香。
そして、決心した。
今度街中で、悠斗の腕にしがみ付きながら『ねぇ、お兄ちゃん。今度はどんないい所に連れて行ってくれるの？　香、こんどは縛られたりしないのがいいなぁ』と大声かつ猫撫で声で叫んでやろうと。

まぁ、それはともかく。

「籠城戦の時のことは、もう怒ってないって言ったでしょ？　麗華さんの気持ちは痛いほど分かったし、元はと言えば、私が未熟なのがいけないんだしね」
「でも、結果的に、ＢＭＰ中毒症を起こして倒れてしまった。悠斗君が覚醒時衝動を起こしたのは私のせい」
「止めたのも貴方でしょ。麗華さんが頑張らなかったら、悠斗君が覚醒時衝動に打ち克つこともなかったと思うわ」
「そう……かな」
自信なさげに俯く麗華。

ちなみに、さきほどの香のセリフは、事情を知る関係者全員の共通認識である。
ただし、麗華以外。
剣麗華だけが、信じ切っていない。

「私は、悠斗君に迷惑ばかりかけている」

ふと、剣麗華の声の調子が変わる。

『アイズオブエメラルド』は、ここからが本題なのだと理解する。

「何か、あった？　麗華さん」

「うん」

そして、彼女は口を開く。

★

話としては、こうだ。

昨日、悠斗と麗華は、ＢＭＰ管理局の要請でＢランク幻影獣『クラブ』と闘った。

意外に防御の固い強敵だったので、初めての連携攻撃を試みた。

……そして、豪快に失敗して、悠斗を殺しそうになってしまった。

「そ、そんなことがあったの……」

香の顎が落ちる。

悠斗と麗華がＢランク幻影獣を相手に連携戦闘を行い、その最中に「ナックルウエポン」こと賢崎藍華が参入して、見事Ｂランク幻影獣を撃退したというのはテレビでやっていたが。

その過程で、悠斗が麗華のカラドボルグに輪切りにされそうになっていたとは、初耳だった。

大人の事情というやつだろう。昨日のゴールデンタイムの放送では、

その辺カットされていたのだ。
それでも無理なく番組を構成するあたり、大人のテクニックというやつだろう。

「ま、まぁ、結果オーライということでいいんじゃないかしら。悠斗君も無事だったし、幻影獣は倒したし！」
努めて明るく言う香。
自分の断層剣で悠斗を殺してしまいそうになった時の、麗華の絶望と恐怖は、一瞬とはいえ、想像を絶するものだったに違いない。
そして、ＢＭＰ能力者の誤射は、ついうっかり、で済ませられるほど軽い問題ではない。
が、それでも、これ以上麗華が自分を責める必要はないと思うのだ。

「まぁ、悠斗君も麗華さんも連携戦闘は初めてだったんでしょ？これから、じっくり合わせていけばいいんじゃないかしら？」
「悠斗君は、連携戦闘の訓練に付き合ってくれるかな？」
「当たり前でしょうが！」
自信なさげな麗華の姿に、若干萌えてしまいそうになる自分を抑えながら、香は言う。
そう。問題などない。
剣麗華は天才だ。できないことなどない。
それは連携戦闘でも同じ。
落ち着いてしっかり、悠斗の動きに合わせれば、ミスなど起こるはずもないのだ。
そして悠斗も、麗華に追い付こうと努力すれば、お互い望ましい成長が……。

「うん。今度は、悠斗君の足を引っ張らないようにする」

……。

「……え？」

思わず、聞き返す、香。

「悠斗君『の』？　『が』じゃなくて？」

「？　なぜ、悠斗君が、私の足を引っ張るの？」

キョトンとした仕草で、香の顔を見返してくる麗華。

香は、思わず眼帯を取って、アイズオブエメラルドを解放した。

「緋色先生？」

「麗華さん、一つ質問するわ」

深緑の瞳で見据えたまま、口を開く緋色香。

「どうして、昨日の連携戦闘では失敗したの？」

麗華は応える。

「私が悠斗君の動きを誤解したから。悠斗君の闘い方に付いて行けなかったから」

……。

「……」

……これは参った。

天才肌の人間は、どちらかというと、これとは逆の誤解をするのだが。

そして、本当の天才は誤解などしないのだが。

本当の天才である剣麗華は誤解している。

三段論法が成立しない理由は、おそらく……。

「急成長した悠斗君の戦闘には、麗華さんでも付いて行くのが大変ということ？」
「うん。悠斗君の成長速度は、ほんとに凄いと思う」
真面目な顔で言う麗華。
そう、確かに澄空悠斗の成長速度と潜在能力は凄い。
が、客観的に見て、少なくとも今の時点では、剣麗華の戦闘能力とでは、天と地ほどの差がある。
アイズオブエメラルドがなくても、天才でなくても、誰にでも見えるほどの大きな差だ。

自分で、それから目をそらさない限りは。

「あ、あのね、麗華さん」
緋色教授は語りかける。
誤解の原因となっている感情は、決して悪いものではない。
だからこそ、取り除くのも容易でない。

「なに、緋色先生？」
「連携戦闘を悠斗君とするのは、もう少し後にした方がいいんじゃないかしら？」
「……どうして？」
わずかに暗い顔をする麗華。

「い、いや、麗華さんがいくら天才だとしても、連携戦闘は初めてでしょ？　悠斗君ももちろんそうだし。もう少しうまくなってからの方がいいかなーなんて……」
「別の人と練習して、うまくなってから、悠斗君と練習するという

こと？」
「そ、そう、そういうこと！」
わずかな胸の痛みを感じながら、それでも言いきる香。
「なるほど。悠斗君以外の人となら、私も全力を出さなくても合わせられる。危険も少ないし、悠斗君の負担も少なくなる。さすがは、緋色先生」
「そ、そうでしょ。そうでしょ。あっはっはっは……！」
「うん。うまくなって、悠斗君をびっくりさせる」
「そうしなさい、そうしなさい。うんうん」
天才であるソードウエポンの微笑ましい決意を聞きながら。
アイズオブエメラルドは、一人、頭を悩ませるのであった。

動き出す陰謀？

さて、翌日。
俺は放課後の教室に一人ぼっちで居た。

ことの発端は、昨日の帰り道。
『ごめん。これからしばらく放課後は特訓するから、悠斗君と一緒に下校できない』
と、麗華さんが言い出したことだ。
とりあえず機嫌は直っているようだったのでホッとしていたのだが、その言葉通りに、今日の授業が終わった途端、
『じゃあ、悠斗君。特訓に言ってくる。先に帰っていて。あ、何か買い物があるなら言ってくれれば買って帰る』
『いや、特にないよ』
『そう。じゃ、行ってくる』
との会話を交わして、本当に一人で特訓に行ってしまったのだ。

麗華さんと一緒に帰るという大義名分を失った俺に、賢崎さんや小野が何らかのアプローチなり意味深なプレッシャーなりを掛けてくる！
と思ったが、二人とも、何か用事があるということで早々に帰ってしまった。

……ひょっとして、俺は自分で思っているほど、重要人物でないのかもしれない。
しかし、それならそれで気楽でいい。
賢崎さんや小野が俺に興味がないというのなら、俺もあの二人（特に賢崎さん）を気にしなくて済む。

その代わりに麗華さんを気にすることにしよう。
あの天才美少女が『特訓』なんて、気になるからな。
と、ＨＲが終わってから３０分思考してようやくこの結論に至った俺は、麗華さんを探しに立ちあがった。

「聞いたか？　悠斗」

立ちあがった途端に、さっきまで自分の席で携帯電話で通話していた三村に声をかけられた。

「いや、聞いてない」
なんで俺が、クラスメイトの携帯電話通話を盗み聞かなければならないんだ。
と、俺が言うと、三村は呆れた顔をして、
「おまえは、女の子と同居しているのに、ドラマも見ないのか？」
「？」
なんの話だ？
「他に誰もいない放課後の教室でクラスメイトが怪しげな電話をしていたら、とりあえずこっそり盗み聞くのが作法だろう？」
「……」
俺は、そんな異界の作法は知りませんが。

「まあいい。俺から改めて伝えよう」
と、峰が俺の前の席（小野の席だね）に後ろ向きに腰を下ろす。
どうも、聞かないといけない話らしい。俺も、自分の席に座り直す。
と、三村はしばらくもったい付けるように間を空けてから。
言った。

「ＫＴＩが動き出した」
「……」
「……」
「……ＫＧＢ？」
「ＫＴＩだ」
自分が知っている単語の中で一番近そうなものを選んだのだが、あっさり三村に訂正されてしまった。
三村のしゃべり方は、外見通りにハキハキして聞き取りやすいものなので、聞き間違いということはないと思ったが、本当に聞き間違いではないらしい。
もちろん俺は『ＫＴＩ』なる組織（だよな、たぶん）は聞いたことがないが、三村のしゃべり方からは知っていて当然、という印象を受ける。
今更格好を付けてもしょうがない。
俺は素直に無知を晒すことにした。

「すまん、三村。俺は、その『ＫＴＩ』っていうのが何のことだか分からないんだが」
「『Ｋａｗａｉｋｕｎａｋｕｔｅｍｏ　Ｔｓｕｙｏｋｅｒｅｂａ　Ｉｉｎｊａｎａｉ』」
「は？」
「『可愛くなくても　強ければ　いいんじゃない？』の略だ」
「……」
俺は黙って三村の額に手を当てた。
うん、少し熱い。
俺は黙って三村の腕を取って立ち上がる。

「悠斗待て。俺は病気じゃない。熱もない。ついでに言うと妄想でもない」
「最後の一つなら、もちろん放っておいてあげよう。とりあえず、

保健室には連れて行かせてくれ」
「だから、誤解だ！」
「保健室の先生は、変わった格好してるけど美人だぞ」
「それはリサーチ済みだ。というか、今日突撃取材して玉砕してきた」
堂々と応える三村。まだミーシャ先生のことは全校集会でも紹介されていないのに、さすがだ三村！
と。

「何やってるの？　二人とも」
いつの間にそこに居たのか、眼鏡をかけたみつあみの女の子が、俺達を見ていた。
うちのクラスの委員長、新條文さんだ。

「いや、三村が高熱系の疾患か、あるいは精神系の疾患に罹患した可能性があって……」
「澄空に危機を伝えようとしてるんだ」
俺達二人の言い分が交錯する！

と、委員長はしばらく俺達の顔を見比べた後。
眼鏡を外して。
大慌てでみつあみをほどいて。
自分のカバンからメモ用紙とペンを取りだし。

「さ、どうぞ始めて！」
１－Ｃ委員長から新月学園新聞部新條文へスタイルチェンジした。
俺達は、そんな委員長をしばらく見つめて。

「その前に委員長。『ＫＴＩ』は知ってるよな？」
先に三村が声をかけた。
「？　もちろん知ってるけど」
「何の略だ？」
「『Ｋａｗａｉｋｕｎａｋｕｔｅｍｏ　Ｔｓｕｙｏｋｅｒｅｂａ　Ｉｉｎｊａｎａｉ』でしょ」
何を今更、という顔で答える新條さん。

俺は三村の腕を放して席についた。

「許してくれ、三村」
「いいんだ悠斗。俺の話し方も悪かった。……ああ、委員長。助かった、ありがとう。もういいから、席外してくれるかな」
「ううん。もちろん、外さない♪」
分かり合う男二人に、めちゃくちゃいい笑顔で詰め寄る新月学園新聞部員。
カオスだ……。なんだかとっても、カオスだ。

「ちょっと訳ありの話なんだ」
「『ＫＴＩ』がらみなのね……。大丈夫。私は基本的に澄空君の味方よ」
「いや、でもな……」
「新聞部の方でも何か協力できることがあるかもしれないし……。もちろん記事にする時は、内容とタイミングについて、二人の許可を取ることにするわ」
「いいのか、それで？」
「澄空君は特別よ。ターゲットが三村君だったら、容赦なく掻き捨てるけど」
俺をそっちのけで交渉が成立している。
それはともかく、委員長の最後のセリフ、絶対わざと発音間違えた

な。
まあ、とにかく交渉は成立した。
委員長が律儀に自分の椅子を俺の机の横まで持ってきて腰掛ける。
「じゃ、はじめて頂戴」
委員長は机にメモ帳を置いて、書記の体勢を取る。
「とりあえず、まずは『ＫＴＩ』の説明からだな」
「頼む」
『ああ、悠斗君。ＫＴＩのことも知らないのか。まぁ、しょうがないよね。ううん、むしろこういう天然さが読者をつかむのよ。さすが悠斗君』と聞こえるように小声で言う委員長をスルーしながら、俺は先を促す。
「まあ、名前の通り、可愛い子を目の敵にしている連中だ」
「女の子の不良グループみたいなのか？」
「いや、メンバーは女の子限定だが、騎士道精神を重んじる、なかなか気持ちのいいグループだ」
「……」
設定のややこしい方達だな。
「十六夜朱鷺子さんは知ってるな？」
「『魔弾（グレイズ）』だろ。さすがにそれくらいは知ってる」
俺は答えた。
魔弾（グレイズ）の十六夜朱鷺子。
名前の通り遠距離系ＢＭＰ能力の達人で、引退した今でも、天閃（レイ）の茜島光さんと双壁と呼ばれている凄い人だ。

「彼女は別名『ぽっちゃりさんの星』と呼ばれていてな……」
「……」
なんだ、その失礼な二つ名は？
まあ、確かに少し太めの人ではあったらしいが。

「つまり、十六夜さんのように『美人と言われる容姿でなくても、ＢＭＰ能力を鍛えて幻影獣を倒すことで、お金と名誉とステータスを得て幸せになれる』というポリシーで、日々ＢＭＰ能力を鍛えている新月学園の同好会ということよ。ちなみに本当に十六夜さんが設立した組織なのかどうかは、新聞部でも意見が分かれているわ」
「……」
三村を引き継いで説明してくれる委員長に、とりあえず感想は控える俺。

「全員がＢＭＰ能力を発現している訳じゃないけど、結構強い子たちも混ざってる。『五帝』の一人、二雲楓さんもいるしな」
三村のセリフにまた知らない単語が混じっているが、とりあえず今は先に話を進めよう。
「戦力はともかく……、話を聞く限り、害はなさそうなんだけど？」
俺の疑問に、委員長もふむふむと頷く。
と。

「今年は剣と賢崎さんが居る」

「……！」
「……！」
揃って絶句する俺と委員長。
「あれだけ反則級高スペック美少女の二人だ。ＫＴＩが本気になっても批判は少ない。というより、動かないとグループの存続意義を問われかねない状況らしい」

「い、いやしかし、動くと言ってもどうやって？　正々堂々がポリシーなんだろ？」
「正々堂々ルールに則って闘える舞台が、もうすぐある」
「へ？」
と唖然とする俺とは対照的に、委員長は何かに気づいたように頷いた。

そして言う。

「体育祭ね」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7486m/

BMP187

2011年12月17日09時15分発行